そ

素庵 そあん

【姓名】角倉氏。原姓吉田。諱玄之、後貞順と改む。字は子元（子允と傳へてゐる書もある）。通稱與一。【號】三蘇庵・蘇庵・素庵【生歿】元龜二年六月五日生れ、寛永九年（一二九二）六月二十二日歿（元和九年六月二十二日說もある）。享年六十二。【閱歷】角倉了以の長子として洛西嵯峨の角倉に生れた。了以の代より海外貿易を營み、又海運治水を業としてゐたが、素庵は家業をつぎ、後、元和元年近江國阪田縣令に補せられ、京都河原町並淀川過書船の支配を兼ね、次いで賀茂川・嵯峨川等の通船の運上金を賜はつた。【人物・業績】性學を好み、藤原惺窩に兄事した。惺窩は一世の學者であつたが、これを稱揚して「素庵信道之篤不可企及」と述べてゐる。又嘗て林羅山の非凡の器なるを洞察して、慶長九年これを惺窩に紹介し、遂にその門に入らしめた。又好んで詩を賦し和歌を詠じた。和歌の師は中院通勝ならんといはれてゐる。又本阿彌光悅に師事して書を能くし、一派を成して角倉流（光悅流參照）を創めるに至り、當時光悅・昭乘と共に洛下の三筆と稱せられた。素庵は又光悅（別項）と相計つて國文學書類を印行した。光悅が善美の裝幀を加へたのに對して、素庵は、二三の書は光悅に倣つたが、その他は專ら實用を主として虛飾を排した。その印行に係るもの少くなく世に嵯峨本・角倉本（圖書參照）と稱せられる。【著書】藤原系圖○武家系圖○期遠集○百家選。

【參考】寛政重修諸家譜○先哲叢談續編○嵯峨本考 和田維四郎○光悅 光悅會 〔植松〕

奏 そう

古文書 【解說】臣下より政治上の意見などを天皇に申上ぐる文書。奏狀ともいふ。大寶令の公式令に依れば、太政官より上るものと彈正臺より上るものとがある。その太政官より上るものは事の種類大小に依つて三通りの式がある。最も重大なるは論奏式、次は奏事式、次は便奏式で、彈正臺より上るものは奏彈式である。以上は正式のものであるが、令にはなほ密奏も認めてゐる。然るに實例よりすれば、この外に省寮等諸司の奏あり、又個人の意見書（封事）もある。三善清行や菅原文時の意見封事の如きもそれである。何れも文章を修飾して書く。 〔伊木〕

講被給　穀倉院學問料令繼六代業男蔭孫無位能公狀

右、伏檢故實、菅原大江兩氏建立文章院、分別東西曹司爲其門從、習儒學著氏姓之者、濟々于今不世として傳へられてゐる。

【六世】〔本名〕幼名は喜代松。後、金藏を襲名し、後又謹と改名した。〔別號〕和風亭・ごまめ〔歿年〕明治十五年六月十五日、享年六十九。〔墓所〕先代と合葬された。〔閱歷〕五世の長男で、その後を襲いだのである。向島三圍社内にある句碑の「つまらぬといふは小さな智惠袋」はこの人の作で、この句は有栖川宮熾仁親王殿下の御感に預り、佃島沖御遊漁の際、住吉宮司の宅にて拜謁、「川風の吹くかたより

世と頌したが、終に對峙することが出來なかつた。

【十世】〔本名〕平井省三 〔別號〕北窓雪雁・狂句堂〔歿年〕昭和三年八月十一日、享年八十二〔墓所〕淺草吉野町瑞泉寺〔閱歷〕淺草千束町に住して市吏を奉職し、傍ら北窓雪雁と號して川柳狂句の點者であつた。明治四十年推されて十世川柳となり狂句堂と稱した。襲名披露の席上、「擔がれて貫目の知れた柳御輿」の一句を詠んだ。翌年、故あつて一旦隱退して、斯道一派の牛耳を執つてゐる。 〔西原〕

川柳點 せんりうてん

「川柳」を見よ。

沾涼 せんりやう

俳人 【姓名】菊岡光行、初名房行、通稱藤右衞門【別號】南仙・獨南齋・崔下庵・活劍子・米山翁【生歿】延寶八年生れ延享四年（一七四〇七）十月二十四日歿。享年六十八【法名】民竈院南仙沾涼居士【墓所】東京淺草誓願寺塔頭林宗院【閱歷】飯東三悅の子。後出でて菊岡行尙の養子となる。江戸神田に住み表具を業とし、又金工の業を柳川直光に

運、閥閱、貴族家之位門業、不論才不才、不拘年齡、菅原爲紀以七代襲職、其時有高岳相如、賀茂保胤者、雖富才不爭、大江定基以五代當仁、其時有田口齊名、弓削以言者、雖工文不競、夫然、則累代者見重、起家者見輕明矣、方今能公聚窓之螢、漸照蠹簡、過庭之鯉志在龍門、若不吹噓、何期成立、望請、蒙鴻慈、准前例、早賜燈燭料、令繼箕裘之業、不堪懇款之至、匡衡誠惶誠恐謹言、

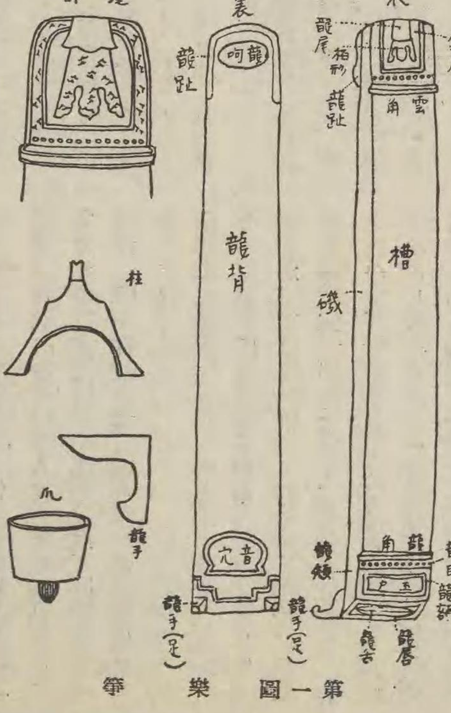
長保四年五月廿七日　正四位下行式部權大輔兼文章博士大江朝臣匡衡誠惶誠恐謹言

相 さう

「動詞」を見よ。

箏 さう

樂器【別名】さうのこと・こと・仁智【解說】絃樂器の一種で、樂箏・筑紫箏・俗箏の三種がある。〔樂箏〕樂箏は主として雅樂に用ひられるもので、その形は第一圖に示す如く、箏を一匹の龍と見立てその各部の名稱が附けてある。古制は桐の長さ五尺五寸であつたが、嵯峨帝改めて六尺五寸とせられ、のち一寸を減じ、「延喜式」には六尺四寸と定められてある。「體源抄」に記す所も亦六尺四寸である。併し今日の制は主として「樂家錄」の記す所に從つてゐるが、これは「遠雁」といふ銘のある官物を基として近世の樂箏が出來てゐるといふのでその寸法は桐の全長六尺二寸七分、幅は本八寸二分、末七寸八分七厘、槽の厚さ四分、裏板の厚さ三分、磯の厚さ本末九分九厘、中は一寸七厘ある。昔は桐の表を桐で作り、裏を杉で作つたが、今は表裏共皆桐で作る。即ち桐板を燒き焦して、その面を磨いたものを用ひる。足（龍手ともいふ）は果李にて作り高さ一寸八分、絃は絹の撚糸を用ひ、十三絃あり、これを向う（即ち低音の方）から數へて、順に一・二・三・四・五・六・七・八・九・十・斗・爲・巾と呼ぶ。「教訓抄」に據れば、昔はこれを仁・智・禮・義・信・文・武・翡・闌・商・斗・爲・巾と呼んだといふ。これに依つて箏を一に仁智とも呼んだ。それで一から五までの絃は太くてこれを太緒（太絃）といひ、六から十までの絃は中間で、これを中緒（中絃）といひ、斗・爲・巾の三絃は細くてこれを細緒（細絃）といふ。柱は果李で作り、高さ一寸四分七厘、二股の開きは一寸七分二厘、その尖端の絃の乘るところを岩越といふ。爪は昔は自分の指爪を用ひて義爪は用ひなかつたが、後世に至つて「蘇合香」の大曲傳授を受くるまでは、凡て義爪（又は掛爪といふ）を用ひる。これは右手の拇指・食指・中指の三つに用ひるもので、枯竹の皮を去らざるものを用ひ、厚さ七厘、横一分、長さ一分半、尖端を圓くしたものを用ひ、これを裁縫用の指貫の如きものを厚紙で作つたものに挾んで指にはめて彈ずる。「樂家錄」には、「掛爪の紙は損じ易き故に、表方に猫皮を張る。但し裏は必ず紙を

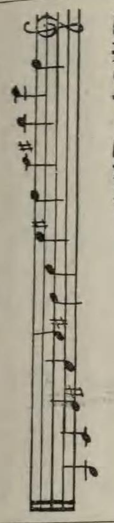


用ふ。これ脱せざらしむるためなり。これ近代の工夫也」と記してある。紙の色は普通白色を用ひるが、銀色を用ひることもあり、大曲傳授を受けた者に限り金色を用ひる。樂箏を彈ずるには胡坐(あぐら)するのを法とするが、女子の場合には左膝を立てて箏を座に置き、又は右の膝に乘せて彈ずる。樂箏は主として、「左方」(別項)の樂の管絃合奏に用ひられ、その調絃の法は左樂の六調子に依つて異なるが、大體に於て呂調と律調との二種に分れる。但し呂調の中に於て、太食調だけはその排列を異にしてゐる。即ち左の如くである。(律名は頭字だけを記す)

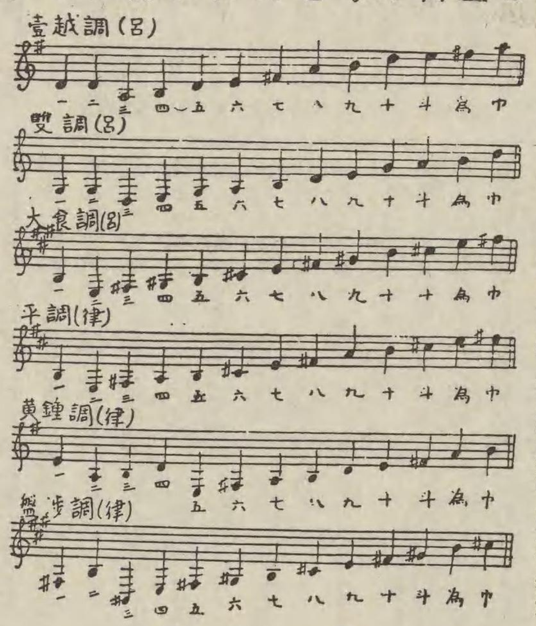
絃の名	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	斗	爲	巾
(呂調)(五聲)	宮	宮	徵	羽	宮	商	角	徵	羽	宮	商	角	徵
壹越調	壹	壹	黃	盤	壹	平	下	黃	盤	壹	平	下	黃
双調	双	双	壹	平	双	黃	盤	壹	平	双	黃	盤	壹
(五聲)	徵	宮	商	角	徵	羽	宮	商	角	徵	羽	宮	商
太食調	盤	平	下	鳧	盤	上	平	下	鳧	盤	上	平	下
(律調)(五聲)	徵	宮	商	角	徵	羽	宮	商	角	徵	羽	宮	商
平調	盤	平	下	黃	盤	上	平	下	黃	盤	上	平	下
黃鐘調	平	黃	盤	壹	平	下	黃	盤	壹	平	下	黃	盤
盤涉調	下	盤	上	平	下	鳧	盤	上	平	下	鳧	盤	上

これを洋式五線譜にて示せば、第二圖のやうになる。右方樂即ち高麗樂(別項)には、普通箏を用ひないが、稀に用ひる場合がある。その場合には、高麗壹越調では調絃法は五聲配置を太食調と同じく、ただその宮音を壹越とする。高麗平調では五聲配置を平調と同じく、ただその宮音を下無に置き、高麗双調では五聲配置を壹越調と同じく、ただその宮音を黃鐘とする。昔は箏の獨奏曲があつたらしいが今日に傳はらない。近代に殘つてゐる樂箏の曲は、凡て管絃合奏の一部をなすもののみであつて、その手法は極めて簡單である。

〔筑紫箏〕 もと筑紫樂に於て用ひられた所の箏をいふ。近世の俗箏は筑紫流より出でたものであるから、屢々俗箏をも筑紫箏と呼ぶことがある。筑紫箏はその形樂箏に同じい。筑紫流に傳へられる「筑箏知要」に依れば、その大さに三種あり、長さ六尺四寸のものを羽音箏といひ、長さ五尺五寸のものを鳳音箏といひ、長さ四尺二寸のものを折箏といふ。胴の幅は羽音箏は頭九寸六分、尾八寸六分、鳳音箏は頭八寸一分、尾七寸二分、折箏は頭七寸二分、尾六寸四分である。他の寸法はこれに準ずる。奏法も樂箏に似てゐるが手法は幾分複雜になつてをり、筑紫流に於てはその手法が樂箏よりも、かなり進んで來たことが分る。その調絃法には雅樂の平調及び水調が行はれ、殊に水調が最も普通に用ひられてゐた。水調といふのは黃鐘調の呂調をいひ、即ち宮音を黃鐘としたところの呂旋音階であつて、箏の十三絃の調律法は、樂箏の太食調と同樣の關係をなし、その第二絃を黃鐘に置いたものであつて、それを五線譜を以て示せば次のやうになる。



〔俗箏〕江戸時代に至り、一般民間に行はれたところの箏で、もと筑紫流から出たものであるが、生田流・繼山流・山田流などの流派に分れて、多少その形を異にしてゐる。併しその大體の構造とその各部の名稱とは樂箏と同じである。ただ足・爪・柱に多少の差異があり、又口前の龍舌は生田流及び繼山流にあつて山田流にはなく、前者では龍角の上に絹糸で編んだ枕糸を置くが、後者では枕糸を省き、その代りに、龍角又はその上を象牙製とする。箏の全長は生田流及び繼山流では六尺三寸、山田流では六尺を規定として、これを本間(ほんけん)と呼んでをり、それよりも短かいものは中間(ちゅうけん)又は短間(たんけん)と呼んで稽古用のものとする。但し山田松黑の著「箏曲大意抄」(安永八年刊)には、俗箏の形に秋霧形・松濤形・虬箏(一名あやめ形)・小臥箏等の種類のあることを述べてゐる。併しこれは、その大さの相違と小部分の差違に依る名稱である。箏の用材は昔から桐を用ひるが、北國・兩羽・岩越地方の如き寒地産のものを良材とし、殊に岩石地又は砂礫地産のもので、樹齡百年乃至二百年のものを最上とする。江戸時代には俗箏の名匠に近江春定といふ者がゐた。この近江の一門の作つたものには、中々立派な名器があり、中にも春定・長門の如き名匠があつた。「箏曲大意抄」によると、俗箏の手法には左手八法、右手十七法と稱するものがある。併し山田流に於ては、手法は左右とも餘程簡單になつてゐる。俗箏の調子は、平調(ひらぢょう)子及び雲井調子の二つが基本になつてゐて、この外にも種々の調子が行はれてゐる。中には秋風調子の如く、特殊な「秋風曲」(光崎檢校作)にのみ用ひられる調絃法がある。また近來は新箏曲の出現と共に、雅樂調又は西洋音樂調を持つた各種の調絃法も現はれて來た。



第二圖

【沿革】〔樂箏〕初めて神農氏が作つたとか、その形が瑟に似てゐるから、瑟を改作したものとか、或は秦將蒙恬の作る所といひ、又は秦人薄義父子が瑟を爭ひ、これを二分して作つたので、爭の字を用ひて箏といふなど諸說紛々としてゐるが、一般には蒙恬の作と信ぜられてゐる(書經・風俗通・切韻等)。併し傅玄の「箏賦」には、蒙恬說を反駁してゐる。要するに秦の頃に改造されて出來た所の樂器であつて、或は蒙恬が西征の軍に伍し、西域から輸入された所の樂器を摸して瑟を改造したものかも知れない。秦以後漢に至つて漸く行はれ、南北朝を經て隋・唐に至り、合奏用並に獨奏用として廣く行はれるに至つた。その初めて我が國に傳へられたのは「東大寺獻物帳」の中には桐木箏一張とあり、正倉院御物中に、裏面に東大寺の燒印ある桐木箏胴の破損したものが存在してゐるから、奈良時代に既に傳へられてゐたことは明かである。或は文武天皇の頃、唐樂の五常樂や太平樂などの行はれた記錄があるから、大寶年間には、もはや傳へられてゐたのかも知れない。平安朝に入り仁明天

奏の頃、唐楽・唐の博士陳承式の頃から箏譜を學び、箏と共にその樂曲を傳へたことが「三代實錄」に見えてゐる。これは恐らく箏の獨奏曲を傳へたことの初めらしい。これに依つて、屢々貞敏は我が國へ箏を傳へた最初の人であると誤り傳へられてゐる。又「箏曲大意抄」によると、「夫れ本朝に箏の傳りたる事は、宇多帝寛平年中の事とかや。石川色子といふ人筑紫の彦山にて唐人にあひ、箏のことを傳へ帝にさづけ奉る。これより是を樂に用ひて、管絃のわざ世にひろまれり」と言つてゐるが、これも唐から箏の獨奏曲を傳へた一つの記錄である。平安朝の頃、雅樂の管絃合奏曲の外に、箏の獨奏曲の多く行はれてゐたことは、「源氏物語」などの書を見ても知ることが出來る。然るに鎌倉時代より以後は、獨奏曲は中國に消失して九州北部にのみ殘り、以て筑紫樂といふものになつた。中國に於ては、樂箏は單に管絃合奏の一部のみとなつた。尤も堂上家には一二傳へられてゐたらしく、豐臣秀吉時代に至り、四辻大納言光繼卿より舍弟藪大納言嗣良卿へ箏曲を傳へられ、藪大納言は樂箏の傳統を受けられたが、家康の頃に至り、後水尾院は藪大納言へ樂箏御許の勅書を賜はつたといふ。併しこの傳を惜しんだのか、樂箏の獨奏曲は今日は既に消失してしまつた。〔筑紫箏〕筑紫箏のことは、「箏曲大意抄」に、石山色子が九州彦山にて唐人から箏曲を傳へられたことの後に、「後鳥羽帝、壽永・元曆に至りて、その事愈々さかんに行はれける。近世に至る迄筑紫樂といへることれなり」と記し、その傳はつた事情に就いては、元祿七年刊の「琴曲抄」序に、「こゝに文治の比、あるやんごとなき人（松殿關白基房か）の

色子に引つたへて聽し給ひしを、此人筑紫に趣たまへる時、筑後國善導寺の住侶（聖光上人か）世にすき人にて、切に乞ひて此祕曲を傳はり得て云々」と述べてゐる。これより筑紫箏は代々善導寺に傳へられ、遂に筑紫流といふ派をなした。「箏曲大意抄」には、「後奈良帝の御時までは、大方此箏をもて筑紫樂のみを彈き來る也」とある。後奈良帝の頃、肥前の賢順これを傳へて妙技を得、賢順は同國諫早の慶岩寺の僧玄恕にこれを傳へた。傳說には賢順周防の大內家に行き、折柄京都の戰亂を避けて此所に寄寓せる公卿等と相知り、七人の公卿が各々一首づつ詠める歌を組み合せ、これに越天樂の旋律をくづして作曲し、「菜蕗」「梅が枝」等の組歌を作つたと稱せられるが、組歌（別項）は三味線の方から來て箏曲に入つたといふ說がある。併し筑紫流に組歌があつて、八橋は筑紫の組を變化したものであることは明かである。又「琴曲抄」によると、賢順は京都に行き、樂箏の宗家なる藪大納言と相識り、その技を天聽に達し、その歸國するに當り一同に惜しまれて、その乞ひにより歸國後門弟なる善導寺の法水といふ者を都に送つた所、その技が拙かつたので法水は江戸に行き、還俗して柏屋と號し琴屋となつたといふ。筑紫流はその後微々としてその命脈を保ち、その第十三世と稱する肥前の今泉千秋翁は、明治三十三年に九十四歳で歿してから、殆どその傳は絕えた。〔俗箏〕慶安年間、八橋檢校が筑紫箏に工夫を加へて用ひたのに始まる。檢校は江戸で法水に學び、又玄恕の祕曲を受けたといふ。（八橋流・生田流・山田流・箏曲參照）

【參考】仁智要錄○體源抄○樂家錄第八卷安部季尙○夜鶴庭訓抄（群書類從所收）○秦箏相承血脈（同上）○琴曲抄○俗曲大意抄山田松黑○吾嬬箏うた山田松校○撥箏雅譜大成抄高井伴寛○松響閣箏話今泉千春○琴曲獨稽古大橋又太郎○琴曲之栞百足登○俗曲評釋箏唄佐々醒雪○箏曲譜鈴木鼓村○日本音樂の話同上○日本歌謠史高野辰之○江戸時代の音樂田邊尙雄○日本音樂概論伊庭孝○地唄夜話藤田斗南○日本歌謠集成卷八高野辰之編　〔田邊〕

草庵集（さうあんしふ）

僧頓阿【別名】草庵和歌集【諸本】寛文四年京都二條武村三郎兵衞刊本。承應二年校本。國歌大系第十四卷所收本。【內容】四季・戀・雜・羇旅・哀傷・釋敎・神祇・賀に部立し、續集は四季・戀・雜・雜體・連歌に分類されてゐる。合せて二千餘首に及んでゐる。續集との間で重出の歌も少々は存するが、別個の奧書があるのを見ると、別々に撰せられたものかと思はれる。頓阿の歌論は、その著「井蛙抄」「愚問賢註」（各別項）等に見え、二條家（別項）の說を大成したものである。本集所載の歌も、

朝霞たなびきにけりしきしまの高まど山に春やたつらむ（春上）

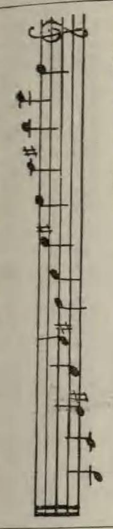
相坂の關こゆるよりやがてはや都の山ぞ見えずなりゆく（羇旅）

の如く平明流暢である。續集の終に、「雜體」とある部分は、短歌（實は長歌をさす）二首・物名二十三首・折句十首・旋頭歌三首・廻文歌一首・俳諧歌十六首より成る。主として遊戲的作品であり、最後に連歌百韻を載せてあることは、當時に於ける連歌勃興の情勢を語るものであらう。【價値】本集は、二條家の人々によつて非常に尊ばれた。近世に至り、澄月法師は、「そも〳〵草庵集一部は、和歌中道の

集錄也」といひ、烏丸光廣卿の日記には、「一部とりきはめて見ならふべきは草庵集、雪玉集、又柏玉集なり」など傳へ、職仁親王御敎訓に、「家集にては、爲家卿集、尤優美なり。ちかくは草庵集、此作者は、ふかくいひふれたることを、すこしひき直し、あたらしくよみたる也」と評してある。傳統を尊び、平明を重んずるあまり、やゝ陳套なる本歌取の如き詠み口が目立つ。「かへるかりたつをみすててゆくかたもなほこそ霞め春のあけぼの」は、「古今集」の「春霞たつをみすてて行く雁は」の歌によれるもの、これに就いて、似雲の「詞林拾葉」に、「頓阿の歌のために、古歌をつくりしやうに見ゆ」とあるは、やゝ强ひた感がある。「新拾遺集」に、「露しげきつたのしげみを分こえてをかべにかゝるうつの山道（定圓法師）」と、頓阿の「くれにけりつたの下露わけすぎてをかべにかゝるうつの山道」とを比較しても、同樣の感がある。故に今川了俊は、「落書露顯」に、「さるは、かの法師も只一節詠みたる姿のほかをば、つゞ〳〵よみ侍らず」と、「和歌所不審條々」には、「頓阿が歌樣を見候へば、十首に七八首は、古歌を多分に用ゐよみて候間、斯樣の輩は、げにも新しく讀むらん詞をば、たゞ言と可申やらむ」などと評してゐる。彼の歌は、その歌論と共に、二條家の平淡さの長所短所ともに、よく發揮したものと見るべく、また當時の歌壇の情勢に乘じて、一層尊ばれる傾向を生じたものと云へよう。

【註釋書】草庵集蒙求諺解十五卷　梅月堂香川宣阿集編・梅仙堂平景新訂正　○續草庵集蒙求諺解五卷　同上（草庵集正續兩集を、姪甥のために宣阿が諺解したもの。享保八年八月刊）○草庵集難註　一卷

これを洋式五線譜にて示せば、第二圖のやうになる。右方樂卽ち高麗樂（別項）には、普通箏を用ひないが、稀に用ひる場合がある。その場合には、高麗壹越調では調絃法は五聲配置を太食調と同じく、ただその宮音を壹越とする。高麗平調では五聲配置を平調と同じく、ただその宮音を下無に置き、高麗双調では五聲配置を壹越調と同じく、ただその宮音を黃鐘とする。音は箏の獨奏曲があつたらしいがつて、箏の十三絃の調律法は、樂箏の太食調と同樣の關係をなし、その第二絃を黃鐘に置いたものであつて、それを五線譜を以て示せば次のやうになる。



（俗箏）江戸時代に至り、一般民間に行はれたところの箏で、もと筑紫流から出たものであるが、生田流・鄕山流・山田流などの流派に分田松黑の著「箏曲大意抄」（安永八年刊）には、俗箏の形に秋霧形・松濤形・虹箏（一名あやめ形）・小臥箏等の種類のあることを述べてゐる。併しこれは、その大さの相違と小部分の差違に依る名稱である。箏の用材は昔から桐を用ひるが、北國・兩羽・岩越地方の如き寒地產のものを良材とし、殊に岩石地又は砂礫地產のもので、樹齡百年乃至二百年のものを最上とする。江戸時代には俗箏の名匠に近江春定といふ者がゐた。この近江の一門の作つたものに南北朝を經て隋・唐に至り、合奏用並に獨奏用として廣く行はれるに至つた。その初めて我が國に傳へられたのは「東大寺獻物帳」の中には桐木箏一張とあり、正倉院御物中に、裏面に東大寺の燒印ある桐木箏胴の破損したものが存在してゐるから、奈良時代に既に傳へられてゐたことは明かである。或は文武天皇の頃、唐樂の五常樂や太平樂などの行はれた記錄があるから、大寶年間には、もはや傳へられてゐたのかも知れない。平安朝に入り仁明天

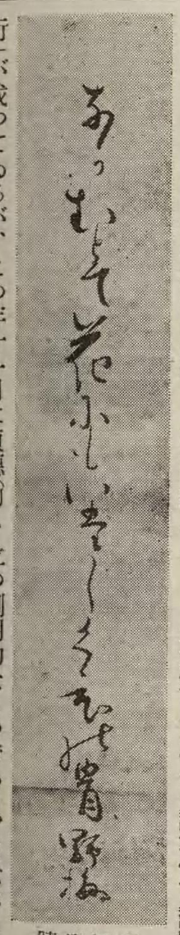
櫻井元茂（宣阿の著の誤りを難じ、自説を述べたもの。享保十五年刊）○草庵集啓蒙六卷（寫）裏松固禪　○鼇頭草庵集一卷（寫）日野資枝（以上二部京都帝國大學所藏本）○草庵集玉帚九卷本居宣長○續草庵集玉帚一卷　同上（宣阿、元茂等の誤りを批評し、自說を述べたもの、本書脫稿は、明和四年九月、著者三十八歲の時である。天明六年刊）○草庵和歌集類題六卷　蜂谷又玄（正續兩集の歌の詞書を省略し、四季・戀・雜に別ち類題としたもの、元祿八年刊。寬延四年袖珍本がつくられた）○草庵集類題拾遺一卷　草庵集にもれたる頓阿の歌を、諸書より取り來つて集編したもの）○草庵集正誤一卷　磐雄重文（流布本の歌の誤れるもの百五十餘首をかゝげ、右旁にその故を指摘したもの。文化二年、藤田正信序）　〔松浦〕

宗伊（そうい）　連歌師【姓名】杉原伊賀守賢盛【閱歷・作風】室町幕府に仕へた。連歌は梵灯庵に益を請うた。連歌の七賢の一人で、「新撰菟玖波集」（別項）には四十六句採られてゐる。智蘊（別項）の冲淡な作風と異なり絢爛な體を好んだ。「遠山のまゆずみ　青き雪間かな」の如きがその代表作である。　〔福井〕

棕隱（そういん）　漢學者・狂詩作家【姓名】中島德規、また規ともいふ。字は景寬、通稱文吉【別號】棕隱軒・棕軒、外に畫餅居士・因果道士。狂詩に安穴道人といつた。又その居を道華庵・銅駝餘霞樓・水流雲在樓などと稱した。【生歿】安永八年京都に生れ、安政二年（一二五一五）六月二十八日、洛外聖護院村に歿す。享年七十七【私謚】文憲先生【墓所】泉涌寺並に黑谷【閱歷】棕隱は伊藤仁齋門の儒者中島義方の後であつた德方の子、初め父より句讀を受け、伊藤談に國學を學んだ。後、村瀨栲亭にも詩いたらしい。寺北平時代を江戸に客寓すること十年、文化十一年に歸つてからは京に居ついたが一生仕へず、屢々居を轉じ、又屢々旅に出た。旅も生活の資を得るためだつた。棕隱、風流を以て鳴り、自らも好事儒者などと稱してゐる。儒名賴山陽に下らず、詩人としても知られてゐるが、傍ら狂詩に遊び、戲文を作り、小說にまで指を染め、和歌も詠んだ。端唄「京の四季」も亦棕隱の作るところである。その狂詩は、やゝ滑稽味に乏しい憾みはあるが、辛辣味に富み、漢詩に於ける力量がその間に窺はれ、また他作家の企及すべからざるものがある。【著作】鴨東四時詞一册（祇園を中心とした竹枝、文化十一年刊）○鴨東四時雜詞一册（前者の增訂版、文政九年序）○棕隱軒集六册（詩集、初集より三集に至る、文政八年より同十三年に亙つて刊行）○金帚集六册（詩集、前者につぐ、天保十年刊）○水流雲在樓集二册（同上、刊年未詳）○鴨川朗詠集二册（內容牡丹百詠（詩）、詠雪百首（和歌）、嘉永五年刊）○嵯峨小稿一册（詩集、嘉永六年刊）○都繁昌記一册（天保八年序、寺門靜軒の江戶繁昌記に倣へるもの、一册より出なかつた）○河東方言箱まくら三册（洒落本）○太平新曲（棕隱社中の狂詩集、棕隱の作が多數を占めてゐる、文政二年序）○太平二曲（同上、文政三年序）○太平三曲（同上、文政四年序）○天保佳話（同上、天保元年刊）○天保佳話二編（同上、同年刊）【參考】京都を中心として見たる狂詩下編（安穴道人とその周圍）青木正兒（藝文大正八ノ一）○好事儒者中島棕隱森銑三（藝文昭和二）　〔森〕

宗因（そういん）　連歌師・俳人【姓名】西山豐一（とよかず）通稱二郎作【號】連歌師の頃より宗因と號し、俳諧に於ては初め一幽と號した。また西翁・梅翁（天滿宮の社地に居たからであらう）・西幽子・梅翁子・梅花翁・野梅子・已奇齋・有芳庵等【生歿】慶長十年生れ、天和二年（一三四二）三月二十八日歿。享年七十八【法名】實省院圓齋宗因居士【墓所】大阪天滿西寺町西福寺。又東京日暮里養福寺に、「江戶を以て鑑とす也花に樽」の句碑がある。【閱歷】肥後八代に生れた。肥後侯加藤忠廣の臣で同國松江城の城代加藤正方（もと、片岡氏）の臣であつた。然るに寬永九年に忠廣が除國されて羽州莊內藩に御預けの身となつたので、正方も出城して京都に流浪し、伏見に住し、後廣島に赴いて片岡風庵と號した。宗因も主正方の流浪と共に流浪の身となり、主と共に伏見に居り、宗因と號した。まだ肥後に在つた時、主正方と共に作州津山釋將寺の豪信法師に就いて和歌連歌を學んだと云はれ、伏見に出てからは里村昌琢（別項）の門に入つて連歌を學び、又松江重賴（別項）と交つて連歌の益を受けた。かくて正保四年九月浪花天滿宮の邊に移り住み、天神連歌の月次宗匠となつた。承應二年七月には作州津山に旅行し、「津山紀行」が成つてゐるが、この年十一月に貞德（別項）が歿した。これが宗因の俳諧方面の活動を促進するに至つたらしい。越えて四年明暦二年九月に、菲盤屋町の向榮庵が成つたので、こゝに移り、「告二天滿宮一文」を作つて文運を神に祈つてゐるが、この頃から俳諧師一幽としての活動が見られる。寬文二年には關東、東北旅行を思ひ立つて內藤風虎公の岩城の城下に至り、松島をも一見して「松島一見記」が成り、同四・五年に亙つて、豐前の小倉に旅行し、同十年にも同地に旅行して、卽非の弟子法雲禪師に參じて剃髮した。然るにこの頃から延寶の初め頃へかけて談林（別項）の新風の樹立に努め、延寶元年には彼の新舊の俳諧百韻を集めた「西翁十百韻」（別項）が刊行されたが、同三年江戶の田村松意に招かれて下り、「されば爰に談林の木あり梅の花」の發句を與へ、これが本となつて「談林十百韻」（別項）が成つた。宗因が、これが談林風樹立の劃期的なものである。同六年には京都の物本寺菅野谷高政に「末茂れ守武流の物本寺」の句を與へてその前途を祝したりした。然るに晩年には門流の作に、放縱亂脈なものが生じて來たので、これを嘆歎して、「なんにもはじて來たので、これを嘆歎して、「なんにもは

西山宗因（大坂俳歌仙）



宗因筆蹟

や池雅の枝葉口」の一句に俳諧の口を慰み、連歌を学ぶとするに至つたと云はれるが、俳諧を全く捨てた譯ではなかつたらしいけれども、亂脈を歎じたことは門人へ送つた書簡（玉池雜藻）によつても知られる。

【著作】北野法樂獨吟千句（連歌）（寛永十五年）○白峰獨吟百韻（連歌）（寛永十七年）○風庵一周忌追悼獨吟千句（連歌）（慶安二年）○昌琢二十五回忌追善獨吟百韻（連歌）（萬治三年）○松島一見記（寛文三年記）○豐前小倉城獨吟千句（連歌）（寛文五年）○西翁十百韻一册（延寶元年刊）○明石人丸社法樂獨吟百韻（連歌）（延寶二年）○鎌倉三百韻一册（延寶三年）○五百韻一册（延寶三年刊）○天滿千句一册（延寶四年刊）○七百韻一册（延寶五年刊）○兩吟集一册（同上）○廿日草三百韻一册（延寶六年刊）○四人法師一册（同上）○釋教百韻一册（延寶九年刊）○蕃椒百韻一册○後五百韻一册○後千句一册○花洛百韻一册○一時雨○ひるあみ○高野紀行一册○十會獨吟集一册○西山三籟集二册（西山昌休（享保十九年刊）○俳諧發句むかし口一册（一炊庵（安永六年刊）○梅翁宗因發句集一册（谷素外（天明元年刊）○宗因文集一册（寛政十二年刊）○梅翁發句集二册（文政六年刊）○宗因附句一册（山田通孝（天保十四年寫）。

【業績】宗因は終生連歌を捨てず、且つ連歌を本道、俳諧をその餘興と考へる如き思想を脱しなかつたので、この點ではその門人等の態度と多少異なるものがある。又その俳諧觀も「上手は上手、下手は下手、いづれを是と辨へず、好いたことをして遊ぶに若かじ、夢幻の戯言也」（阿蘭丸二番船）といふ如きもので、遊戯觀を脱せぬものであつた。併し新風談林風の樹立は、陳套な駄洒落で規定の窮屈な貞德風の反動的破壞で、宗鑑・守武（各別項）を直に目標として革新を行つたものであり、なほ駄洒落を出でないものではあつたけれども、用語形式も漸新自由で想も清新奇拔を覗つたので、貞德風に飽いてゐた俳壇の人氣を呼び、貞門（別項）の俳人でこれに歸向する者も多く、門人も漸次全國的に增加し、俳壇の新勢力を占めるに至つた。貞門から歸向した人の中には、重賴門の池西言水・高野幽山（各別項）、令德門の芳賀一昌、梅盛門の伊藤信德（別項）、良保門の田中常矩（別項）、安靜門の岸本調和、季吟門の小澤卜尺・小西似春・山口素堂（別項）・松尾芭蕉（別項）、未得門の岡村不卜の如きがあり、新しい門人の中には、大阪の井原西鶴・岡西惟中（各別項）、京都の菅野谷高政、江戸の田代松意（各別項）の如きは、その中心的俳人であつた。兎に角宗因の新風は、貞德の俳風を脱して遙かに內容的な革新に進み、藝術的な作風に接近したものであつた。されば芭蕉も「宗因なくんば吾々が俳諧今以て貞德の涎をねぶるべし。宗因は此道の中興開山なり」（去來抄）と云つたと傳へられる。〔志田〕

【參考】時世粧松江維舟○續無名抄 岡西惟中○阿蘭丸二番船 木原宗圓○玉池雜藻 谷素外○俳家奇人談竹內玄々一○隨齋諧話 夏目成美○誹家大系圖 生川春明○俳人百家撰 水谷川柳○俳林小傳 中村光久○江戸文學研究 藤井乙男○江戸文學叢說 同上○黃檗と西山宗因との關係 鹿嶽光雄（同人大正一五ノ五）○漫讀漫錄 藤井乙男、懸葵 昭和六ノ一〇）○宗因の連歌 鎌原退藏（國文學誌 昭和六ノ一二）○西山宗因の俳句 滕峰晋風等（黃檗 昭和六ノ一二）

宋音（そういん）「漢字」を見よ。

層雲（そうん）俳誌【主幹】荻原井泉水【創刊】明治四十四年四月【解說】明治四十一年頃から勃興した俳句界の新傾向運動は、主として「日本及日本人」の俳句欄（日本俳句）を根據とし、雜誌「アカネ」（後改造して「人生と表現」といふ）を補助機關としてゐたが、四十三年頃から所謂新傾向（別項）派同人の中にも見解の相異を來したので、この際、新傾向運動の意義の再檢討と組織的の研究とをなすと共に、同人相互の句境と傾向とを淸算して運動上の統一を圖らうといふ目的から、新傾向派の俳句雜誌として創刊されたものである。然るにその後、碧梧桐・一碧樓は、別れて俳誌「海紅」（別項）を興し、次に碧梧桐は更に別れて俳誌「碧」（別項）（後改題「三昧」）を興す等の事があつて、こゝに新傾向運動に出發を持つものとしては、この三雜誌が鼎立の狀態となり、「層雲」は層雲派若しくは井泉水派の機關雜誌として立ち今日に至つてゐる。「層雲」發表の俳句を選集した句集が、「自然の扉」「生命の木」「光明三昧」「風景心經」「泉を掘る」「劫火の後」「短律時代」の七部が出てゐて、第一句集「自然の扉」の「落椿掃くなべに溝に澄みし空（朱鱗洞）」「筆執る我にひそと炭つぐ母かなし（井泉水）」の如き句風から、第七句集「短律時代」の「雪やんだ雪の落日（裸木）」「シャツ、雜草にぶつかけておく（一石路）」の如き句風に至つてゐる。そして創刊後暫くは、碧梧桐を中心として興つたものだけに碧梧桐及びその共感者が參與してゐたが、碧梧桐が分離してからは、純粹に井泉水派として進展するやうになり、新傾向以來の作者野村朱鱗洞や、後に參加した芹田鳳車・尾崎放哉の如き代表的作者をも出した。〔志田〕

增益書籍目錄（ぞうえきしょじゃくもくろく）「書籍目錄」を見よ。

宋屋（そうおく）俳人【姓】望月氏【別號】百葉泉・富鈴房・机墨庵【歿年】明和三年（一七二六）三月十二日。享年七十九。【法名】机墨庵春翁宋屋居士【墓所】京都一條淨福寺【閱歷】初め其角門の加藤原松に師事したとも傳へられてゐるが（誹諧拾遺譜）、享保年間早野巴人（別項）が上洛してからは、その門に屬して最も忠實に師に事へ、享保十七年には、同門の鄙里と共に、師の高點句集「卯花千句」を撰ぶに至つた。爾來彼は京都に於ける巴人門の最高足として知られ、同十九年には北野三千句を吟じて文臺の主となり、巴人の東歸後は、その遺弟を擁して自ら一方の首領たる觀があつた。併し彼は、その肖像に門人嘯山が「貪財無貯、好色不著、身世一瓢、豈住哀樂」と題してゐる通り、性澹泊で敢て他と爭はず、且つ生涯旅を好んで、屢々諸方に吟杖を曳いた。元文四年冬には播州から讃岐に旅行して「小春笠」の撰があり、延享二年の春は舊山と吉野の花を見、同四年には遠く奧羽地方に行脚して「杖の土」を撰んでゐる。【俳風】概して率直で、時に平板に失する虞もあるが、徒らに小細工を弄する弊がなく、自然を素直に見てゐる句が多い。即ち師巴人の眞率な趣を最もよく繼承してゐる。なほ彼は頗る句達者で數萬の什があつた（瓢簞集序）といふが、今日「瓢簞集」その他によつて知り得る句はさう多くはない。

【編著】梅鏡二册（元文四年刊。享保十九年立机した記念に、汎く知友諸家の吟を綴り集めたものである）○小春笠二册（元文五年刊。播磨・讃岐旅行の集）○西の奧二册（寛保三年刊。巴人追善集）○大和笠一册（延享二年、舊山と和紀地方をめぐつた紀行で、題簽には舊山の撰となつてゐる）○杖の土二

【別號】椋隱軒・椋軒、外に書餅居士・因果道士。狂詩に安穴道人といつた。又その居を道華庵・銅駝餘霞樓・水流雲在樓などと稱した。

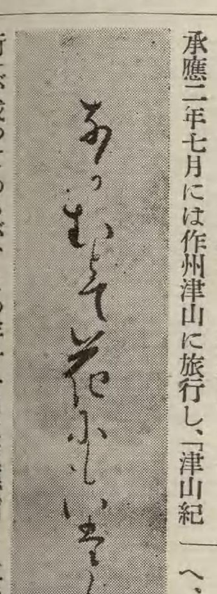
【生歿】安永八年京都に生れ、安政二年（一八五五）六月二十八日、洛外聖護院村に歿す。享年七十七【私諡】文憲先生【墓所】泉涌寺並に黑谷【閱歷】椋隱は伊藤仁齋門の儒者中島義方の後であつた德方の子、初め父より句讀を受け、伊藤談に國學を學んだ。後、村瀨栲亭にも就いたらしい。寺社奉行時代を江戸に客

序）○太平三曲（同上、文政四年序）○天保佳話（同上、天保元年刊）○天保佳話二編（同上、同年刊）

【參考】京都を中心として見たる狂詩下編（安穴道人とその周圍）青木正兒（藝文大正八ノ一）○好事儒者中島椋隱 森銑三（藝文昭和一）【森】

宗因（そういん）連歌師・俳人【姓名】西山豐一（とよかず）通稱二郎作【號】連歌師の頃より宗因と號し、俳諧に於ては初め一幽と號した。また西翁・梅盛翁（天滿宮の社地に居たからであらう）・西幽子・梅翁子・梅花翁・野梅子・忘吾齋・有考庵等

承應二年七月には作州津山に旅行し、「津山紀行」が成つてゐるが、この年十一月に貞德（別項）が歿した。これが宗因の俳諧方面の活動を促進するに至つたらしい。越えて四年明暦二年九月に、菩提屋町の向桑庵が成つたのでこゝに移り、「告二天滿宮一文」を作つて文運を立の劃期的なものである。同六年には京都の物本寺菅野谷高政に「末茂れ守武流の物本寺」の句を與へてその前途を祝したりした。然るに晩年には門流の作に、放縱亂脈なものが生じて來たので、これを嘆歎して「なんにもは



宗因筆蹟

成つたが、これが談林風樹

冊（寶曆五年刊。延享四年奥羽地方に遊歴して歸京した後、その行脚記念とし、且つは又恰も齡耳順に達したので、その賀集として撰んだもの）○明の蓮一冊（寶曆四年。巴人十三回追善集）○千歌仙合机墨二冊（寶曆七年刊。古稀の賀集として千歌仙が成り、更に門下都鄙の高判句を拔萃して机墨と題したもの）○戴恩謝一冊（寶曆八年刊。巴人十七回忌集）○瓢簞集一冊（明和六年刊。門人嘯山と賈友とが師の遺稿を四季・雜に分けて整理し、先づ初編として上梓したものであるが、續編は遂に出版されなかつた）。なほ巴人の追善集「手向の墨」「結ひ水」を撰んだといふが、今傳本を知らない。

【門流】その主な門人を擧げると、人見鈴山・廣瀨了派（初號鐵鐸）・山本宗專（初號松江）・池田鈴賀・三宅嘯山（別項）・望月武然・小谷賈友・岡田文誰等がある。武然は、蓮日庵・方壺山人等の別號があり、宋屋の歿後その後を嗣ぎ、追善集「香世界」（二冊、明和四年）を撰んだ。蕪村・太祇等とも親交があり、享和三年正月二十三日、八十四歳で歿した。〔鈴原〕

早歌（さうか）「宴曲」を見よ。

雜歌（ざふか）　和歌　【名稱】「ざふか」又は「くさ〳〵のうた」「ぞふのうた」とも訓む說があるが、「ざふか」が穩當である。【性質】「萬葉集」の主要なる分類として、雜歌・相聞・挽歌に分つてあるが、相聞・挽歌に屬しない歌をば雜歌としてある。「古今和歌集」以下では、春・夏・秋・冬・賀歌・離別歌・羇旅歌・物名・戀歌・哀傷の歌等に屬しない歌をば雜歌としてあるから、「萬葉集」よりは範圍が狹くなつてゐるのである。且つ「萬葉集」では雜歌を量の多いだけ、相聞・挽歌よりも重んじてゐるのに對して、「古今集」以下では、春・夏・秋・冬や戀の歌に比して後に置いて輕んじてゐるのである。勅撰集の雜歌は自然の歌、もしくは戀愛の歌も加はつてゐて、明かに區別し難いものもあるが、自然をうたつた歌も、自然を譬喩として用ひたものが多く、純粹に戀愛歌と稱すべきものも尠い。たとへば「新古今集」に於ては雜歌三卷の中、上・中は自然を譬喩的に用ひた歌が主であり、下は無常思想をうたつた歌が主である。歌としては、自然や戀愛歌のやうに純一でなく、雜然たる性質があり、感動としても純粹でないものがあるが、歌人の環境・生活を知る上に興味ある材料を提供してゐる。〔久松〕

【參考】萬葉集○勅撰和歌集

創學校啓（さうがくかうけい）　國學書　一卷　【著者】荷田東麿（春滿）　【成立・由來】當時は漢學隆盛を極め、幕府の昌平黌を始め、諸藩の學校が悉く儒教主義であるのを慨し、幕府に對して國學校創設のことを請願したもので、彼が六十歳なる享保十三年に、弟信名と計り、養子在滿を江戸に出でしめ、御家人をたよつて上言せしめようとしたものであることは、信名手記の「享保十三年歳次戊申家錄」九月十四日の條（「荷田東麿翁」所載）に明かである。そしてその御家人は、嘗て東麿が將軍吉宗の命を受けて、古書校勘の事に從つた際（享保七・八年）、彼に質疑した一人である御小納戸大島雲平であることが、羽倉家所藏の草稿本によつて明かである。建議の結果は、「近世畸人傳」のみには、「官の許をうけ、既に地を東山にトするに及びしが云々」とあるけれども、これは據るところも不明であり、その後の經過から推しても疑はしい。恐らく彼は何等かの沙汰を待ちつつ、後二年にして中風症を發し、一旦快くなつたが、數年を經て再發、卒去に至るまで、それを實現する運びには至らなかつたのであらう。【諸本】汎く世に行はれたものは、寛政十年刊の、彼の歌集「春葉集」の末の卷に附錄せられたものの系統で、長尾武雄・福羽美靜によつて一冊の書として刊行せられ、更に平田鐵胤によつて「荷田大人啓」として板に附せられた。明治以後の版本もすべてこの系統のものののみである。然るにこの啓文の草稿と稱せられるものは、今も京都羽倉家に藏せられ、版心の下方に「靈淵堂」と入れた半紙判八行の罫紙六枚に認められたもので、東麿門人山名武内（靈淵）の筆とされてゐる。これと「春葉集」附錄系統のものとを比較するに、主要精神を叙した部分は殆ど同一であるが、諸所に字句の異同があり、文末は草稿本の方が遙かに詳細で、且つ「大島雲平大兄閣下」と宛名を明記してある。

【內容】まづ德川氏治世の昌平及び當代教學の隆盛を讃嘆し、曾て自ら校書の恩命に浴した光榮を謝し、當時既に幕府の庇護によつて素願を達せんとする意があつたけれども、未だその任に非ざるを思ひ、空しく歸京した由を述べ、しかも鬱勃たる志は抑へるに由なく、且つ時弊は日に甚しきを加へ、漢學・佛教のみ行はれて皇國の學は忘れられ、神道も歌道も共に異教の糟粕餘瀝に賴る妄說私言に墮したと慨し、玆に國學創業の大抱負を叙べ、更にその學要を示して國學校創設の要を述べたものであつて、草稿本にあつては更に宛名人たる大島雲平に對して上達を請ふ旨を記して文を結んである。啓文一篇の中心思想は、中葉以來民心を混濁に導き、社會的害惡を醸した佛教・漢學を斥けて、わが古道を闡明し、更にこれを國民生活の上に實現しようとするにあつたことは言ふ迄もない。【價値・影響】彼がこの啓文に於て成した功績は、第一には時代の上に著しく現れて來た復古精神及び自國尊重の機運に統一と根據とを與へ、來るべき國民運動の基礎を確立したことであり、第二には「古語不レ通則古義不レ明焉。古義不レ明則古學不レ復焉」といふ國學の學要を樹立したことである。以後國學が單なる國史・國語・國文の研究たるに止まらず、その根本に於ては常に古道を對象となし、而も古語に卽してこれを闡明し實現し行かうとした傾向は、こゝにその基礎を得たのであつた。從つて眞淵・宣長・篤胤等の國學上の業績は、前代もしくは同代學者の事務的研究の繼承發展であるよりも、東麿が生涯の結論として揭げたこの精神の實現に外ならなかつた。なほ曾て藤岡博士が、この啓文を怪しみ、平田派の假作ではないかとしたことの誤（東圃遺稿）については、既に井上賴囶博士の駁論（「荷田東麿翁」所載）があつて大體を盡してゐる。（國學參照）

【參考】玉磐　平田篤胤　○荷田東麿翁大貫眞浦　○荷田大人啓文註解　神代名臣　○荷田全集第一卷例言　〔西尾〕

草假名（さうがな）「平假名」を見よ。

宗鑑（そうかん）　連歌師・俳人　【姓名】志那範重。通稱彌三郎　【歿年】天文二十二年（一五五三）十月二日（通說）、享年八十九（通說）　【墓所】讃岐琴引山麓興昌寺境內一夜庵。又大德寺の眞珠庵に宗鑑上座塔があつたと云ふ。〔辭世〕「古今夷曲集」に、「背に癰瘡出來て身まかる時詠る　宗鑑はどちへと人の問ふならばちと用ありてあの世へといへ」。【閱歷】近江源氏佐佐木義淸の裔と傳へられる。近江に生れ、幼年より足利義尙に仕へて恩顧を受けたが、延德元年義尙が江州の六角高賴を討伐中陣歿し

集」の主要なる分類として、雜歌・相聞・挽歌に分つてあるが、相聞・挽歌に屬しない歌をば雜歌としてある。「古今和歌集」以下では、春・夏・秋・冬・賀歌・離別歌・羇旅歌・物名・戀歌・哀傷の歌等に屬しない歌をば雜歌としてあるから、「萬葉集」よりは範圍が狹くなつてゐるのである。且つ「萬葉集」では雜歌を量の多いだけ、相聞・挽歌よりも重んじてゐるのに對して、「古今集」以下では、春・夏・秋・冬や戀の歌に比して後に置いて輕んじてゐるのである。

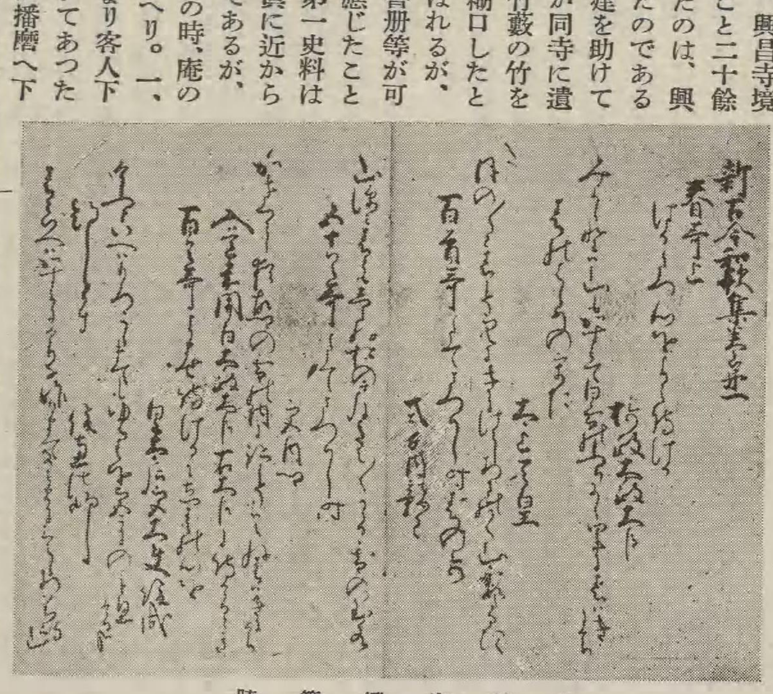
彼に質疑した一人である御小納戸大島雲平であることが、羽倉家所藏の草稿本によつて明かである。建議の結果は、「近世畸人傳」のみには、「官の許をうけ、既に地を東山に卜するに及びしが云々」とあるけれども、これは據るところも不明であり、その後の經過から推しても疑はしい。恐らく彼は何等かの沙汰を待ちつつ、後二年にして中風症を發し、一旦快くなつたが、數年を經て再發、卒去に至るまで、それを實現する運びには至らなかつたの

共に異教の糟粕餘瀝に賴る妄說私言に墮したと慨し、玆に國學創業の大抱負を叙べ、更にその學要を示して國學校創設の要を述べたものであつて、草稿本にあつては更に宛名人たる大島雲平に對して上達を請ふ旨を記して文を結んでゐる。啓文一篇の中心思想は、中葉以來民心を混濁に導き、社會的害惡を齎した佛教・漢學を斥けて、わが古道を闡明し、更にこれを國民生活の上に實現しようとするにあつたことは言ふ迄もない。【價値・影響】彼が

そのうち、宗鑑は今出川殿であつた公縁に相愛して、遂に足々庵に移り住んで、名を宗鑑と改めた。世に山崎を苗字のやうにいふのはこのためである。こゝに結んだ庵を對月庵と稱したと云ひ、現存の妙喜庵（特別保護建造物）は、文明年間の改修改稱のものであると云ふ（庵中の茶室は、山崎合戰の時利休が點茶したと云はれる斯道の名物）。晩年讃岐に遊び、興昌寺境内に一夜庵を結び、留まること二十餘年こゝで歿した。讃岐へ來たのは、興昌寺の梅谷禪師を尋ねて來たのであると云はれ、興昌寺の本堂再建を助けて草したと云ふ紫金仙勸進帳が同寺に遺つてゐる。山崎在住中は、竹藪の竹を切り、油壺を作つて鬻いで糊口したと云はれ、又筆耕をしたと云はれるが、宗鑑は名筆で、その遺筆の書册等が可なり現存するから、傭書に應じたことは事實であらう。宗鑑傳の第一史料は頗る乏しく、以上は比較的眞に近からうと思はれる所を記したのであるが、この外逸話として、山崎在住の時、庵の入口の額に、「一、上の客立かへり。一、中の客人日がへり。一、とまり客人下の下」（「百物語」に據る）。と書いてあつたと云はれる。又宗祇（別項）が播磨へ下る時、宗鑑の庵を訪づれ、「足さし入て宿をからばや」と云ひかけ、宗鑑が「津の國のなにはくはずと泊り舟」と答へて一夜を語り合ひ、宗鑑が自作の連歌を取出して旅宿の暇に添削してくれと乞ひ、播州は鍋の名所だから鍋一つ土産にくれと約し、翌朝別れに臨んで、「忘るなよ連歌の點とはりま鍋」と云ふと、宗祇が

「いづれおすみのつかであるべき」と答へたといふ（連歌遠行記）。この中「足さし入て」の附合は「犬筑波」（別項）に小異があるのみで出てゐるから、この逸話の附合は眞僞遽かに斷じ難い。又宗鑑が宗長と共に始めて逍遙院實隆公へ伺候した時の事として、

宗鑑が姿を見ればがきつぼた　公
のまんとすれど夏の澤水　宗長



山崎宗鑑筆蹟

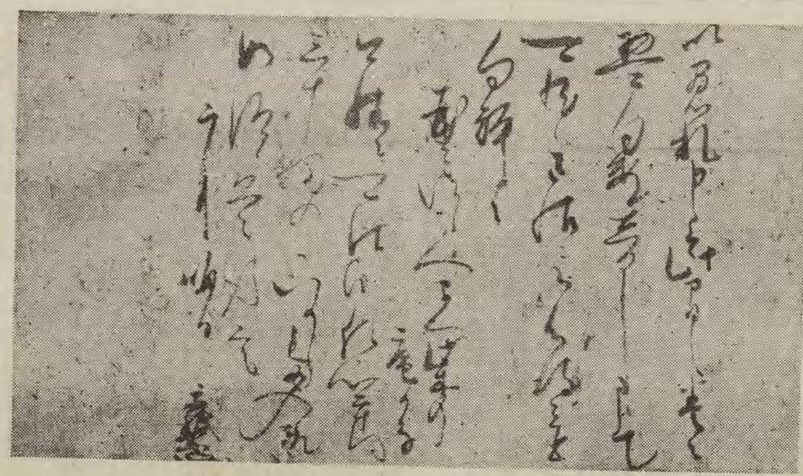
蛇におはれていづちかへるらん　宗鑑

の附のあつたことが「犬子集」（別項）に見え、この後種々のものに發句を近衞龍山公としたりして樣々に傳へられてゐる。【著作】新撰犬筑波集（別項）○竹馬狂吟集（存否不明）。【史的地位・作風】宗鑑は、宗長（別項）と風交があり、當時有數の連歌作者であつた事は、「宗長手記」によつて知られ、その他宗祇（別項）一門と風交があつたらしく、守武（別項）とも交友であつたことは、「守武千句」跋によつて知られる。然るに宗鑑は、「かしましや此さと過ぎよ郭公都のうつけさこそ待らん」（片言）と詠んだと云はれるやうに、武門を去つての彼の隱棲生活は、兎角因襲とえせ風流とを嫌つたらしく、かくて遂に本連歌よりも俳諧連歌に重きを置くに至り、「犬筑波集」を撰集したばかりでなく、なほ同種の「竹馬狂吟集」（「寛山集」良德跋）なるものをも撰集したらしい。即ち宗鑑は守武と共に俳諧獨立の機運を作つたもので、俳諧史上に於ける彼の地位と價値とはこゝにある。併し彼の確實な作は多く見るを得ないが、「犬筑波」は彼の標準によつて撰集したものであらうことと、僅かに知られる彼の作とによつて「犬筑波」の風調が、やがて彼の作風を代辯してゐると云つてよい。

【參考】新增犬筑波 松永貞德○玉海集追加 安原貞室○誹諧三部抄 岡西惟中○苑蘂泥赴（つぎねふ） 北村季吟○雜談集 寶井其角○貞德永代記 中島隨流○滑稽太平記 北藤浮生○歷代滑稽傳 森川許六○綾錦菊岡沾凉○誹諧句撰 祇德○新著聞集○誹諧家譜 早川丈石○誹論 八文字舍白露○朱紫 越谷五山○俳家奇人談 竹內玄々一○誹家大系圖 生川春明○華葉集 寺町百庵○山崎宗鑑手跡連歌式目歌時代考（輪池叢書）○犬筑波考 柳亭種彥○用捨箱 同上○野史 飯田忠彥○山崎宗鑑 松尾明德○一夜庵のこと 乾木水（「祇園」二ノ九）〔志田〕

宗祇（そうぎ）

連歌師 【姓】飯尾氏 【號】自然齋・種玉庵 【生歿】應永二十八年生れ、文龜二年（一一一六二）歿。享年八十二。【墓所】駿河桃園定輪寺。又箱根早雲寺にも墓がある。【閱歷】生地は、「雜抄（別項）」には江東の地といひ、如松子の「種玉庵宗祇傳」には紀伊粉河邑といひ、「周南文集」には有田郡の內といひ、定說がない。その出自についても、本居內遠の「賤者考」には伎樂師の子といひ、如松子の「宗祇傳」には姓は三善、氏は飯尾といひ、定說がない。幼時高山民部少輔宗砌の養育を受け、歌は飛鳥井卿に點を請ひ、連歌は心敬（別項）等の敎を受け、岩倉に庵を結んでは自然齋と號し、東山に移つては居を種玉庵といつた。應仁の頃は亂を關東に避け、文明元年には心敬に從つて川越の太田道灌の館に招かれ、千句の席に列つた。又美濃の郡上に詣り、東野州（別項）より「古今傳授」を受け、南禪寺の蘭



宗祇句入消息（高野辰之氏藏）

坡、建仁寺の龍統正宗に漢詩を學んだ。長享二年「花の本」の宗匠を允され、北野會所の奉行となつた。文明九年には長尾景春の五十子の陣に招かれて連歌の道を傳へ、同十二年には大内正弘に招かれて周防に到り、それより筑紫の旅路に上り、明應八年には越路に旅して留まること二年、文龜二年相模湯本に到つて歿した。【著作】〔連歌に關するもの〕竹林抄○新撰菟玖波集（各別項）○宗祇初學抄（白髮集參照）○吾妻問答（別項）○淀の渡（別項）○老のすさみ（別項）○宗祇袖下（別項）○分葉（相良侯に贈つたもの）○宗祇傳抄（飛鳥井宋雅に答へたもの）その他。〔連歌の集〕萱草○下草○老葉（各別項）。〔和歌・國文に關するもの〕古今兩度聞書○源氏物語帚木別註○伊勢物語抄○愚問賢註抄等。外に家集・紀行等、その他がある。百韻・千句等の連歌の作は、列擧しがたいほど多い。

【業績】宗祇は連歌のみならず、國文學全般に亙つて研究し功績があつたが、中にも連歌に於ける業績の最も見るべきもののある事は云ふまでもない。彼は遍歷詩人で、一生南船北馬席の暖まる遑がない程で、全國に連歌を宣布した功は少くない。又連歌を見る眼が高くて、高山宗砌以下七賢を選定し、その佳句を拔いて「竹林抄」を撰び、又、一條冬良の命を奉じて「新撰菟玖波集」を撰んだ。連歌は長高く幽玄に有心の趣あるを理想としたことは、先輩に於てもさうであつたが、宗祇に至つてそれが一層名實相協ふものとなつた。要するに連歌の進展と隆盛は、宗祇時代にその頂點に達したと云つてよく、その指導者たり中心たる人は宗祇であつた。

【參考】連歌史論口功○連歌の史的研究藤井久藏○宗祇を中心としたる連歌史樋口功（潮音九ノ一〇）○連歌師宗祇法師　同上（藝文五ノ二・三・五）○宗祇を中心とせる室町文學　小島吉雄（日本文學講座）○宗祇法師とその生涯　同上（國語國文の研究八・一四・一七）　〔福井・志田〕

宗祇終焉記　一卷【著者】柴屋軒宗長【諸本】群書類從雜部所收。【解說】宗長が、文龜元年、越後の國府に晩年を送つてゐる師の宗祇を訪ね、翌年相携へて歸つて來る途次、宗祇が箱根の湯本で歿した次第を記した終焉記で、水本與五郎に書き送つたものである。猪苗代兼載の追悼の長歌をも奥に加へてある。　〔福井〕

宗祇初學抄　「白髮集」を見よ。

宗祇袖下　連歌書　一卷【著者】飯尾宗祇【名義】袖下とは、原義は「兒敎訓」に初心が連歌の會席に列なる時の模樣を歌つたところに、「十七十四ある文字を、袖の下にて數へかね」とある如き意義で、それから移つて、連歌に用ひる詞の手引書をいふやうになつたものと思はれる。【諸本】續群書類從連歌部所收【解說】宗祇が常德院足利義尙のために、連歌に用ひる詞を「萬葉集」「八代集」「伊勢物語」「源氏物語」、その他種々のものから五百近く拔萃して、それに註釋或は解說を施し、數條の附合上の注意をも書き加へ、冒頭に一座の行樣の事及び千句の行樣の心もちの事、面の行樣の事の二ケ條を記して進上したものである。本書より前に、これに頗る類似したものに「梵灯庵袖下集」（別項）があるので、本書はこれに倣つたものと思はれる。　〔志田〕

宗祇法師前句附　連歌集　一卷【作者】飯尾宗祇【解說】「人の心のかはる世の中」といふ句に、さまざまの前句を附け試み、その數合せて百に上つたものを、春・夏・秋・冬・戀・雜に部類したもの。　〔福井〕

蒼虬　俳人【姓名】成田氏。通稱久左衞門【別號】槐庵（二世）・芭蕉堂・南無庵・對塔庵【生歿】寶曆十一年金澤袋町南側小路に生れ、天保十三年（一八四二）三月十三日、對塔庵に歿した。享年八十二【墓所】京都二條東妙傳寺【閱歷】蒼虬は金澤藩士成田勘左衞門（知行四百石大小姓組）の子に生れた。俳諧を闌更に就いて學び、槐庵第二世を稱したのであるが、寛政五年十二月（三十四歲）父が事に坐して知行沒收一類預けとなり、翌年七月入牢、同十一月遂に牢死したので、蒼虬は金澤を去つて京に上り、その頃東山に芭蕉堂を構へて ゐた闌更に依つた。闌更歿後、芭蕉堂第二世となり、全國的遊歷をなして大に名聲を馳せた。當時に於ける俳人の遊歷卽ち行脚は、連句技倆の練磨であり、又勢圈の扶植でもあつた。天保元年芭蕉堂を子崖に讓り、その傍の小庵に入つて南無庵第二世を稱した。江戸の抱儀が蒼虬を招きて、約一ケ年の間蒼虬を厚遇したのは、天保五・六年であつた。以て蒼虬の盛名を得たことを知るべきである。京に歸つて後、八坂のほとりに移り住んで對塔庵と稱して老を養つたが、遂にそこで終つた。蒼虬が京で迎へた後妻は枝月尼と稱して、蒼虬歿後は行脚などもした。その妹は賴山陽の後妻で三樹三郎の生母である。山陽が發句を「馬子唄」と嘲つて蒼虬を揶揄してゐたといふ挿話は、かういふ私的關係があつたからであらう。蒼虬は特に連句に長じてゐて、天保の四老人（別項）の中では、蒼虬が最もよく「炭俵」の至味を會得し、これをその連句に發揮した。蒼虬が連句練磨に心を勞した事は「魯利風語」中の「蒼虬翁遺事」十一項によつても看取される。（闌更參照）

【編著】蒼虬自らの編著と見るべきものは、まだ見當らないが、門下等の編纂上梓したものに次の五種がある。○蒼虬翁句集二册（四册に分綴したものもある。天保十年門人校合、同十五年刊。梅室の序がある。內題には「對塔庵蒼虬句集」とあり、四季の發句約九百を收錄してある）○訂正蒼虬翁句集二册（弘化三年麥慰舍梅通編、同年刊。梅通の序、泮水園芹舍の跋がある。內題には「蒼虬翁發句集」とあり、卷首に略傳を載せ、四季の發句約八百五十を收錄してある。俳書大系近世俳話句集所收）○增補蒼虬發句集二册（編者は未考であるが、嘉永五年金澤の槐庵六世大夢の跋がある。金澤地方に於ける遺吟を「對塔庵句集」に加へたもので、梅室の序をその儘用ひてある。十三回忌の嘉永七年に金澤で刊行したもの）○蒼虬翁俳諧集二册（梅通の編で、弘化四年刊。芹舍の序、梅通の辨がある。歌仙三十五卷・百韻一卷を收錄してある。蒼虬の連句を見るべき好資料である）○蒼虬翁俳諧附合集　小本二册（半青居新甫編。文久元年刊。新甫の序がある。歌仙三十六卷・半歌仙六卷・百韻二卷を收錄し、當時の全國俳人の發句を附載してある。梅通のものに比すれば、採錄の標準が雜駁である）。　〔贊川〕

箏曲　音曲【名義】箏の琴に合せて奏する歌曲【種類】八橋檢校によつて大成された近代箏曲は、組と外曲とに分たれる。外曲は組以外の曲の意。この兩者を通じて曲だけで歌のないもの、歌に合せるもの、箏と三味線とに合せるもの、これに胡弓又は尺八を加へて、三曲と稱するものに用ひるもの等の區別がある。【傳授上の區分】曲の難易と因襲とによつて敎授上に特殊の區分が設けてある。これを「後事雜記抄大成」（富士谷御杖著、文

[illegible]

正許裏組　雲上　薄衣　桐壺　四季友　八段の調子　友鶴　雪月花　二長　亂輪舌　砧。

中許　須磨　明石　末松　空蟬　九段の調子

四季富士　玉鬘　浮船　玉川　花園　宴　四季戀

七段の調子　雲井弄齋　五段の調子。

三曲　四季曲　扇曲　雲井曲。

新組祕事　羽衣　若葉　思川　橋媛　宮鶯

三の調　新雲井弄齋　雲井九段の調子。

新組第一祕事傳受　飛燕曲。

組三十三曲　段調子七　外二砧

弄齋二首　以上四十二

これが總計である。而して何段の調子といふもの、亂輪舌及び砧には歌がない。（曲の作者や作成年代については「箏歌」を、組の歌に關しては「箏の組歌」を、外曲については「上方歌」參照）〔高野〕

宗祇流「書道」を見よ。

想起錄　隨筆　一卷　【著者】矢野文雄【刊行】明治二十四年【解説】龍溪居士矢野氏の隨筆で、明治二十三四年の交、當時の新聞紙に連載されたものである。盆栽より想起錄に關する寄書まで凡そ二百三十九條を集めてゐる。和漢洋古今の事物についての感想が多い。別著「西遊漫記」と合本にして、明治二十四年活印せられた。なほ「西遊漫記」に同二十三年の自序がある。〔和田〕

雜藝　歌舞【名稱】平安時代の種々なる藝能の意味、從つて單に歌謠のみならず演藝の類をも含める。支那では、「南史」の朱异の條に、「涉獵文史、兼通雜藝」などと見える。この語を用ひて、我が國では演劇歌謠の類を總稱する。なほ雜藝は「體源抄」にも假名でザイと記してゐる。倭しザイと云つたふとも思はれる。【種類】散樂（別項）劇及び散樂と共演せられる曲藝奇術の類、而してこれ等を演ずる呪師・別法士の徒は、何れも雜藝の本藝者である。「新猿樂記」には當時行はれた散樂の曲目を掲げ、散樂を雜藝とすることは「西宮記」の相撲召仰の條にも見えてゐる。「傀儡子記」には、傀儡子の演ずる曲目に、今樣・古川樣・足柄・片下・催馬樂・黑鳥子・田歌・神歌・棹歌・辻歌・滿固・風俗・呪師・別法士を擧げ、「郢曲抄」には、「郢曲（朗詠の事）・神樂・今樣・催馬樂・片下・田歌など一つ音聲に歌ひ、未練の內は皆々一樣に唱ふなどと云ふ事は口惜しき事也」と見えてゐる。何れも雜藝に屬するものと思はれる。「拾芥抄」の雜藝曲目は、東遊・朗詠・今樣・古柳・田歌・沙羅林・早歌・片下・物樣である。就中「梁塵祕抄口傳集」（別項）には、最も數多く見えてゐる。雜藝を類別すれば次の如くである。

一、散樂・曲藝・奇術・呪師・別法士

二、神樂・催馬樂・風俗歌・東遊

三、朗詠（狹義の郢曲）

四、足柄・黑鳥子・伊知古・古川（古川樣）・十天・たみ（この二種の名は誤りであらう。以上を大曲樣と云ふ）・片下（片下歌）・古柳・舊古柳・權現（權現樣）・御幣・早歌・初幟・長歌・二句神歌・四句神歌・法文歌・沙羅林・物樣（樣の歌）・田歌・棹歌・辻歌・滿固（イに周）風俗（前記四譜の風俗歌と異なる）。

五、今樣（狹義）・たゞの今樣（常の今樣）

六、鬢多々良・思之津・伊佐立奈牟・白薄樣・物云物・宴曲（白拍子）。（五節間郢曲參照）

七、その他の雜曲

以上のうち二・三・四・五・六に屬する曲を廣義の郢曲と云ふ。また四・五・六に屬する曲を廣義の今樣と云ふ。郢曲の事を唱歌とも云ふ。而して「文藝類」に打物・音曲・催馬樂・風俗・朗詠・雜藝・聲明と並べ記してゐるのによれば、二三の二項をば雜藝から獨立させることも出來る。即ち管絃舞樂・四譜・雜藝・朗詠・聲明の五種を古代音樂の大別となすことが出來るが、また雜藝の意味を一般歌謠の意味に擴充させれば、管絃舞樂・雜藝・聲明の三大別とすることが出來ると思はれる。なほ「梁塵祕抄口傳集」には、高砂・雙六と云ふ曲名が見える。これは催馬樂の高砂及び雙六の名を列擧した大芹のことかも知れぬ。

【片下・早歌】「體源抄」に、「法文ノ歌今樣片下早歌コレ分クモノイト難シ」、「郢曲抄」に、「片下は又今樣に同じ」、「口傳集」に、「片下早歌」「沙羅林早歌」「今樣沙羅林片下歌早歌」などと並べ記せるによれば、何れも法文歌・沙羅林と並んで、今樣の一種の謠ひ方と思はれ、從つてその形式も七五四句の今樣形式を持つた歌と思はれる。片下の名は上代歌謠に見え、神樂（別項）にも似た名稱があり、東遊（別項）の大比禮の別名でもある。それ等の謠ひ方の系統を引いてゐるのであらう。早歌も神樂にあり、宴曲（別項）の別名でもあり、室町時代の小歌にもある。それ等と同じい間の早き謠ひ方であらう。神樂の早歌、室町時代の早歌は何れも短小の形式であるが、雜藝の早歌は今樣形式であらう。「梁塵祕抄」卷一の斷片に載せた今樣のうち、

常に消えせぬ雪の島、螢こそ消えせぬ火はともせ、鳴と云へど濡れぬ島かな、一聲なれど千鳥とか。

の如き歌に、「早」と肩に記したのは、この二首が早歌であるからであらう。「體源抄」には「早歌トテ郢曲世ニモテアソビシナリ。是ハ悉雅樂ノ音聲ヲタダシテ、五音七音皆其源ヲモトヅク雜藝ノ物也」と記してゐる。傳しも關ふ早くて、よくその歌詞が聞き取れたのである。「江家次第」及び「北山抄」の大嘗會の條に、悠紀の風俗歌は「其聲似ニ神歌一遲」と記し、「主基奏ニ早歌一」と註して、神歌と早歌と相對し、神歌は遲く早歌は速き事を示してゐる。但しこの神歌早歌は、神樂歌の事で雜藝のそれではないかも知れぬ。

【大曲樣】舞樂の大曲の樣に歌ふのである。樣は上代の曲と似た名稱で、謂はば大曲節と云ふ名である。今樣・古川樣・權現樣等の樣は皆同じい。大曲は序破急の揃つて、よくその序に叶つた曲である。神樂の大前張も舞樂の大曲より出た謠ひ方と思はれる。「口傳集」に「大曲足柄」「足柄より始めて大曲樣」「足柄黑鳥子伊知子などやうの大曲（中略）舊川」「大曲のやうになりて足柄黑鳥子舊川果てて伊知子を歌ふ」「足柄兩三伊知古舊川」「足柄十天（十首などの誤りか）黑鳥子伊知子舊川」「足柄四首、天のとうさい二反、關神・瀧水・黑鳥子・伊知子・舊河」（天のとうさい、關神、瀧水は足柄の曲の中である）、足柄黑鳥子舊河伊地古」。「郢曲抄」に「足柄大曲黑鳥子前張に宮人ゆふしでなり」（前張の宮人と木綿志天は大前張の中で卽ち大曲樣である）。これ等の例で、以上數曲が大曲樣であり、常に一團として取扱はれてゐる事を知るべきである。歌詞は何れも殘つてゐないが、足柄（別項）だけは若干推測される歌があり、政長（刑部卿。源家の六代目の名手で綾小路家の祖）の記した笛譜には歌詞もあつたらしいが（體源抄）、今日その書は傳はらない。また黑鳥子に就いては、「河海抄」帚木の卷に、西の京なる後達は續千疋縑千疋くりあげて織るかと、しの引きするや、ぬき引きするや、きりゝ〳〵すはは、採錄の標準が雜駁である）。〔賀川〕

箏曲　音曲【名義】箏の琴に合せて奏する歌曲【種類】八橋檢校によつて大成された近代箏曲は、組と外曲とに分たれる。外曲は組以外の曲の意。この兩者を通じて曲だけで歌のないもの、歌に合せるもの、箏と三味線とに合せるもの、これに胡弓又は尺八を加へて、三曲と稱するものに用ひるもの等の區別がある。【傳授上の區分】曲の難易と因襲とによつて教授上に特殊の區分が設けてある。これを「箏曲獨語抄大成」（高安國山著、文

て、高山宗砌以下七賢を選定し、その佳句を拔いて、「竹林抄」を撰び、又、一條冬良の命を奉じて「新撰菟玖波集」を撰んだ。連歌は長高く幽玄に有心の趣あるを理想としたことは、先輩に於てもさうであつたが、宗祇に至つてそれが一層名實相協ふものとなつた。要するに連歌の進展と隆盛は、宗祇時代にその頂點に達したと云つてよく、その指導者たり中心たる人は宗祇であつた。

【參考】連歌史論口語〇連歌の史的研究

物語」源氏物語」その他種々のものから五百近く拔萃して、それに註釋或は解説を施し、數條の附合上の注意をも書き加へ、冒頭に一座の行樣の事及び千句の行樣の心もちの事、面の行樣の事の二ケ條を記して進上したものである。本書より前に、これに頗る類似したものに「梵灯庵袖下集」（別項）があるので、本書はこれに倣つたものと思はれる。〔志田〕

宗祇法師前句附　連歌集　一卷【作者】飯尾宗祇【解説】「人の心のかはる世の中」といふ句に、さまゝゝの前句を附つて後、八坂のほとりに移り住んで對塔庵と稱して老を養つたが、遂にそこで終つた。蒼虬が京で迎へた後妻は枝月尼と稱して、蒼虬歿後は行脚なども した。その妹は賴山陽の後妻で三樹三郎の生母である。山陽が發句を「馬子唄」と嘲つて蒼虬を揶揄してゐたといふ挿話は、かういふ私的關係があつたからであらう。蒼虬は特に連句に長じてゐて、天保の四老人（別項）の中では、蒼虬が最もよく「炭俵」の至味を會得し、これをその連句に發揮した。蒼虬が連句綾綾に心を勞した事は「俳利風語」

のなとかたむかし荻の花や雜藝歌黑鳥子歌」と記して出てゐる歌詞が、黑鳥子の歌であらう。

【權現・御幣】「口傳集」に並べ記せる故、同一種の曲で、恐らく神歌の一種であらう。足柄などと關係があるかも知れぬ。「吉記」の承安四年九月、今樣合の條に、「雜藝等終以盛定歌ニ權現樣ニ」、また「今鏡」の花散る庭の面にも「五節の淵醉の今樣などに權現歌ひける」とも見えて、當時可なり行はれた雜藝と思はれる。但し、「吉記」には、權現は敦家流の外謠はないとあるから、特殊の雜藝で、傀儡子女に特に習つた曲と思はれる。

【田歌・棹歌・辻歌・滿固・風俗】以上何れも「傀儡子記」に見える。田歌は、大賞會田歌と關係があらう。棹歌は舟歌、辻歌は市中で歌ふ流行歌又は門附歌の類、風俗は各地の民謠、滿固は不明。この他、初幘・物樣等も全く不明。「口傳集」にはまた蟲鳥の歌などとも記せるものがあり、何れも民謠流行歌巷謠の類であらう。また「口傳集」に物語と云ふ歌があるのは物樣の誤りと思はれる。

【伊豫の湯桁】「體源抄」卷十には、風俗十四首の次に「ウバラコキ ザウゲイ」(四句神歌の歌)一首、次に「伊豫湯ザウゲイサイバラ」を四首と、同種の雜藝催馬樂に屬する歌四首、最後に神樂の其駒を風俗歌として載せてゐる。右の伊豫湯の歌は、既に「源氏物語」の空蟬にも、「指を屈めて十廿三十四十など數ふる樣、伊豫の湯桁もたど〳〵しかるまじう見ゆ」と見えてゐる。これは「體源抄」所載の第一歌、「伊豫の湯桁は幾ついざ知らずヤ數へず算まずヤレソヨヤナヨヤ君ぞ知るらうや」の歌を意味してゐる。これは傀儡樂の歌謠と酷似してゐるから、新作の傀儡樂とも云ふべきもので、曲調もそれより出てゐるから、雜藝催馬樂と記したものであらう。

【雜藝書】早く「雜藝集」と云ふ書があつて「梁塵祕抄口傳集」に後白河院の御愛讀の旨見え、「源平盛衰記」卷十七の祇王祇女佛御前事の條には「佛も昔は凡夫なり」の今樣が雜藝集の中に書かれてゐる由を記してゐる。今樣その他の歌詞を多く纂集したものであらうが、早く逸して傳はらず、ただ後白河院の「梁塵祕抄」數卷を殘してゐるのみである。これ等の書の外、平安朝末より鎌倉室町時代の書に多く散見してゐる。又これ等の歌謠を集錄した書には、今井似閑の「萬葉緯」を初め、伴信友の「中古雜唱集」、栗田寬の「古謠集」等があり、黑川春村・大田南畝・田宮仲宣・岡本保孝等、雜藝の集錄に力を盡した學者が多い。〔藤田〕

造形藝術（ざうけいげいじゆつ） 藝術論 〔獨〕Die bildende Kunst.【解說】造形美術といふも同じ意味で、一般に繪畫・彫刻・建築等を指す。これ等は感覺現象として觀れば、建築彫刻の如く直接に空間又は實質的形體として現はれるか、或は繪畫の如く空間又は實質形體の假象的空間として現はれる。即ち皆空間を所緣とする所から、又空間藝術とも呼ばれ、時間藝術(詩・音樂等)(別項)と區別される。又凡て有形的材料によつて表現され、視覺的に把握されるが故に視覺藝術といひ、或は形象藝術と呼ぶ事もある。併し美學者リップスは、繪畫彫刻等の如く自然の物象をそれ〴〵の表現手段によつて再構成するものを形象藝術とし(再現藝術參照)、非再現的な抽象的空間構成である建築や純粹裝飾の如きものを特に空間藝術と稱してゐる。從つて事物の現實的形象を再現しないやうな繪畫に對しては、抽象的繪畫といふ如き名稱も與へられて來る。總じて造形藝術は、その手段方法は相違しても、それが藝術である限り、吾々の生活感情の具體的造形的表現であるところに同一の意義を獲得する。(藝術參照) 〔村田〕

草徑集（さうけいしふ） 歌集 三卷 【作者】大隈言道 【刊行】文久三年【諸本】近世名家歌集下卷(續日本歌學全書)・近代名家歌選(和歌叢書)所收。また戊午集・今橋集の二集は、歌文珍書保存會の言道翁全集、及び日本古典全集の大隈言道全集所收。【解說】言道の家集は、稿本四卷を存してゐる。戊午集二卷、今橋集二卷がこれである。〔戊午集上卷〕は甲辰集・己酉集・庚戌集・辛亥集・壬子集に分れ、甲辰集は弘化元年より嘉永元年まで五年間の集、己酉集は同二年、庚戌集は同三年、辛亥集は同四年、壬子集は同五年と年々の作歌を集め、以上九年間の詠歌、約一萬餘首の中より拔萃して、この一卷を編したものである(その以前若年の時の歌集に、南樓集・ささの屋集・鳧居集等がある)。〔戊午集下卷〕嘉永六年より安政五年にかけて、五年間に詠み出でたる歌約五萬首の中より撰出したるものを戊午集十二卷とし、その稿本に朱點を附したる歌四千五百五首のうち前半の六卷より更に黑點を附したる歌を撰出してこの卷となした。安政六年の跋文がある。〔今橋集上卷〕右の戊午集草稿十二卷の中、後半の六卷より、更に下に黑點を附した歌を拔萃したもの、終りに種々の歌が集錄せられてゐるが、この歌の詞書の中には、文政二年などといふ若い時の年號が見えてゐる。〔今橋集下卷〕戊午集草稿十二卷の後半六卷の中より、上に黑點を附したる歌を集めて集錄したものである。以上の如く言道は、推敲に推敲を重ね、選歌に嚴選を加へて無慮十萬餘首にのぼる作歌の中より歌集の稿本を編し、更にその中より撰出してこの四卷とした。而してこれ等より四度嚴選して家集三卷を編み、文久三年正月二十日の自序、門弟茂村恒久の同年の跋文を加へ、地苹堂藏板として刊行したものが即ち「草徑集」である。この後、續草徑集刊行の企もあつて、茂村恒久の跋文にも「又二編も程なく物すべくなむ」と記してゐるが刊行はせられなかつた。本書の內容は、戊午集・今橋集が雜然たるに比し、凡そ春夏秋冬、その他同種の歌を同所に並べて置き、整然と排列されてゐる。【歌風】良寬・曙覽と並び稱すべき幕末の偉大なる歌人である言道は、歌風から言へば、良寬・曙覽が萬葉調に近いのに對して、古今調に近いものがあるが、着想の斬新奇拔に、また洒落輕妙なる事、觀察の精微微細なる事など、從來の歌人の着眼せざる點に出で、從來、詠み出でなかつた境地を自由に詠みこなして、印象鮮明、生氣潑剌たるものがある。用語の新しく、好んで擬人法を用ひ、老幼を多く詠む等、內容形式上幾多の特色を有してゐる。(言道參照)

童べの手を逃れこし蝶ならむはねやぶれても飛ぶが悲しさ

妹が背にねぶるわらはのうつつなき手にさへめぐる風車かな

【參考】新釋大隈言道集牛田良平 ○大隈言道佐佐木信綱・橋野滿雄 ○歌學論叢、大隈言道の歌)佐佐木信綱 〔佐佐木〕

綜藝種智院（しゆげいしゆちいんしゆちゐん） 「空海」を見よ。

造形本能（ざうけいたんのう） 藝術論 【解說】藝術的形象、特に造形美術の起原を心理的に解釋しようとするとき、素朴的に造形の本能的

同種の雜藝催馬樂に屬する歌四首、最後に神樂の其駒を風俗歌として載せてゐる。右の伊豫湯の歌は、既に「源氏物語」の空蟬にも、「指を屈めて十廿三十四十など數ふる樣、伊豫の湯桁もたど〳〵しかるまじう見ゆ」と見えてゐる。これは「體源抄」所載の第一歌、「伊豫の湯桁は幾ついざ知らずヤ數へず算まずヤレソヨヤナヨヤ君ぞ知るらうや」の歌を意味してゐる。これは催馬樂の歌意と酷似してゐるから、新作の催馬樂ともみふべきもので、自

藝術（詩・音樂等）（別項）と區別される。又凡て有形的材料によつて表現され、視覺的に把握されるが故に視覺藝術といひ、或は形象藝術と呼ぶ事もある。併し美學者リップスは、繪畫彫刻等の如く自然の物象をそれ〴〵の表現手段によつて再構成するものを形象藝術とし（再現藝術參照）、非再現的な抽象的空間構成である建築や純粹裝飾の如きものを特に空間藝術と稱してゐる。從つて事物の現實的形象を再現しないやうな抽象に對しては、抽象的繪

卷とし、その稿本に朱點を附したる歌四千五百五首のうち前半の六卷より更に黑點を附したる歌を撰出してこの卷となした。安政六年の跋文がある。〔今橋集上卷〕右の戊午集草稿十二卷の中、後半の六卷より、更に下に黑點を附した歌を拔萃したもの、終りに種々の歌が集錄せられてゐるが、この歌の詞書の中には、文政二年などといふ若い時の年號が見えてゐる。〔今橋集下卷〕戊午集草稿十二卷の後半六卷の中より、上に黑點を附したる歌を集めて集錄したものである。以上の如く首遺

が悲しさ
妹が背にねぶるわらはのうつつなき手にさへめぐる風車かな

【參考】新釋大隈言道集牛田良平○大隈言道佐佐木信綱・梅野滿雄○歌學論叢、大隈言道の歌）佐佐木信綱　〔佐佐木〕

綜藝種智院（そうげしゅちいん）「空海」を見よ。

造形本能（ぞうけいのうの）　藝術論　【解説】藝術的形象、特に造形美術の起原を心理的に解釋しようとするとき、素朴的に造形の本能的

しるしも鮮たびはみつとも思ふ二もとの梅」と云ふ歌を詠んだ時、拼雲が聞いて古歌に依據してゐないことを難じたので、正徹は「月やあらぬ」と「日くるれば」の二首を引證した。應永末期、了俊に伴はれて石山詣をなし、兩人一首づつ正面の柱に歌を書いたことがあつたが、二十餘年後再び參詣して見ると、全く文字は跡かたもなく消えてゐた。寶德三年頃の一日、心敬が尋ねて來て、唐繪に賛を依賴したので、斷りかね、一首の歌を讃した。以上の如く、當時の歌人との往來交渉を知るに便りが多い。【史的地位・價値】「草根集」の價値は、正徹そのものの史的地位を代表する。その獨自の態度は、後人を搖かし得たところ尠少でない。高田與清は「草根集部類」（一卷、寫本、彰考館藏）を編して、「草根集」中の特異の表現を指摘批評した。類題にも廣略二種があつて、略本「草根集私抄類題」は、北川眞顏・清水濱臣の序を附して、文化十年上板されてゐる。編者は弓弦であつて、正徹の歌風と曾丹や爲兼のものと交渉ある點を論じてゐる。前掲した「草根集別卷」の成立についても、「草根集」に觸れ得たものあつた爲めの事業と見て、始めて意味がある。（正徹參照）

【參考】國書刊行會本丹鶴叢書中、「草根集」解説○正徹岡崎義惠（思想六七）　〔齋藤（清）〕

創作の心理（さうさくのしんり）　藝術論　〔獨〕Psychologie des Schaffens　【解説】藝術家の創造の心理は複雜であり、個人的に外部的にいろいろな條件があつて一樣でないが、これを幾つかの心的段階に分けて見る試みがある。〔創作心理の段階〕（一）作家の材料把握の段階。この場合、材料は外部の自然・事物、或は觀念思想・傳説等である。故に作家が心に與

の事、衣裳の事、太刀・打刀・刀の作樣の事、折紙調候樣の事、書札之事、色々の事、公方樣御成幷御供の樣體の事、殿中さまざまの事、文明十一二年之比御相伴衆御供衆以下之事、故人の申をかれし事の諸條に分つて記してある。「條々聞書貞丈抄」（續々群書類從第七法制部）は本書の註釋である。　〔石村〕

操觚字訣（さうこじけつ）　漢文作法書　十卷　補遺五卷　【著者】伊藤長胤（東涯）　【解説】卷一には、文章の篇法・章法・句法及び助辭の增減等の大概を説き、卷二以下には、同訓異義の漢字を輯めて一々その差異を引證辯明した。もと伊藤東涯の未定稿であつたのを、男善韶が纂修したものである。明治十二年、村上德淳等これを校讎して版刻した。荻生徂徠の「譯文筌蹄」（別項）と同類の書である。　〔佐久〕

蒼梧隨筆（さうごずるひつ）　隨筆　八卷六册　【著者】大塚嘉樹　【諸本】寫本で行はれてゐたが、明治三十八年、黑川眞頼博士の藏本が「百家説林」續編に收められて刊行せられた。【解説】公家・武家の典儀・故實に關する考説を集錄したもので、每條の終りに考説の年月及び姓名を記してある。二三の挿圖がある。　〔和田〕

造語法（ぞうごほう）「語構成」を見よ。

草根集（さうこんしふ）　歌集　十五卷　【編者】師正徹の歌集を、正廣が編したもの。【書名】最初、正徹の號に依つて「松月庵詠草」とのみ呼びならしてゐたものを、正廣が一條兼良に乞うて、草根の題名を得たと云ふ。【諸本】普通本は十五卷。その他「草根集」と題されたものに、二十卷本・十八卷本・十四卷本・十二卷本・八卷本（歌書綜覽には、なほ十一卷本・七卷本ある由見ゆ）等、異種のものが多いけれど、その多くは草根集類題であつて、正廣編の「草根

集」の系統內では、さしたる異本はない。拔抄本あるのみである。それには拔書のものと、十五卷本の末卷（草根殘葉集ともよぶ）一帖を缺くものとの兩樣が存する。古寫本には內閣文庫藏三卷零本等。【組織】今、十五卷本に依るならば、卷頭に文明五年に係る一條兼良の序文があり、卷一が應永二十一年以後の限定數歌を收めてゐ、卷四・五・六が四季雜題詠集になつてゐるが、卷二より卷十四までは、正しい年序によつて排列を得てゐる。即ち卷二・三は、永享元年より嘉元二年十一月までのもの、卷七より卷十四までは、寶德元年四月以降長祿三年四月に及ぶ歌を收載してゐる。その間すべて三十一ケ年、洩らされた年次を掲げるなら、永享七年・同九年・同十年・同十二年・嘉吉元年・同三年・文安元年・同三年・同五年・寶德元年・享德元年・同二年・長祿元年の十三ケ年である。ともあれ作者の晩年三十ケ年を見るには、詞書も多く、甚だ好資料たるを失はぬ。さて卷十五であるが、その故らに「草根殘葉集」と命名されたのに依つても、全十四卷の整理後に附加されたことは否み難く、或は後人の業と見られないこともない（以上十五卷に洩れた歌を後人が輯め「草根集別卷」と稱される書が、別に前田侯爵家に傳へられてゐると云ふ）。卷十五は、勿論次第不同である。全十五卷の總歌數は二萬餘に及び、一個人の歌集としてはその類に乏しい（正徹參照）。【內容】「草根集」は、永享以前の作も含んでゐるが、本書は主として正徹歿前三十ケ年の年序的歌集であると云ふ點に、多くの特色を含めてゐる。その詞書の中より興味ある例二三を引けば、初瀨詣して、「歎くそよ夢の四十年も泊瀨山をのへの鐘のこゑをかぞへて」「祈こし法の

へられる凡てのものを體驗する段階である。材料そのものは直接に美的意義がなくとも、作家の美的態度に於て把握せられる限り表現の內容を規定する事が多い。把握の仕方は個人的素質により相違し、材料に對する興味は社會的外部の條件に左右される事もある。併し作品の個性的特徴に重大に關與する段階ではない。(二)內的形成の段階。想像の段階。これを更に分けて見る事も出來る。(a)デッソアの所謂最初の感激、內面的興奮の段階は蓋しこの點を云ふのである。(一)の段階を經て最初の創作的氣分が釀される。(b)次に興奮の裡に、感情的緊張が原因となつて益々空想活動が刺戟されて、こゝに作品の最初の構想卽ち內的な形象の美が形成され、表出實現的過程に移る段階。この段階は主として所謂神彩(別項)といふ概念が生ずる基をなす所のもので、極めて迅速な內的形成の活動が行はれ、而して又作家の個性的特徴が發揮される方面である。ヴントはこの段階について想像活動を說く。想像の概念は彼に於ては廣く解釋して、精神の組織作用を凡て含めるのである。而して純再生的想像と純想像(美的空想參照)と區別されるが、本質的には區別なく共に一定の組織に向ふ能力の兩端であると解される。かくして能動的な想像活動は、(一)に於て把握せられたものを原因として、迅速に全體的に活動して藝術的形象を意識の上に實現する。デッソアの所謂藝術形象の內面的完成の段階である。(以上の(一)(二)の段階について、ヴント、デッソア等の考に對し、ヒルトは內的な藝術の統一的な觀念又は形象は、全體的に電光の如く意識にも齎らされるのでなく、寧ろ徐々たる內面的努力を經て、漸次的に全體形象が意圖に從つて形成されるのであると主張する。創作が何かの課題によつて行はれる時は、恐らくヒルトの主張は維持されると思はれる)。(三)最後に內面的に形成されたものの客觀的外面化の段階がある。卽ち技術が關與する段階である。技術は材料及び手段によつて左右されることが多いから、この段階卽ち表現過程に於ては、空想的形象の形成にも影響し、また表現を辿る內的形成は、實現する過程を支配するといふ相互關係にある(內的形式參照)。かくして藝術的客觀形象は手段を求め確定される。次に表現過程に於て內的形象が實現されるについては、そこに技巧・技術の習得は重要な點である。內的なるものが外部の形式を得る可能は、卽ち技術は重要な創作の條件であつて、眞の藝術家にあつてはこの二者は全く分けられない。彫刻家が材料である石塊を見て考へ、そして創るといふのはこの消息を語るものである。以上創作の心理の一般的特徴は、(1)突然迅速な着想と、(2)心的過程の非人格的無意識に見ゆる神祕性である。神彩又は靈感として說かれ來つた所以である。ミュラア・フライエンフェルスは、その「藝術創作の心理」で次の如き點を說明してゐる。(一)創作はその起原及び本質に於て全く純美的活動でない、一般的に仕事である。(二)併し藝術創作は美的効果を目標とするといふ點で、美的活動として特別のものとされるに過ぎない。(三)從つて創作の過程に於ては凡ての心的作用が參加する。(四)藝術家の個性的內的活動として考へられる。(五)創作は意識的な造形活動である。併しながら藝術を以て社會の觀念的上部構成であるとする唯物史觀的藝術論に於ては、創作の活動に於ける個性的活動としての意義並にその目的活動といふ點に修正が加へられる(藝術家・藝術品參照)。なほ藝術創作活動の本質に關して、他の類似的活動から或は發生的見地から說明を試みる者がある。これ等に關しては「摸倣本能」「遊戲本能」「表出本能」を見よ。〔村田〕

草山集（さうざんしふ）　歌集　一卷　【作者】深草元政【本稱】草山和歌集【刊行】寛文十一年【諸本】近古諸家集(國歌大系)所收。【解說】元政法師の歿後四年に村上氏の上木するところ。その本は、書體優美にして雅致に富んでゐる。歌は四季に排列し、辭世の歌を以て終る。【歌風】大體に於て正雅を旨とした當時の風であるが、さすがに釋門の名士たる彼の歌ゆゑ、一種の禪味、隱逸の風があつて、西行の面影がある。閑寂の境地、眞心の流露せる歌は、技巧に墮ちず澄み切つた作が多い。

人は來でむなしき谷に水流れ花咲く山の春ぞしづけき

惜しからぬ身ぞ惜しまるゝ乳根の親の殘せるかたみと思へば(母のなくなりてのち)

【參考】草山集孤考　日照山義天〔佐佐木〕

草山集（さうざんしふ）　詩文集　三十卷　目錄一卷【著者】深草元政【刊行】延寶二年【解說】著者の漢詩文集である。文章は叙・書・記・傳・賦等諸體皆備はり、詩は五七言古體、五七言律絕、雜體あり。寛文三年癸卯、妙心寺大嶽の序、同二年、明人陳元贇の題辭がある。【批評】元政は文よりも詩に長じてゐる。その詩は飾らず衒はず極めて平淡である。石川丈山と併稱されたが、丈山よりは少しく劣る。江村北海の「日本詩史」に、「其の詩韻格高からずと雖も、意義平實なり」と評してある。〔佐久〕

莊子（しさう）　子書　十卷三十三篇【著者】三十三篇の中、內篇の七篇は大體莊周の手筆で、外篇と雜篇とは、後學の附益に係る。【製作年代】「史記」の莊周列傳に據れば、彼は蒙(當時は宋國の領)人で、名は周、嘗て蒙の漆園の吏となつた。梁の惠王、齊の宣王と同時で、又嘗て楚の威王から聘せられたが應じなかつた。その學說は老子に本づいて儒墨を批評してゐるが、その著書は大抵寓言である、とあるが、同じく梁惠齊宣の時代に活躍した孟子が、その書の中に嘗て彼の事に言及してゐないことは、古來疑問視されてゐる點で、彼が趙の文王を諫めたと云ひ(說劍)、梁の惠王と襄王の二代に仕へた宰相惠施に面會し(秋水)、その墓に詣でた(徐無鬼)と云ふ記事、及び「韓詩外傳」(初學記卷二七引、文選卷三一註及び太平御覽卷四七四亦ほぼ同じ)が、莊子を招聘しようとした楚王を、威王でなくて襄王とすること等から察すれば、彼は孟子よりもやゝ後の人で、晉の李頤が彼を齊の湣王と同時とした說(經典釋文敍錄注)はほぼ妥當である。而して莊子の後學に依つて附益せられた外篇、雜篇の部分は、その文體・內容ともに、前後必ずしも一樣でなく、莊周の歿後程遠からぬ頃から、秦漢の際に至るまでに亙る門流の手に依つて附益されたものと思はれる。【傳來】「漢書」藝文志に「莊子五十二篇」(呂氏春秋高誘注同じ)とあり、「經典釋文敍錄」には、「卽ち司馬彪・孟氏の注するところ」と云ひ、且つ「內篇七、外篇二十八、雜篇十四、解說三」と云ふ。これに據れば兩漢時代は五十二篇であつたが、晉の崔譔が五十二篇本を刪定して二十七篇とし、その註を著はした(釋文敍錄)と云ひ、又向秀が崔譔本に本づいて新註を作つたが、秋水・至樂の二篇を擧らずに死んだ(世說文學)と云ふ。これに據れ

は、郭象・向秀二氏の本は二十七篇で、「釋文敍錄」には、「內篇七、外篇二十」とあるが、その內容や篇名には言及してゐない。現存する三十三篇本は晉の郭象の註本である。郭象は儁才が有つたが、人となり薄行で、その莊子註は向秀の註を竊んで文句を定點したに過ぎぬ（世說文學・晉書本傳）と云はれてゐるが、向註の佚した今日、これを確めることは出來ない。「釋文」及び「見在書目」には三十三卷とあり、今本の十卷は後人の改定で舊態ではない。

【內容】〔本體論〕莊子の學說は老子のそれを繼承し發展せしめたもので、同じく虛無の道を以て宇宙の本體とし、時空を超越し、絕對無差別であり、それ自ら獨立獨存して、天地萬物の根本とする等の屬性に就いても、亦ほぼ同樣であるが、ただ前人の所說よりも一層明晰精密深遠を加へてゐる。彼は道の分化發展して末となるに從つて、薄く少く不完全となり、分化發展せざる根本に溯るに從つて、厚く多く完全に存するものとした。「古の人其の知至る所あり、惡くにか至る、以て未だ始めより物あらずとなすものあり、至れり盡せり、以て加ふべからず、其の次は以て物（物そのもの、有そのもの）ありと爲す、而も未だ始めより對（差別相待）あらざるなり、其の次は以て對ありと爲す、而も未だ始めより是非あらざるなり、是非の彰るゝや道の虧くる所以なり、道の虧くる所以は愛の成る所以」（齊物論）。その最高の道とする所は、一切の有を絕した、彼が「知らざる所に止る」（同上）と云つた不可知的な虛無である。而して彼はこの道の遍在を說き、一切處にあらざること無しと云ふ（大宗師、知北遊）のは、一種の一元汎神論的な立論である。

「人生觀」宇宙の現象に纏て道の變遷である以、人は萬物の一形に過ぎぬ。故に人の生死は恰も晝夜夢覺の如く、その間に愛憎をなすべきではない。宜しく道を體得して生死一如の理を悟り、その繫縛を解脫すべきである。白駒の隙を過ぎるが若き（知北遊）須臾の人生に執着すべきではない。彼はこれを巧妙な譬喩を用ひて說明した。「昔し莊周夢に胡蝶と爲る、栩々然として胡蝶なり、自喩適志するか、周たるを知らず。俄然として覺むれば、則ち蘧々然として周なり。知らず、周の夢に胡蝶と爲れるか、胡蝶の夢に周と爲れるか。周と胡蝶とは（卽ち甲乙の現象の間には）、則ち必ず分有り。此れ（併しこの區別は畢竟）之を物化（一絕對者の二つの變化）と謂ふ」と（齊物論）。かくの如き解脫觀を體得した理想的人格を名づけて至人・神人・聖人と云ふ。その境地は、「之の人や、之の德や、將に萬物に旁礴して以て一世の爲に亂（治）を蘄めんとす。孰れか弊々焉として天下を以て事と爲さんや。之の人や、物之を傷ること莫く、大浸天に稽るも溺れず、大旱に金石流れ、土山焦るゝも熱せず、是れ其の塵垢粃糠すら猶ほ將に堯舜を陶鑄せんとする者なり。孰か肯て物を以て事と爲さんや」（逍遙遊）と云ふが如き、理想化された一種神祕的な自在無礙のものである。要するに莊子は世を捨てて自己を獲、厭世觀に出發して終に超絕的人生觀に到達したのであるが、玆に於て彼は絕對的な宿命論を唱へ、凡ての人爲的作用をも悉く因果の自然必然的關係によつて生ずるものとし、この世を捨てる意志すらも擲つて、眞に無に徹底した時、始めて物を物とする世界に逍遙し得るものとした。

【批評】春秋戰國時代の二大思潮の中、老子に依つて代表せられる出世間的思想の流を汲んで、これを大成したものが莊子である。その「帝王の功は聖人の餘事なり、身を完うし生を養ふ所以にあらず」（讓王）とまで極言して、天下の經綸に殆ど言及してゐないのは、特異とすべき點である。荀子は彼を評して、「天に蔽して人を知らず」と云つた。なほ注意すべきは最後の天下篇で、周末の諸子を評論して、その後に莊子の思想を概論したもので、勿論彼自身の筆ではないが、先秦思想史の研究には必讀すべき文章である。

【註釋書】莊子注十卷（舊三十三卷）晉郭象　○莊子注疏三十卷　唐成玄英　○莊子集釋十卷　清郭慶藩　○莊子集解三卷　清王先謙　○莊子義證三十三卷年表一卷佚文一卷　民國馬叙倫　○莊子鬳齋口義十卷　宋林希逸　○莊子翼八卷闕誤一卷附錄一卷　明焦竑　○莊子因六卷　清林雲銘（秦鼎補義本、東條保謙注本）　○莊子考五卷　岡松辰　○莊子天下篇講疏　民國顧實

【參考】春秋倫理思想史　綱島榮一郎　○老莊哲學　高瀨武次郎　○老子と莊子　武內義雄　○老莊哲學　小柳司氣太

宗二（そうじ）　歌學者　〔姓名〕林逸（りん）　〔字野・本多〕　〔生歿〕明應七年に生れ、天正九年（一五八一）歿す。享年八十四　〔法名〕桂室宗二居士　〔閱歷・業績〕宗二の曾祖父林淨圓は支那人であるが、京都建仁寺の兩足院の開山龍山德見が支那留學中に、德見に歸依し、貞和の頃、德見歸朝の際に、これに從つて來朝し、遂に歸化して奈良に住んでゐたが、子孫は代々兩足院と深い關係がある。淨圓の子詳增は、京都に移り住んだが、盛祐は奈良にゐた。宗二も亦主として奈良にゐた。宗二の傳記は明かでないが、和漢の學に通じてゐたことは明かである。卽ち歌學を一定の組織に向ふ能力の兩端であると解される。かくして能動的な想像活動は、（一）に於て把握せられたものを原因として、迅速に全體的に活動して藝術的形象を意識の上に實現する。デッソアの所謂藝術形象の內面的完成の段階である。（以上の（一）（二）の段階について、ヴント、デッソア等の考に對し、ヒルトは內的な藝術の統一的な觀念又は形象は、全體的に電光の如く意識にも賣らされるのでなく、孳々たる內面的勞作を經て、漸次的に全てゐる。（一）創作はその起原及び本質に於て全く純美的活動でない、一般的に仕事である。（二）併し藝術創作は美的效果を目標とするといふ點で、美的活動として特別のものとされるに過ぎない。（三）從つて創作の過程に於ては凡ての心的作用が參加する。（四）藝術家の個性的內的活動として考へられる。（五）創作は意識的な造形活動である。併しながら藝術を以て社會の觀念的上部構成であるとする唯物史觀的藝術論に於ては、創作の活動に於け

說】著者の漢詩文集である。文章は叙・書・記・傳・賦等諸體皆備はり、詩は五七言古體、五七言律絕、雜體あり。寬文三年癸卯、妙心寺大嶽の序、同二年、明人陳元贇の題辭がある。【批評】元政は文よりも詩に長じてゐる。その詩は飾らず衒はず極めて平淡である。石川丈山と併稱されたが、丈山よりは少しく劣る。江村北海の「日本詩史」に、「其の詩韻格高からずと雖も、意義平實なり」と評してある。（佐久）

莊子（しう）　子書　十卷三十三篇　〔著者〕ものと思はれる。〔傳來〕「漢書」藝文志に「莊子五十二篇」（呂氏春秋高誘注同じ）とあり、「經典釋文敍錄」には、「卽ち司馬彪・孟氏の注するところ」と云ひ、且つ「內篇七、外篇二十八、雜篇十四、解說三」と云ふ。これに據れば兩漢時代は五十二篇であつたが、晉の崔譔が五十二篇本を刪定して二十七篇とし、その註を著はした（釋文敍錄）と云ひ、又向秀が崔譔本に本づいて新註を作つたが、秋水・至樂の二篇を畢らずに死んだ（世說文學）と云ふ。これに據れ

牡丹花肖柏に受けて、「源氏物語」の註釋「林逸抄」（五十四卷、寫）を著はしてゐる。また「古今傳授」の一派の「奈良傳授」（歌道傳授參照）は、宗二から起つたものである。詩文に關する敎は誰から受けたか明かでないが、左記の如き註解の宗二自筆本と認められるものが今日兩足院に殘つてゐる。

山谷抄（六冊）　山谷幻雪抄（二十一冊）
尙書抄（十三冊）　山谷詩抄（二十二冊）
杜詩抄（二十四冊）　杜詩續（十冊、內一冊缺）
柳文抗（七冊）　春秋左傳抄（十冊）
史記世家抄（八冊）　東坡詩抄（三十冊）
江湖風月集抄（三冊）

これ等のうち一部分は前人の註解を筆寫したものではあるが、これ等に依つて宗二の漢學の一斑は知る事が出來る。而してこれ等の書は一面室町末期の國語資料として頗る珍重すべきものである。なほ宗二は、「節用集」（別項）の著者と傳へられ、その點に於て頗る有名であるが、「節用集」の著者とは信じ難い。これは、「節用集」の最古の刊本の一つである「饅頭屋本節用集」（節用集參照）が、宗二又はその子孫の手に依つて刊行されたらしいことから起つた誤傳であらう。　〔龜田〕

【參考】饅頭屋本節用集の著者林宗二の事蹟　上村觀光（禪林文藝史譚）　○古節用集研究上田萬年・橋本進吉（東京帝國大學文科大學紀要第二）

草子洗小町（さうしあらひこまち）「小町物の諸曲」を見よ

雜司ケ谷記行（ざふしがやきかう）　滑稽本　二冊　〔作者〕十返舍一九　〔名稱〕堀內詣後編の角書がある。堀之內詣の途次雜司ケ谷の鬼子母神に詣でた紀行の謂ひ。〔刊行〕文政四年　〔諸本〕續一九全集（帝國文庫）・膝栗毛全集（文藝叢書）所收。〔解說〕堀の內詣を終つた佐次兵衞

が成子から雜司ケ谷道に出て、往來の人々の後からそれ等の人々の話に耳を傾けて行く。芝居好きの酒屋の老爺に仕方噺を聞かせて酒を持つて逃げて行く者の事や、幇間等の會話、乞食等の結婚、己惚連の述懷、內心びく〳〵で懷勘定をする酒飲み連、或は吝嗇な武士などが見える。「堀之內詣」の後編としてそれを踏襲したものである。(俳語堀之內詣參照)〔小柴〕

壯士芝居　「新派劇」を見よ。

喪志編　隨筆　一卷　【著者】楫取魚彥【名稱】喪志編とは讀書癖を玩物に比べて自謙したものと思はれる。【諸本】國書刊行會の百家隨筆第三所收。【解說】著者卷頭の自題に、「間々史傳・雜說等に及ぶごとに、其見し所を放下し去らんも口惜しければ、筆に隨ひ見に任せて、古に今に和に漢に雜糅して抄錄し、固より性記憶なければ、後日の遺忘に備ふるのみ……敢て人に示さんとには非ず、書して篋底に藏むるなり」と云つてゐる。されど單なる抄錄物でなく、和漢の典籍に據つて故事の起原を考證し、その他見聞の奇事等を錄したもので、清國并に亞細亞諸國の地理・物產、及び和蘭船客の情況等を記すこと多く、又逸話には三世に亙つて時計を工夫せし蘭人の事、脇坂八雲軒(安元)多藝の事、濱田兄弟臺灣を服從せしめし事等もある。その他、中古以來の史傳に係る記事が少くない。凡て三百餘條を含んでゐる。寛延二己巳年夏六月十一日の自序がある。著者の博覽はこの書によつて分る。殊にこの時代に於て心を海外の事情に注いでゐた事は珍しい。〔和田〕

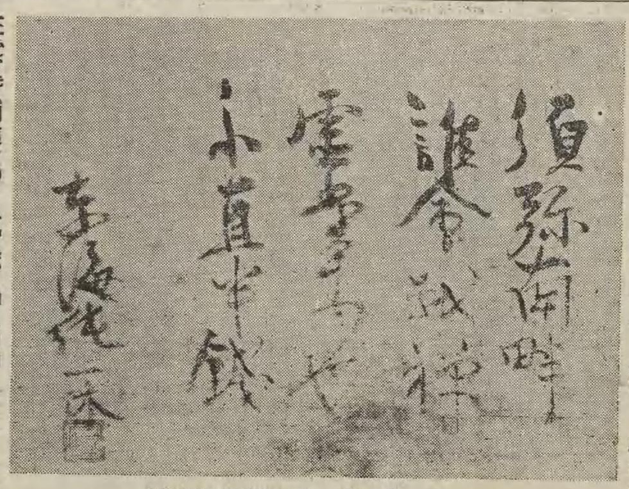
滄洲樓金埒　「錢屋金埒」を見よ。

宗叔　「石井宗叔」を見よ。

宗純　禪僧【諱名】字は一休。諱は宗純。幼名は周建【號】狂雲・夢閨・瞎驢・國景・天下老和尚【生歿】應永元年正月朔日京都に生れ、文明十三年(一四八一)十一月二十一日山城薪に於て寂す。享年八十八【墓所】山城薪酬恩菴【學統】宗純は六歲の時安國寺に入り、像外に師事し、十三歲の時東山の慕詰攀に就いて作詩法を學び、祥球等と交つて盛名を馳せ、「春草」「春夜宿花」等の名吟を賦して當時に知らる。十五歲の頃には既に一家の詩人として聞えた。應永十七年十七歲の時、清叟に就いて內外の書を學究し、尋いで無因和尚に依つて大燈派の宗風を受け、宗曇華叟に師事して專らその宗風を繼承した。【家系】母は藤原氏、後小松天皇の後宮に入り、寵せられたが、その後宮を出て民家に宗純を生んだといふ。宗純の實子に紹偵和尚があるとも傳へ、或はこの紹偵は宗純の法の子で肉身の子ではないともいふ。【閱歷】應永六年(六歲)安國寺に入り、像外の侍童となり、周建と稱した。應永十二年(十二歲)清叟の維摩經講說を聽き、翌年慕詰攀に作詩法を學び、後「春夜宿花」の詩を賦し、大に傳唱せられた。清叟に就いて內外の書を講究し、尋いで西金寺に入つて禪旨に就いて關山慧の宗風を受けた。謙

一休宗純（大德寺眞珠庵藏）

謙が寂するや石山寺に參籠し、その後近江堅田へ行き、宗曇に師事した。同二十五年(二十五歲)宗曇より一休の號を與へられた。宗曇の寂後、和泉に幽棲した。永享五年(四十歲)後小松天皇御不豫の折、御床に召されて心要を說いた。後、禪門の廢頹を憤り、一門の嗣書を燒き、翌年銅駝坊北の小廬に居り、翌々年大德寺如意庵に移つた。嘉吉二年(四十九歲)宗曇の十三回忌を修した。後、大德寺の事に依り痛心して餓死せんとした。花園天皇これを慰め給ふ。後、瞎驢庵に遷る。康正元年(六十二歲)「自戒集」を編んだ。翌年大和薪の妙勝寺に大應國師南浦紹明の木像を造り、その翌年山城薪妙勝寺に入り、翌々年同じく山城德禪寺の住持となつた。後、龍翔寺を修造し、寬正三年(六十九歲)八月痢を患ひ、九月兵亂を桂林尼寺に避け、翌年瞎驢庵に歸つた。應仁元年(七十四歲)瞎驢庵兵火にかゝり、九月薪の酬恩庵に入つた。翌々年七月、兵を避けて慈濟庵に入り、八月奈良に遁れ、和泉を歷て住吉松栖庵に移り、その翌年雲門庵を再興して住んだ。三年後大德院を創立した。文明六年(八十一歲)二月二十二日、勅によつて大德寺住持となり、八月瘧に罹り、九月亂を避けて和泉に行く。翌年虎丘庵に慈揚塔を建てた。その翌年四月又瘧にかゝり、床藥庵を建てた。後、名香亭を造り、九月又亂を避けて和泉に赴き、尋いで住吉に住んだ。二年後、如意庵を再建し、又大德寺法堂を建てた。文明十三年(八十八歲)十一月、瘧重く十一日寂す。【著作】

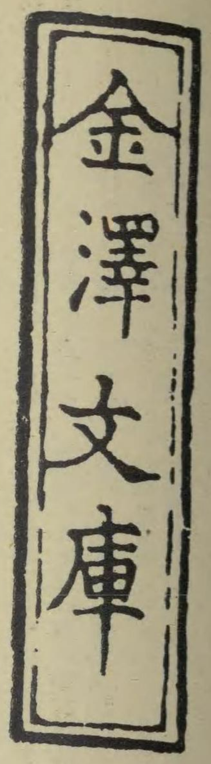


一休筆蹟（山城薪酬恩菴藏）

狂雲集(別項)○自戒集。【人物】宗純は洒脫磊落な性格で、貴賤の差別なく親しみ交はるので、童兒は常に宗純の後を慕ひ、鳥雀は馴れてその手に食するに至つたが、法門に臨んでは極めて辛辣嚴格で、湛堂・妙周・宗頤等と問答論爭した。宗風の廢頹を憤つて嗣書を燒くに至つた。宗純は詩に秀で、弱年よりその聞え高く、詞氣縱橫、意趣超脫、大に稱せられた。又繪畫を善くし、山水・人物・花鳥等、いづれも狂逸にして而も清趣があり、氣韻に富んでゐる。

【參考】一休和尚行實　○東海一休和尚年譜　○本朝高僧傳　○紫巖讀略　○本朝書史　○和長卿記〔鷲尾〕

藏書印　「書籍學」【解說】印章(雜項)



北條實時
（金澤文庫）

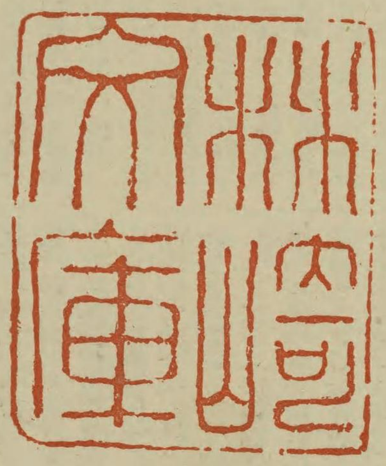
傳御
（德川家康本）

屋代弘賢
（不忍文庫）

僧天海
（天海藏）

狩谷棭齋
（湯島狩谷氏求古樓藏書記）

板坂卜齋
（淺草文庫）



林崎文庫

柳亭種彦
（此本ぬかしき浮世種彦）

蘭人の事、脇坂八雲軒（安元）多藝の事、濱田兄弟臺灣を服從せしめし事等もある。その他、中古以來の史傳に係る記事が少くない。凡て三百餘條を含んでゐる。寛延二己巳年夏六月十一日の自序がある。著者の博覽はこの書によつて分る。殊にこの時代に於て心を海外の事情に注いでゐた事は珍しい。〔和田〕

滄淵樓金埒（そうえんろうきんらつ）「錢屋金埒」を見よ。

宗叔（そしゅく）「石井宗叔」を見よ。

宗純（そじゅん）禪僧【經名】字は一休。諱

れたが、その後宮を出て民家に宗純を生んだといふ。宗純の實子に紹偵和尙があるとも傳へ、或はこの紹偵は宗純の法の子で肉身の子ではないともいふ。【閱歷】應永六年（六歲）安國寺に入り、像外の侍童となり、周建と稱した。應永十二年（十二歲）淸叟の維摩經講說を聽き、翌年慕喆攀に作詩法を學び、後「春夜宿花」の詩を賦し、大に傳唱せられた。淸叟に就いて內外の書を講究し、尋いで西金寺に入つて長講會に就いて圓山派の宗風を受けた。爲

桂林尼寺に避け、翌年瞎驢庵に歸つた。應仁元年（七十四歲）瞎驢庵兵火にかゝり、九月薪の酬恩庵に入つた。翌々年七月、兵を避けて慈濟庵に入り、八月奈良に遁れ、和泉を歷て住吉松栖庵に移り、その翌年雲門庵を再興して住んだ。三年後大德院を創立した。文明六年（八十一歲）二月二十二日、勅によつて大德寺住持となり、八月嬉に罹り、九月亂を避けて和泉に行く。翌年虎丘庵に慈揚塔を建てた。その翌年四月又嬉にかゝり、床藥庵を建てた。

問答論爭した。宗風の廢頹を憤つて嗣書を燒くに至つた。宗純は詩に秀で、弱年よりその聞え高く、詞氣縱橫、意趣超脫、大に稱せられた。又繪畫を善くし、山水・人物・花鳥等、いづれも狂逸にして而も淸趣があり、氣韻に富んでゐる。

【參考】一休和尙行實　○東海一休和尙年譜　○本朝高僧傳　○紫巖譜略　○本朝畫史　○和長卿記　〔鷲尾〕

藏書印（ざうしよいん）書誌學【解說】印章（別項）

の一種。圖書に押捺して、その所有を明かにするためのもの。普通の印章が流用される場合もあるが、多くは藏書にのみ押捺する特別の印章が用ひられる。而して同一の藏書家であつて二種以上の印章を用ひる事少くなく、

示したもの。「左京藤貞幹校正藏本」（藤貞幹）、「甜齋書屋儲藏經本」（吉田篁墩）の如く藏書の種類をも記したもの。「柴邦彥圖書後歸阿波國文庫別藏于江戸雀林莊之萬卷樓」の如く圖書の傳來を記したもの。「善庵三十年精力所聚」

種々の意匠をこらしたものがある。明治以後歐米の圖書が多く輸入されると共に、我が國でも、藏書印の代りに藏書票を用ひる事も少くない。

【參考】日本古文書學 伊木壽一（大日本史講座第

えたが、日本では殊に平安朝以來次第に料紙や表紙見返等の裝飾に藝術的の意匠を加へ、裝飾美術としても特殊な領域を開拓するに至つた。寫經の裝飾的施設として古くから普通の形式は所謂紺紙金銀泥經で、表紙見返にも

の一種。圖書に押捺して、その所有を明かにするためのもの。普通の印章が流用される場合もあるが、多くは藏書にのみ押捺する特別の印章が用ひられる。而して同一の藏書家であつて二種以上の印章を用ひる事少くなく、又それによつて藏書の種類を分ち示す事もある。藏書印を捺す場所は、多く卷首・卷尾であるが、表紙に捺したのもある。又藏書印を押捺した紙片を表紙或は見返等に貼布した所謂藏書票に近いものもある(信州須坂城主堀氏の「花廼舍文庫」の如きもの)。我が國で何時頃から藏書印が行はれたかは明かでない。圖書に捺された印章としては、「杜家立成」(正倉院御物)に捺してある光明皇后の「積善藤家」の印の如き古い方であるが、藏書印と云ひ得るかどうか分らない。その後山城の高山寺、武藏の金澤文庫の同名の印、下野の足利學校の「野之國學」の印等、明かに藏書印と認められるものが現はれたが、室町時代末から江戸時代にかけては、藏書家の輩出と共に、藏書印も各種のものが現れた。藏書印の形狀・印文・文字・字體、或は印肉等は、一般の印章の變遷と伴つて變化してゐるが、藏書印としての性質上、或る特殊性を有して居り、就中、印文には幾多特色のあるものが見える。印文は古くは單に所有者の名稱を刻するに留まり、後世に至つても「養安院藏書」(曲直瀨正琳)、「天海藏」(僧天海)、「淺草文庫」(板坂卜齋)、「不忍文庫」(屋代弘賢)、「阿波國文庫」「曲亭文庫」(瀧澤馬琴)、「柊齋」(狩谷棭齋)等の如く、簡單なものが最も多いが、更に種々の字句を加へたものも少くない。「湯島狩谷氏求古樓圖書記」(狩谷棭齋)、「參河碧海村上圖書」(村上忠順)、「弘前醫官澁江氏藏書記」(澁江道純)の如く、居地又は藩をも示したもの。「左京藤貞幹校正藏本」(藤貞幹)、「留春園書屋儲藏經本」(吉田璋堂)の如く藏書の種類をも記したもの。「柴邦彥圖書後歸阿波國文庫別藏于江戸雀林莊之萬卷樓」の如く圖書の傳來を記したもの。「善庵三十年精力所聚」の如く蒐集の苦心を記したもの。「友人求假余書畫摹本余未曾嚢焉然至乎淹滯不還則大負老境之樂意故作俚詩自刻印子其首以奉告諸友斯翁努力知何事爲樂殘生爲遺兒君子求假奚足惜荷恩還璧莫遲々　壬寅秋　廣澤釣徒書時年六十又五」(細井廣澤)、「コノフミヲカリテミムヒトアラムニハヨミハテヽトリカヘシタマヘヤ若狹酒井家々人　伴氏藏本」(伴信友)の如く、書籍を借りる人を戒めたもの。「趙子昂云吁聚書藏書良非易事善觀書者滌手焚香拂塵淨几勿捲腦勿折角勿以爪侵字勿以唾揭幅勿以夾刺勿以作枕隨損隨修隨開隨掩後之得吾書者幷奉贈此法　大阪臨照堂藏」(松井輝辰)「第一と第二のゆひもてひらくべし其よみたるさかひにをりめつけ又爪しるしする事なかれ」(堤朝風)等の圖書を利用するものの心得を記したもの。「曾在必靜書屋」(大竹蕉塘)、「身後俟代我珍藏人伴信友記」(伴信友)、「我死ナハウリテ黃金ニカヘナナムオヤノ物トテ虫爾ハマスナ　長澤伴雄藏書記」(長澤伴雄)の如く自分の死後の事を慮つてゐるものもある。又新川の鹿島家の藏書印の如きは、「子孫永保　雲煙家藏書記」とあつて、その左右には卷數と分類を書き入れる空欄がある。

【附記】藏書印は我が國及び支那に於て行はれたが、西洋では、これと同一目的を持つものとして、專ら藏書票が用ひられた。所有者を示す文字或は記號等を紙片に印刷し、これを表紙裏等に貼布したもので、その圖案には種々の意匠をこらしたものがある。明治以後歐米の圖書が多く輸入されると共に、我が國でも、藏書印の代りに藏書票を用ひる事も少くない。

【參考】日本古文書學 伊木壽一(大日本史講座第十三)○藏書印の蒐集趣味 高木文(好書雜載所收)○藏書印譜 三村・橫尾○續藏書印譜 三村清三郎○藏書印譜稿本 橫尾勇之助○藏書印譜稿本 樋口慶千代○經籍答問 松澤老泉○玉石雜誌○藏書票の話 齊藤昌三○創作藏書票好刻會

〔岩淵〕

相稱(さうしよう)　美學〔英〕Symmetry【解說】均齊ともいふ。美的形式原理の一つ。觀照の對象の構成要素(點・形、或はその大さ・位置等)が、中央の垂直線又は水平線の兩側に均等に配分され、互に照應して均衡を保つ場合。力の相稱は別に均衡(別項)といふ。原始藝術(別項)、簡單な裝飾文樣に見られるが、美術上多くは他の比例・調和・統一等の形式原理關係と結合して美的形式條件となる。伊太利の生理學者マンテガッア(1830—1910)は、「相稱に對する快感の解剖學的根據は神經中樞の相稱的構造にある」といふ。一般に人體の相稱的構造が快感の基礎と信ぜられてゐるが、この點からすれば、(一)眼の生理解剖的條件に適合し、(二)錯覺の少い水平の相稱が、より多くの美的効果を有することになる。實際上、建築等の物的材料によるものは、動力の關係で垂直の相稱が困難であることは勿論である。

〔村田〕

裝飾經(さうしよくきやう)　寫經の一種【解說】料紙その他の裝飾美に力を盡した特殊の寫經をいふ。寫經供養は支那で古くから行はれ、佛教の傳來と共に日本にも傳はつて以後長く榮えたが、日本では殊に平安朝以來次第に料紙や表紙見返等の裝飾に藝術的の意匠を加へ、裝飾美術としても特殊な領域を開拓するに至つた。寫經の裝飾的施設として古くから普通の形式は所謂紺紙金銀泥經で、表紙見返にも文字と同じ金銀泥を以て、文樣や佛畫を施すのである。然るに料紙に種々の彩箋を用ひたり或は丹青華やかに彩色し、種々の文樣葦手繪(別項)等を畫き、金銀の切箔砂子を蒔き、經文も單に金銀や墨字に限らず彩字を以てするものも現はれ、これに從つて表紙見返繪は金銀五彩の美を擅にするに至り、繪樣の如きも小品ながら純然たる獨立の繪畫として見得るまでに發展した。かゝる裝飾美の極點を示す遺作としては、嚴島神社の平家納經を初め、駿河の久能寺經、武藏の慈光寺經等が顯著である。これ等に於てはひとり料紙のみならず、軸・金具・箱等にも裝飾的施設の見るべきものが尠くない。この種の裝飾經の外に特殊なものとして下繪經がある。その遺例としては四天王寺及び帝室博物館所藏の扇面寫經、上野精一及び前山久吉氏所藏の法華經册子等が代表的である。兩者共貼葉裝の册子であるが、扇面寫經はその名の如く扇面形である點に於て特に風雅の趣に富む。而してこれ等はその紙面に經文とは關係なき日常生活の時代風俗等をつくり、繪で畫いた上に經文を書寫するのであつて、こゝに至つては純然たる繪畫が、料紙裝飾の用に供せられてゐる。かくの如き裝飾經は文獻や遺品に徵して、藤原時代を中心として最も榮えたのであつて、殊に當代法華信仰の隆昌に伴ひ、この種寫經供養は殆どすべて法華經中心であつたことが知られる。この寫經供養に當つては法華經・開結經・阿彌

陀經・般若心經等三十餘卷、多くは一人一卷づつ結緣分擔し、その裝飾に美を盡して劣らじと競爭したのであつて、いよ〳〵全部完成の曉には、佛堂に於て莊嚴盛大な供養の法會を營むのが通例であつた。これ等の情況は當時の日記物語等に散見するが、「榮花物語」に見ゆる治安元年、皇太后研子が法成寺阿彌陀堂で行つたものが殊に顯著である。〔田中(一)〕

宗砌（そうぜい）　連歌師【俗名】高山民部丞時重【歿年】康正元年（一四一五）正月十六日。

李部王智仁親王筆高山宗砌田舍への狀（圖書寮藏）

【閲歷】梅庵古筆傳には但馬の人と見え、「大和志」には、同國大和田の產とある。和歌を清蔓和尙（正徹）に、連歌を梵灯庵主に學び、文安五年北野會所の奉行となり、北野會所連歌新法十八條を定めた。又一條實良の同に對して「新式追加今案」に於ける意見を述べて參考に供した。救濟（ぐさい）等の三賢時代を下ること六七十年、連歌隆興期に於ける倡首であつて、心敬の「さゝめごと」（別項）にも、「永享の頃より世に知らるゝは、宗砌法師・智蘊法師なるべし」とある。專順の語にも「この頃連歌の聖にて、高きも短きも宗砌を知らぬものやある」とある。宗祇は宗砌を初め心敬・智蘊・行助・宗伊・專順・能阿を斯道に於ける七賢となして「竹林抄」を著はしたが、その中に宗砌の句は三百五十一章を採り、「新撰菟玖波集」には百十四句を收めてゐる。附句は比類のない名匠と稱せられた。「熊にもあらぬ人ぞかしこき」に、「我と見る胸の月輪さやかにて」と附けた如きその一例である。茶道にも深かつたといふ。【著書】田舍への狀○宗砌抄（和泉の人のために書いたもの）○花能萬賀喜（はなのまがき）（別項）○式目捉歌（式目參照）○初心求詠集（梵灯庵の說を錄したもの）。その他門人の日下部忠說が師說を錄したものに「砌塵抄」があり、その發句帳も一部分は遺つてゐる。〔福井〕

宗碩（そうせき）　連歌師【號】月村齋【歿年】天文二年（一五三三）。【閲歷】宗長等と共に宗祇の門人である。「梅庵古筆傳」には、尾州茨江の人とあるが、河內の產のやうである。父に夙く別れたので、異母弟能登永閑と共に、繼母の故鄕能登に赴いたこともある。永正十花千句・住吉法樂千句・伊庭千句・太神宮法樂千句等の作者に加はつてゐる。その一周忌には、三條西實隆公が法文連歌を賦して、哀悼の意を表してゐる。宗碩は歌をも善くし、集外三十六歌仙に入つてゐる。【著書】藻汐草十卷○佐野のわたり○百二十番連歌合等。

【參考】連歌の史的研究（福井久藏）　〔福井〕

漱石（そうせき）「夏目漱石」を見よ。

漱石俳句集（そうせきはいくしふ）　一册【著者】夏目漱石【編者】小宮豐隆輯寫、野上豐一郎分類【刊行】大正六年岩波書店【內容】明治二十二年より大正五年に至る漱石の俳句を輯錄し、附錄として俳體詩と連句一篇とを附載したものである。俳句の部は新年の部、春の部、夏の部、秋の部、冬の部、雜の部に分ち、更に各々を時候・天文・地文・人事・動物・植物・雜に分けてゐる。俳體詩は水底の感・冬夜・尼等の外に童謠もある。連句は歌仙一卷で、虛子・四方太・漱石の三吟である。【價値】英文學者・小說家としての漱石は、俳句に於ても既に豐かな天分を見せてゐる。漱石後年の小說家としての氣稟は既にその俳句に見えて居り、後年の小說は俳句からの成長であると云つてよい。その點でも漱石の俳句は注意を拂はるべきものである。俳體詩は虛子と共に新しく提唱したもので、二三の作家も現はれ、一時俳壇の期待もあつたが、後の續かなかつたのは惜しむべきである。〔萩原〕

崇禪寺馬場敵討（そうぜんじばばかたきうち）　「敵討崇禪寺馬場」を見よ。

創造的（さうざうてき）　藝術論【解說】藝術家（別項）の活動も職人の仕事も、加工的形成物を生產する限り創造的である。併し藝術に於て特に創造的である以上は、（一）藝術活動が藝術家の意圖的活動であり、（二）彼の意圖は作品以外に出でない。（三）又彼の生產するところのものは手段として他の目的に奉仕しない自己目的的であると考へられること。（四）それが藝術家自身の內面的體驗の完全な表現であり、一の人格、有機體、價値と考へられること。要するに活動が個性（別項）的であり、生產物が一の有機體、美的價値（別項）で美的自律性（別項）を有することについて言はれる。（藝術家・個性・獨創性參照）　〔村田〕

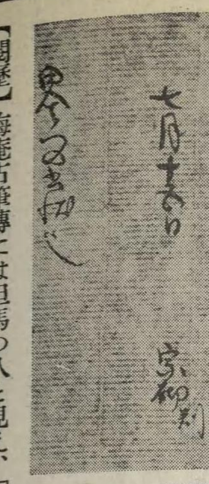
宗旦（そうたん）　俳人【姓名】松井氏、本姓池田氏。通稱俵屋孫兵衞【號】也雲軒・夕雨・兀翁・依楫子【生歿】寬永十三年生れ、元祿六年（一三五三）九月十七日歿す。享年五十八。【法名】法屋宗旦居士【墓所】攝津伊丹攝取山光明寺〔辭世〕世の中はただ瓢簞の大鯰抑へてにげて往にけり。【俳系】松江重賴門【閲歷】その先は京都の人である。延寶二年春居を在岡に移し、門人を集めて老莊の書を講じ、又長明・兼好の文を說いた。學徒爭ひ到つて門を塡め、室を塞ぐ程であつた。性甚だ酒を愛し、常に觴を花月の下に取つてゐた。也雲軒に住する事二十餘年、伊丹風（別項）の祖と云はれてゐる。鬼貫も幼年よりその感化を受けてゐたやうである。門人中、古澤鬱動・木村鷺助（さぎすけ）等が特に勝れてゐる。【編著】當流籠拔一册（延寶六年刊、宗旦・木兵・百丸・鬼貫・鐵幽の五吟五百韻である。俳書大系談林俳諧集所收）○無分別一册（延寶八年刊、宗因の「白露や無分別なるおきどころ」を立句とした兩吟である）○野梅集一册（貞享四年刊、鸞動の追善集である）○遠山鳥、延寶二年刊）○無盡經○か樣に候ものは○鵜の眞似。

【參考】花見車高島轍士○在岡誹諧逸士傳森本百丸○誹家大系圖生川春明○俳人鬼貫の研究鈴木重雅　〔萩原〕

雜談集（ざふだんしふ）　說話　十卷【著者】無住【成立】嘉元三年【刊行】延寶七年【諸本】明治十五年版がある。內閣文庫に「雜談集」の寫本があるが、無住の「雜談集」とは全然違ふ。【出典】本書の說話の典據と思はれるものには、「本朝法華驗記」「長谷寺靈驗記」「今昔物

平家納經「序品」（厳島神社藏）

平家納經「授記品」（厳島神社藏）



（藏）

【閲歴】梅庵古筆傳には但馬の人と見え、「大和志」には、同國大和田の産とある。和歌を清巖和尚（正徹）に、連歌を梵灯庵主に學び、文安五年北野會所の奉行となり、北野會所連歌新法十八條を定めた。又一條兼良の問に對して

【參考】連歌の史的研究　西井久藏　（西井）

江の人とあるが、河内の産のやうである。父に夙く別れたので、異母弟能登永閑と共に、繼母の故郷能登に赴いたこともある。永正十花千句・住吉法樂千句・伊庭千句・太神宮法樂千句等の作者に加はつてゐる。その一周忌には、三條西實隆公が法文連歌を賦して、哀悼の意を表してゐる。宗碩は歌をも善くし、集外三十六歌仙に入つてゐる。【著書】藻汐草十卷○佐野のわたり○百二十番連歌合等。

項）の活動も職人の仕事も、加工的形成物を生産する限り創造的である。併し藝術に於て特に創造的である以上は、（一）藝術活動が藝術家の意圖的活動であり、（二）彼の意圖は作品以外に出でない。（三）又彼の生産するところのものは手段として他の目的に奉仕しない自己目的であると考へられること。（四）それが藝術家自身の内面的體驗の完全な表現であり、一の人格、有機體、價値と考へられること。要するに活動が個性（別項）的であり、生

刊）○無盡經○か樣に候ものは○鵜の眞似。

【參考】花見車高島輙士○在岡誹諧逸士傳森本百丸○誹家大系圖生川春明○俳人鬼貫の研究鈴木重雅　（萩原）

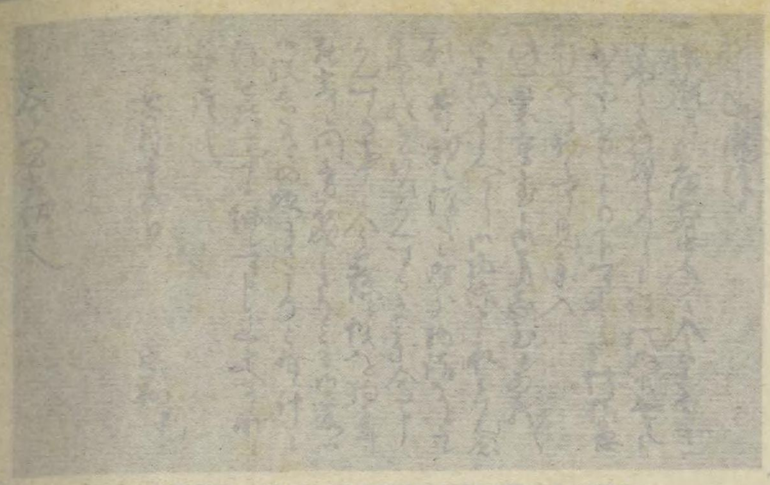
雜談集（ざふだんしふ）　說話　十卷

【成立】嘉元三年　【刊行】延寶七年　【諸本】明治十五年版がある。内閣文庫に「雜談集」の寫本があるが、無住の「雜談集」とは全然違ふ。

【出典】本書の說話の典據と思はれるものには、「本朝法華驗記」「長谷寺驗記」「今昔物

陀經・般若心經等三十餘卷、多くは一人一卷づつ結緣分擔し、その裝飾に善美を盡して劣らじと競爭したのであつて、いよ〳〵全部完成の曉には、佛堂に於て莊嚴盛大な供養の法會を營むのが通例であつた。これ等の情況は當時の日記物語等に散見するが、「榮花物語」に見ゆる治安元年、皇太后研子が法成寺阿彌陀堂で行つたものが殊に顯著である。（田中（一））

宗砌（そうぜい）　連歌師【俗名】高山民部丞時重【歿年】康正元年（一四五五）正月十六日。



孝部王智仁親王筆高山宗砌田舍へ〜の狀（圖書寮藏）

「新式追加令案」に於ける意見を述べて參考に供した。教濟等の三賢時代を下ること六七十年、連歌隆興期に於ける俤首であつて、心敬の「さゝめごと」（別項）にも、「永享の頃より世に知らるゝは、宗砌法師・智蘊法師なるべし」とある。專順の語にも「この頃連歌の聖にて、高きも短きも宗砌を知らぬものやある」とある。宗祇は宗砌を初め心敬・智蘊・行助・宗伊・專順・能阿を斯道に於ける七賢となして「竹林抄」を著はしたが、その中に宗砌の句は三百五十一章を採り、「新撰菟玖波集」には百十四句を收めてゐる。附句は比類のない名匠と稱せられた。「熊にもあらぬ人ぞかしこき」に、「我と見る胸の月輪さやかにて」と附けた如きその一例である。茶道にも深かつたといふ。【著書】田舍への狀○宗砌抄（和泉の人のために書いたもの）○花能萬賀喜（別項）○式目掟歌（式目參照○初心求詠集（梵灯庵の說を錄したもの）。その他門人の日下部忠說が師說を錄したものに「砌塵抄」があり、その幾句帳も一部分は遺つてゐる。（羅井）

宗碩（そうせき）　連歌師【號】月村齋【歿年】天文二年（一五三三）。【閱歷】宗長等と共に宗祇の門人である。「梅葉百韻傳」には、尾州茨江の人とあるが、河內の產のやうである。父に夙く別れたので、異母弟能登永閑と共に、繼母の故鄉能登に赴いたこともある。永正十花千句・住吉法樂千句・伊勢千句・太神宮法樂千句等の作者に加はつてゐる。その一期忌には、三條西實隆公が法文連歌を敷して、高僧の

漱石（そうせき）「夏目漱石」を見よ。

漱石俳句集（そうせきはいくしゅう）　一冊【著者】夏目漱石【編者】小宮豐隆・野上豐一郎【刊行】大正六年岩波書店【內容】明治二十二年より大正五年に至る漱石の俳句を輯錄し、附錄として俳體詩と連句一篇とを附載したものである。俳句の部は新年の部、春の部、夏の部、秋の部、冬の部、雜の部に分ち、更に各々を時候・天文・地文・人事・動物・植物・雜に分けてゐる。俳體詩は水底の感・冬夜・尼等の外に漢詩もある。連句は歌仙一卷で、虛子・四方太・漱石の三吟である。【價値】英文學者・小說家としての漱石は、俳句に於ても既に豐かな天分を見せてゐる。漱石後年の小說家としての氣稟は既にその俳句に見えて居り、後年の小說は俳句からの成長であると云つてよい。その點でも漱石の俳句は注意を拂はるべきものである。俳體詩は虛子と共に新しく提唱したもので、二三の作家も現はれ、一時俳壇の期待もあつたが、後の續かなかつたのは惜しむべきである。

藝術（げいじゅつ）　藝術論【別項】藝術家（別項）の活動も職人の仕事も、加工的形成物を生產する限り創造的である。併し藝術に於て特に創造的である以上は、（一）藝術活動が藝術家の官能的活動であり、（二）彼の官能は作品以外に出でない。（三）又彼の生產するところのものは手段として他の目的に奉仕しない、自

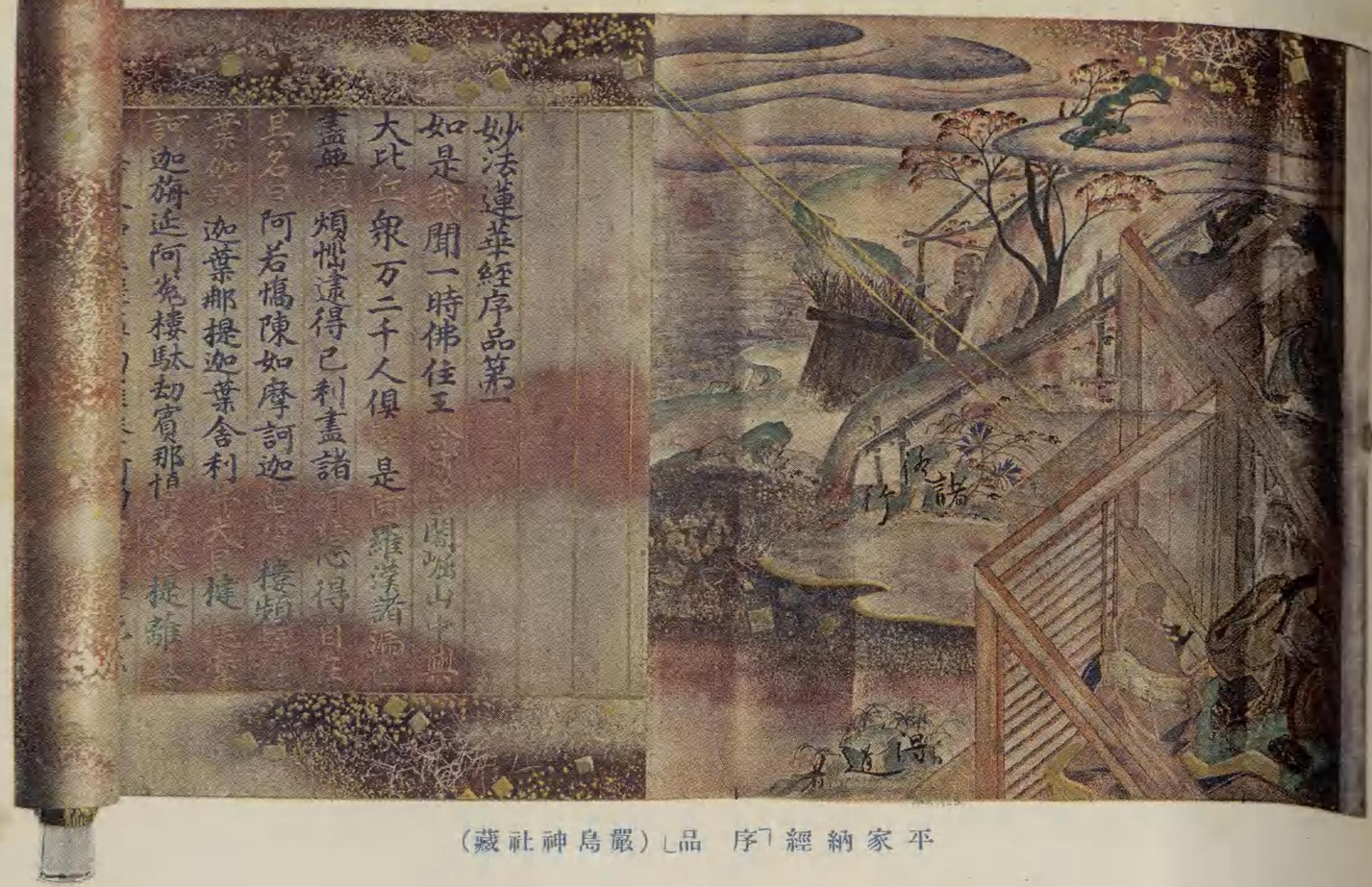
藝術寺馬場敵討（げいじゅつじばばかたきうち）「敵討藝術寺馬場」を見よ。

創造的（そうぞうてき）　藝術家（別項）の活動も職人の仕事も、加工的形成物を生產する限り創造的である。併し藝術に於て特に創造的である以上は、（一）藝術活動が藝術家の官能的活動であり、（二）彼の官能は作品以外に出でない。（三）又彼の生產するところのものは手段として他の目的に奉仕しない、自

產物が一の有機體・美的價値（別項）で美的自律性（別項）を有することについて言はれる。（藝術家・獨性・獨創性・審美）（村田）

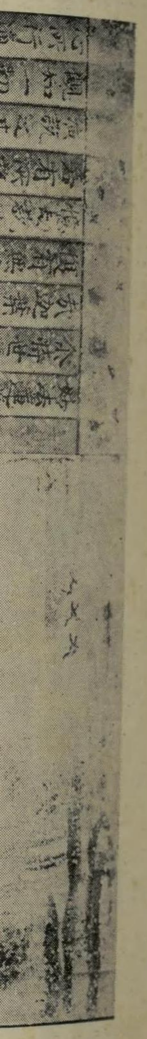
宗旦（そうたん）　俳人【姓名】松井氏、本姓池田氏。通稱伝屋孫兵衛【號】也雲軒・夕雨・元翁・依樹子【生沒】寛永十三年生れ、元祿六年（一六五三）九月十七日歿す。享年五十八。【法名】法星宗旦居士【墓所】攝津伊丹摂取山光明寺【辭世】世の中はただ鹽筆の大綱抑へてにげて往にけり。【俳系】松江重頼門【閱歷】その先は京都の人である。延寶二年春居を在岡に移し、門人を集めて老莊の書を講じ、又長明・兼好の文を說いた。學能爭ひ到つて門を塡め、室を塞ぐ程であつた。性甚だ酒を愛し、常に瓶を花月の下に取つてゐた。也雲軒に住する事二十餘年、伊丹風（別項）の祖と云はれてゐる。鬼貫も幼年よりその感化を受けてゐたやうである。門人中、古澤雲動・木村雲動等が特に勝れてゐる。【編著】雪流鏡拔一册（延寶六年刊、宗旦・木兵・百丸・鬼貫・續齋の五吟五百韻である。俳諧大系談林俳諧集所收）○無分別一册（延寶八年刊、宗因の「自踏や無分別なるおきどころ」を立句とした連吟である）○野梅集一册（貞享四年刊、雲動の追悼集である）○遠山集（延寶二年刊）○無藏經○か樣に候ものは○鶴の眼鏡。【參考】花見車（高島藩士○在岡俳談・士傳淡本百丸○俳家大系國作川春明○俳人鬼貫の研究鈴木重雄）

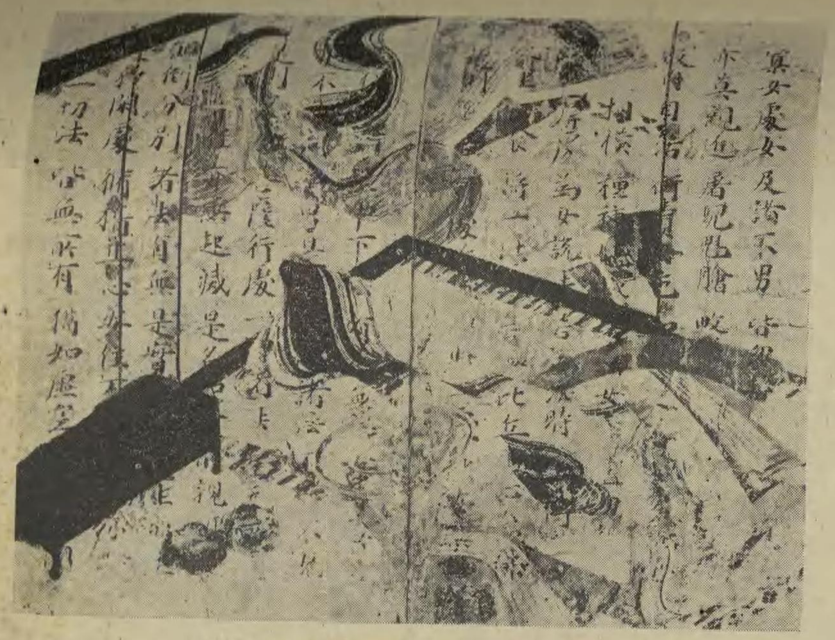
雜談集（ざつだんしゅう）　說話　十卷【著者】無住【成立】嘉元三年【刊行】延寶七年【諸本



平家納經「序品」（嚴島神社藏）

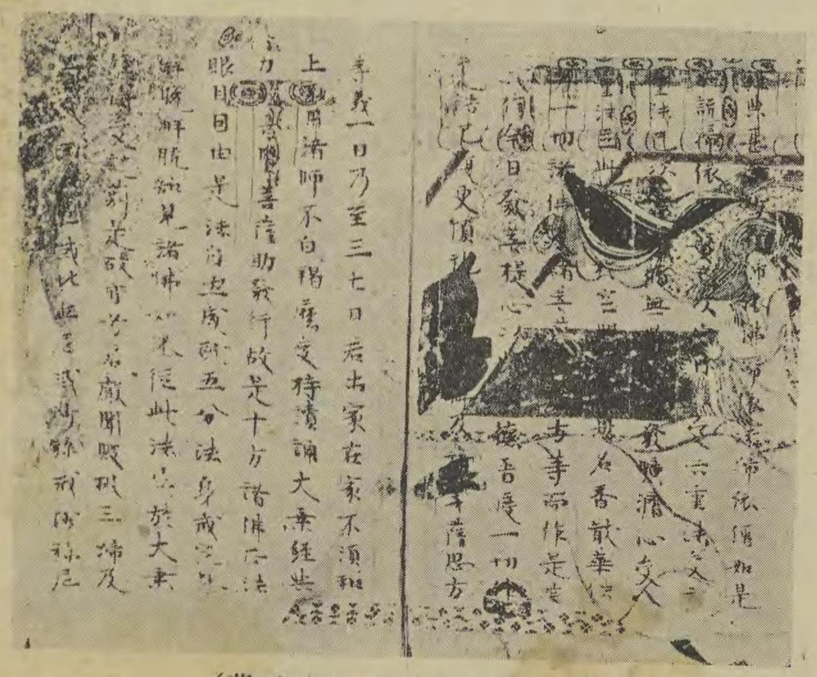
平家納經「授記品」（嚴島神社藏）





法華經册子（上野精一氏藏）

久能寺經（武藤山治氏藏）



法華經册子（前山久吉氏藏）

扇面寫經（四天王寺藏）

語」「古事談」「今昔物語」「私家百因緣集」「古今著聞集」等があり、漢籍には「孝經」「白氏文集」「莊子」等があり、佛典には「起信論」「涅槃經」「法華經」「金光明經」「阿含經」「往生要集」等がある。なほ「沙石集」と同じ説話も散見する。【内容】本書は「沙石集」の前身と見るべき性格を持つ。東山の高僧を訪ねる話、數奇な運命に弄ぜられた禪門夫妻の出家譚、地頭に恨を報はうとする法師の魂の話等が見られる。〔卷七〕には、動物譬喩譚を用ひて禮儀を説き、法華經の靈驗をさとしてゐる。精進懈怠や願行、淨

へただけのものと思はれる。時宜相應の故に「と云つてゐるのは、肅山の跋に、「師德をあげて云々」とあるのと同じ氣持からの語であらう。かくて肅山の跋が附されて翌年刊行されたものと思はれる。【内容】撰者の見聞に基

れたが、かく改題された程その體裁が本書に似てゐないではない。追善のためのものなるが故に「其角十七回」の如き標題として置いたものとすれば、該集編纂の意中には本書に擬する志向が働いてゐたものかも知れない。

語」「古今事談」「沙石集」「私案百因錄集」「古今著聞集」等があり、漢籍には「孝經」「白氏文集」「莊子」等があり、佛典には「起信論」「涅槃經」「法華經」「金光明經」「阿含經」「往生要集」等がある。なほ「沙石集」と同じ説話も散見する。【内容】本書も「沙石集」(別項)と類似するもので、種々の雜談を集錄してゐるが、矢張り佛教的な説教が主な内容をなしてゐる。〔巻一〕には、自力本願他力本願、易と佛教、田獵の天竺王、楚王と后、化道多義、眞言物語等説話と説經談をのせてゐる。〔巻二〕には物事には得失相並ぶ事を始めとして、知恩の條には猿の報恩譚があり、災難は三世の業因に依ると説いて、遊女、あさなへ賣、まめ祖ものぐさ祖の滑稽譚を擧げ、妄語得失を説いては、説經僧の失敗譚、雞卵や鮎を食する僧とその弟子坊主との滑稽譚が見られる。〔巻三〕には飲酒を乘戒緩急の見地で承認した説經談、山僧と其母の滑稽談、法宗上人と鹿の母子、鐵輪王の因果譚、禪林寺僧正の滑稽譚、南都高僧、聖武帝と學僧等の笑話がある。袈裟の因緣、作者の述懷等が見られる。〔巻四〕には、老人用意、瞋恚の重障、泣尼の滑稽、失戀死別に依る發心往生、無明の兄弟、述懷の和歌等が見られるが、いづれも佛教的な教訓法談に供せられてゐる。〔巻五〕には、長谷寺の觀音が、僧に誘拐せられようとする姫君を救ふ滑稽な靈驗譚、勅使のために濞を拭はぬ上人、慈童女、貧女の一燈、梵志と國王等の因果譚、意念往生、梵鐘が三途の苦を救ふ等の話が見られる。〔巻六〕は空閑の妻をなぐさめ、農作の保護をつとめ、或は墮地獄を救ひ、死者を蘇生せしめる等の地藏の靈驗説話が、多少滑稽味をおびて出てゐる。餓鬼が東山の高僧を訪ねる話、數奇な運命に弄ぜられた禪門夫妻の出家譚、地頭に恨を報はうとする法師の魂の話等が見られる。〔巻七〕には、動物譬喩譚を用ひて禮儀を説き、法華經の靈驗をさとしてゐる。精進懈怠や願行、淨不淨を説いてゐる。〔巻八〕に注目すべき説話は、老子・孔子を本地垂迹の思想で、儒童・迦葉二菩薩の化身であると説いてゐるのと、禪宗の坐禪三昧に五獼猴の譬喩譚が説かれてゐることである。〔巻九〕には、卒都婆の解説、觀念の利益、讀經の利生、龍尾寺緣起の龍の話、空也と松尾明神等の話がある。嚴恭と龜の話は萬物靈精の汎神的見解を示してゐる。誑惑の條には、奇智を用ひる滑稽譚がある。〔巻十〕には、隨求陀羅尼の靈驗譚、後白河法皇の御頭痛を因果的に説明した因果説話等、或は讀經の德、神明の慈悲等、神佛混淆の態度で説かれてゐる。以上述べた如く本書の文學的興味あるのは、所々に出て來る滑稽笑話の少くない事である。而も説話を通じて當時の時代思想が呈示されてゐる事は、見遁し得られぬ點である。

【參考】鎌倉時代文學新論　野村八良　〔高島〕

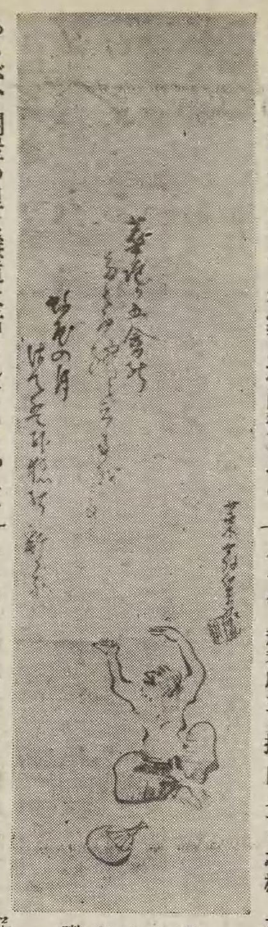
雜談集（ざふだんしふ）　俳話　二册　【撰者】寶井其角　【成立】元祿四年立春日　【刊行】元祿五年（俳諧書籍目錄）　【諸本】其角全集（俳諧文庫）・其角全集（勝峯晋風編）・俳文學大系隨筆編に所收　【由來】撰者の識語はやゝ意の通じにくいものであるが、識語中「芭蕉翁回國歸庵時宜相應故被二校合一畢」とある歸庵は、元祿四年十一月初めであり、集末に節分の句のある點から考へて、識語中「元祿辛未歳内立春日於二狂而堂燈下一書」とあるのが成稿の日と推定され、校合とあるのは燈下に於て書すと言ひ換へただけのものと思はれる。時宜相應の故にと云つてゐるのは、蕭山の跋に、「師德をあげて云々」とあるのと同じ氣持からの語であらう。かくて蕭山の跋が附されて翌年刊行されたものと思はれる。【内容】撰者の見聞に基く俳話並に撰者及び撰者に關係ある人々の發句・連句を集めたもので、上巻は俳話を主として、外に岩翁父子と大山・江の島へ吟行した吟行句及び四季の發句を載せ、下巻は連句を主として、これに少數の發句と三條の俳話とを交へたものである。俳話は、芭蕉の「辛崎の松は花より朧にて」の句の留字についての門下の疑義及び芭蕉の答を初めとして、同門他門及び自己に渉り、古今に渉り、發句・連句に渉つて或は事實を主とし或は自見を主とした説述である。連句は殆どその全部は、後年撰者自身「俳諧錦繡緞（きんしうどん）」（別項）に再錄して居り、發句も撰者自身のものは別に集もあるから、本書獨自の面目は要するに俳話にあると云つてよい。【價値】本書の俳話中には、俳論として聽くべきもののあることは勿論である。其角の俳論のやゝ纏まつて聽かれるものは、去來の「花實集」乾巻（柿晋問答）であるが、其角の自著では本書のみである。積翠園の「俳諧或問」は屢々本書に言及し、「雜談集の一書は、誠に其角が旨を知り、蕉門の教をあかす最第一の書なり」とまで極言してゐる。「白雄夜話（しらを）」には、「雜談集にはおのれが非をあげいひ」と云ふ點を稱揚してゐる。下巻の梅翁の句の前文に「諷（うたし）は誹諧の源氏なり」の有名な語も見られる。かく本書は俳諧及び俳諧上の事實に對する其角の感想評論を聽くべきものとして價値の大なるものである。【影響】門人淡々の其角追善の「其角十七回」は、後に「淡々雜談集」と改題されたが、かく改題された程その體裁が本書に似てゐないではない。追善のためのものなるが故に「其角十七回」の如き標題として置いたものとすれば、該集編纂の意中には本書に摸擬する志向が働いてゐたものかも知れない。これにやゝ遲れて現はれた「五色墨」（別項）は、本書下巻の一條中の「句は道具也、點はあき人也」が、その作者相互點の動機となつたので、巻頭にこの語を含む一條を掲げ出してゐる。其角に傾倒した天明の几董は、本書に倣つて「新雜談集」（別項）を著作してゐる。これ等の事實の見られるのも、本書の所説と其角一流の才筆とに因るのである。　〔志田〕

宗長（そうちやう）　連歌師　【幼名】長六　【號】紫屋軒　【歿年】享祿五年（一五三二）（眞珠庵過去帳）。享年八十五（同上）　【閲歴】駿河島田の人。十六歳にして宗祇の門に入り、その終焉に至るまで隨從すること四十餘年、その風骨を傳へた。又一休和尚に參禪し、大德寺の眞珠庵の畔に居り、神南備に近き薪の酬恩庵に栖んで一休禪師の後を弔ひ、晩年齋藤加賀守安元の志により廬を駿河の泉谷に結んだ。所は宇都の山の入口で、蔦楓繁りもの淋しき境、家を紫屋軒と號した。性恬淡で平常連歌の外參禪なく、參禪の外連歌なき狀であつた。師の歿後衆に推されて花の本の宗匠となつた。宗長は舊師に對する情が極めて篤く、大德寺の山門を修築するため、百方奔走して淨財の喜捨を朝倉教景等の人々に勸誘したのみならず、愛藏の「源氏物語」を賣つてその資の一部分にあてたといふ美談がある。「新撰菟玖波集」（別項）にはその句が三十五句採られてある。【著書】永文〇三河下り〇宗祇終焉記（別項）〇東路のつと〇宇都の山記〇那智籠〇雨夜の記〇

宗長手記（附句のことを細かに說いたもの）○連歌自註（壬生下總守に送つたもの）○嫌詞○百番連歌合評○老葉註○古瀨新水。その他百韻千句の類がある。「連歌比況集」（別項）もその作といふ說がある。

【參考】宗長居士傳 黑川道祐 ○連歌の史的研究 福井久藏 〔福井〕

巢兆（さうてう） 俳人 【姓名】建部英親、字は族父【別號】秋香庵・黃雀園・寒葉齋・菜翁【生歿】寶曆十年に生れ、文化十一年（二四七四）十一月十七日歿す。享年五十四【墓所】東京淺草北寺町日輪寺【俳系】白雄門。その八弟子の一【閱歷】千住の人、書家山本龍齋の子で腐（享和元年）○せきやでう半紙本一册（享和二年、大阪柿壺客中撰の旅窓春興帖。俳書大系近世俳諧名家集所收）○玉の春半紙本一册（文化六年、春興帖）○俳諧老が染飯半紙本一册（文化七年、巢兆五十歲賀集）○掃笑會半紙本一册（文化八年、有圭・斗月・燕市を撰者とした諸國俳人句錄）○仙都紀行半紙本一册（文化八年名月の夜、月の都へ旅行した空想的紀行）○八十とせの賀半紙本一册（文化九年、上總の媒柯八十賀集。媒柯著・省我校としてあるが、巢兆の編である）○はいかい小がさはら半紙本一册（文化十年、俳席の心得を示すに託して俳味を說いたもの）○木實あはせ半紙本一册（文化十年、秋香庵主人撰・門人十日亭校、木の實に關する句の輯錄）○たまの市半紙本一册（文化十一年、江鳥詣句錄。翌十二年刊）○曾波可理半紙本一册（巢兆の發句輯錄。內題に巢兆發句集とある。春夏の部は巢兆の自撰自筆の板下、秋冬の部は巢兆歿後、門人國村が撰し、且つ板下を書いたもの。文化十四年刊。鵬齋の序がある。俳家成美全集・俳書大系近世俳話句集・日本名著全集俳文俳句集等所收）



巢兆自畫讚

雙蝶記（さうてふき） 讀本 六卷 【作者】山東京傳【畫工】歌川豐國【名稱】世俗に二つ蝶々といはれた淨瑠璃歌舞伎を種として作る故、かく名付けた。また一名を「霧籬物語」（きりのまがき）といふは、遊女夕霧の事を作るとて既に屢々廣告したが、遂に夕霧の事は出でず、「霧の籬のうちを行く雁の音をのみ聞きてかたちを見ざるが如く」であるに據つたのである。【刊行】文化十年【諸本】袖珍繪入文庫・京傳傑作集（帝國文庫）・山東京傳集（近代日本文學大系）等所收【題材】濡髮長五郎と放れ駒長吉の事を書いた竹田出雲の「双蝶々曲輪日記」（別項）に據つて說話の輪廓を作り、「曲輪日記」の町人の世界を武士の世界に改めてゐるが、僅かに原作の面影を留めてゐるに過ぎない。これがために作者は「しるせる事のさだかならず」とし、「霧籬物語」の題名を說いてゐるが、實は初め、この名によつて遊女夕霧のことを作らうとしたが、これに據つた二三の合卷草雙紙が出た爲め題材を變へたのだといふ（おかめ八目）。

【梗概】南北朝の頃、北條時行は南朝に御旗を請うて信濃の苫形城に據つたが、月影ケ谷判官照影の大軍に攻められて落城し、時行は自刄し老臣大佛貞直は入水したと傳へられた。それから十年許りも經つた。鎌倉小動の駕籠舁塵兵衞は、盜難に遭つて愈々貧窮し、娘小蝶を遊女に賣つたが、その弟蝶吉は月影ケ谷判官の嫡子玉兎之助の小姓として愛され、塵兵衞も士分に取立てられた。その頃執權山吠莊司雪森の子余吾郎は、父の代參に高野に赴かんと京に上つたが、偶然同家中の箕腹蟻右衞門に逢つて遊里に誘はれ、遊女吾妻と深く馴染み常住金までも費すので、守役南方十字兵衞は拜領の名劍朝烏を金に換へ罪を身に引受けて自害する。余吾郎は後悔して自害を決心するが、偶々吾妻の兄の余字兵衞に救はれて遊里を脫れ、朝烏を得て十字兵衞の子余兵衞に返して家を立てさせ、父の許を得て吾妻を妻とする。吾妻は小蝶であつた。一方蝶吉は塵兵衞が何者かに射殺されたので、仇を尋ねて越中蛭牙山の麓に至り山吠莊司に逢ふ。莊司は苫形落城の際、手に入れた密書によつて時行の死と貞直の入水が僞りであることを知り、密に索ねてゐたのであつたが、こゝに計らず修行者となつてゐた山吠余吾郎の奇計によつて、山麓に住む鴉飼の頭閑作が大佛貞直であることがわかるので、蝶吉は自ら進んで貞直を討たんとし、却つて自ら刄に伏した。蝶吉は貞直の子で、苫形城の軍中に生れ、塵兵衞に拾はれた者であつた。時しも月影ケ谷玉兎之助來つて南北朝和睦し、北條時行助命の事を告げる。そこで閑作の僕となつてゐた時行は出家し、貞直は自害を遂げた。

【構想】題材とした淨瑠璃歌舞伎の面目・精神を全く除き武士の大義名分を表した。發端と結末を時代物とし、中間に世話事を含ませてゐるが、戀愛を寫すよりは恩愛を描寫するを主とした。又探偵小說に見るやうな主要人物の正體を隱して、讀者の興味の中に事件を運び、適當な時に素性などの疑點を明かにして、意外の感興を起させる構成法を取つてゐる。獨自の構想であり、作者の苦心もこゝにあつたが、それ程の効果を擧げ得なかつた。【史的地位】「本朝醉菩提」「浮牡丹全傳」（各別項）の後、これが現はれる迄に三年の隔りがある。この三年間の沈默は、馬琴と對立してゐた關係から見ると重大な意義を有するもので、「忠臣水滸傳」（別項）以來の讀本の上に於ける頹勢をこの作によつて回復し、多年江戸戲作者の第一人者としての名聲を維持せんと試みたことは、「近世物之本江戸作者部類」（別項）によつても想像される。併しこの方面に於ける馬琴の能力に及ばざることを自覺して、讀本の面目を、その長所とするところを以て一新せんとし、題材を當時「侠客實錄傳」（文化五年）といふ合卷に取扱つた世話狂言に求め、文章も一變して通俗の一體を圖かうと、苦心經營、多くの期待を以てしたのであつたが、失敗に歸したので、遂に讀本に筆を斷ち、馬琴の偉容の前にその陣を撤するの餘儀なきに至つた。

の句集の序中に云つた一句は、能く肯綮に當つてゐる。父龍齋の用ひた「松甫」の印をその儘襲用して、少し斜めに押してゐるのに見ても、その恬淡洒脫の程が知られる。その編著の小册子は多數に上るが、皆一特色を具へてゐ、特にその挿畫に於て他の摸倣を許さないものがある。【編著】武藏野（寛政六年）○德萬歲半紙本一冊（寛政十二年、門人琴市のために編したもの。作者大妻近實修話名家集所收）○おぼろ豆

ふ合戦に取材した黄表紙狂言に求め、文章も一變して通俗の一體を開かうと、苦心經營、多くの期待を以てしたのであつたが、失敗に歸したので、遂に讀本に筆を斷ち、馬琴の偉容の前にその陣を撤するの餘儀なきに至つた。

【價値】この作の失敗は、作者が最も苦心した構想上に重大な缺陷が含まれてゐたのに原因する。餘りに部分的興味に走つた結果が、挿話を增加し補綴に陷つて遂に統一的價値を低下し、讀本に尊重する理想や精神の深い印象を與へなかつた爲めに、馬琴との對立を不利に終らしめた。併し馬琴は、「おかめ八目」（文化十年）にこの趣向を相當認めてゐる。〔笹野〕

【參考】おかめ八目　曲亭馬琴（曲亭遺稿圖書刊行會）○京傳傑作集・山東京傳集等の解說

莊重體（さうちよたい）「文體」を見よ。

箏の琴（さうのこと）「箏」を見よ。

象引（ざうひき）　脚本（歌舞伎十八番の一）【作者】市川團十郎【興行】元祿十四年正月、江戸中村座初狂言「惠方鎌足鎌鬼門入鹿弓　傾城王昭君」第一番目、深草の里の梅見の場〔曲節〕外記節〔太夫〕薩摩掾外記〔作曲〕未詳【傳來】廢滅。但し大正二年十月、東京歌舞伎座で、平木白星新作の「根元歌舞伎　象引」を市川左團次等が上演した。

【梗概】太宰の廣嗣（中島三郎四郎）がもてなしで、深草の里の梅見に幔幕を張つて入鹿の大臣（山中平九郎）と藤原の速足（中村大藏）との和睦の酒宴を催す。入鹿はこゝへ白象に乘つて來る。大織冠鎌足實は山上源内左衞門（市川團十郎）は、讃岐から歸ると直に稻荷明神へ參籠すべく、三つ扇要之助（橘本金作）を召連れて幔幕の前を通りかけると、東人右京之進（宮崎十四郎）が出迎へて鎌足を入鹿が酒宴の席へ招かうとする。併し鎌足は知らぬ顏をしてゐるので、右京之進が詰ると、要之助は主君鎌足公は志渡の浦風に身を痛めたので、お耳が聞えませぬからお許し下さいといふ。こゝへ入鹿が出て來て鎌足と兩人盲目・聾の挨拶がある。後に入鹿謀叛の謀み顯れて目を開き、又鎌足の耳が聞えるとて互の詮議になる。鎌足といつたのは僞り、實はその家老山上源内で、鎌足は志渡の浦で死んだので、その名をかりて贋聾となつて入鹿の逆意を見極めに來たのである。源内は鎌足の遺言があるとて入鹿に諫言する。入鹿は惡心を止めて和睦したやうな風を裝うて、實は酒に事よせて源内を殺さうと企む。酒の肴に入鹿が引出物を取らせようといつて、さき程入鹿が乘つて來た白象の手綱を切つて源内に嗾ける。源内が摑み挫がんと立ち上る所を妻の宿り木（上村井筒）が留めて、妾がこの象を止めませうと、につこと笑つて立ち上る。この時入鹿は怒つて鉾を振り上げて源内に打つてかゝると、源内は白象をふりまはして所謂「象引」になる。遂に入鹿を初め惡人どもは、皆逃げてしまふ。源内は妻の宿り木を白象に乘せ、自分は花見の幕をちぎつて討ち取つた首を包んで腰に卷き、三尺手拭で頰冠りをして鼓をとり、萬歲の見得で踊りながら引込む。

【解說】皮肉と可笑味とに富んだ荒事を基礎にして、それを音樂と舞踊と華麗な色彩とで包んだ古典劇として注目すべき作である。なほ本作は元祿十三年三月、江戸山村座所演「うす雪今中將姫」第一番目で、八劔王子が唐から將來の白象を引裂く場を改作したものである。なほ寶曆に二代中村傳九郎が象引を演じてゐる。〔秋葉〕

所收）

雙蝶記（さうてふき）　讀本　六卷【作者】山東京傳【畫工】歌川豐國【名稱】世俗に二つ蝶々といはれた淨瑠璃歌舞伎を種として作る故、かく名付けた。また一名を「霧離物語（きりのまがき）」といふは、遊女夕霧の事を作るとて既に屢々廣告したが、遂に夕霧の事は出でず、「霧の離のうちを行く雁の音をのみ聞きてかたちを見ざるが如く」であるに據つたのである。【刊行】

【參考】狂言本「源氏五十番櫻」の文藝歌舞伎傑作集下卷）○狂言本「傾城王昭君」（同上）○歌舞伎十八番考石橋獅芥子（新燕石十種第三）○歌舞伎十八番考象引山田春雄（演藝畫報二ノ一〇）○象引の大薩摩と鳴物粹屋勝四郎（舊歌舞伎一六一）

相府蓮（さうふれん）　雅樂曲【名義】支那の相府の蓮のことを歌つてあるので、この名がある。【異稱】想夫憐・想夫戀【性質】唐樂。新樂の中曲。平調曲に屬する。拍子十。詠があつたが後に絕えた。舞はない。【沿革】支那の歌謠曲の一種であつて、我が國への傳來は未詳。歌は傳はらない。この曲を「想夫戀」と誤り傳へた事に就いては「徒然草」に「想夫戀」といふ樂は、女をとこをこふる故の名にあらず。もとは相府蓮、文字のかよへるなり。晉の王儉大臣として家にはちすをうゑて愛せし時の樂なり。是より大臣を蓮府といふ」とある。併し支那には別に「想夫戀」といふ名の樂が存在したと見えて、その名は支那の書に見えてゐるので、この名を相府蓮に代用することが始まつたのであらう。「大日本史」禮樂志には「按、國史補曰、唐司空于頔、以二想夫憐其名不一レ雅、將レ改レ之、客曰、南朝相府曾有二瑞蓮一、故歌二相府蓮一、自レ是後人語訛相承不レ改耳」とある。想夫戀の名は、「平家物語」小督局の記事から人口に膾炙されるに至つた。〔田邊〕

想夫戀（さうふれん）　飜譯小說【譯者】臥牛樓主人佐野尙（大分縣の人といふ）、菊亭靜閲【原作】ボッカチヨの「デカメロン」第五日目の第七話。サバチェー・ド・カストルの佛譯による。【角書】ボッカース翁十日物語【刊行】明治十九年十月、丸善書店。【解說】この書は、「デカメロン」の名を標榜してゐるが、事實は譯といふより改作に近いくらゐの譯し方である。原本の第五日目の第七話（即ち「群芳綺話」中の第四「哀情忽去、歡樂忽來」）は、シシリイの一貴族の奴隷少年が主家の娘と戀に落ち、その戀に勝つまでの物語である。少年と少女とは互に思を打明ける折を待つてゐたが、一夏、別莊からの歸途雷雨のため家族と離れ〴〵になり、二人だけ路傍の破れ屋に雨宿りしたのが緣となつて、間もなく少女は姙娠の身となる。少女の父は怒の餘り奴隷少年を市長に訴へて死刑にさせ、娘をも自殺させようとする。ところが當時その地に止宿してゐた外國使臣の一人が、處刑場に引かれて行く少年を見て、十五年前に誘拐された我が子なのに大に驚き、市長に掛け合つて釋放して貰ふ。一方少女の父の貴族も少年の素性が知れたので喜んで娘を嫁がせ、兩家は繁昌する。この原話を自由に敷衍し增補して近代風の小說にしたものが本書であり、その敷衍增補者は菊亭靜、即ち高瀨眞卿である事も卷末の斷り書によつて知ら

想夫戀挿畫（ビゴー畫）

れる。ビゴーの挿畫がある。

【附記】同じ「デカメロン」中の物語を譯したもので、本書の姉妹篇ともいふべきものに、「鴛鴦奇觀」と「密夫之奇獄」(共に明治二十年)がある。二書共に、譯者を近藤東之助としたり、菊亭靜としたりして一定しない。恐らく菊亭が纂譯して近藤氏の名を借りたものか。前者は、原本第三日目の第三話で、美人が僧を欺いて不倫の戀の媒介をさせた物語(卽ち「群芳綺話」のうち第三)、後者は、四日目の第十話(「群芳綺話」の第五)で、醫師の妻の情人が誤つて痲醉劑をのんで死人と誤られた爲めに、種々の喜劇が生じた物語である。兩書とも增補敷衍して、强ひて小說めいた體裁を與へられてゐるが、稚拙甚しい。以上三書とも、愛書家は頗に高價を拂つて珍重してゐるが、內容價値からいへば左程のものでない。「デカメロン」の飜譯としては、「群芳綺話」(別項)に遠く及ばぬものである。

【參考】明治の飜譯文學研究 柳田泉 (柳田(泉))

增補繪入松の落葉 ぞうほゑいりまつのおちば 「松の落葉」を見よ。

宗牧 そうぼく 連歌師 【姓】谷氏 【號】孤竹齋・半隱軒 【歿年】天文十四年か 【學統】「梅庵古筆傳」には宗碩門、「連歌家譜」には肖柏門とあるが、宗長並に賢舜にも益を請うた。和歌及び「源氏」は、九條尙通公の敎を受けた。【閱歷】宗牧は宗祇に私淑し、宗祇の年忌毎に追善百韻を賦した。宮方・門跡・公卿を初め、近畿にては三好長慶、關東にては北條氏康、中國にては尼子晴久、その他の武將にも景仰され、その旅するや、寸壤尺地をも爭つてゐる當時にも拘らず、到る處に厚遇を受けた。尾張の織田氏に、勤王に附くべき大命をも傳へた。天文の末、旅路で歿したが、臨終に際して古今傳授の筥を近衞關白稙家公に送り、「紅葉葉はつねなき風にちりぬともなほ木のもとをあはれとは見よ」の辭世を奉り、一子宗養(別項)の庇護を請うた。【著作】手引の糸○老葉抄○胸中抄(別項)○擇善集○闇夜一燈(別項)○百番連歌合○小林庵二百韻註。その他、大永三年獨吟千句を初め、千句百韻等の作が多い。【業績】「耳底記」にも「宗牧はよく人に斯道を傳へたるものにて、連歌の道のこまやかになりたるは、實にこの人よりなり」と稱へてある。その「東國紀行」は斯道の參考となることが少くない。

【參考】連歌の史的研究 福井久藏 (福井)

寵北瑣語 さうほくさと 隨筆 八卷 【著者】恩田宜充 【名稱】寵北の名は「後漢書」向栩傳に、「常於二寵北一坐二板牀上一、如レ此積久」とあるに取つたのであらう。【諸本】國書刊行會の「三十輯」第一册に所收。【解說】本朝俗間に通用の漢語(事物の名稱たる)の出典を擧げ又難解の語を釋して示蒙に資したもので、著者の支那經籍に博通なることが見られる。俗用の誤訛を訂したところもあつて、一般操觚者の參考に價する。

【著者小傳】恩田宜充。字は仲任、通稱新治、蕙樓と號した。名古屋の儒家、岡田新川の弟で、共に松平君山の門に遊び、考據の學に長じ、兄と名を齊しうした。文化十年八月二十一日歿、享年七十一。「世說音釋」「重修韻略」「蒙求續貂」等の著述がある。(和田)

增補合類大節用集 ぞうほがふるだいせつようしふ 語學書 十卷十三册 【別名】和漢音釋書言字考節用集 【刊行】元祿十一年。明和三年再版 【內容】通俗漢字辭書である「節用集」(別項)を增補訂正して組織を改めたものである。まづ語をその意義によつて、天地・氣候以下二十四門に分ち、各門の中では、その語の最初の音に依つて「いろは」順に排列し、その語にあつべき漢字を擧げたものである。體裁は漢字を擧げてこれに片假名で振假名を付け、漢文で註が附けてある。その分類は(一)乾坤、(二)時候、(三)神祇、(四)官位、(五)人倫、(六)肢體、(七)氣形、(八)生植、(九)服食、(十)器財、(十一)言辭、(十二)數量、(十三)姓氏の十三門としてゐる。【價値】「節用集」は、非常に多くの增補改訂本があるが、中にも特に注意すべきものは、「新刊節用集大全」(七册、惠空編、延寶八年刊)と本書とであつて、從前はいろは別として更に分類したのを、これ等はまづ意味によつて分類し、同類の中で更にいろは別としたのであつて、こゝに至つて、組織上に大變改が生じたのである。その他の增補訂正も本書に於ては最も著しく、所收の語彙も甚だ多く、註は和漢の書を引用して出典や用法を示し、「節用集」の增補としては發達の頂點に達したもので、當時は盛んに世に行はれ、今日に於ても參考すべき價値がある。

【參考】古本節用集の研究 上田萬年・橋本進吉(東京帝國大學文科大學紀要第二) (龜田)

增補桃山譚 ぞうほもやまものがたり 脚本 四幕 時代物 【作者】二代河竹新七(默阿彌) 【通稱】地震加藤 【諸本】默阿彌全集第九卷所收 【初演】明治六年九月、東京村山座。

〔殺劇〕關帝の靈像實は石川五右衞門・豐臣秀次・加藤主計頭淸正(河原崎三升、後の市川團十郎)、小早川隆景・豐臣秀吉公(中村宗十郎)、淀の方・尼幸藏主(市川門之助)、田中兵部之介・石田三成(關三十郎)、儘川氏康(坂東家橘)、鈴木新助・小西行長(中村雀藏)、不破伴作・左枝利家(中村時藏)。

【題材】この作の角書に、「市川海老藏遺稿の正本」とあるが、海老藏卽ち七代市川團十郎に腹案があつたのを、明治六年に至つて書いたものと見える。

【梗概】〔序幕〕醫者笹井甫庵の娘お元は秀次公の料理人鈴木新助と言ひ交してゐるので、不破伴作から再三申込まれる緣談を斷つてゐたが、伴作は兩人の逢つてゐる處を見つけ、不義の故を以て成敗しようとする。これを見た田中兵部之介は、兩人が許婚で自分が媒人であると詐つて兩人を助け、その恩義を枷に秀次の膳部へ毒を仕込んで呉れと新助に依賴する。日に增し惡逆の募る秀次は、太閤を弑しようと企んでゐるのであるから、毒殺する事は太閤への忠義であると說かれ、新助は得心して請合つたものの、なほ思案にくれてゐる時母親おさみが鐵砲で擊たれる。擊つたのは秀次の慰みに相違ないと聞かされ、その上お元が秀次の妾として引立てられて行くので、新助は、その恨みのために毒殺を決意する。〔二幕〕太閤の愛妾淀の方は、實子秀賴のために、秀次を亡き者にしようと鷹ヶ峰の毘沙門堂へ每夜參籠し、關帝廟の傍の蛇體杉へ祈誓をかけてゐる。それと知つた石川五右衞門は先づ淀の方を討取らうと關帝廟の中に忍んでゐたが、參詣に來た小早川隆景のために、秀次から五右衞門へ送られた密書を奪はれる。〔三幕〕肴に仕込んだ毒は秀次に看破され、お元はその肴を無理に口へ入れられて死し、新助は拷問に逢ふが、兵部之介に賴まれたことは白狀しないで死ぬ。新助の拷問を等閑にした廉で兵部之介が秀次の不興を蒙つた處へ、小早川隆景が參殿して理を盡して諫言するが用ひられない。併し隆景は觀相に據つて秀次

の心中を察知するので、秀次はその本心を明かさうとし、立ち聞きせんとした兵部之介を槍で貫く。兵部之介は石田三成へ加擔してお元の父甫庵に毒藥を調合させ、新助の心を勵ますため、その母親を擊殺したことなど、悉くを秀次は承知して居り、お元と新助も毒殺に關係した罪の成敗であつて、無道と見せて無道でないことが分る。なほ秀次は自分が家督すれば三成達が讒言して亂の基となり、又故なく秀頼に將軍職を讓らうとすれば腹心の者達が得心せず、その虚に乘じ叛逆を企てる者が出るので、假令惡名を殘しても天下のため自分が疎まれる覺悟である事を打ち明け、一人高野へ寺入りする。〔四幕〕加藤清正は、朝鮮に於て小西行長を堺の町人と誹謗し、且つ許しもなきに豐臣の姓を名乘つた廉で、太閤の勘氣を受け謹慎してゐたが、大地震に主君の身を氣遣つて眞先に駈附ける。その功によつて秀吉から不審の條々を尋ねられるが、行長を堺の町人と言つたのは、行長が敗走した故、日本の威を輝かさんためであり、又明朝へ返答の書に豐臣と記したのは、豐臣の威光を借りて征伐せんとした爲めであると申譯が立ち、勘氣を赦免された上、比類ない手柄により、改めて豐臣の姓を許される。そして再び和睦破れた朝鮮へ討手に向ふこととなる。

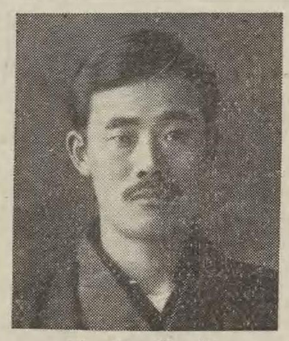
【解説】この作は明治二年八月、東京市村座で「駒迎三升入盃觴」といふ名題のもとに、中幕として「新歌舞伎十八番の内、市川海老藏遺稿の正本、桃山譚」として、四幕目だけが上演されたのであつたが、明治六年九月、東京村山座で上演の折、序幕から三幕目までが添加されて、表題の名稱が出來たのである。「新歌舞伎十八番」(別項)の最初のもの、活歴(別項)の作物の先驅として、又九代目十郎が得意のものとして既に定評あるものである。

【參考】河竹默阿彌河竹繁俊○市川團十郎 伊原青々園○續々歌舞伎年代記田村成義 〔河竹〕

雙本歌(さうほんか)「旋頭歌」を見よ。

惣本寺誹諧中庸姿(そうほんじはいかいつねのすがた)「中庸姿」を見よ。

相馬御風(さうまぎよふう) 詩人・評論家 【本名】昌治 【閲歴】明治十六年七月、越後國糸魚川に生れた。早稲田大學英文科出身。彼は最初短歌より出發し、「明星」(別項)の同人であつたが、後、岩野泡鳴・前田林外等と共に東京純文社を興し、雜誌「白百合」(別項)を創刊して詩の發達に盡した。それは明治三十六年のことで、なほ浪漫主義の運動をもはじめた。次いで三十九年學業を卒へると、近松秋江等と「早稲田文學」(別項)の編輯に當り、自然主義に關する論文を時々誌上に發表した。翌四十年、三木露風・野口雨情・人見東明等と早稲田詩社(別項)を起し、自然主義の立場から詩の革新を唱へ、又口語詩を興すべき必要あることを主張した。この過渡期の彼を記念するものに「御風詩集」(新潮社版)の一卷があるが、それは啻に彼一人の記念たるのみならず、題材を實際生活に採りながら而も在來の情調を失ふまいと努めた當時一部の詩潮を語つてゐる點に於て、非常に興味深いものである。大正元年に至り、「黎明期の文學」を出版、更に文集「第一歩」及び「自我生活と文學」を出して、評論家としての特色を發揮すると共に、進んで自我の權威を高調し、生活の藝術化を提唱した。「自我生活と文學」中には、内外文學に關するエッセイが多く收められてある。同五年、感ずるところあつて故郷に退耕し、その記念として「還元錄」を刊行した。その後、郷里にあつて主として歌人良寛の事蹟を研究し、「大愚良寛」「良寛和尚詩歌集」等良寛に關する論文、隨筆の類を多く公にした。その他、北越の自然と人とについて紹介することに力めたものが多い。なほ傍ら短歌を創作し、この方面に於ても、獨自の色彩を發揮した。【著書】前記の外に、「近代歐洲文藝思潮」「毒藥の壺」「個人主義思潮」「凡人淨土」「田園春秋」等がある。なほトルストイ、ツルゲネフの著書の譯が數卷ある。 〔高須〕



相馬御風

相馬泰三(さうまたいざう) 小說家 【本名】退藏 【閲歴】明治十八年十二月二十九日、新潟縣中蒲原郡庄瀬村に生れた。東京開成中學校卒業、早稲田大學英文學科を中途退學。在學中、舟木重雄・光用穆・宇高信一・宮地嘉六等と稲風會を組織してゐたが、大正元年、舟木重雄の主唱で、廣津和郎・葛西善藏等を加へた同人雜誌「奇蹟」が發刊された時、その同人となり、間もなく、「奇蹟」が生んだ最初の作家として文壇に出た。「田舍醫師の子」がその出世作である。一時は廣津和郎・谷崎精二(各別項)と並稱されて、三羽烏などと呼ばれたが、長篇小說「荊棘の路」の後餘り振はず、と言つて通俗作家にもならず逼息してゐたが、大正の末年、無産派文學の擡頭が著しくなつた頃から、主として農村に材を得た喜劇的な作品を多く見せるやうになつた。多少傾向的になつたが、左傾とまでは云へなかつた。大學を罷めた後、暫くの間、「萬朝報」「婦人評論」「火日本」「東京日日新聞」等の記者をしてゐたことがある。【著作】改造社版新選名作集中に「新選相馬泰三集」があり、單行本には「夢と六月」「憧憬」「隣人」「鹿子木夫人」「野の哄笑」「葉陰の花」「荊棘の路」「愛慾の垢」等の創作集及び長篇小說、又「陽炎の空へ」の如き童話集がある。【作風】初期の頃には、大體が寫實主義系統の作風であつたし、また優れた寫實の出來る手腕を有つた作者であつたが、後にこの寫實家としての優れた素質を自ら棄てて、主觀的な傾向に走つたが、これがこの作家の敗北の原因であると思はれる。 〔片岡〕

草木精魂物の謠曲(さうもくせいこんもののえうきよく)

【曲目】草木の精魂を主人公とした謠曲に、「六浦」(むつら)「遊行柳」(あそぎやうやなぎ)「墨染櫻」「梅」「藤」「芭蕉」及び西行物(別項)の「西行櫻」、伊勢物語物(別項)の「杜若」がある。草木ではないが、雪の精を主人公とした「雪」も、曲趣はこの部類に入らう。

【諸本】諸流現行謠本。謠曲叢書・國民文庫・日本文學大系・謠曲三百五十番集(日本名著全集)等所收。

【六浦】三番目。〔作者〕金春禪竹(能本作者註文)とも日吉安清(二百十番謠目錄)ともいふ。

〔内容〕都の僧(ワキ)が相模國六浦に行き、一本の楓の少しも紅葉してゐないのを不審がつてゐると、一人の女性(前ジテ)が來て、それは爲相卿の詠歌、「いかにしてこの一本に時雨けむ山に先だつ庭のもみぢ葉」に感じて、それ以來、名遂げて身退くの心を以て、紅葉しなくなつたのですといつて消え去る。そして僧が回向してゐると、楓の精(後ジテ)が現れて成佛を喜び、舞を舞ふといふ曲。上掲の歌から想を得たもの。複式夢幻能。觀世・寶生・金春・

金剛現行。

【遊行柳】三番目【作者】觀世小次郎（能本作者註文・二百十番謠目錄）〔内容〕遊行上人（ワキ）が陸奥白河の邊に行くと、老人（前ジテ）が來て六十萬人決定往生の御札を乞ひ、自分は朽木の柳であると打明けて消え去る。上人が念佛してゐると、柳の精（後ジテ）が現れて、成佛を喜び舞を舞ふといふ曲。「新古今集」西行の「道のべの淸水流るゝ柳蔭」の歌から想を得てゐる。複式夢幻能。五流現行。

【墨染櫻】三番目〔作者〕不明〔内容〕仁明帝の崩御を悼み奉つて出家した峯雄（ワキ）が深草に行くと、里女（前ジテ）が來て剃髮を乞うて去る。そしてその夜の夢に、墨染櫻の精（後ジテ）が現れ、先帝を忍び奉り、わが成佛を喜ぶといふ曲。「深草の野邊の櫻し心あらば今年ばかりは墨染に咲け」の歌を、「遍昭集」に據つて深草の帝を傷み奉つた歌と解して脚色したのであらう。複式夢幻能。金剛現行。

【梅】三番目〔作者〕觀世元章〔内容〕藤原何某（ワキ）が難波に行つて梅を眺めてゐると、一人の女性（前ジテ）が來て、梅についての歌物語をして消え去る。そしてその夜、梅の精（後ジテ）が現れ、舞を舞つて御代を祝ふといふ曲。「萬葉集」卷二十、家持の歌を中心として綴つた。複式夢幻能。觀世現行。

【藤】三番目〔作者〕日吉安淸（二百十番謠目錄）〔内容〕都方の僧（ワキ）が加賀國に行つて、多祐浦の藤の花を眺め、古歌を吟じてゐると、藤の精が里女（前ジテ）の姿をして出で、僧と歌物語をして消える。その夜、藤の精（後ジテ）が現れ、この地の風光をたゝへて舞を舞ふといふ曲。「萬葉集」卷十九「遊覽布勢水海、賦沼多祐湖、望見藤花、各述懷作歌」を主材とした。複式夢幻能。觀世・寶生・金剛現行。

【芭蕉】三番目〔作者〕金春禪竹（能本作者註文・二百十番謠目錄）〔内容〕支那楚國小水の僧（ワキ）が毎日聽聞に來る。それは芭蕉の僞れる姿で、その夜の夢に、芭蕉の精（後ジテ）が現れ、成佛を喜ぶといふ曲。謠曲拾葉抄に湖海新聞に據つたものであるといふ。複式夢幻能。五流現行。

【雪】三番目〔作者〕未詳〔内容〕行脚僧（ワキ）が奥州から攝津國天王寺へ參詣の途次、野田の渡まで來ると、俄かに空が曇つて雪が降り、一人の女性（シテ）が出て來た。それは雪の精であつて僧に讀經を乞ひ、廻雪の舞を舞つて消えて行く。單式夢幻能。金剛現行。

【構想】草木國土悉皆成佛の教理に基づき、僅か一二首の和歌から想を得て、草木の精魂をも戲曲の主人公に採り入れたのが、謠曲作者の手腕であるが、構想・脚色は一律で特に見るべきものはない。

【參考】謠曲評釋大和田建樹　○謠曲大觀　佐成謙太郎　〔佐成〕

草木太平記（さうもくたいへいき）「墨染櫻」を見よ。

相聞（さうもん）和歌【名稱】「あひぎこえ」または「したしみうた」とも訓ずるが、「さうもん」が穩當であらう。【性質】「萬葉集」に於て雜歌・挽歌と並んで歌の分類の一であつて、卷二・四の如きは、相聞歌のみで各々一卷をなして居り、卷八・十は雜歌・相聞から成つてゐるが、雜歌・相聞がそれ〴〵更に四季に分れ、相聞は春相聞・夏相聞・秋相聞・冬相聞となつてゐる。卷十一・十二は、古今相聞往來歌類とあつて、その中が旋頭歌・正述心緒歌・寄物陳思歌・問答歌・譬喩歌等に分れてゐる。卷十三は雜歌・相聞歌・問答歌・譬喩歌・挽歌に分れて問答歌とも對立する名稱となつてゐる。かういふやうに種々の樣式で用ひられてゐるが、雜歌・挽歌と共に「萬葉集」に於ける最も大きい分類の標準であつたのである。この相聞歌は「古今集」以下の勅撰集に於ける戀歌と大體近いのであるが、更に廣い範圍を含んでゐる。元來相聞といふのは「文選」の曹子建與吳季重書に「口授不悉往來數相聞」とあるなどから出てゐて互に唱和し、問ひかはす意であらう。從つて戀愛に限らず親子・兄弟の唱和、贈答の場合にも用ひられてゐるが、純粹の唱和した歌は問答歌と名づけられて、相聞歌は次第に内容的な意になり、又事實に於て戀愛の歌が最も多いのである。價値から言へば「古今集」以下に於て、戀歌が四季の歌と共に最も重要な部分である如く、「萬葉集」に於ても最も抒情詩的な性質の純粹な歌として重きをなしてゐるのである。（戀歌參照）　〔久松〕

相聞（さうもん）歌集【作者】與謝野寛【刊行】明治四十三年三月、明治書院【解説】新派和歌運動とは、和歌の廣義の詩への進出であり、同時に、現代語への接近を意圖したものであるが、この點で一段落をつけた作者は、本歌集に於て著しく技巧的になつて來た。そのうちにも、比喩・隱喩等に於て特殊な一面をひらいた。曾てその事實の特異さと事件の複雜さとを示すことに或る效果ををさめ、やがてこれに飽き足りなくなつた作者は、その技巧を直ちに比喩に移して、一層技巧的に暗示を深めようとして來た。また其處には批判的態度が多分に加はつて來た。それにも拘はらず、卷末に揭げた「伊藤博文卿を悼む歌。明治四十二年十一月」とある十六首は、純抒情詩として、また多くは困難とされる時事を扱つて、その長所とする一面をはつきり見せたものとして、將來に殘されていゝ作である。全體より見て、この「相聞」は技巧の圓熟と共に、才情汪溢、作者の代表歌集である。　〔北原・内藤〕

增山の井（ぞうやまのゐ）俳諧季寄　二册【撰者】北村季吟【名義】同じ撰者の「山之井」（別項）の增補の謂ひ。【成立】寛文三年十一月冬至日。【刊行】寛文三年【由來】八文字屋白露が「誹論」（別項）に記した所によると、本書は野々口立圃の「嚏草大全」を改正したものであるといふ。【解説】本文は俳諧に於ける四季の詞の「山之井」に漏れた分を類集したものである。即ち天地自然の現象、行事・習俗・草木・鳥獸・風雨・霜雪等に關する事象で俳諧の季題となるべきものを、春夏秋冬の四季に分ちこれを季節の順に摘出して、それ等の和漢の異名を擧げ、又その本名・異名の由來を説明してある。「山之井」の如くこれが應用上の注意や作例等は示してない。これ等の四季之詞の後に神祇・釋敎・天象その他、各般の項目の中で季を持たぬ詞を非季詞として附錄し、最後に執筆の心得を書き添へてゐる。なほ本書には四季之詞の最後に、四季のあらゆる詞を殘らず集めなかつた理由を附記し、非季詞の最後に、歷史上の古事は季にすべからざること及び連歌と俳諧とに於て、同じ雜の季題も取扱ひに相異のあることを述べてゐる。　〔各務〕

宗養（そうやう）連歌師【姓】谷氏【號】半松齋【閲歷】幼くして父宗牧（別項）に別れたが家名を辱しめなかつた。三好長慶とは風交特に深く、その「闇夜一燈」（別項）の如きも長慶に進覽したものである。永祿五年の長慶との兩吟、「飯盛城道明寺法樂百韻」は、長慶が弟戒

の「三卷抄」は幼子のために書いたとあるが、天正五年の「宗牧三十三回忌追善百韻」には、宗養は加はつてゐないから、彼はこれ以前に既に歿したらしく、又この百韻の紹巴の發句、「年をふるこのもとたえし紅葉かな」から考へると、家を嗣ぐべき子も絶えたのではないかとも思はれる。【著作】作品には、天文十八年の大覺寺殿四吟、同二十年の進藤山城守追善獨吟百韻、同二十二年の尼子晴久夢想披百韻、同二十四年の石山寺四吟、弘治三年の三好長慶・安宅冬康との三吟、前述の飯盛城の兩吟、その他、千句・百韻等が少くない。學書としては父の說を錄した「闇夜一燈」（別項）を初め、「宗牧宗養連歌祕袖抄」「宗養三卷抄」「天水抄」（別項）等がある。〔福井・志田〕

桑楊庵光（さうやうあんくわう）　「頭光」（つむりひかる）を見よ。

桑楊庵千則（さうやうあんせんそく）　狂歌師【本名】熊岡友八【別號】初號眞砂庵【生歿】生年未詳。文政二年（一二四七九）十一月十四日歿。享年六十餘。【法名】桑楊禪門居士【墓所】下谷屏風坂下高岸寺【閱歷】江戸淺草田原町三丁目の商賈で家號を三河屋といふ。初め狂歌を頭光（つむり）（別項）に學び、後、淺草側の判者となつた。享和二年四月、亡師光の遺族より桑楊庵の號を贈られ、同時に眞砂庵の號を門人仁義堂道守に讓つた。淺草庵二世の號は、この千則が襲ぐべき筈であつたが、その機の熟せざる間に歿したので、二世淺草庵の號は、上野大間々の淺茅庵守舍が文政六年に襲ぐ事となつた。著書甚だ少く、文化三年に「百さへづり」（「詩」を著はしたのみである。）

宗養連歌問答（そうやうれんがもんだう）　「天水抄」を見よ。〔野崎〕

雙林寺千句（さうりんじせんく）　俳諧集　二册【編者】而咲堂練石等。【刊行】寶曆二年十一月の序があるから、當時の刊行であらう。【成立・內容】寶曆二年十一月十五日は、貞德の百年の遠忌に當るので、福田練石を初め北村隆志・早川丈石・甲良林石・山本普求・淺田八百彥・北川一方・居初乾峰・北村和汐・杉本春雄等が主催となつて、先づその前年十一月十四日、寄風公から賜はつた「探梅の梅のかをりや百かへり」を發句とし、鳥羽の實相寺で懷舊の俳諧百韻を催した。次いで翌二年三月十三日から三日間、東山雙林寺で法樂十百韻を興行し、滿座に至るまで都鄙の宗匠好士が集まつて句を手向け、又全國各地方から文音を以て席上に到來した連句發句も數多かつた。これ等の懷舊追悼の卷々を凡て集めたものが卽ち本書である。【價値】內容からいへば、寧ろ儀禮的な作品のみで、藝術的立場から編纂されたものでなく、又特に練石一派の傾向句風が知られるといふのでもない。併し當時京都にゐた俳人は、その流派の如何を論ぜず、殆ど凡てが千句の興行に出座してをり、又各地方からの到來句にも、各社中の勢力分布の狀が窺はれるので、當時の京都は勿論、更に京都を中心とした全國俳壇の形勢が一目瞭然たる觀がある。例へば蕪村の如きも千句の第三卷興行に列座してをり、法樂の發句をも捧げてゐるので、その席次等で自ら當時の地位も察せられる。かゝる意味に於て、本書は一種の俳壇鳥瞰圖とも言ふべく、史的資料として貴重なものたるを失はぬ。

【參考】蕪村の新研究　乾木水　〔穎原〕

草廬雜談（さうろざつだん）　隨筆　二卷　續一卷　寫【著者】青木敦書（昆陽）【成立】正編は元文三年秋九月、續編は同四年二月の編述に係る。【解說】著者の自序に「秋雨ノサミシキママニ、平日諸君子ト談論スルモノ、及ヒ見聞スルコトトモヲ、ミタリニ書アツメテ草廬雜談ト名ツク」とある。所々に挿畫があり、正續共に編述年月の小序がある。〔和田〕

草廬漫筆（さうろまんぴつ）　隨筆　五卷　寫【著者】武田信英（傳未詳）【解說】歌話・史談・風俗談・有職故實・地理・本草諸科に係る尙古的考說を集めたもの。卷一に、仁德天皇高臺の御詠、賴政の歌、太田道灌の歌、小町雨乞の歌、文臺、しをり、歌袋等。卷二に兵、櫃原宮蹟、痘瘡、纈纈、くゝり染、菊とぢ、七夕等。卷三に倭國、帝都、平安城、王城、九重、京師、洛陽、四神相應、羅城門等。卷四に潮漉石、馬瑙、代赭石、鏃石、珀石、砥石、礫石、水晶等。卷五に熊膽、膃肭獸、眞珠、牡蠣、長鮑、海鰕、河豚魚、鰻鱺等、各卷數十項を收めてある。〔和田〕

祖翁口訣（そをうくけつ）　俳諧【著者】未詳。【諸本】雪の薄・俳諧一葉集・俳諧袖珍鈔・芭蕉全集（沼波瓊音編）・芭蕉一代集（勝峰晋風編）・芭蕉全集（贄川他石編）等所收。【由來】麥浪（乙由の子）の門人眠郎が安永六年に刊行した「雪の薄」に載せられたのが初めで、眠郎は「亡師麥浪舍に遊びし頃正風の意といふものを寫し置しを今爰にあらはす」と斷り書きをしてゐて、これに依れば乙由から傳はり來つてゐるものの如くであるけれども、乙由は支考と調子を合せてゐる人であり、他に疑はしい點もあるので、若し乙由に出づるものとすれば乙由が疑はれて來る事になる。【解說】俳諧を學ぶ者の心得となるべき條目十二ヶ條を示したものである。芭蕉の口訣と稱するけれども恐らくは後人の僞託であらう。「我が門の風流を學ぶ輩は」とある條に、「鶴の歩み」の百韻から「炭俵」までの七部を擧げてゐるのは、「俳諧七部集」（別項）なるものの、成立した後なることを思はしめ、「心を向上の一路に遊び」の語が見えるが、この語は支考の僞作と思はれる「二十五箇條」に見えるものであり、「俗談平話をたゞさんが爲なり」の語が見えるが、これは「山中問答」「黑册子」「けふの昔」等によつて、芭蕉の語なることの知られるものではあるが、又「二十五箇條」にも見えるものである。これ等の點から考へても、彼此のものに參酌して、後人の僞作したものであらうと思はれる。〔志田〕

會我會稽山（そがくわいけいざん）　淨瑠璃　五段　時代物【作者】近松門左衞門【名稱】兄弟仇討の成功を利かせ、富士を會稽山と見たてた。【興行】享保三年七月十五日初日竹本座。（太夫）竹本賴母・竹本大和太夫・竹本文太夫・竹本家太夫・竹本政太夫等。【諸本】七行九十三丁本。近松門左衞門全集第八卷・大近松全集第四卷・近松名作集下（日本名著全集）・近松時代淨瑠璃集（帝國文庫）・近松傑作全集四卷所收。【題材】從來の會我狂言、殊に近松自身の作にかゝる數種の會我物が活用されてゐる。【梗概】（初段）（鎌倉御所）建久四年五月二十八日寅の一點に御門が開いた。頼朝が富士裾野に卷狩の留守なので、御臺所が式禮を執り行ふ。席上讀み上げられた狩場の功名帳に秩父の執權本多近經と工藤祐經との間に、鹿論のあつた由が記されてゐた。祐經の妻阿古

曲。「萬葉集」卷二十、家持の歌を中心として綴つた。複式夢幻能。觀世現行。

【藤】三番目（作者）日吉安清（二百十番謠目錄）（內容）都方の僧（ワキ）が加賀國に行つて、多祐浦の藤の花を眺め、古歌を吟じてゐると、藤の精が里女（前ジテ）の姿をして出で、僧と歌物語をして消える。その夜、藤の精（後ジテ）が現れ、この地の風光をたゝへて舞を舞ふといふ曲。「萬葉集」卷十九「遊覽布勢水海、賦詠多首歌」、卷八「藤花、各述懷作歌」を主材とたは「したしみうた」とも訓ずるが、「さうもん」が穩當であらう。【性質】「萬葉集」に於て雜歌・挽歌と並んで歌の分類の一であつて、卷二・四の如きは、相聞歌のみで各々一卷をなして居り、卷八・十は雜歌・相聞から成つてゐるが、雜歌・相聞がそれ〴〵更に四季に分れ、相聞は春相聞・夏相聞・秋相聞・冬相聞となつてゐる。卷十一・十二は、古今相聞往來歌類とあつて、その中が旋頭歌・正述心緒歌・寄物陳思歌・問答歌・譬喩歌等に分れてゐる。卷十三は集に於て著しく技巧的になつて來た。そのうちにも、比喩・隱喩等に於て特殊な一面をひらいた。曾てその事實の特異さと事件の複雜さとを示すことに或る效果ををさめ、やがてこれに飽き足りなくなつた作者は、その技巧を直ちに比喩に移して、一層技巧的に暗示を深めようとして來た。また其處には批判的態度が多分に加はつて來た。それにも拘はらず、卷末に揭げた「伊藤博文卿を悼む歌。明治四十二年十一月」とある十六首は、純抒情詩と集めなかつた理由を附記し、非季詞の最後に、歷史上の古事は季にすべからざること及び連歌と俳諧とに於て、同じ雜の季題も取扱ひに相異のあることを述べてゐる。〔各務〕

宗養（そうやう）　連歌師【姓】谷氏【號】半松齋【閱歷】幼くして父宗牧（別項）に別れたが家名を辱しめなかつた。三好長慶とは風交特に深く、その「闇夜一燈」（別項）の如きも長慶に進覽したものである。永祿五年の長慶との兩吟、「飯盛城道明寺法樂百韻」は、長慶が弟戰死

屋の雜言を巴御前が嗜める。御臺所は蒲の範頼に鹿論の扱ひを委せる。（大名小路）蒲殿は曾我の下人鬼王から、鹿論で本多の讓らぬのは、時致が祐經を覘ひ誤つた矢であるために兄弟を救はん策であると聞き、蒲殿も兄弟のため二枚の割符を贈つてやる。（北の丸）蒲殿は鹿論に本多を助けた爲めに、梶原から曾我贔屓と睨まれ、割符詮議にあつた所から、梶原に斬り付けたが及ばず、自害して果てた。御臺所は八ッ限りの頼朝への注進を、曾我の姉婿二の宮に命じた。二の宮は緣者の疑ひを避けて女房へ離緣狀を送つた。〔二段〕（二の宮屋敷）二の宮の女房姉御前は、良人からの離緣狀に驚いて馳せ出る。（藤澤街道）久上の禪師が憂をつけて心太屋を出してゐる。とも知らぬ梶原が工藤の家來近江の小藤太に命じて、山上の時の鐘を撞かせて二の宮に腹切らす企み。こゝ迄走りついた姉御前は、禪師と共に梶原等を逐ひ走らせ、驅けつけた良人から始終を聞かされる。この時、八ッの鐘が鳴る。禪師が山上から小藤太等を投げ下ろす。二の宮はその首を打つて狩場へ急ぐ。〔三段〕（工藤假屋）曾我の老母を看護する京の小四郎の內通により安心した祐經は、珍しく我が假屋に、黃瀨川の龜菊を招いて酒宴の興をやる。ところへ老母の重病を兄弟に報告するため、鹿の皮を被つて忍び入つた團三郎が捕へられて來た。愈々鎌倉へ引かれる時、兄弟が現れて彼を救ひ、祐經に對面した。やがて祐經が與へた荒馬を御した兄弟は、曾我に馳せ行く。八ッの鐘が鳴つた。（曾我の里）小四郎の外に、虎と少將とに護られて、母は紙帳の中に病み臥す。七ッの刻に漸く兄弟が駆け込んだ。老母は仇討の本念を責め、呼び返すための假病と明かし、直に兄弟に祝言させることとなつた。小四郎は悅んで祐經へ內通に走る。その夜も更けて兄弟は立ち出た。虎少將が跡を追はうとするのを老母が留めて、內通者の小四郎に油斷さす謀なる事を明かし、兄弟の成功を祈る。蔭で知つた兄弟は勇んで出立する。時に初夜。〔四段〕「虎少將道行」老母は兄弟を氣遣ひ二人の嫁に扶けられて狩場へ志す。（松林）二人は、假屋から戻りの遊女の中に龜菊を見出した。その話によると、二の宮の早打で、一行は雨の降らぬ限り、今宵引上げる事になつたとある。併し三人の祈願によつて、忽ち雨が沛然と降り來る。（狩場）兄弟はかの割符で深く忍び入り、本多に案內されて易々と祐經を討つた。二の宮は仁田と名乘つて祐成を逃さんとしたが果さず、眞の仁田もその心を稱へたが、時致召捕の聲に、祐成は進んで仁田に討たれる。〔五段〕（頼朝の假屋）二十九日の鷄鳴、大江廣元の披露によつて、頼朝は二の宮の處置を賞して老母を養はせ、梶原は和田義盛に預けられる。京の小四郎は刑せられる所を、時致の命乞で助かる。時致は法のために討たれる事となり、頼朝自身繩をかける。

【解說】五段目に「晝夜十二時に事終り」と作者自ら記すやうに、脚色上の第一の功と誇りとは、複雜な多くの場面を一日間の出來事として、破綻なく綴り込み得た點にあつたのであらう。場面を逐ふにつれて、一刻々々と運ばせ、その間、觀衆をして些かも緊張の緩みを感ぜしめなかつた手際は、鮮かなものである。但しそのためか、各場面が悉く技巧的に優れてはゐるものの、そこに新脚色を發見することは難い。鹿論は「團扇曾我」、久上の禪師のやつしは「世繼曾我」（別項）、小四郎は「曾我五人兄弟」、曾我の里は「曾我虎が磨」、團三郎の鹿麥は「源氏供養」から等と考へられるやうに、一々點檢すると、近松の作と他人のものとを問はず、又曾我物と否とを問はず、舊作から幾種もの脚色を捉へ來つた事が分明にされる。併しこれ等を適宜に配合し得た作者の功は認められて然るべきだと思ふ。明治年間になつて、福地櫻痴（別項）の作にかゝる「十二時曾稽曾我」は、全く本曲の飜案にすぎぬ。（曾我物參照）

【參考】近松名作集下解說　黑木勘藏　〔守隨〕

曾我糠袋（そがぬかぶくろ）

山東唐洲（京傳）【畫工】喜多川歌麿【名稱】「曾我糠袋」は曾我兄弟が育つたと傳へられる相模曾我中村のもぢり。【刊行】天明八年【諸本】滑稽名作集（帝國文庫）所收【題材】曾我兄弟、朝比奈と共に吉原に遊ぶ事を題材とし、主として五郎時宗、少將と村琴とに對する情話を叙し、これに配するに十郎祐成と虎との情事を以てしてある。十郎と虎との情話は、既に「曾我物語」（別項）に出てゐるが、少將と五郎との情事は、該物語には存しない。謠曲・舞の本等にも出てゐない。恐らく淨瑠璃に始まつたものらしい。

【梗概】曾我兄弟が、一寸八分の八幡宮（淺草觀音を暗示した）の奧山をぶらつく折柄、朝比奈に逢ひ、三人うちつれ、今戶の景色を賞しながら大門を入る。茶屋は別々で十郎と朝比奈は尾花屋、五郎は粧屋（はけや）、五郎は男女の藝者を連れて尾花屋に行く。見世には丁子屋の全盛虎も來てゐる。いろ〳〵廓の遊女の噂をしながら、丁子屋の暖簾をくぐる。時宗ひとり座敷で勝をさましてゐる所に虎が來て、村琴が彼を思つてゐることを告げる。時宗茶にして相手にしない。虎は詮方なく十郎の方へ去る。五郎は村琴の新造に呼び出されて村琴の許へ行く。村琴は思ひのたけを口說く。やがて寺々の鐘、茶屋の迎への聲、三人うち揃ひくぐり戶をあけて出る。

【構想】歷史的人物を今樣に寫すのは、狂言に始まり、八文字屋本に流行し、更に洒落本・黃表紙に入つた。「聖遊廓」（寶曆七年）（別項）には老子・孔子・釋迦が大盡、李白が揚屋の亭主、白樂天が太鼓持になつてゐる。特に曾我物（別項）は演劇に於て每年の春狂言になつて、民衆に親しみがある。洒落本に於ては演劇好きの烏亭焉馬が既に「蚊不食呪曾我（かにくはれぬまじないそが）」（安永八年）（別項）を發表してゐる。これに續いたのが本書である。曾我兄弟の今樣、そこに興味をもつた作品であるが、そつの無い作者の事とて、遊女から强ひて客をいろにすると云ふ趣向を描いてこの作品の特徵としてゐる。又穿ちも遊女の品評も生彩あるものである。しかし彼の作品としては優れたものとは言へない。【影響】京傳は續いて「仕掛文庫」（寬政三年）（別項）を發表し、曾我兄弟の深川遊びを描出してゐる。振鷺亭の「翁曾我」は恐らくこれ等に倣つたものであらう。

曾我廼家（そがのや）

「喜劇」を見よ。

曾我派（そがは）

畫派【解說】曾我派の祖蛇足は越前の人で、世々武臣であつたが、畫を好んで周文を師とし、山水・人物・花鳥を畫く。筆力粗にして氣韻蕭疎たるものがある。然るに蛇足の後、宗丈・紹仙その他あつたが振はなかつた。狩野・雲谷諸派（各別項）の間に介在してゐたが、慶長の頃、直庵が出て巧緻な花鳥畫や豪放な人物畫などを作つて名聲を博し、

曾我兄弟は一時に世に認められた。この前後し家風をよくし、鷹を搦くに巧みであつた。曾我蕭白はこの末流から出たのであつて、蛇足軒と號し、濃墨剛勁、一種の奇矯な畫風を以てした。〔藤懸〕

曾我物（そがもの）

歌舞伎【名稱】曾我狂言ともいふ。曾我兄弟の事蹟に取材した狂言、或は曾我兄弟に因んだものを總稱する。【解說】曾我の事蹟は「吾妻鏡」や「曾我物語」以來、廣く人口に膾炙し、既に足利時代から謠曲・舞曲に作られ、次いで古淨瑠璃にも脚色せられて、「根元曾我物語」「大曾我富士の牧狩」「元服曾我」「小袖曾我」「夜討曾我」等々諸種の曾我の名目が見え、近松門左衞門の淨瑠璃にも、「世繼曾我」「百日曾我」「加增曾我」「曾我會稽山」（各別項）等十一種の曾我物があり、この外にも錦文流作の「本海道虎石」（別項）、紀海音作の「曾我委富士」（正德四年七月）、戸川不鱗作の「記錄曾我玉笄髷」（同五年六月）等の諸作がある。これ等が直接又は間接に攝取されて歌舞伎獨自の幾多の曾我狂言が生れた。その主なものは「對面曾我」を初め、「髮梳曾我」「元服曾我」「夜討曾我」等であつた。【沿革】曾我狂言の江戸の最初は、明暦元年八月山村座の「曾我十番斷」で、次いで寛文五年正月森田座の河原崎權之助作「曾我三番續」（序幕箱根權現登山、次幕箱王元服と母子別れ、大詰夜討）が古く、曾我兄弟を坂東福太郎と同又八とが演じたといふ（戲場年表）。のち、延寶三年五月山村座の「勝時饗曾我」では、初代團十郎が五郎を初めて勤めた（役者諸藝金之揮）。翌四年春中村座の「曾我兩社曙」には對面の場が演じられたと傳へられ、また「役者三名物」（享保五年版）によると後世の曾我三役の根元は、貞享五年三月に三座で除幕されたもので、即ち、山村座「兵曾我」（十番續）の市川團十郎の五郎（荒事）、市村座「若殿原樂遊初繰曾我」（四番續）の中村七三郎の十郎（和事）、中村座「全盛梶原奴朝比奈大磯通」（四番續）の中村傳九郎の朝比奈（かまつぼう）である。而して曾我狂言が、春狂言の吉例となつたのは、寶永六年春、山村座の「愛保曾我」、中村座の「傾城嵐曾我」（前年の繰返し）、市村座の「銘石曾我」、森田座の「福引曾我」の四座の曾我が大當りをとつたので、その緣起で以後は江戸の各座とも初春に出すことになり、このしきたりは明治の初期まで行はれた。京阪では、元祿四年大阪岩井半四郎座所演の「曾我投島田」が古く、元祿・寶永度には毎年七月に曾我を出すのが通例とされたが、その後は廢され、遂にその上演も稀れであつた。この間江戸で生れた曾我狂言は凡そ六百種にも達するであらうが、必ずしもその全部がすべて曾我といふのではなく、時には一二幕、又は一番目だけで、その他は別な狂言に緣を持たせたものの方が多い。歌舞伎十八番の「助六」（別項）の如きはその好例で、花川戸助六實は曾我五郎などとなつたのも、その理由に基くのである。また末期にはほんの申譯に、單に名題のみに曾我を附けたのもあり、曾我の所作事で濟ましてゐるのもあるといふやうになつて來た。勿論脚色や趣向も千差萬別であるが、結局年毎に目先を變へようとした爲めに無理が多くなり、筋の通らぬものも少くなく、その時その場限りに終つたものが大部分で、後世まで永く生命を保つやうな作は極く少數であつた。かくして曾我狂言の本筋として、今日まで傳存された場面は、「曾我の對面」「大磯廓通ひ」「鬼王の貧家」「近江八幡の石段」「夜討十番斷」等である。【對面の變遷と種目】慣例として行はれた曾我の對面を主にして、變遷上からこれを大別して見ると五期になる。第一期は初期から享保前期までで創始期に當る。對面は特に一場を設けるといふ程ではなく、普通場所は概ね箱根山にした如き、脚色も演伎も舞臺裝置も總て荒削りなもので、後の色彩美や音樂美に富んだものではない。寧ろ兄弟の廓通ひを中心にしたものか、朝比奈と五郎との「草摺引」（別項）の荒事や十郎と虎との「髮梳」の濡事和事、又は十郎と大藤内などの寛濶出立の「丹前」（別項）等に興趣を置いたものである。併し鬼王の實事を主にしたものや、工藤の敵役を立役で勤めた事や、又は工藤の羽織着流の扮裝などが既に試みられてゐる。第二期は享保後期から寛延までで發達期に當る。對面の場は定りがないが一場を設けられ、而も年々その趣向と形式の新奇を競ふ風があると共に、ツラネ（掛合せリふ）を加へ、且つ曾我兄弟や祐經よりも鬼王・景清・京の次郎等を活躍するやうに脚色せられた時代である。對面の奇拔な趣向を弄した著名なものに「鳥眼の對面」「蝦夷が島の對面」「人面疔の對面」「鷄合の對面」等がある。また「鬼王の貧家」が生れ、二代團十郎によつて五郎の扮裝が定められると共に「矢の根」（別項）の初演せられたのもこの期である。第三期は寶曆から寛政までで大成期に當る。前期は專ら對面の形式にのみ腐心して新奇を競うたが、この期に於て漸次大成されて、對面の場は一番目大詰とほぼ一定され、概ね金襖の廣間、又は庭前で、並び大名の前で、兄弟が朝比奈の手引で祐經へ對面するといふ形式になつた。尤もこの期の初めに七人工藤や贋工藤、又は十郎五郎祐經三役早替り等の變つたものもあつた。また趣向の新奇は愈々凝らされたが、それは對面よりも主として舞臺の色彩、音樂の應用といふ風に代つた。即ち對面の前に一場の所作幕を附けることが流行した。常磐津・富本・長唄等の歌曲を地に用ひて、五郎の荒事、十郎と虎御前の色模樣、朝比奈が闊達な所作、祐經が今樣の舞や狂亂等、派手で賑やかな所作事に陶醉させておいて、これが切れると對面になる。それは對面を重々しく見せる效果ばかりでなく、如何にも春狂言にふさはしいので、非常に歡迎された。この對面の前奏曲ともいふべき代表作に、長唄の「釣狐」（釣狐の對面）、「娘七種」（七種の對面）、「夢の春駒」（春駒の對面）等があり、曲は今日に傳存してゐる。その他對面の趣向に「松囃子の對面」「二人助六の對面」「行列對面」「紋盡の對面」「道成寺の對面」「七福神の對面」「萬歲の對面」「邯鄲の對面」「狂亂の對面」等があり、對面の樣式も時に五郎一人のみの對面もあり、工藤の奥方梛の葉が、虎少將を兄弟に見立て對面する事もあれば、祐經

釣狐の對面（初演番附）

假屋に、黃瀨川の龜菊を招いて酒宴の興をやる。ところへ老母の重病を兄弟に報告するため、鹿の皮を被つて忍び入つた團三郎が捕へられて來た。愈々鎌倉へ引かれる時、兄弟が現れて彼を救ひ、祐經に對面した。やがて祐經が與へた荒馬を御した兄弟は、曾我に馳せ行く。八ツの鐘が鳴つた。（曾我の里）小四郎の外に、虎と少將とに讓られて、母は紙帳の中に病み臥す。七ツの刻に漸く兄弟が駆け込んだ。老母は仇討の本念を責め、呼び返すた

【解說】五段目に「晝夜十二時に事終り」と作者自ら記すやうに、脚色上の第一の功と誇りとは、複雜な多くの場面を一日間の出來事として、破綻なく綴り込み得た點にあつたのであらう。場面を逐ふにつれて、一刻々々と運ばせ、その間、觀衆をして些かも緊張の緩みを感ぜしめなかつた手際は、鮮かなものである。但しそのためか、各場面が悉く技巧的に優れてはゐるものの、そこに新脚色を發見することは難い。底本は「國書曾我」、久上の譯まつたものらしい。

【梗概】曾我兄弟が、一寸八分の八幡宮（淺草觀音を暗示した）の奥山をぶらつく折柄、朝比奈に逢ひ、三人うちつれ、今戸の景色を賞しながら大門を入る。茶屋は別々で十郎と朝比奈は尾花屋、五郎は粧屋（けはや）、五郎は男女の藝者を連れて尾花屋に行く。見世には丁子屋の全盛虎も來てゐる。いろ〳〵廓の遊女の噂をしながら、丁子屋の暖簾をくぐる。時宗ひとり座敷で酒をさましてゐる所に虎が來て、村等のであらう。

曾我廼家（そがのや）

「喜劇」を見よ。〔山崎〕

曾我派（そがは）

畫派【解說】曾我派の祖蛇足は越前の人で、世々武臣であつたが、畫を好んで周文を師とし、山水・人物・花鳥を畫く。筆力粗にして氣韻蕭疎たるものがある。然るに蛇足の後、宗丈・紹仙その他あつたが振はなかつた。狩野・雲谷諸派（各別項）の間に介在してゐたが、慶長の頃、直庵が出て巧緻な花鳥畫や豪放な人物畫などを作つて名譽を博し、

が病氣又は若年のために近江小藤太が代つて對面する事もある。「近江八幡の石段」が出來たのや、また「草摺引」や「帶引」の大成されたのもこの期である。第四期は寛政中頃から文政迄で爛熟期に當る。對面は形式上慣習として一定された結果、完備して今日のそれに近くなつたが、なほ「寶船の對面」「舞樂の對面」「柱立の對面」「屋形船の對面」「樓門の對面」等の趣向が凝らされた。併し前期に於て獨立した一幕の夢幻的に所作化された對面は、この期に至つてその頂點を示し、對面に附隨する所作事の新案にのみ考案がなされた。即ち前奏曲の所作事が中心になつてゐるのが當期の特色で、凡そ對面に關連して歌曲を應用してゐないものは殆どない程で、前期に長唄がより多く用ひられたに對し、主に常磐津と富本とが用ひられた。これ等の所作事は、曾我兄弟・虎少將・朝比奈が中心で、殊に朝比奈が活躍してゐる。第五期は天保から明治迄で頽廢期に當る。對面の樣式が全く一定すると共に前奏曲の所作事も改作や再演が多く、嘉永以後は對面や前奏曲が全く出ないこともあり、對面をその儘所作事にして濟ますといふ風に變つて來た。かくて明治に及んでは歌曲も全然削除されて、現今の工藤の館の對面が殘つた。故にこの期の對面は趣向として見るべきものがないが、二代河竹新七（默阿彌）によつて「箱根山雀堂の對面」、富本の「魁若木對面」（三十三間堂通し矢の對面）、女工藤の「雪中の對面」、岸澤の「新年對面盃」等、數種作られて居り、最後の「對面盃」は岸澤を使用する以外、現今の對面とほぼ同形である。この對面は元祿以來二百餘十年の間演じ重ね來た種々の對面が淘汰され、その精髓のみが殘つたものと稱し得る。なほ現行の對面の荒筋を述べておく。祐經が賴朝より富士の卷狩の總奉行を仰せ付かり祝宴を張つた所へ、朝比奈の執り成しと虎・少將の口添へで、曾我兄弟は敵工藤に對面を許される。盃の取り交しがあつて、五郎は一太刀工藤に報いんとするが、朝比奈と十郎とに留められる。そこへ忠臣鬼王が友切丸を持參するので、五郎は再び力を得て工藤を挑む。工藤は總奉行の役目終つた後に討たれるから時節を待てと狩場の切手を與へる。

【主要曲目】兵根元曾我○男伊達初買曾我（各別項）○戀便假名書曾我（寛政元年五月市村座、古風な形式が見られる。日本戲曲全集第十四卷所收）○念力箭立楫（文化三年正月中村座、同上所收）○靈驗曾我離（文化六年四月市村座、化政度の代表作。大南北全集第一卷所收）○比翼蝶春曾我菊（別項）○曾我梅菊念力箭（文政元年二月都座、同上第七卷所收）○容賀扇曾我（文政三年正月河原崎座、同上第六卷所收）○御攝曾我閏正月（別項）○初冠曾我皐月富士根（文政八年五月中村座、默阿彌の「夜討曾我」の粉本。同上第十四卷所收）○富士三升扇曾我（慶應二年二月守田座、「切兼曾我」の脚色。默阿彌全集第五卷所收）○夜討曾我狩場曙（明治七年三月村山座、通稱「夜討曾我」。同上第十卷所收）○十二時會稽曾我（明治二十六年五月歌舞伎座、福地櫻痴が「曾我會稽山」を改作したもの）等。

【參考】劇代集二代櫻田左交○歌舞伎年代記○歌舞伎細見飯塚友一郎○歌舞伎狂言往來遲美清太郎○吉例曾我礎（歌舞伎新報一三三九以下）○曾我の對面の型（舊歌舞伎三五）（秋葉）

曾我物 所作事【名稱】歌舞伎の曾我物（別項、即ち曾我狂言によつて生れた舞踊である。【沿革】曾我物の所作としては「草摺引」（別項）や「髮梳」（元祿元年三月山村座）等が古く、「竹拔五郎」（同十年五月中村座）や、「帶曳」（同十六年正月山村座）等がこれに次ぎ、その後では「虛無僧の五郎」（正德五年正月中村座）、「灸据二つ枕」（享保二年正月同座）、「鏃五郎」（矢の根參照）等が名高く、これ等の所作の地は土佐・外記・虎屋・永閑・式部・若山・半太夫・河東・大薩摩節等に長唄が用ひられた。然るに寶曆期に至つて長唄の興隆に加へ、豐後諸流の競ひ起ると共に、一方曾我狂言の趣向も複雜を極むるに隨ひ、遂に各種各樣のものが生れ、變化にも取入れられたが、幕末にかけて漸次曾我狂言の衰微に伴ひて激減し、やがて明治に及んで、新作は殆ど稀であつた。曾我舞踊はその範圍が極めて廣く、又他の系統も數多く入り組んで枚擧に暇のない程である。

【主要種目】草摺引（別項）○鏃五郎（大薩摩）通稱矢の根（矢の根參照）○鏡開逆澤瀉（同上）享保十九年春市村座。女朝比奈と五郎の所作○鶴丸千壽萬歲（同上）享保二十年正月同座。

釣狐春亂菊（長唄正本）

朝比奈と清水冠者との萬歲の所作○尺八初音寶船（河東）同上。箱王丸が虛無僧の所作。○梅曆庵祐成（義太夫）寶曆四年正月市村座。大磯の虎が文の紙帳の上を渡る所作。○髮梳千鳥曙（上）帶曳小蝶昏（下）（常磐津）寶曆十三年二月中村座。上下二段の形式で、上は大磯の虎の羽子つきの所作があつて、曾我十郎との口舌の段（髮梳）。十郎は藤屋伊左衛門のやつし。下は曾我五郎の「矢の根」があつて、次に少將との帶引。○春調娘七種（長唄、通稱「春駒」又は「對面」（春駒參照）。○百千鳥子日初（常磐津、通稱「小松曳」）寛政三年正月中村座。○振袖染分道成寺（長唄）天明六年四月森田座。鐘入の對面。○對面今樣道成寺（長唄）天明七年二月森田座。五郎が白拍子に扮して道成寺の所作から對面になる。この類のものは本曲以前數種あるが本曲を代表作とする。なほ對面道成寺として富本の「霞袖春山寺」（享和二年正月中村座）が著名である。○對面花春駒（長唄、通稱「春駒」又は「對面」（春駒參照）。○百千鳥子日初（常磐津、通稱「小松曳」）寛政三年正月中村座。

と五郎とを萬歲（大黑舞のやつし）に仕立て、靜御前が七種の粥の故事に倣ひ、七種の若草を俎上に乘せ、なづな打の所作。後、對面になる。曲は傳存。振は廢滅したが復活された。因みに富本節では文化四年三月中村座で、同名題で上演された。○釣狐春亂菊（長唄）通稱「釣狐」「工藤の釣狐」明和七年正月中村座。工藤の白藏主、釣狐の所作から對面になる。○髮梳梅物狂（長唄）工藤祐經の物狂（狂亂參照）○狂亂初霞雲井里言葉（長唄）通稱「八百藏狂亂」祐成の狂亂（狂亂物參照）。○夜討曾我裾野の正夢（常磐

然削除されて、現今の工藤の館の對面が殘つた。故にこの期の對面は趣向として見るべきものがないが、二代河竹新七（默阿彌）によつて「箱根山雀堂の對面」、富本の「魁若木對面」（三十三間堂通し矢の對面）、女工藤の「雪中の對面」、岸澤の「新年對面盃」等、數種作られて居り、最後の「對面盃」は岸澤を使用する以外、現今の對面とほぼ同形である。この對面は元祿以來二百幾十年の間演じ重ね　來た種々の對面式削減され、その精髓のみが殘つたものと

二時曾稽曾我（明治二十六年五月歌舞伎座、福地櫻痴が「曾我會稽山」を改作したもの）等。

【參考】劇代集二代櫻田左交　○歌舞伎年代記○歌舞伎細見飯塚友一郎○歌舞伎狂言往來渥美清太郎　○吉例曾我礎（歌舞伎新報一三三九以下）○曾我の對面の型（舊歌舞伎三五）　〔秋葉〕

曾我物語（そがものがたり）　所作事【名稱】歌舞伎の曾我物（別項、即ち曾我狂言によつて生れた舞踊である。【沿革】曾我物の所作としては「草摺引」（別項）や「髮流」（元祿元年三月市村座）等が

水仙（別項）文と類似文體との種々の所作があつて神樂獅子で終る。○對面花事觸（長唄）寶政九年正月都座。鹿島の事觸の拍子舞があつて對面になる。○鏑踊（月三引、富本）寛政九年正月桐座。男鏑（十郎）、女鏑（虎）の所作へ男女の春駒（五郎・少將）が入り、朝比奈がこれに搦む、子役は五人囃子の趣向。○三重霞嬉敷顏鳥（長唄・富本掛合）通稱「三重霞傀儡師」（傀儡師參照）。○蝶衞松太夫（常磐津）文化元年三月河原崎座。松風村雨を改作した汐汲の所作があつて對面になる　○三津拍子相合槌（長唄）文化五年正月市村座。曾我兄弟の吉原通ひや拍子舞等の事あつて鍛冶になり、祐經と劔を打つ趣向○三津朝床敷顏觸（常磐津）通稱「わかな」文化九年正月市村座。虎と少將とが相撲（河津・股野）の人形を持つて行司役の朝比奈と三人せり出し、赤澤山の角力の仕形話があり、これに五郎も搦み、口說から朝比奈が木遣りで踊る。後、對面になる（相撲の對面）。○鳴立澤虎礎（清元）通稱「朝比奈の三番叟」、文政五年二月河原崎座。○寄罠娼釣鯉（常磐津）通稱「釣狐」（朝比奈の釣狐）（釣狐參照）。○蝶羽風梅暫（常磐津）通稱「曾我の女暫」。文政八年正月中村座。○八重九重花姿繪（長唄）變化物。通稱「時致」（五郎）又は多見藏の五郎。天保十二年七月中村座。曾我五郎が傘をさして化粧坂の少將の許へ、廓通ひの所作。現流行曲。その他詞曲の傳存するものに、長唄の「六玉川琴柱の雁」（通稱六玉川。文政十二年正月河原崎座）や富本の「新曲神樂獅子」（通稱神樂獅子。寛政五年二月市村座）。清元の「花江戸繪劇場彩」（通稱三人生醉・白扇。文政七年五月市村座）等があり、曾我物に準ずべきものに常磐津の「勢獅子」（別項）がある。【諸本】日本歌謠集成卷九・十、歌謠音曲集（日本名著全集、日本音曲全集第一・三・八・九・十五卷、舞踊劇集（日本戲曲全集）、大南北全集第十二卷等所收。

【參考】劇代集二代櫻田左交　○江戸芝居年代記三田村鳶魚校訂（未刊隨筆百種二一）　○續名聲戲場談話未詳　○近世邦樂年表（長唄・常磐津・富本・清元）　○歌舞伎圖說守隨憲治・秋葉芳美共編　〔秋葉〕

曾我物語（そがものがたり）　戰記物語　十二卷（異本は十卷）【作者】不明。伊勢貞丈は「武器考證」に、「曾我物語」の書目を擧げて「比叡山僧作。名未詳。」といつてゐるが、その根據は明かでない。また山崎美成は、十二卷本の卷一「惟喬惟仁位爭の事」の條に、「比叡山」を「わが山」といつてあるのを根據として、本書の作者を「比叡山の僧」であらうといつてゐる（不忍叢書所收、曾我物語考）。それで從來概ねこれに從ひ、十二卷本の作者は「叡山の僧」と見るのが定說となつてゐる。然るに江波熙氏は、卷四「箱王曾我へ下りし事」の條に、「若しまた思召し捨てさせ給はば、この序に上洛して、わが山にて髮剃り落し」とあるにより、「箱根の僧」を作者に擬してゐる（國語と國文學、軍記物語所覽、曾我物語に就いて）。また山岸德平氏は、「叡山の僧」は眞字本の作者とし、流布本の作者としては、「僧か公卿などではなからうか」といひ、大石寺本の作者としては「大石寺の僧」を擬してゐる（日本文學聯講第二期所覽、仇討文學としての曾我物語）。【成立】荻生徂徠は、本書の成立について、「太平記などよりは前のものなり」（南留別志）といつてゐるけれども、單なる臆說で根據はない。「保曆間記」に「曾我物語」の書名が見えてゐるので、本書の原本は南北朝時代の初には既に成立してゐたものと認められる。現存諸本は、その本文中に先行の「曾我物語」のあつたことを示す記事が見えるから、原本ではないと目せられるが、承久以後、大永以前の成立である徵據もあり、現存諸本中、最も先出のやうである。その成立期について、山岸德平氏は、「承久以後、北條氏執權時代」といつてゐる（仇討文學としての曾我物語）が、遲くも南北朝時代の中期を降るまいと思はれる。南葵文庫本は、原本か又は眞字本を改修したものらしく、松井本・東京帝國大學本は南葵文庫本のやうなものから發達したものらしいが、これ等の本には、爲世の歌を古歌としてはゐない上に、文辭も簡古な趣があるから、その成立は流布本よりも古く、これ等が發達して流布本を現出したものと思はれる。流布本について、伊勢貞丈は、本文中に爲世の歌を古歌といつてゐるのや、犬追物の記事のあるのを根據として、その成立を「室町時代」といひ（安齋叢書所收、安齋隨筆・曾我物語考）、山崎美成は、貞丈と同じ根據によつて、「天文よりはるかに以前なれど、當時の世をさること遙に後の時代」とし（曾我物語考）、佐成謙太郎氏は、流布本中に「太平記」や「庭訓往來」の記事を採つてゐる形迹があるのを根據として「延元三年、即ち保曆間記の末年より三四十年後の著作」とし（國語と國文學、軍記物語號所載、曾我物語と義經記）、江波熙氏は、流布本が「太平記」によつた形迹のあるのを根據として「太平記以後の著作」とし（曾我物語について）、山岸德平氏は諸本の比較研究により「室町時代の作」としてゐる（仇討文學としての曾我物語）。大石寺本は眞字本によつて作り成された形迹があるが、流布本とは別途に成立したものらしい。上揭の諸說を參考し、諸本を比較檢討し、舞の本・謠曲などの作品との關係から考察すると、「曾我物語」の原本は既に南北朝時代の初には成立してをり、眞字本・南葵文庫本・松井本・東京帝國大學本・流布本といふ順序に發達し、また別に眞字本から大石寺本を派生したものらしく思はれる。そして流布本の成立とても、室町時代の中期を降らないであらうと思はれる。【諸本】眞字本はその題簽に「并序本朝報恩合戰謝德鬪諍集」とあり、和臭を帶びた漢文で書かれ、ヲコト點を施したもので、十卷から成つてをり、諸本中最も先出と目せられてゐる。眞字本では駿河國富士郡北山本門寺に傳はる本門寺本が最も廣く知られてゐるが、これは本門寺處在の重須といふ舊地名によつて重須本ともいひ、天文二十三年に本門寺の僧日義が書寫したものであるから、またこれを天文本とも日義本ともいふ。彰考館本・帝國圖書館本は日義本の摸寫であり、存採叢書本は彰考館本を基として現行活字版に複製したものである。日堯本は文化四年に日堯が日義本を複寫したものであり、內閣文庫本・溫古堂文庫本は、弘化三年に日義本を摸寫したものであるが、溫古堂文庫本は、今、松井博士・吉澤博士・宮內省に分藏せられてゐる。靜嘉堂文庫本は嘉永元年に日義本を摸寫したものである。榮堯本は大永八年の奧書あるものを天文二十年に榮堯が寫したもので、本門寺本と同じ系統ながら、書寫の年代が一層古いものである。榮堯本は東京帝國大學舊藏中にあつたが、震災で亡失した。妙本寺本は安房國安房郡保田町吉濱妙本寺に傳はつてゐたもので、天文十五年に日助が書寫して妙本寺に寄進したものであるから、榮堯本よりも更に古いものであり、本門寺本はこれを書寫したものら

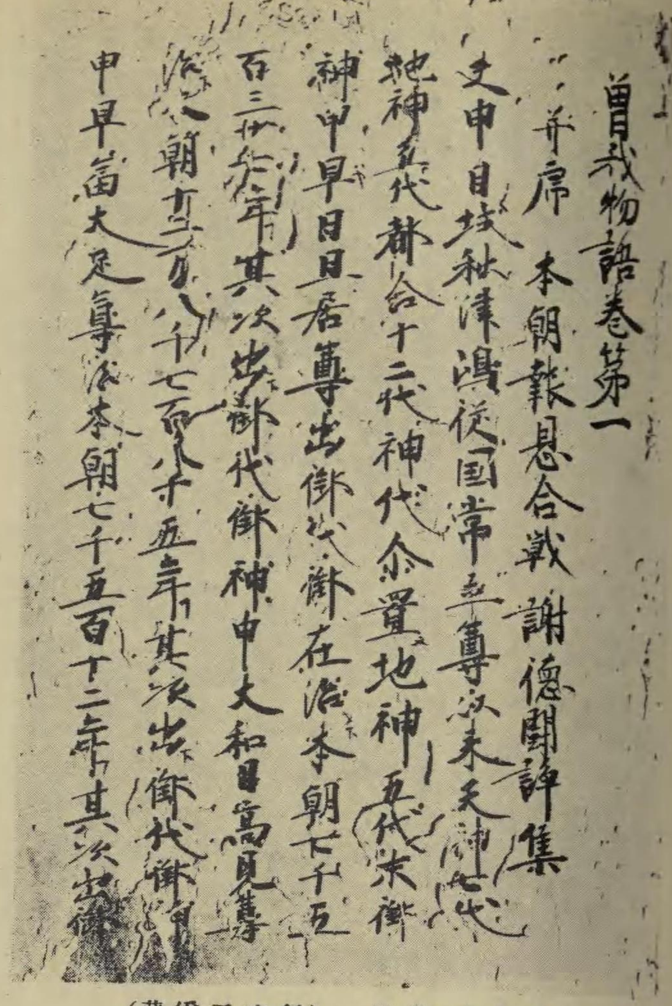
音寶船（河東）同上。箱王丸が虛無僧の所作。○梅曆庵祐成（義太夫）寶曆四年正月市村座。大磯の虎が文の紙帳の上を渡る所作。○髮梳千鳥曙（上）帶曳小蝶昏（下）（常磐津）寶曆十三年二月中村座。上下二段の形式で、上は大磯の虎の羽子つきの所作があつて、曾我十郎との口舌の段（髮梳）。十郎は薩屋伊左衞門のやつし。下は曾我五郎の「矢の根」があつて、次に少將との帶引。○春調娘七種（長唄、通稱「なゝくさ」。明和四年正月中村座。曾我十郎

如く曾我兄弟の幽魂現れ、夜討を見せる。○振袖染分道成寺（長唄）天明六年四月森田座。鐘入の對面。○對面今樣道成寺（長唄）天明七年二月森田座。五郎が白拍子に扮して道成寺の所作から對面になる。この類のものは本曲以前數種あるが本曲を代表作とする。なほ對面道成寺として富本の「霞袖春山寺」（享和二年正月中村座）が著名である。○對面花春駒（長唄、通稱「春駒」又は「對面」（春駒參照）。○百千鳥子日初（常磐津、通稱「小松曳」寛政三年正月中村座。

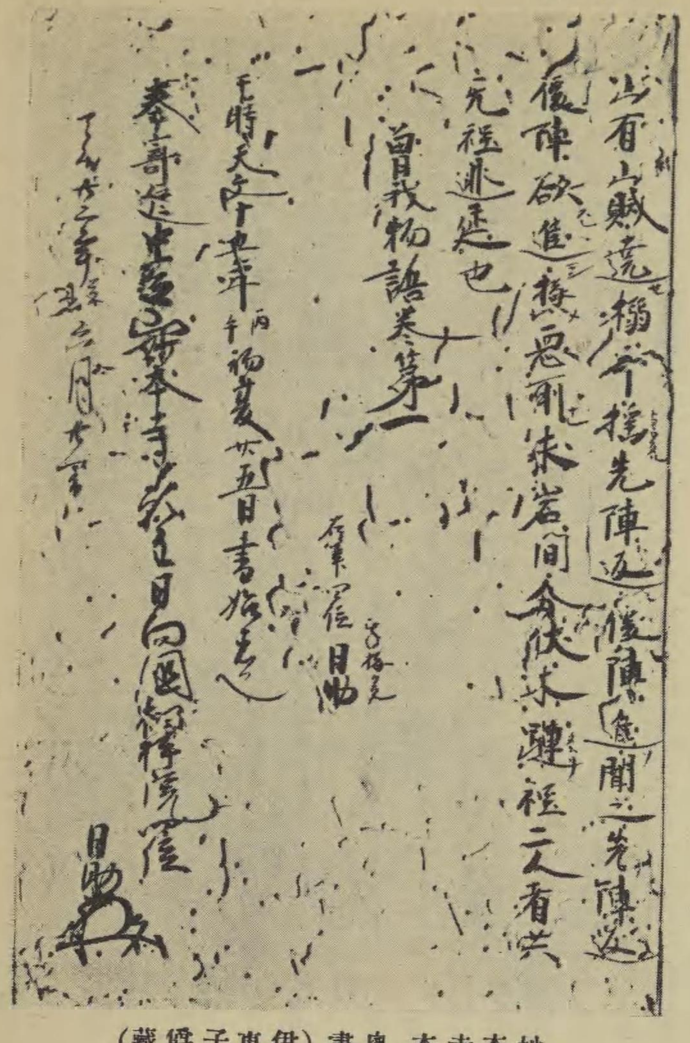
しいから、現存眞字本の原據と目すべきものであるが、今は東京帝國大學史料編纂所に收藏せられてをり、またその奥書は同大學圖書館に藏せられてゐる。大石寺本はその題簽に「本朝報恩合戰謝德鬪諍集幷序」とあつて、十卷から成り、駿河國富士郡上野村上條の大石寺に傳はつてゐたものである。これも東京帝國大學・靜嘉堂文庫をはじめ、諸家に傳はつてゐるが、この系統の本で河津本といふのもある。現行活字版としては生田目經德氏の標註本や國史叢書本などがある。南葵文庫本は十二卷から成り、今、東京帝國大學に收藏せられてゐるが、流布本よりも行文が簡古で章節の區分もなく、先出の姿をなしてゐる。松井本（十二卷中現存九卷）は章節の區分がなく、東京帝國大學本（十二卷）は章節の區分があり、何れも本文は流布本に近似してゐるもので、簡潔にして舊態を存してゐる。流布本（十二卷）は廣く世間に弘布してゐる普通本で、平假名古寫本として諸家に傳はつてゐる。久原文庫所藏の奈良繪本は流布本の系統ながら二十五册に分けられ、分卷の次第を異にしてゐる。古活字版や整版には、それ〴〵片假名本と平假名本とあるが、最も廣く流布してゐるのは平假名整版で、寛永四年刊・貞享四年刊などがあり、平假名整版繪入本では正保三年刊の丹緣本をはじめ、寛文十一年刊・元祿十一年刊・元祿十四年刊などがある。現行活版本としては、國民文庫・軍談家庭文庫・國文叢書・有朋堂文庫・日本古典全集等に所收。

【梗概】工藤祐經は、叔父の伊東祐親と領地のことで爭論したが、負けて領地を取られたのを怨み、家來の大見小藤太・八幡三郎をして、祐親の子河津三郎祐重を暗殺させた。時に祐重の妻は悲嘆にくれたが、祐親のはからひにより、一萬・箱王といふ五歲・三歲の兩兒を伴うて曾我太郎祐信の許に再嫁した。また大見と八幡とは、祐重の弟祐淸のために討たれた。祐親の娘は頼朝と親しくなつて男兒を擧げたが、祐親は平氏を憚つてその兒を殺した。よつて頼朝は、祐親の許を得て北條時政の許に身を寄せ、その娘を娶つた。治承四年八月、頼朝は兵を擧げて平兼隆を討ち、大庭景親と石橋山に戰うて敗れたが、遂に平家を滅して天下を統一した。祐親は頼朝につらく當つた廉で斬られた。工藤祐經の注進によつて、頼朝は曾我兄弟を由比ケ濱で斬らせようとしたが、人々の命乞ひによつて已むを得ずそれを宥した。十郎は元服し、箱王は箱根の別當の許に預けられたが、箱王は法師になるのを嫌ひ、十郎と相談の上、ひそかに箱根を脫して元服し、家に歸つたところ、母の不興を蒙つて五郎は勘當された。兄弟は敵を討つべき隙を窺ひつつ憂き年月を送つたが、その頃、大磯に虎といふ遊女があり、權勢者にも靡かず、孤貧の十郎に思ひをかけたので、十郎も三年の間淺からず親しんだ。然るに頼朝が富士の裾野で卷狩を催すといふことを聞き込み、兄弟はこの機に本望を遂げんものと、名殘を惜しみつつ虎にも別れ、母にもそれとなく暇を告げんと曾我へ歸り、富士野の卷狩の御供せんためとて小袖を乞ひうけ、五郎の勘當をも宥され、勇み立つて出發した。道すがら箱根の別當が許へも立寄り、暇乞をして狩場へと向つた。卷狩は數日に亙つて行はれたが、兄弟は復讐決死の次第を文に書き、鬼王・道三郎を使として曾我へ屆け、首尾よく祐經を討ち、立合つた武士を多く殺傷して十郎は討死し、五郎は捉へられて斬られた。曾我の鄕では、兄弟からの文を得て驚き且つ悲しんで追善を營んだが、越後の九上（久上）にゐた伊東禪師も捉へられて斬られた。虎は十郎討死のことを聞いて尼となり、曾我へ赴いて母に對面したが、母は虎を具して箱根に上り、佛事供養を營んで歸つた。その後、虎は大磯に閉ぢ籠つて十郎のために念佛勤行し、鬼王・道三郎も出家巡修して十郎・五郎の菩提を弔うた。

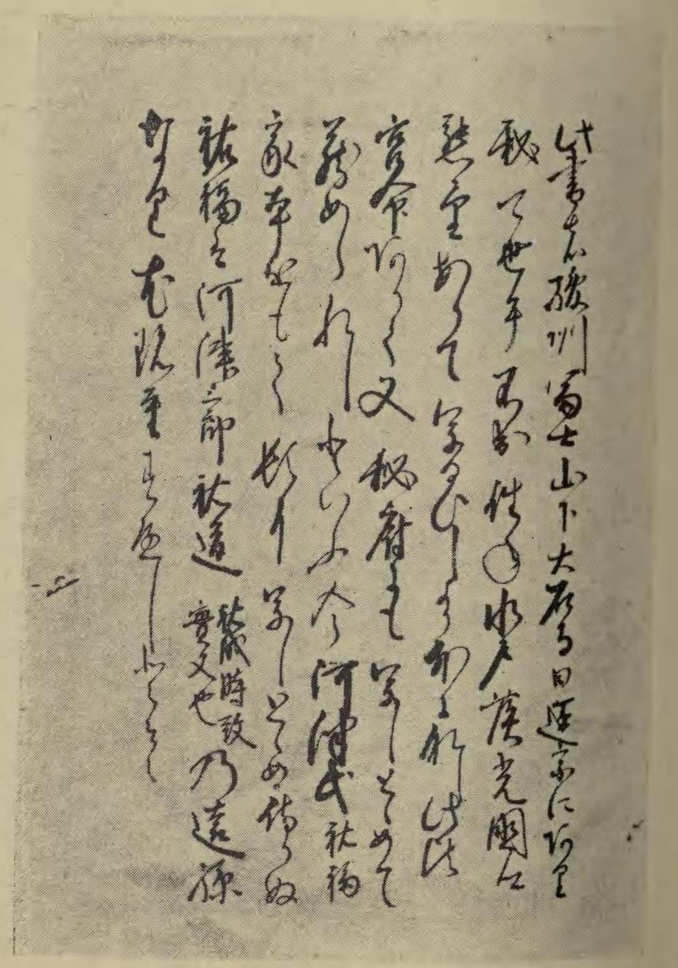
【解說】本書は曾我兄弟の生立から復讐に至る次第を叙寫したものである。先行の戰記物語は、何れも時代的の戰亂を主材としたものであつたが、本書は稗史風な英雄傳說物語の風格を帶び、「義經記」（別項）と似寄つた特色がある。曾我兄弟は十八年の間、具さに辛酸を嘗めて漸く復讐の本望を達したものの、將軍幕下幾百の勇士を殺傷し、花々しい最期を遂げたので、その境涯は雄々しくて而もはかなくあはれである。敵役が將軍頼朝を笠に着て、權勢に驕れる工藤祐經であるだけに、孤貧の中に隱忍奮鬪する主人公兄弟の境地は一層悲壯であり、孝子として勇士としての面目がいよ〳〵發揮せられ、世人から所謂曾我贔屓として白熱的の渴仰讃嘆と同情とを以て迎へられ、波瀾に富めるその境涯は、事實そのまで既に頗る傳奇的戲曲的である上に、恩愛と義理とにからまる母親や、純情と意氣とに燃ゆる遊女をこれに取合はせ、多分に傳說的要素を加味し、これを理想化して國民的英雄の性格を附與してゐる。そして十郎は、沈勇にして思慮深く、五郎は剛勇にして短氣であり、兩者は著しく性格を異にしながら、互に相助け相補ひ、至誠純情を以て辛苦を共にし、身命を捧げて孝道遂行のために殉じ、且つ又人情の至粹を發揮してゐるところに創作上の重心があり、作者苦心のあとが認められる。思想の傾向についていへば、儒敎思想も著しくあらはれてゐるが、佛敎思想・神道思想・武士道思想の表現も顯著であり、國民精神や時代思潮なども鮮かに反映して、忠孝仁義・勇武任俠を尙び、義理人情を重んずる精神の發動が著しいやうである。從つて物語一篇は、國民文學的・戲曲的の色彩が甚だ濃厚である。また表現過程において、和漢の故事が隨處に擧げられ、修辭に彫琢の痕の著しいのも特に目立つてゐる。【影響】曾我兄弟の境涯が變化に富んで薄倖であり、その心情が至孝純眞にして健氣に且つあはれであり、その義擧が多大なるセンセーションを捲起したといふやうな事情から、曾我兄弟の事蹟を主材とした本書は、廣く國民の間に愛讀せられたので、その影響も亦、頗る多大である。舞の本の「元服曾我」「小袖曾我」「和田酒盛」「夜討曾我」「十番切」「切兼曾我」「劍讃嘆」、謠曲の「元服曾我」「小袖曾我」「夜討曾我」「切兼曾我」「調伏曾我」「伏木曾我」「十番切」「禪師曾我」「赤澤曾我」「追懸時宗」等は、「曾我物語」と同材又は類材のものであつて、中には明かに「曾我物語」に據つて作られた形迹のあらはなものも少からずある。古淨瑠璃（小袖曾我・切兼曾我・曾我物語その他）や、淨瑠璃（曾我虎が磨・曾我會稽山・曾我扇八景・根元曾我・團扇曾我・曾我姿富士その他）の中には、所謂「曾我物」（別項）として「曾我物語」の題材・內容が多分に收容せられ、大に人氣を博してゐる。假名草子にも「曾我物」は多少見えるが、浮世草子、殊に八文字屋本（曾我鎌倉飛脚・櫻曾我女時宗・本朝會稽山その他）などには、この物語の影響



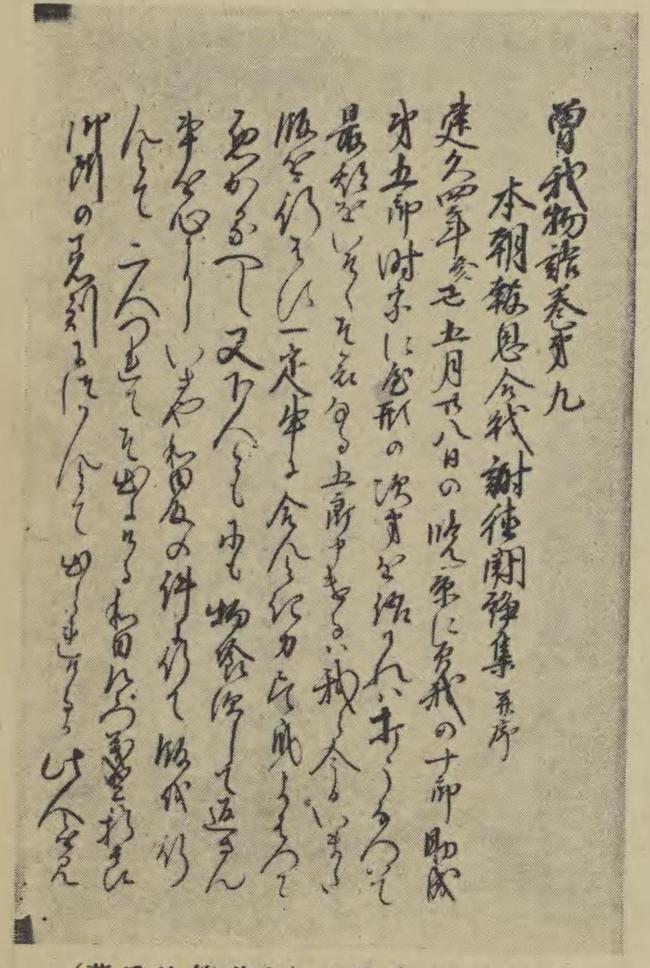
妙本寺本　巻第一（伊東子爵藏）



妙本寺本　奥書（伊東子爵藏）



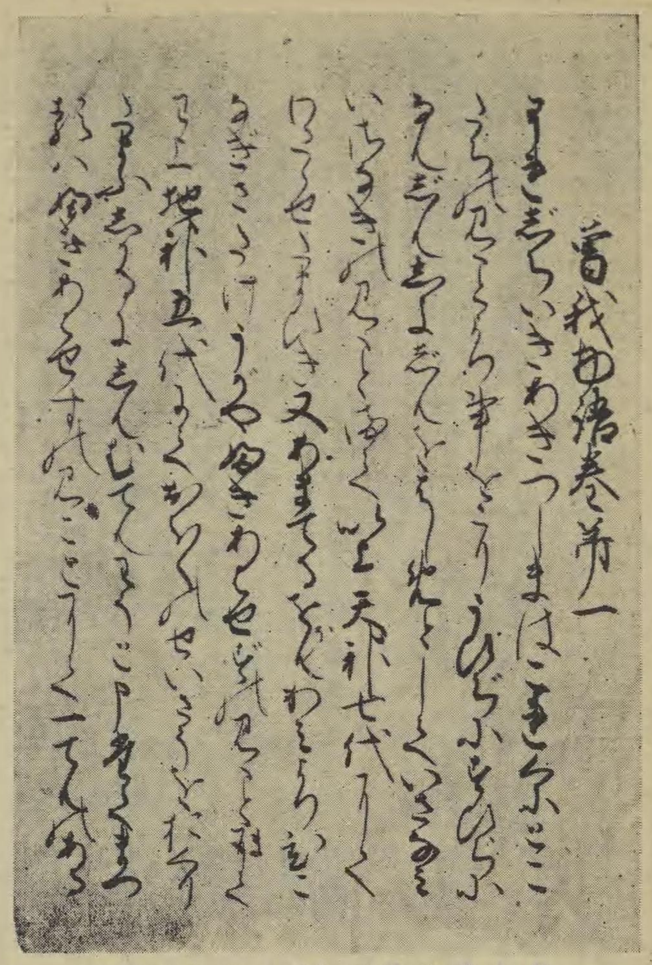
大石寺本　序文（松井簡治氏藏）



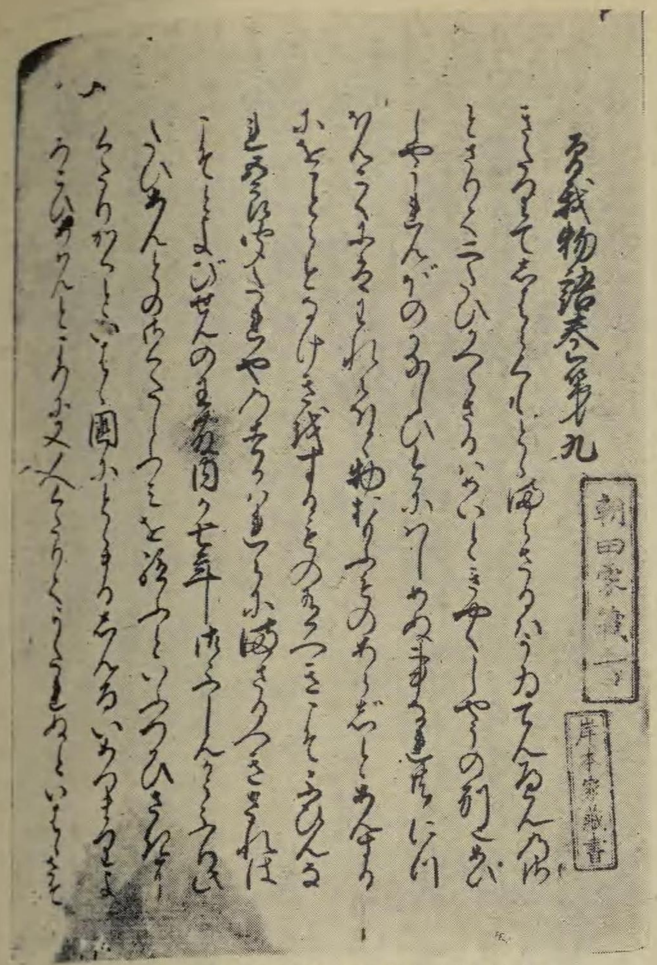
大石寺本　巻第九（松井簡治氏藏）

平假名整版で、寛永四年刊・貞享四年刊などがあり、平假名整版繪入本では正保三年刊の丹緑本をはじめ、寛文十一年刊・元禄十一年刊・元禄十四年刊などがある。現行活版本としては、國民文庫・軍談家庭文庫・國文叢書・有朋堂文庫・日本古典全集等に所收。

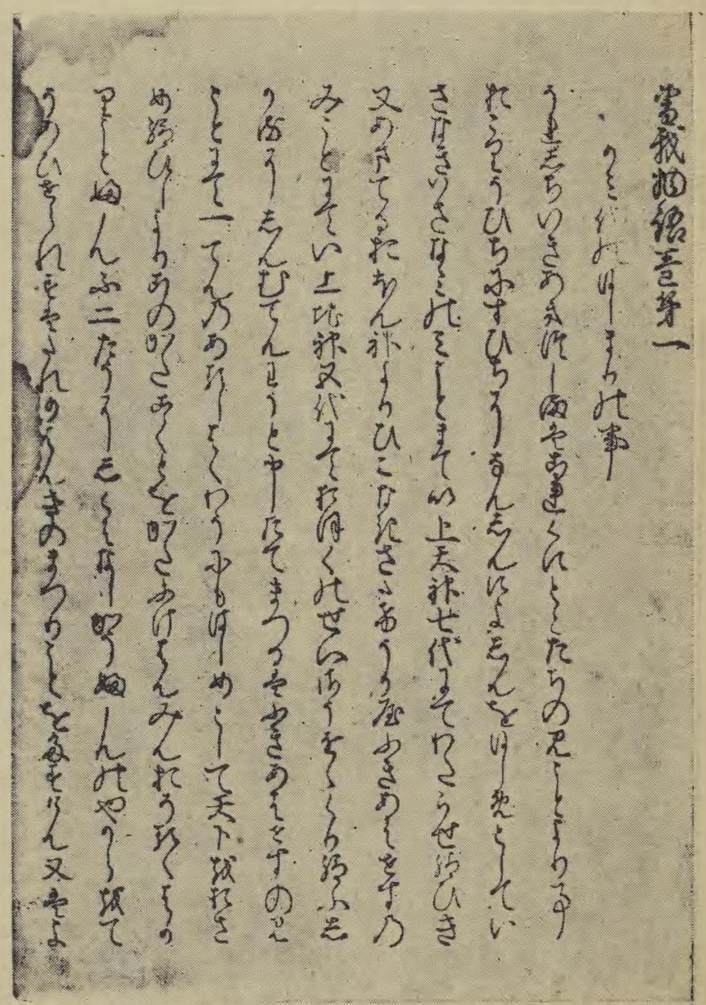
【梗概】工藤祐經は、叔父の伊東祐親と領地のことで爭論したが、負けて領地を取られたのを怨み、家來の大見小藤太・八幡三郎をして、祐親の子河津三郎祐重を暗殺させた。時に祐弟はこの機に本望を遂げんものと、名殘を惜しみつつ虎にも別れ、母にもそれとなく暇を告げんと曾我へ歸り、富士野の卷狩の御供せんためとて小袖を乞ひうけ、五郎の勘當をも宥され、勇み立つて出發した。道すがら箱根の別當が許へも立寄り、暇乞をして狩場へと向つた。卷狩は數日に亙つて行はれたが、兄弟は復讐決死の次第を文に書き、鬼王・道三郎を使として曾我へ屆け、首尾よく祐經を討ち、立合つた武士を多く殺傷して十郎は討死し、五郎は捕られ、波瀾に富めるその境涯は、事實そのままで既に頗る傳奇的戲曲的である上に、恩愛と義理とにからまる母親や、純情と意氣とに燃ゆる遊女をこれに取合はせ、多分に傳説的要素を加味し、これを理想化して國民的英雄の性格を附與してゐる。そして十郎は、沈勇にして思慮深く、五郎は剛勇にして短氣であり、兩者は著しく性格を異にしながら、互に相助け相補ひ、至誠純情を以て辛苦を共にし、身命を捧げて孝道遂行のために殉じ、且つ又據つて作られた形迹のあらはなものも少からずある。古淨瑠璃（小袖曾我・切兼曾我・曾我物語その他）や、淨瑠璃（曾我虎が磨・曾我會稽山・曾我扇八景・根元曾我・團扇曾我・曾我姿富士その他）の中には、所謂「曾我物」（別項）として「曾我物語」の題材・内容が多分に收容せられ、大に人氣を博してゐる。假名草子にも「曾我物」は多少見えるが、浮世草子、殊に八文字屋本（曾我鎌倉飛脚・櫻曾我女時宗・本朝會稽山その他）などには、この物語の影響



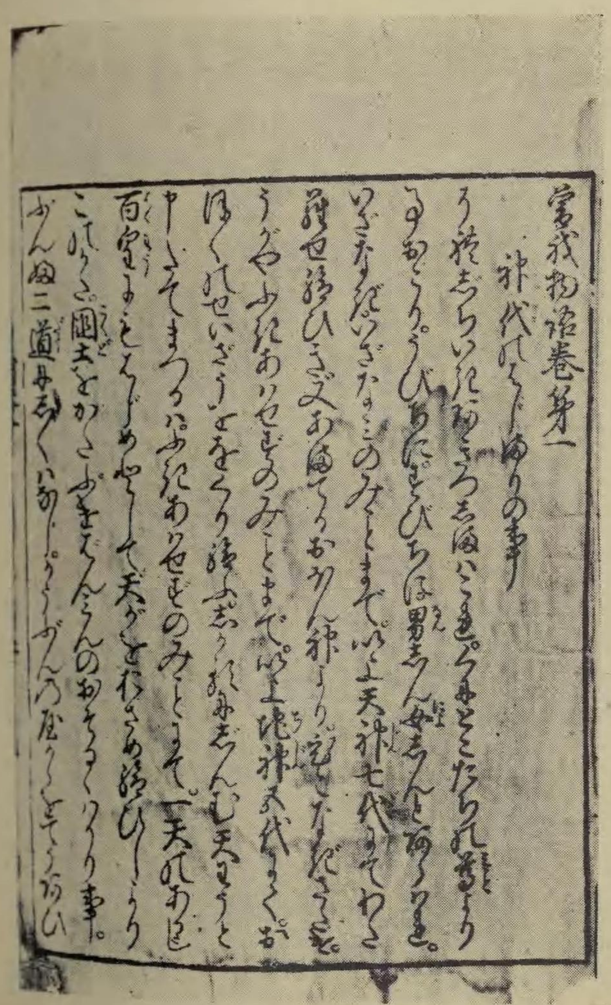
古本曾我物語（舊南葵文庫藏）



古本曾我物語（松井簡治氏藏）



木活字本曾我物語



正保板曾我物語

が著しい。寄席系統では、法本にも多少の影響が見えるが、基本（化物曾我物語・紅白曾我物語・曾我矢根・妖物十番斬、その他）、青本（風流曾我・龍宮曾我物語・曾我一代記・幼曾我その他）、黄表紙（今昔曾我之面影・復讐狂言

曾我物の謡曲 【曲目】建久四年五月二十八日、富士の裾野で父の敵を討つた曾我兄弟の事蹟は、「吾妻鏡」にも詳記せられ、殊に「曾我物語」（別項）によつて詳しく傳へられてゐるが、謡曲にも亦十數曲作られ

を与げ、曾我に降る途中、母に知られない前に、箱王は十郎の手によつて元服した。そこへ別當が追つて來て、元服の祝ひに重代の太刀を與へた。十郎は喜んで男舞を舞つたといふ曲。そのことは、物語流布本卷四「箱王曾我

まし」が女装して五郎を誘惑させ、遂に家門へたといふ曲。流布本卷九（眞字本卷九）に據つた。二段劇能。五流現行。

【禪師曾我】四番目〔作者〕不明〔内容〕鬼王（ツレ）團三郎（ツレ）は曾我兄弟の形見を持

が著しい。古態系統では、法本にも多少の影響が見えるが、無本（化物曾我物語・紅白曾我物語・曾我矢根・妖物十番斬、その他）、青本（風流曾我・龍宮曾我物語・曾我一代記・幼曾我その他）、黄表紙（今昔曾我之面影・復讐狂言曾我物語・曾我物語虚實錄・曾我十番切・惡拔正直曾我、その他）、合卷（曾我祭東鑑・扇富士曾我物語・夜討曾我人形製・繪本曾我物語・色表紙曾我物語、その他）など、作品が發達するにつれて、「曾我物」の採收はいよ〳〵盛んとなつてゐる。その他、洒落本・人情本などにも「曾我物」は多少散見してゐるが、讀本實錄類（繪本曾我物語・曾我勳功記・新撰曾我記・隱顯曾我物語その他）になると、「曾我物」は益々敷衍せられて、その内容が擴大進展してゐる。

【參考】曾我物語評判　馬場信意　○曾我物語考　伊勢貞丈（安齋叢書第二十六冊）○曾我物語考　山崎美成（不忍叢書第十一冊）○曾我物語抄　伊勢貞丈（安齋叢書第四冊）○曾我物語問答抄（國文註釋全書所收）○參訂曾我物語註釋　内藤恥叟・平井頼吉　○標註異本曾我物語　生田目經徳　○暗黑時代の一文學（曾我物語に就いて）　幸田露伴（帝國文學二五ノ一二）○曾我物語と史實　正宗敦夫（明星七ノ五）○曾我物語の著作年代　佐成謙太郎（藝文一〇ノ六・七）○曾我物語と義經記　佐成謙太郎（國語と國文學、軍記物語號）○曾我物語に就いて　江波熙（同上）○曾我物語の語法について　小山朝丸（國文教育、昭和二年號）○曾我物語謠曲の原據　江波熙（國學院雜誌、大正一五ノ一二）○仇討文學としての曾我物語　山岸德平（日本文學聯講第二期）○曾我物語後藤丹治（日本文學書目解説、室町時代）○曾我物語と佛教文學　小川壽一（國語と國文學、昭和五ノ六）○曾我傳説と國文學號（國語と國文學）。

曾我物の謠曲　【曲目】建久四年五月二十八日、富士の裾野で父の敵を討つた曾我兄弟の事蹟は、「吾妻鏡」にも詳記せられ、殊に「曾我物語」（別項）によつて詳しく傳へられてゐるが、謠曲にも亦十數曲作られてゐる。そのうち現在行はれてゐるものに、「調伏曾我」「元服曾我」「小袖曾我」「夜討曾我」「禪師曾我」の五曲がある。【諸本】現行諸流謠本。國民文庫・日本文學大系・謠曲三百五十番集（日本名著全集）所收。

【調伏曾我】　五番目　〔作者〕宮增（能本作者註文）【内容】源頼朝（ツレ）は工藤祐經（前ジテ）その他の臣（立衆）を隨へて箱根權現に參詣した。箱王（子方）は箱根別當（ワキ）に伴はれてこれを見物し、社參の人々の名を聞いて敵祐經の顔を見た。祐經もこれに氣がついて、箱王に自分は親の敵でないぞと言ひ聞かせ、やがて頼朝に隨つて立ち去つた。別當は箱王の心を憐んで、從僧（ワキヅレ）と共に祐經調伏の祈禱をした。すると、不動明王（後ジテ）が現はれて祐經の形代を刺し通し、本望成就の靈驗を示したといふ曲。〔題材〕前段祐經對面の事は、物語流布本卷三「箱王祐經に遭ひし事」（眞字本卷四にも見ゆ）に據つた。後段調伏の事は、流布本卷一「伊東を調伏する事」から暗示を得て、作者の新しく考案したものであらう。二段劇能。寶生・金剛・喜多現行。

【元服曾我】　四番目　〔作者〕宮增（能本作者註文）〔内容〕曾我十郎（シテ）は箱根寺にゐる弟箱王を元服させたいと思ひ、團三郎（ツレ）を伴つて箱根別當を訪れ、敵討の志を打明けて、その許しを乞うた。別當（ワキ）もその志を憐んで、箱王（子方）を呼び、自ら盃をとつて兄弟の將來を祝つた。兄弟はやがて別當に暇を告げ、曾我に歸る途中、母に知られない前に、箱王は十郎の手によつて元服した。そこへ別當が追つて來て、元服の祝ひに重代の太刀を與へた。十郎は喜んで男舞を舞つたといふ曲。そのことは、物語流布本卷四「箱王曾我へ下りし事」「箱王が元服の事」（眞字本卷四・五）に出てゐるが、物語には箱王が自發的に曾我に下り、兄と共に北條時政の館に行き、烏帽子親になつて貰つたとある。二段劇能。喜多現行。

【小袖曾我】　四番目　〔作者〕不明（能本作者註文）〔内容〕建久四年五月中旬、曾我十郎（シテ）と弟五郎（ツレ）は富士の御狩を幸ひに敵祐經を討たうと決心したが、五郎は母に勘當されてゐるので、兄弟相連れて母を訪ね、勘當の宥しを願つたが、母は頑として宥さない。そこで二人は泣く〳〵出て行かうとすると、母は聲をあげて留め、五郎の勘當を宥した。兄弟は喜んで男舞を舞ひ、これを最後と名殘を惜しみながら、狩場へ急いで行つたといふ曲。物語流布本卷七（眞字本卷六）に據つた。一段劇能。五流現行。

【夜討曾我】　四番目　〔作者〕不明〔内容〕曾我五郎（シテ）と兄十郎（ツレ）は富士の裾野に着き、今夜愈々夜討しようとするについて、從者の鬼王（ツレ）團三郎（ツレ）に命じて、文と形見の品を故鄕の母に屆けしめることとした。鬼王・團三郎は、最後のお供がしたいと死をかけて願つたが、主命を背くことは出來ず、泣く〳〵曾我へ向つて出て行つた。その夜、兄弟が敵を討つた後である。古屋五郎その他の者（ワキヅレ）が出て兄弟を捕へようとした。兄十郎は既に新田四郎に討たれたらしい。弟五郎（後ジテ）獨り奮鬪したが、御所五郎丸（後ワキ）が女裝して五郎を誘惑させ、遂に取押へたといふ曲。流布本卷九（眞字本卷九）に據つた。二段劇能。五流現行。

【禪師曾我】四番目　〔作者〕不明〔内容〕鬼王（ツレ）團三郎（ツレ）は曾我兄弟の形見を持つて故鄕に歸り、兄弟の母（ツレ）に渡した。母は末子久上禪師の身の上を案じて鬼王等を久上へ送つた。越後國久上では、禪師（シテ）が護摩を焚いてゐると、伊東九郎祐宗（ワキ）が從兵（立衆）を隨へて討取に來た。禪師は討手を散々に懲らした後、遂に生捕られたといふ曲。流布本卷十「禪師が自害の事」（眞字本卷十）に據つた。但し物語兩本には討手を養父源義信（眞字本は茂信）としてゐる。二段劇能。觀世・寶生・喜多現行。

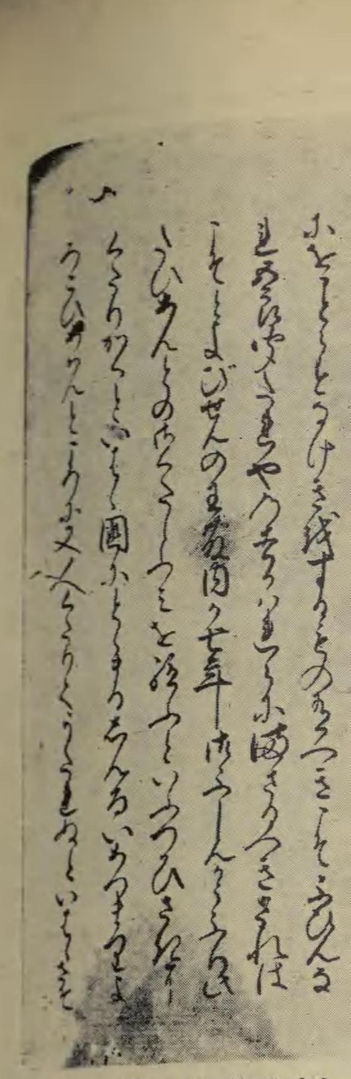
【構想】以上五曲、大體「曾我物語」流布本、又は眞字本に據つてゐるが、その脚色には複式夢幻能の樣式をとらず、皆一段又は二段劇能にしてゐる。そして「平家物語」等から出た劇能には、原據に拘はり過ぎた戲曲的體裁を缺いたものが多いのであるが、曾我物はさうした束縛から離れ、謠曲としての自由な形をとつてゐる。從つて各曲とも、それ〴〵の特色を持つた戲曲的興味の深いものに作られてゐる。江戸時代の淨瑠璃・歌舞伎等に於て、一大勢力を占めた曾我物（別項）は、「曾我物語」又は幸若の曾我物から出てゐるものが多いが、謠曲の與へた所も少くない。　〔佐成〕

【參考】謠曲評釋　大和田建樹　○謠曲大觀　佐成謙太郎　○曾我傳説と國文學號（國語と國文學）

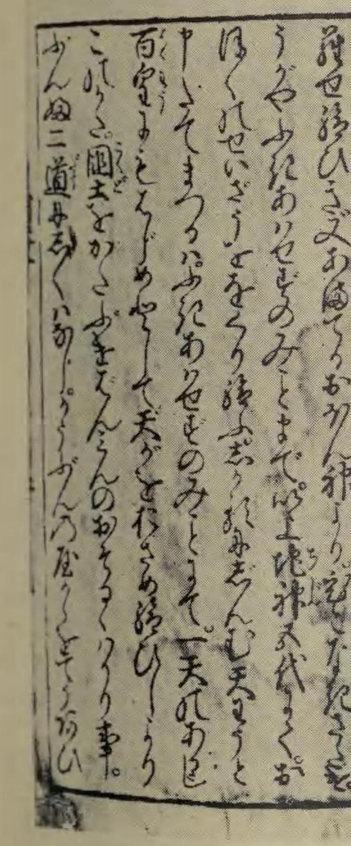
曾我綉俠御所染（そがもやうたてしのごしよぞめ）　脚本

六幕　世話物　【作者】二代河竹新七（默阿彌）

【通稱】時鳥と五郎藏　【別名題】「往古模樣扇重縫（いにしへのもようおうぎのかさねぬい）」「梅春俠客御所染（はるのはるたてしのごしよぞめ）」「時鳥俠客御所染（ほとときすたてしのごしよぞめ）」



（松井簡治氏藏）



等。【初演】元治元(文久四)年二月江戸市村座。【役割】獵人名古平・百合の方・男達御所の五郎藏(市川小團次)、名古平女房お杣・五郎藏女房さつき(尾上菊次郎)、星影土右衞門・五郎藏母お杉(關三十郎)、巴之丞妾時鳥・雪枝小織之助・一齋下部切平(市村家橘)、一齋娘忘貝・花形屋の窪洲(坂東三津五郎)、淺間巴之丞・甲屋息子與五郎(中村福助)等。【諸本】默阿彌全集第五卷所收。【題材】柳亭種彥の小説「淺間嶽面影双紙」に據る。【梗概】〔序幕〕茶の湯の師匠團の一齋は、折杵の茶杓買取りのため、淺間巴之丞から百兩を預かるが、歸路隱形の術を遣ふ曲者のために斬り付けられ金子を奪はれる。一齋は茶事奧義の一卷を巴之丞へ渡すやう姉娘の忘貝に託し、妹娘寄居蟲は實の娘ではなく、淀の夜船で喧嘩に出逢ひ、實の娘と間違つて連れ歸つた餘所の娘であることを打明けて死ぬ。繼母に疎まれて巡禮に出たおすては、亂暴を仕掛ける雲助共を斬り倒した處を巴之丞に見初められ、時鳥と名を變へて側侍することとなる。〔二幕〕忘貝と寄居蟲とは、伯父名古平の企みに遭つて勾引され、一齋の下部切平は磯部家の重寶朝日の名鏡を名古平から奪ふ。〔三幕〕巴之丞の室撫子の母百合の方は、妾の時鳥が巴之丞の寵を受けるのを嫉み、時鳥に毒藥を薦めて惡瘡を發させた上、嬲り殺しにする。侯臣猿島彌九郎は、時鳥の亡靈のために家老雪枝彌惣太に斬られ、百合の方が星影土右衞門と心を合はせて家横領を企ててゐることを白狀する。〔四幕〕腰元の杜鵑花と通じて磯部家を暇となつた須崎角彌は、江戸に出て俠客となり御所の五郎藏といふ名を賣つてゐたが、計らずも仲の町で巴之丞の蘇儀を救ひ、巴之丞の想ひを掛けた傾城逢洲は名古平に賣られた忘貝であつて、茶道の傳書は巴之丞の手に渡り、逢洲の實の妹は時鳥であることがわかる。そこへ巴之丞を訪ねて時鳥が姿を現はして逢洲と姉妹の對面をし、忽然とその姿をかき消した時、國許から雪枝彌惣太が時鳥の慘死と百合の方の自害とを知らせに來る。〔五幕〕杜鵑花へ戀慕したがために追放となつた星影土右衞門は、杜鵑花が夫五郎藏のため苦界に身を沈めたのを幸ひに言ひ寄る。杜鵑花は五郎藏が巴之丞の揚代金の滯り百兩を拂はうと苦勞してゐるのを見兼ねて、土右衞門のいふがまゝに死ぬ覺悟で五郎藏へ去狀を書き、愛想盡しを言つて百兩を受取り、五郎藏に贈らうとする。五郎藏は杜鵑花の變心を怒り、これを殺害せんとし、土右衞門と一緒に出て來た逢洲を杜鵑花と思ひ込んで殺し、土右衞門は隱形の術を使つて五郎藏から逃れる。〔六幕〕五郎藏は、杜鵑花の書置に據つてその眞意を知るが、逢洲を殺した申譯に切腹し、杜鵑花は五郎藏へ百兩を渡して夫の罪を負はうと、廓を拔けて家まで來て自害する。袖乞に身を落した寄居蟲と切平とは、偶然五郎藏の門口に立つが、手の内を惠まれる時に見た巾着から五郎藏の母お杉を實の母だと知つて、お杉を初め臨終の際の腹違ひの兄五郎藏にも逢ふ。そして五郎藏から土右衞門が隱形の術を遣ふことを聞いて仇と悟り、杜鵑花からは百兩の金を惠まれる。切腹した五郎藏と自害した杜鵑花とは再び夫婦の盃を交した上、五郎藏は尺八を吹き、杜鵑花は胡弓を彈いて逢洲の靈を弔ひながら死んで行く。【構想】原作の小説にはない百合の方を點出してあるのを初めとして、單なる脚色でなく、作者の手腕は縱横に揮はれてゐると言つてよい。【價値】小團次の當り藝であつたのみならず、その藝統の一面を繼承した五代並に六代尾上菊五郎・市村羽左衞門の得意の役となり、歌舞伎劇中俠客劇の典型的なものとなつてゐる。【參考】河竹默阿彌河竹繁俊〇續々歌舞伎年代記 田村成義 〔河竹〕

素卿 「奧羽四天王」を見よ。

續明烏 句集 二册 【編者】高井几董【刊行】卷末に「安永丙申(五年)歲九月廿三日几董書」とあるから、當時の刊行であらう。京、橘仙堂善兵衞・吉田九郎右衞門刊【諸本】蕪村曉臺全集(俳諧文庫)・其雪影・續明烏(古俳書文庫)・中興俳諧名家集(俳書大系)・蕪村新十一部集(河東碧梧桐編)所收【解說】几董が自ら鄕に撰んだ「明烏」(別項)の續編として汎く諸家の連句・發句を集めたものである。蕪村を初め、その門流の詠は殆ど網羅され、その他故人には、宋阿・几圭・太祇・移竹等があり、他門には蝶夢・樗良・青蘿・麥水・曉臺・士朗・也有・五雲・二柳・千代尼等があり、當時新興名家の吟は、殆どこの中にありと言つても宜い位である。几董が編集の苦心想ふべきで誠に道立の序に言つてゐる如く、撰するの難き裁するよりも更に難きものがあつたであらう。それだけ又この書が當時の俳書中に群を拔いて、代表的の價値と名聲とを有する譯である。その量からいつても、質からいつても、最も多方面的な事に於て、「蕪村七部集」(別項)中、「五車反古」(別項)と共に双璧となすべく、道立の序文、無賜の跋文、亦いづれも蕪村系とは關係淺からぬ人々の筆で、道立が源敬義としての漢學者らしい面目も窺はれ、無賜即ち秋成の例の特有な古語の使ひざまなども、それ〴〵に特色があつて面白い。〔續原〕

續有磯海 俳諧集 二册 【編者】僧浪化【刊行】元祿十一年仲冬上旬【諸本】竹冷文庫第三編・蕉門俳諧後集(俳書大系)所收【解說】自序に「當時みだりに蕉門の徒と名乘るやから國々にあまねく所々にみてり。されども正しく其直示を得たるものすくなし」とある如く、かく慨することが動機となり、伊賀・江戸・湖南の三個所はさすがに芭蕉の遺風を守ることを懷しみながら、越中の邊陬にあつては、折節の便りさへ心に任せぬので、時々の文通に聞えた佳句や芭蕉を追慕する人達の作を集め、芭蕉が「和漢朗詠集」の部立が面白いと云つたと豫て去來から聞いてゐたので、朗詠集の部立に倣つて編輯したのである。即ち上卷は朗詠集の上卷の四季の部立に倣つて部立し、下卷は同下卷の雜の部立に倣つて部立してゐる。ただ朗詠集の部立に據つた所は凡て俳句を集めたので、連句は上卷の卷頭と下卷の卷尾とに別に置いて、上卷の卷頭には之道・去來・芭蕉・惟然・丈草・支考・野明の落柿舍即興の七吟歌仙一卷を置き、下卷の卷尾には浪化・惟然・拾具・林紅四吟の歌仙亂吟、荻人・浪化・林紅の三吟歌仙、路健・浪化・嵐青の三吟歌仙、北枝・浪化・呂風・胡仲・林紅・吏全・荻人・梅素・汶泗・桑柘・路健・和久・夕兆・嵐青の十四吟歌仙、追加として丈草・風國・浪化・去來四吟の文通によつて附けた亂吟歌仙の都合四卷を收めてゐる。本文をなす俳句の部は、下卷の雜の部立の如き句を得るには頗る困難なものもあるに拘らず、五種の部立に「右の題發句なし」とある外は兎に角集め得てあつて、上卷三百四十四句、下卷百六十六句、都合五百十句の數が集められてゐる。これだ

の結果を掲げ得たのには、前の「有明抄」、「万奈美山」（名別項）に於ける如く、去來の後見もあつたものらしく、去來系の人が少くない。兎に角芭蕉歿後の蒼門の主なる俳人や、越中及び九州俳人の見られる點に於て注意すべきものであると共に、特殊な部立を持つ點に於て撰集中に異彩を放つものである。〔志田〕

續一年有半（ぞくいちねんうはん）　「一年有半」を見よ。

續今宮草（ぞくいまみやぐさ）　俳諧集　二册　【作者】小西來山【編者】小西什山【刊行】天明三年正月【諸本】粃山梓月の覆刻本。元祿名家句選（俳書大系）・古俳書文庫第十二編所收。【内容】「今宮草」（別項）の續集である。松壽齋芋狐の序、十萬堂四世孫小西什山の跋があつて、序跋によると、芋狐の勸めによつて什山が梓に命じたもので、凡例によると、小西家祕藏の眞蹟の遺章の凡てに、來山の知人であつた三宅泉石の蒐集して置いたものから二三採つて加へたとある。卷頭に南岳悅山和尙書の十萬堂の額、關月寫の來山の像、南海僧正空日の題語を掲げ、集中に來山が好んで揮毫した白拔きの「愼獨」の二字に、「くらがりで涼めど肩はぬがぬなり」の句を題した眞蹟と、外に來山が夫々句を題した周圭及び鶴林筆の畫とを挿み、集末に諸家の追善の發句を附錄してある。本文は四季混雜の發句で、中に歳旦三ツ物一章、末略の連句の三句物三片、附合一章、末闕の夢想開獨吟歌仙や、辭世の歌及び臨終前に書いたといふ歌や、小紀行「寺島の記」「玉川の辭」「鳥路齋編集序」「豹皮集題各枕」の文などがあり、その他句に前文の附いたものが少くない。なほ最後に「附錄」として發句五十五句あつて、これ等は眞蹟の得られないものながら集例をそむいて附錄するとの後記があり、この後になほ三句追補してある。又句上に泉石の評を記した句が少くないが、これ等は泉石の蒐集して置いた中にもあつた句であらう。發句のみを數へると、上卷が百三十六句、下卷が附錄の五十五句及び追補三句を合せて百三十句である。【價値】「今宮草」は奈良の門人が、來山から聞き、或は贈られたものを集めたものであつたが、本集は「今宮草」よりも三倍の大きさを持ち、また附錄以下の外は眞蹟に據つたものといふから、確實さに於て勝ると言ひ得る。併し中に、「袴着や子の草履とる親心」外一二、他人の作であり或は他人の作なるかの疑ある句もあるので、全部とは言ひ難いが、大部分は確實と言ひ得る。「附錄」の部は、「門松や死出の山路の一里塚」の句は來山の作といふ確證がなく、「涼しさに四つ橋を四つ渡りけり」の句は、「花見車」には盤水の作とされてゐて、この部は凡て考證を要する。併し兎に角來山の發句は前集と合せて大部分蒐集されて居り、數篇の文や句の前文等によつて、彼の環境や性格思想等も知られるところに、本集の大なる價値がある。【附記】來山の句集には、外に「俳諧五子稿」中のものがある。〔志田〕

續浦島子傳（ぞくうらしまこのでん）　傳記　一卷　【作者】未詳【成立】延喜二十年八月朔日。類從本には、初めに「承平二年壬辰四月二十二日甲戌、於勘解由曹局、注之、坂上家高明耳」と記してゐる。承平二年は延喜二十年から十三年の後である。その他誤字もあるらしく坂上云々の意味は明かでない。【諸本】群書類從一三五所收【解說】「浦島子傳」（別項）を註解敷衍した上に、七絕二十二韻及び神女と浦島子に代つて七絕と和歌各十四首を掲げてゐる。なほ本書の記述は「浦島子傳」の註解敷衍であるから記述は說明が長くなつて居り、又同一の語句も多い。そして魯魚の誤も少くない。〔山岸〕

【參考】浦島子傳

續燕石十種（ぞくえんせきじつしゅ）　風俗書　一卷　【編者】國書刊行會。水谷不倒、主として校訂の勞を執り、朝倉無聲と與に編纂上に力を盡した。【刊行】明治四十二年三月【解說】編纂の方針は燕石十種（別項）と同じ。

〔卷一〕書證錄（喜多村信節）・式亭雜記（式亭三馬）・釣客傳（黑田五柳）・莘野茗談（平秩東作）・過眼錄・反古染（越智爲久）・洞房語園後集（庄司道恕）・武江年表補正略（喜多村信節）・博戲犀照（山崎美成）・國字小說通（木村黙翁）・京攝戲作者考（烏有山人）・一蝶流譜考（涼仙考樵）・柳淇園先生一筆（柳里恭）・深川珍者錄・浪速人傑談（政田義彦）・戲財錄（並木五瓶）・わすれ殘り（四壁庵茂蔭）・德永種久紀行（德永種久）・反古籠（萬象亭）・俳諧古文庫（曲亭馬琴）。〔卷二〕異聞雜稿（曲亭馬琴）・吉原源氏五十四君（櫻木其角）・筠庭雜錄（喜多村信節）・清神祕錄（北流山人）・十八大通（三升屋二三治）・山東京傳一代記・江都百化物・金杉日記（山崎美成）・京山高尾考（山東京山）・紙屑籠（三升屋二三治）・須須美草（建部綾足）・壺すみれ（黑川春村）・舞曲扇林（河原崎權之助）・改過筆記（曲亭馬琴）・柳亭遺稿（柳亭種彦）・其昔がたり（三木隆盛）・無垢衣考（山東京傳）・疑問錄（山崎美成）・只今御笑草（二代目瀨川如皐）・色道大鏡（畠山箕山）。〔石村〕

側音（そくおん）「子音」を見よ。

促音（そくおん）　國語學【解說】音の種類の一つ。「セツク」（節句）「キツプ」（切符）「ザツシ」（雜誌）などに於て「ツ」の字で表はされる音。現代國語では、促音は、その次に來る音節の最初の音と同一の子音であつて、音の長さから言へば、音節一つの長さを占めてゐる。その子音はk・t・p又はs・ʃで何れも無聲子音である。それ故、促音は次の音節の初めの子音と同一の無聲子音で、一音節（日本における獨特の意味の音節。「音節」參照）をなすものであるといふ事が出來る。この促音は次の音節の最初の子音と共に一個の長子音であると見る事が出來るものである。即ちp・t・kを發するためには唇又は舌で呼氣の通路を閉ぢ、s・ʃを發するためには舌の前部と上顎との間で呼氣の通路を狹めるのであるが、普通の場合は、すぐこれを開くが、促音の時は、閉ぢ又は狹めてゐる時間を特に長くし、一音節の長さに延ばしたのであつて、これを開く時に發する音、又は持續した音の最後の部分が次の音節の最初の子音となると見る事が出來る。さうしてp・t・kの促音の場合には音は全く聞えず、s・ʃの場合には、純粹の子音のみが持續する。促音は、語の初めにも終りにもあらはれない（但し、特殊の場合には終りにあらはれる事がある）。又促音は、無聲子音にのみあるが、方言によつては、有聲子音（濁音の前）にもあらはれる。古く純粹の日本語に促音があつたかどうかは不明である。奈良朝に「モテ」「モタリ」といふ語があつて「モチテ」「モチタリ」の義であるが、もし「モテ」を「モツテ」「モタリ」を「モツタリ」とよんだとすれば促音があつた事となるが、しかしさうであつたとして、その促音が一音節だけの長さを占めてはゐなかつたと考へられる故、後世の促音とは同じものとは言ひ難い。然るに、漢字音に於ては入聲音がp・t・kで終つたので、その次に清音が來る場合には、促音のやうな現象が起つたものと考へられる（「日記」nit-ki→nikki「雜記」zap-ki→zakki「節供」set-ku→sekku など）。これに伴つて、純粹の國語に

於ても、平安朝以後普通の音節が特殊の場合に促音に變じ（これを促音便といふ。「たふとし」が「たつとし」「たちて」が「たつて」「いひし」が「いつし」となる類）、促音が多く用ひられるに至つた。

【促音の記法】促音を示す特別の符號、又は文字は久しくなかつた。それ故、これを省いて書き表はさないものが多かつた（ニッキを「にき」、タットブを「たとぶ」の類）。後、擬聲語などの場合から始まつて、これを「つ」の字で書き表はすことが次第に多くなり、遂に一般の風となつた。「つ」は入聲音の場合に促音となる事が多いからである。

【參考】促音考 上田萬年（國語のため第二所收）○國語音聲學 神保格○日本語の音節に就て特に促音の研究 金田一京助（國學院雜誌一九ノ八）○國語音韻論同上○日本音符考 吉澤義則（國語國文の研究所收）　〔橋本〕

俗樂旋法（ぞくがくせんぱふ）「調子」を見よ。

續歌舞伎年代記（ぞくかぶきねんだいき）　演劇書　三十卷【編者】豐芥子【本稱】花江都歌舞妓年代記續編【成立】安政末年頃【諸本】從來寫本で傳はつてゐたが、明治四十年、新群書類從卷四として田村成義所藏本が飜刻され、後、そのまゝ單行本としても刊行された。【解說】「花江都歌舞妓年代記」（別項）の後を承け、文化二年より安政六年七月まで五十五年間に亙り、江戸三芝居に興行された狂言を主として、役者の動靜や臺詞等にも及んで記述されてゐる。卷一は文化二年より同十一年、卷二は文化十二年より文政四年、卷三は文政五年より同十年まで、卷四は文政十一年及び十二年、卷五は天保元年及び二年で、卷六以下は一卷一年の割である。この種のものとして遺漏誤謬の絶無は期し得ないが、「花江都歌舞妓年代記」「續々歌舞伎年代記」（各別項）と共に三者連續して、江戸歌舞伎史の年表は完全する譯になる。　〔增田〕

續教訓抄（ぞくけうくんせう）　音樂書　十五卷【著者】狛朝葛【成立】文永七年【解說】本書は「教訓抄」（別項）の續編として編纂せられ、「教訓抄」と同じく、樂曲・樂器の由來・奏法・逸話等につき、萬般の事を書き記したもので、「教訓抄」と併せて、本邦音樂舞曲の研究上多大の參考となる書である。その內容は、第一は六調子幷十二調子、第二より第八までは樂曲の部、第九より第十一までは唄物の部、第十二は舞の部、第十三は音樂靈驗談を記し、第十四・十五の兩册は追加で、五節次第に就いて詳述せられてゐる。歌謠研究上には、東遊（別項）等の郢曲に關する說明の見えることや、第四卷の散吟打述樂の中で偈頌の詞を述べ、左方に笛譜を記し、右方に折線式の樂譜を記した如き、また第八卷の萬歲樂の中に、知足院の言を引いて祝の今樣歌を載せたる如きは、甚だ參考となるものである。本書は「教訓抄」ほど世に行はれなかつたらしく、かれほど傳本も多く殘つてゐず、且つ殘缺本零卷誤寫の多き書もあつて、研究すべき餘地なほ多く、寫本で傳はるのみで刊本はない。明德三年乃至四年に、豐原統秋（すねあき）の書寫したと云ふ奧書のある古寫本もある。　〔藤田〕

續群書一覽（ぞくぐんしよいちらん）「群書一覽」を見よ。

續群書類從（ぞくぐんしるゐじゆう）「群書類從」を見よ。

俗語（ぞくご）　國語學【名稱】俗言とも。【解說】場合によつて種々の意味に用ひる。（一）「俗」には、風習の義がある故、或る國又は或る地の俗語といつて、その國の言語又はその地の方言をさす事がある。（二）「俗」は「雅」に對する意味をもつ故に、文語（別項）が發達してこれが雅正な言語と考へられるやうになつた場合に、これに對する口語を俗語といふ事がある。（三）口語にも標準語（別項）のやうたものが定まつて、これが模範的な正しい言語と考へられる場合に、これとは違つた諸地方の方言、又は教育のない社會の言語を卑俗なものとして、俗語といふ事がある。この意味の俗語をまた俚言俚語などいふ。（二）及び（三）の意味の俗語が、雅言又は雅語に對するものであるが、我が國で言語の雅俗を明かに區別したのは「倭名類聚鈔」（別項）が最初であると考へられてゐる（吉澤義則氏の說）。（雅言參照）

【參考】「雅言」の條の參考を見よ。　〔橋本〕

續五元集（ぞくごげんしふ）「五元集」を見よ。

續古事談（ぞくこじだん）　說話　六卷【著者】未詳【成立】建保七年四月【諸本】群書類從。寫本は內閣文庫・東京帝國大學圖書館・高知縣立圖書館等に所藏。【出典】本書の說話は勿論「古事談」に依つたものが少くないが、「袋草紙」「臺記」「今鏡」「李部王記」等も說話の典據である。又第六卷は「論語」「史記」「說苑」「長恨歌傳」「南史隱逸傳」等に依つてゐる。【內容】本書は「古事談」（別項）に摸して作つたものである。第一卷は王道后宮篇で、堀河院・白河院・寬平法皇・皇嘉門院・宜秋門院等皇室を中心とする史話が多い。第二卷は臣節篇で九條師輔・一條伊尹・匡房・在衡・長手等著名な朝臣の生活、有職故實等の話があり、第三卷は缺けてゐる。「古事談」から推察すると、僧行か勇士とでも云ふのであつたらう。第四卷は神社佛寺篇で、六角堂・長谷寺觀音像等の由來の話、行敎が宇佐八幡に仕へる神佛混淆の思想を示す說話、超自然的な神佛の靈異等を收めてゐる。第五卷は諸道篇で、胡飲酒・納蘇利・採桑老・アララギ舞等の舞踊、橫笛・琵琶・和琴・大鼓等の音樂、或は登昭等の占相術・馬術・强盜等の說話が多い。第六卷は漢朝篇で、楊貴妃を神仙として取扱ひ、又靑年との戀愛を絡ませたのや、齊の威王・娥皇女英、野干と婚姻する話、宋弘の妻を去らぬ話等、漢土の著名な故事傳說が多い。　〔高島〕

【參考】續古事談註 北眞言○鎌倉室町時代文學史 藤岡作太郎○鎌倉時代文學新論 野村八良

續後拾遺和歌集（ぞくごしふゐわかしふ）　勅撰集　二十卷【撰者】藤原爲藤・藤原爲定【成立・由來】後醍醐天皇元亨三年七月二十二日、藤原爲世の子爲藤、勅撰の命を奉じ、同年八月四日に撰歌の事を始めた（勅撰次第）。翌四年七月十七日（拾芥抄・常樂記）に、爲藤が卒したので、爲藤の兄なる爲通の子、爲定が命を奉じてこれを嗣ぎ、正中二年十二月十八日に、四季の部を奏覽した。これに就いて、「增鏡」（春のわかれ）には、「兵衞督爲定、故中納言（爲藤）のあとをうけて撰びつる撰集の事、正中二年十二月の頃、まづ四季を奏するよし聞えしのこり、このほど世にひろまれる、いとおもしろし」と記してゐる。この記事は、嘉曆元年三月二十日、春宮邦良親王薨去、同三十日、東宮方公卿女房等三十餘人出家の記事に續いてゐるから、文中、「このほど」といへるは、嘉曆元年三月の頃を指し、四季以下の部分が成就した年代を示すものとも思はれる。「勅撰次第」には、「嘉曆元年六月九日返納歟」と見える。時恰も、風雲急なる時で、元亨四年（正中元年）は、後醍醐天皇が幕府追討の事を謀りたまひ、遂に藤原資朝・俊基卿が鎌倉に拘引さ

れたる。増鏡の著は、かゝる間に述あらんとて、文擬者に就いて、「増鏡」には、「爲世の大納言二度になりぬればにや、爲藤の中納言に讓りしを云々」と見え、又爲藤卒去の後、爲世は末子爲冬を撰者とせんとした爲め、爲定は一時世をのがれ山伏姿であとをくらませたなどの由を記してゐる。爲世・爲藤・爲冬・爲定、すべて二條家の人々がこれに關與したのは、大覺寺統にまします後醍醐天皇の下にあつては、先例により當然であつた。集成り、天皇は、ことのほか賞で給うた由、これ亦「増鏡」の記す所である。【諸本】二十一代集本・國歌大觀

歌集部・國歌大系第七卷所收。

【内容】序はない。歌數は、「勅撰次第」には、千三百五十三首、「拾芥抄」には、千三百四十三首と見え、國歌大觀本は、千三百四十七首を收めてゐる。部立は、四季・物名・離別・羇旅・賀・戀・雜・哀傷・釋教・神祇に分れ、「第七卷」は「物名二十七首」で成つてゐるのは、恐らく集名をとつた「拾遺集」の先例にならつたものであらうが、珍とすべきものである。撰入歌の多い作家は、爲氏二十四首・爲家・爲世各二十一首・定家二十首・後宇多院・後醍醐天皇各十七首、公雄・俊成各十五首、伏見院・覺助法親王・冬平・實兼各十三首等である。大覺寺・持明院兩統の帝及び二條家對京極・冷泉兩家の作者の歌數の上にも、對立的狀勢が看取される。京極爲兼の如きは一首もない。卷頭の歌、「今朝よりや春はきぬらむあら玉の年立ちかへり霞む空かな　爲世」に比較すれば、撰者爲藤の作は、

吹き迷ふ霞山あらし春さえて沖つ潮あひに沫雪ぞふる（春上）

夏衣ほす間も知らず玉川の井手越す波にさける卯

など、やゝ生新な趣があるが、爲定の作は、きりぎりす夜をへて秋は手枕の下安からぬ音をやきくらむ（秋下）

なほざりに頼めおきける夕暮の苦しきまでにまたれずもがな（戀二）

の如く、爲藤より流暢であるが、力なく平板である。本集を撰せしめられた後醍醐天皇の「今朝はしも音こそかはれ吹く風の便りにつきて秋やきぬらむ（秋上）」にも、同じ趣が見える。全體として、叙景歌が比較的に優れてゐるが、二條家一流の力の乏しい點が目立つ。この外、萬葉の歌及び萬葉ぶりの作が、集中所々に散見してゐる點が注意される。本集は南北朝對立以前、所謂鎌倉時代の最後の勅撰集である。二條家の流れが、愈々平凡に陷つて行く頽勢がよく看取されると思ふ。〔松浦〕

【參考】國歌大系第八解題○歴代和歌勅撰考

續國歌大觀　二册　【編者】松下大三郎【刊行】歌集部は大正十四年、索引部は大正十五年、紀元社。【内容】國歌大觀に勅撰集をはじめ歴史物語、日記草子類中の歌を集めたに對し、この書の歌集部は、主として家集をとり、私撰集たる古今和歌六帖及び諸種の歌合をのせてゐる。家集は六歌集、歌仙歌集以外、六十四の諸家集所收。大江千里集・元良親王御集・清慎公集・西宮左大臣御集・海人手子良集・御堂關白集・本院侍從集・清少納言集・紫式部集・伊勢大輔集・曾丹集・實方朝臣集・前大納言公任卿集・祭主輔親卿集・藤原長能集・馬内侍集・惠慶法師集・安法法師集・小馬命婦集・爲賴朝臣集・閑院左大將朝光卿集・藤原義孝集・權中納言定賴卿集・大貳三位集・辨乳母集・出羽辨集・祐子内親王家紀伊集・源賢法眼集・大納言經信卿集・津守國基集・藤原入道集・藤原基俊家集・左京大夫顯輔卿集・清輔朝臣集・故刑部卿集・寂然法師集・北院御室御集・式子内親王集・待賢門院堀川集・權中納言俊忠卿集・中納言雅兼卿集・成通卿集・登蓮法師集・相如集・源三位頼政卿集・二位院讃岐集・小侍從集・按納言集・忠度集・前大納言實國卿集・入道大納言資賢卿集・鴨長明集・惟宗廣言集・源師光集・金槐和歌集・源有房朝臣集・藤原隆祐朝臣集・菅原在良朝臣集・俊成卿女集・兼好法師集・慶運法印集・慕景集、これに加ふるに和泉式部集を補遺としてゐる。歌合は寛平御時后宮歌合・亭子院歌合・天德四年内裏歌合・高陽院七番歌合・千五百番歌合・六百番歌合の六つを所收。索引部は歌集部の各歌の第一句と第四句とを五十音順に排列し、且つその下に歌集部と符合せる番號を記入し、索引に便してゐる。【價値】國歌大觀と共に、非常に便利なものである。索引の方法は各歌の數字番號が卷首から卷末まで通し番號で、その點は却つて便利でさへもある。國歌大觀は五句索引である。これは第一句と第四句だけの索引であるから、便利の點で國歌大觀には劣つてゐる。〔藤川〕

續昆陽漫錄　隨筆　一卷　【著者】青木敦書【諸本】寫本のみで傳はつたが、明治三十八年「百家說林」下卷に所收刊行【解說】本篇六卷の後を承けたもので、和漢の群籍を涉獵の際、心づきの處を抄して考案を附したやうなもの。事物の起原や稱謂の出處を知るに便がある。細馬・砂金・白金・川口湖・大水・唐商・周髀・烏羽表・高瀨舟・土官・封戸・阿蘭陀尺圖等百七十五目を擧げてある。〔和田〕

續小夜嵐　「小夜嵐」を見よ。

續猿蓑　一册　【編者】榎元井筒屋の奥書に、「何人の撰といふ事をしらず」とあるために、編者が先づ疑問となるのであり、越人は「不猫蛇」で支考の僞撰と見てゐるのであるが、支考は「削かけの返事」その他に於て、芭蕉が江戸の沾圃を撰者とし、芭蕉が伊賀で密撰したのを自分が手傳つたものであると云つてゐる。本集の内容から見ると、越人が疑ふほど支考に深い關係のあるものであることは疑ないが、又沾圃が特殊の關係を持つものであることも看取される。大體本集は去來の元祿六年の書簡に於て、その時以前から撰集されつつあつたものであることが知られ、なほ去來の「花實集」に芭蕉が本集に或る句を入れなかつたことを云ひ、土芳の「黑册子」に、芭蕉が本集に或る句を入れたことを語つたことを云つたりしてゐるので、芭蕉が本集の撰にたづさはつたことは疑なく、本集の内容體裁その他から芭蕉が沾圃を撰者としたと云ふことも信ぜられ、それが芭蕉歿後どうした關係でか支考の手へ渡つて支考が樣々手を加へたものであることが、種々の資料や本集の内容體裁から十分推斷される。【名稱】内題には、續猿蓑集とある。沾圃の「猿蓑にもれたる霜の松露哉」（歌仙の立句）の句もある如く、「猿蓑」（別項）の續集として企てられた意味のものであらう。然るに本集の名稱としては古く「續猿蓑」と「後猿蓑」との兩樣の名稱が見える。元祿六年と推定される去來の書簡には後猿蓑と見え、同八年の「笈日記」にも後猿蓑と見え、同九・十年頃に成つた「花實集」には續猿蓑、同十年の去來の「贈晋氏其角」書」にも續猿蓑と見え、かくて本集以後享保頃までもこの兩樣の名稱が殆ど半々に見える。これ等

後そのまゝ單行本としても刊行された。【解說】「花江都歌舞妓年代記」（別項）の後を承け、文化二年より安政六年七月まで五十五年間に亘り、江戸三芝居に興行された狂言を主として、役者の動靜や臺詞等にも及んで記述されてゐる。卷一は文化二年より同十一年、卷二は文化十二年より文政四年、卷三は文政五年より同十年まで、卷四は文政十一年及び十二年、卷五は天保元年及び二年で、卷六以下は一卷一年の割である。この種のものとして通書もあつて研究すべき餘地なほ多く、寫本で傳はるのみで刊本はない。明德三年乃至四年に、豐原統秋の書寫したと云ふ奥書のある古寫本もある。〔藤田〕

續群書一覽　「群書一覽」を見よ。

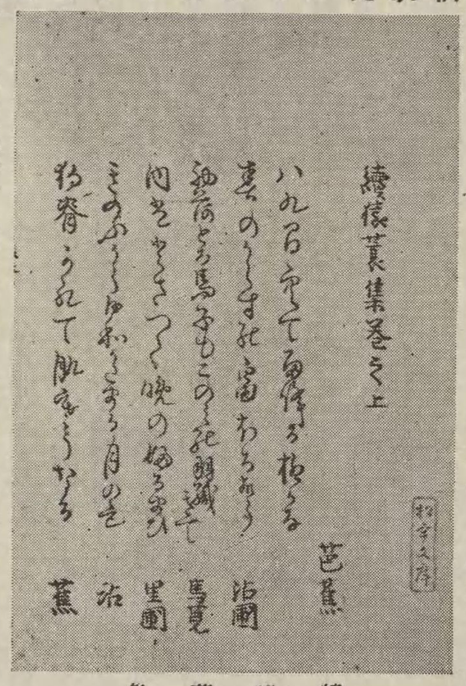
續群書類從　「群書類從」を見よ。

俗語　國語學【名稱】俗言とも。【解說】場合によつて種々の意味に用ひる。（一）「俗」には、風習の義がある故、或る國又は或る地の俗語といつて、その國の言語又はその地

【内容】本書は「古事談」（別項）に摸して作つたものである。第一卷は王道后宮篇で、堀河院・白河院・寛平法皇・皇嘉門院・宜秋門院等皇室を中心とする史話が多い。第二卷は臣節篇で九條師輔・一條伊尹・匡房・在衡・長手等著名な朝臣の生活、有職故實等の話があり、第三卷は缺けてゐる。「古事談」から推察すると、僧行か勇士とでも云ふのであつたらう。第四卷は神社佛寺篇で、六角堂・長谷寺觀音像等の由來の話、行教が宇佐八幡に仕へる神佛混淆のしろし」と記してゐる。この記事は、嘉曆元年三月二十日、春宮邦良親王薨去、同三十日、東宮方公卿女房等三十餘人出家の記事に續いてゐるから、文中、「このほど」といへるは、嘉曆元年三月の頃を指し、四季以下の部分が成就した年代を示すものとも思はれる。「勅撰次第」には、「嘉曆元年六月九日返納歟」と見える。時恰も、風雲急なる時で、元亨四年（正中元年）は、後醍醐天皇が幕府追討の事を謀りたまひ、遂に藤原資朝・俊基兩卿が鎌倉に拘引さ

の中、去來は早く一人で兩樣を使ひ、許六・支考も兩樣を使つて行つてゐる。この兩樣の中、續猿蓑といふ方が優勢になつたのは、本集が「俳諧七部集」(別項)に選ばれた後のことと思はれる。又この名稱の選定者も判然してゐない。【刊行】元祿十一年五月【諸本】原版は白茶表紙の半紙本二册で、ゐづつ屋庄兵衞開版。その他諸版の「俳諧七部集」及び芭蕉全集(俳諧文庫)・蕉門俳諧前集(俳書大系)・芭蕉全集(日本名著全集)等に所收。

【內容】上卷が連句、下卷が發句で、上卷は芭蕉・沾圃・馬莧・里圃四吟歌仙一卷、馬莧・沾圃・里圃三吟歌仙一卷、里圃・沾圃・芭蕉・馬莧四吟歌仙一卷、沾圃の「猿蓑にもれたる」の句を立句とする脇起風の芭蕉・支考・惟然歌仙一卷、支考の「今宵賦」を前書とする芭蕉・曲翠・臥高・惟然・支考五吟歌仙一卷が收められ下卷は四季各部と釋教之部附追善哀傷、旅之部の六部に部立して、發句五百十九章を收め、その中芭蕉三十一句、支考二十四句、沾圃二十句が多い方である。秋之部の芭蕉の名月の二句に支考が評を後記してゐる。なほ本集には墨消しや書入や訂正やがあつて、井筒屋の奥書に草稿を手跡の儘板行したと云つてゐる如く、さう見えるものになつてゐるが、これは種々の資料によつて支考の作爲であることが斷定される。【史的地位・價値】「俳諧七部集」中最後の位地を占めてゐるが、正に芭蕉晩年の俳風を代表するもので、「炭俵」(別項)の姉妹篇或は續篇の如き地位を取り、「炭俵」と同じく輕み



續猿蓑集

の調子のものと言ひ得る。去來は、「ひさご」「猿蓑」以後を云つて、「其後又一ツの新風を起さる。炭俵・續猿蓑是也」(贈三晋氏其角書)と言ひ、許六は、「今世間の人、後猿蓑の誹諧はかるみ有て面白き事也とて云々」(誹諧問答)と言ひ、吏登は、「續猿蓑は炭俵にあるなり、全體は之度程の流行ぢやと先師(嵐雪)などのいはれた」(七部捜)と云つてゐる。支考は最後の結成者であるだけに、「祖翁一代の法華經にして」(削かけの返事)とか、「法華虛實一合とならば花にして花ならず、實にして實ならんや」(發願文)とか言つてゐるが、これは勿論割引して考へねばならぬけれども、「炭俵」ほど人事俗事に傾く弊が少く、この點から「炭俵」に優る所がある。〔志田〕

【參考】本文中引用以外の主なる末書○俳諧古集之辨大貫杜哉○俳諧或門石河積翠○八九間雨柳鈴木李東○芭蕉葉ぶね田川鶯笠○七部集大鏡茂呂何丸○續猿蓑註解同上○七部婆心錄原田曲齋○詩人芭蕉荻原蕉月○七部集解說志田義秀(改造社版俳句講座俳書解說篇)

續三千里 ぞくさんり　紀行　一册　【著者】河東碧梧桐【刊行】大正三年三月金尾文淵堂

【內容】「三千里」(別項)の續編。曩に日本全國遍歷を企てた著者は、先づ東北方面を一巡して一旦歸京して後、明治四十二年四月、再び旅裝を整へて出發した。甲斐を振出しにして信濃に入り、越後を越え、飛驒を過ぎ、越中を經て能登に踏み入り、加賀に至つた。轉じて伊勢に赴いて遷宮の御儀を拜觀し、更に美濃を過ぎ、越前に戻り、それより丹波・但馬・因幡・伯耆・出雲・石見・長門といふ順に歷遊してゐる。この卷は下關で擱筆してある。著者はそれに續いて、九州に渡り、四國を巡り、山陽道を過ぎて、近畿に入り、東海道を經て四十四年七月、東京に戻つた。この行は二年三ケ月を費し、初度の東北の旅一年三ケ月と併せて、前後三ケ年半を以て、全國俳句旅行の目的を果した譯である。この中、九州以後の記は「續三千里」下册として刊行せらるゝ豫定で遂に出なかつたので、上一册が出てゐるのみである。但し「日本及日本人」紙上、「續一日一信」として載せあるものに、その未刊の部を見ることは出來る。【影響】俳壇の新傾向運動は、四十一年頃より漸く顯著となつたので、恰も著者のこの第二次旅行が、直接にその煽動ともなれば宣傳ともなつた。各地の俳句會では俳三昧といふ句作練行が試みられた。研究的の製作が熱を帶びた事この當時の如きは、前後に稀であつた。殊に城崎・玉島の兩所に於ける俳三昧は勇猛精進の意氣に燃えてをり、所謂新傾向運動に決定的の方向を與へた信條は、この間の製作意識より釀成せられたものと云つてよろしい。兎も角著者のこの旅行と本書の發表が、俳壇の新運動を促進した事は顯著である。作句の中より、

賣人我を頭となす夏野連立ちて

有德者に後妻の狂ひさく花か

俗耳談 ぞくじだん　隨筆　正編次編各五卷二册　寫【著者】山本格安口授、門人加藤元敏・早川敬明・柳川通故・柴田成美・矢島泰度の分卷筆記したもの。【解說】和漢の語義・事原・古諺等を人の問ふに對へて解答したもの。正編卷一に亥は豕以下、卷二に貘夢を食ふ以下、卷三に箕うちが故箕以下、卷四に物事有のままなるをよしとす以下、卷五に常に反する物以下、次編卷一にいとゞと云ふ詞以下、卷二に福を神佛に禱る事以下、卷三に水をとと謂ふ事以下、卷四に經と云ふ詞以下、卷五に箇の字をかうりと訓ず以下各數十項を載せてゐる。序跋はない。寫本に誤脫が多い。【著者小傳】山本格安は尾張の博學者で、天野信景の門人。號を寛齋と言つた。書を能くして從學者も多かつた。歿年未詳。寶曆中の人と云ふ。別著に「燕石錄」「寛齋漫錄」の二隨筆がある。〔和田〕

續七部集 ぞくしちぶしふ　「俳諧七部集」を見よ。

續寫生文集 ぞくしやせいぶんしふ　寫生文集　【編者】阪本四方太【刊行】明治四十年四月【內容】「ホトトギス」に於て、その第五卷第一號(明治三十四年十月三十日)から第九卷(三十九年九月一日)に至るまでに應募掲載された寫生文のうち、傑作と認められるもの、又は異色ありと認められるもの三十九篇を選び集めたものである。名稱からは、先に刊行された子規・漱石・虛子・四方太等の文を集めた「寫生文集」に續くものであるが、この方は、無名の作家が多く、內容からいへば、先に刊行された「寸紅集」に次ぐべきものである。取材觀察が多種多樣で頗る見るべきものがあり、「寸紅集」よりも一段の進歩を見せ、正に寫生文壇の最

高項を示すに足るものである。次の諸類は、年次によつて記事・紀行・雜題の三種に分けてある。〔石井八庄〕

續春夏秋冬（ぞくしゅんかしうとう）　俳句集　四册

【撰者】河東碧梧桐　【刊行】明治三十九年、四十年　【内容】子規一派の俳句の最高の發表欄たる新聞「日本」紙上の日本俳句より選抄したものであるから、代表的な選集として、「春夏秋冬」（別項）に次ぐものと見做して宜しいが、年代は明治三十六年以後、恰も子規の病歿前、日本俳句が碧梧桐選となつてより以來であるから、碧梧桐の趣味傾向が濃厚に現はれてゐるとも見られる。「新俳句」から「春夏秋冬」になつて、句の進歩したことは、子規子の明言する如くである。「春夏秋冬」から「續春夏秋冬」になつて、句が如何に變化したか、予はこゝに明言することを得ぬ」、と編者は云つてゐるけれども、「春夏秋冬」以後、表現上の進歩は著しきものがあり、子規に依つて創められた新派俳句なるものは、この時代に於て一の頂點に登りきつたものと云ふべく、從つてこれに續いて一轉化をなす素因を胚胎してゐる、それが卽ち新傾向（別項）である。編者の言に「予の日本新聞選者たること約四年、一日閲讀の句數約八百、四年間一千四百六十日の句數約百十五萬、其中毎季千句併せて四千句を得て此集を成す」と。刪存の標準の嚴密であることはこれでも知られる。〔荻原〕

霞む日やよき鞍買ひに馬の主　碧童
谷淺き灯も三つ二つ螢かな　六花
里へ里へ路くだりなり野萩咲く　八重櫻

足薪翁記（そくしんをうき）　隨筆　三卷　【著者】柳亭種彦　【諸本】明治三十九年「百家說林」續編に收められて上印。【解說】江戸時代の流行語、吉原の眞俗等に關する事項の考證を錄したもので、卷一に鼠の五郎兵衛以下十六條、卷二に尼が紅粉以下十八條、卷三に玉川主膳以下十五條を收めてゐる。劇場・見せ物・遊廓・俗曲等に係る記事が多く、概ね古書を引いて攷證してゐる。挿圖が少々ある。（著者の傳記は「種彦」參照）〔和田〕

俗神道大意（ぞくしんだいい）　「巫學談弊」を見よ。

俗箏（ぞくさう）　「箏」を見よ。

續々歌舞伎年代記（ぞくぞくかぶきねんだいき）　演劇書　乾三十六卷　【編者】田村成義　【成立】明治三十六年の頃か。【刊行】大正十一年、編者三周忌に際し、乾卷（明治三十六年迄）が出版されたが、坤卷（大正九年迄）は大正大震災のため刊行を見ずして烏有に歸した。但し稿本「東都演劇年鑑」二十二册（明治元年—四十二年）は、東京市日比谷圖書館に藏せられてゐる。【解說】「續歌舞伎年代記」（別項）の後を承けて、安政六年九月以降の江戸東京の各座の興行、俳優の動靜等を年代的に叙述し、大正九年末編者の殘する迄に及んだのであるが、乾卷のみが殘されてゐる。この期は日本演劇史上からも大に興味ある時代の一であるが、編者は又明治・大正劇壇と直接に相當緣の深い人であつた故に、記述は正確詳細と言へよう。評判記及び新聞劇評の拔萃、編者自身の批評、又脚本の梗概實說等を加へてあるのも一特色であり、單に歌舞伎に止まらず、新興の新派劇や諸劇場で興行された諸藝に就いても記載を怠らぬのは便宜である。又大劇場以外、小芝居の興行についても、若干の遺漏はあるにしても、記述を怠つてゐないのは貴重な文獻である。〔增田〕

續々群書類從（ぞくぞくぐんしよるゐじゆう）　叢書

俗事に傾く弊が少く、この點から「炭俵」に優る所がある。〔志田〕

【參考】本文中引用以外の主なる末書○俳諧古集之辨大貫杜哉○俳諧或門石河積翠○八九間雨柳鈴木李東○芭蕉葉ぶね田川鶯笠○七部集大鏡茂呂何丸○續猿蓑註解同上○七部婆心錄原田曲齋○詩人芭蕉萩原蕁月○七部集解說志田義秀（改造社版俳句講座俳書解說篇）

續三千里（ぞくさんりん）　紀行　一册　【著者】河東碧梧桐　【刊行】大正三年三月金尾文淵堂俳句會では俳三昧といふ句作練行が試みられた。研究的の製作が熱を帶びた事この當時の如きは、前後に稀であつた。殊に城崎・玉島の兩所に於ける俳三昧は勇猛精進の意氣に燃えてをり、所謂新傾向運動に決定的の方向を與へた信條は、この間の製作意識より釀成せられたものと云つてよろしい。兎も角著者のこの旅行と本書の發表が、俳壇の新運動を促進した事は顯著である。作句の中より、

貝人我を置となす夏野連立ちて

【解說】本稿を擧ひる叢書に二種ある。（一）は古書保存會本、（二）は國書刊行會編纂のものである。前者は五册より成り、明治三十六・七年に刊行。第一卷、編年殘篇（應德元年皇化記）南都七大寺巡禮記・平城宮大內裏跡坪割之圖及附圖。第二卷、（釋家部）聖德太子傳私記（古今目錄抄）、（雜部）獨物語。第三卷、（帝王部）延久四年五年日次記、（官職部）有職問答・公武大體略記、（文筆部）藤原公捨經之記、（合戰部）大津籠城合戰記。第四卷、（公事部）編旨抄、（雜部）老師物語聞書・近藤氏書上・毛利家樣子・前九鬼長門守守隆働拔書。第五卷、（裝束部）裝束色彙（荷田在滿撰）を收めてゐる。この古書保存會は「古今の貴重圖書を刊行」する目的を以て明治三十六年に創設されたもので、吉川弘文館が中心となり會員組織の下に、第一期刊行として本叢書が選ばれた。又後者は井上頼圀、佐伯有義監修の下に、同三十九・四十年に刊行。第一册神祇部、第二・三・四册史傳部、第五册記錄部、第六・七册法制部、第八・九册地理部、第十册教育部、第十一・十二册宗教部、第十三册詩文部、第十四・十五册歌文部、第十六册雜部となつてゐる。國書刊行會叢書のうち第一期に屬するもので、「塙保己一の輯めたる正續二編の後を承けて其遺漏を拾ひ、且其未だ取るに及ばざりし近世（江戸幕府時代）の典册」を收めたものである。正續史籍集覽・存採叢書・帝國文庫（各別項）等に已に刊行されたものを省き、原本三百六部七百三十五卷を、「群書類從」（別項）の部門二十五を神祇・史傳等十二のそれに編制して收載する。底本は官府名家等の祕籍を用ひ、校訂は各卷專門家の手を經たもので、嚴密な點に於て定評のあるものである。〔土井〕

續其袋（ぞくそのふくろ）　俳文・俳論集　一册　【編者】雪中庵蓼太　【刊行】寶曆九年己卯九月　【内容】寶曆六年、嵐雪（別項）の五十回忌に當り、蓼太（別項）が先師の遺文十章を、その草稿に據つて集めて初卷とし、又遺句を立句として、社中その他の人々が表八句を興行したもの二十餘卷と、一人一章の名錄發句とを加へ、追善のために出版したもので、嵐雪の「其袋」（別項）に繼ぐ意でかく名づけたのである。安永三年に出た蓼太編の「嵐雪文集」は、本書の初卷を增補したものと言つてよい。〔瀬原〕

卽題（そくだい）　「題詠」を見よ。

俗つれ〳〵　「西鶴俗つれ〳〵」を見よ。

則天文字（そくてんもんじ）　「漢字」を見よ。

俗耳鼓吹（ぞくにくすゐ）　隨筆　一卷　【著者】大田覃　【諸本】活東子の「燕石十種」の一部であつたが、國書刊行會本燕石十種所收　【解說】著者の數多い隨筆中の小品で、江戸期後半に於ける地口（語呂）・戲場・茶番狂言・俳優の評、淨瑠璃作者紀海音の評、近松門左衞門の評、遊女瀨川の歷世、力士谷風梶之助・三絃名手原武太夫・狂歌師一本亭芙蓉花等の事、河東節歌曲の名句拔萃、曲舞（謠曲）の詞曲の名句拔萃等を擧げてゐる。まゝ滑稽捧腹の記事もある。天明八年の著者自序があつて杏花園と署してゐる。本文の初めには惰農子著とある。〔和田〕

續日本歌學全書（ぞくにほんかがくぜんしよ）　歌書　十二册　【編者】佐佐木信綱　【刊行】明治三十年十二月三十一日より順次刊行、三十三年五月二十日に至る。博文館。【解說】歌學全書（別項）は大體近世以前のものを收めたに對し、この叢書は、近世の歌集・歌論書の主なるものを收錄し、明治初期の歌集・歌論等をも收めてゐる。第一編は賀茂眞淵翁全集上卷と題し、

「晩花集」(長流)、「漫吟集」(契沖)、「春葉集」(春滿)、「賀茂翁歌集」(眞淵)の諸家集、「にひまなび」(眞淵)、「國歌八論」(在滿著宣長評)、「國歌八論斥非」、(大菅公圭著・本居宣長評)、「國歌八論餘言」(田安宗武)、「國歌八論餘言拾遺」(眞淵)の歌論書及び「十二番歌合」(寛保元年八月於荷田在滿家)を收め、第二編はその下卷で、「うけらが花」(千蔭)、「琴後集」(春海)、を初め、眞淵系の歌集・歌論等を收め、第三編は本居宣長翁全集で、翁の自撰歌及び石上私淑言を初めとし、鈴屋系の人々の歌集や歌論書をのせてゐる。第四と五編は香川景樹翁全集と題し、景樹を初め、その系統の歌集・歌論等を載せ、第六編は小澤蘆庵翁全集と題し、その歌集・歌論以外、「つゞら草子」(秋成)、「閑田百首」(蒿蹊)、「垂雲和歌集」(澄月)、「夢宅和歌集」(夢宅)、「杉のしづ枝」(蓋生子)をも收めてゐる。第七・八編は近世名家家集、第九編は近世長歌今樣歌集、第十編は桂園門下家集、第十一・十二編は明治名家家集にあててある。各卷初めには筆者の略歴、著書の解題等を附してある。寫本として傳はつてゐるものは勿論のこと、木版本と雖も一般には比較的入手し難いのであるが、この叢書が、かくの如き多數のものを收めて出版したことは、學界にとつても貢獻する所が甚大で、近世和歌・歌學の研究者にとつて、座右缺くべからざるものである。〔藤川〕

續日本隨筆索引（ぞくにほんずいひつさくいん）「日本隨筆索引」を見よ。

續本朝文粹（ぞくほんちやうもんずい）「本朝續文粹」を見よ。

俗枕草紙（ぞくまくらのさうし）　浮世草子　三册

【作者】斑竹堂陸葦。尾張の俳人とあるだけで傳記未詳。【名義】一名「借上納言」は淸少納言のもぢり、更に原作「枕草紙」を戲稱した意をも加味したものである。「枕草紙」に俗の字を冠したのは、無論卑俗の意に外ならない。【成立】寶永七年春。著者の跋文に據れば「是も春まち得たればさくらの板にめをだす事となりぬ」とあれど、恐らく出版するに至らなかつたものらしい。江都東流隱士冷月庵殘棑子の序がある。【諸本】浮世草紙刊行會浮世草紙第三卷男色大鑑所收。現在帝國圖書館本以外に傳本を見ない。【解說】所謂「擬物語」の一種で、各卷五話づつ都合十五話より成る。各章の題號は原題をその儘襲用してゐるが、內容は全く作者の創意になる隨筆的漫評漫錄で、就中、古今に亙る歌舞音曲・演劇・遊里遊女の評判から、當代に於ける文藝評論もあれば、風俗世相に關する辛辣な批評も加へられてゐる。左に內容の一端として粹不粹を論じた「たどしへなきもの」の一章を抄錄する。

「主と被官と、福の神と貧乏神と、三谷女郎と鮫が橋者と、鳥の跡といへる新歌集に、何とやらしてなぐさめはしとか待りしも、下には此さとの色をふまへてこそよめるならむ。梅津歌門が新徒然に、太夫のおほん位はいともかしこし、やりてかぶろの末々迄大やうにしてやんごとなきと書きけるを思ふに、げにも格子のみありさまは更なり、さん茶なども揚屋一座はゆゝしと見ゆ、五三寸の女郎迄はぶれにたれど猶なまめかし。それより下つかたこんかきの嗟連、さてははしゞ〳〵の木綿乙女、別して此里の五十錢君も、酒相すこしあぢらしく、いきはりのはづみに團十郎をにせ口說の辯口さはやかなるは、名だいものといふに成つて、いづれ籬の人だちもたえぬ故、みづからの心には、全盛なりとおもふらめといと口惜し。俳諧師一晶がたはぶれにいはく、鮫が橋とあらむ句には、檢物師さし物やの若い衆、扨は大工の番匠童、こんやの手間賃足駄中間なんど付くべしとぞ。想じて

續萬葉集（ぞくまんえふしふ）　古代歌謠研究書

【著者】武田祐吉【名義】本書の書名の意味は、「萬葉集」に洩れた萬葉時代の歌を總集して一卷とし、これに萬葉集に續く卷だと云ふ意味から「古今集」の例をも考へて「續萬葉集」の名を與へたのであらう。【刊行】大正十五年五月【內容】本書は、「萬葉集」時代及びその以前の歌謠で「萬葉集」に見えないもの全部を集め、それを原文・假名まじり書きの兩樣に記し、現代語譯を附し、歌作事情の說明のいるものは簡明に事情を說明した書物である。但し著者は、「萬葉集」は天平寶字三年で終つてゐるが「今またその年までに歌を限るとすると、かなり多くの歌を、或はその年以後に出來たものであるかも知れぬといふ理由のもとに捨て去らねばならない」と云ふ實際的な立場と、同じ奈良京時代であるのに、人爲的な天平寶字三年でくぎりをつけるのは不自然だと云ふ理論的な立場から、寶字三年でくぎらず奈良時代末でくぎつて、それ以前と判定すべき歌を全部入れてある。なほ平安期に出來た書でも、それに收めてある歌謠が、奈良期のものと判定し得る場合(土佐日記・日本後紀の如き場合)は本書に收めてある。本書に歌をとつた書物は左の三十書である。

伊勢國風土記、歌經標式、神樂歌、琴歌譜、皇太神宮儀式帳、古今和歌集、古語拾遺、古事記、催馬樂、上宮聖德太子傳補闕記、上宮聖德法王帝說、正倉院文書、釋日本紀、續日本紀、丹後國風土記、東大寺要錄、土佐日記、日本後紀、日本國現報善惡靈異記、日本書紀、年中行事祕抄、播磨風土記、肥前國風土記、常陸風土記、佛足跡歌碑、本朝月令、萬葉集註釋、新撰國史、新撰神祇本源、尾張國熱田太神宮緣起(五十音順)。

【價値】本書と類似の聚集を試みた書は、德川期に既に「萬葉緯」や、「南京遺響」等三四存する。殊に記紀の歌謠のみに關するものは、林諸鳥の「記紀歌集」以下少くない。併しその所收書の撰み方が嚴密でなく、疑はしき書册をまで中に入れてゐたり、當然入るべきを逸してゐる書があつたりして完全とは言ひ難い。殊に後者の點では、「琴歌譜」の如く近年發見された資料は當然逸してゐる。本書はこれ等のすべての缺點から逃れてゐて、材料の正確さ、資料の豐富さに於て推稱に價する。同樣の書に、佐佐木博士の「日本歌選上古之卷」(別項)が既にあるが、全體の編纂に於て、附錄の種類に於て、夫々特色を具へてゐて、共に注意すべき良書である。ただ本書のとつた雜歌・相聞・挽歌の分類は本書の特色ではあるが、必ずしも有效ではないと思はれる。〔森本〕

續萬葉集祕說（ぞくまんえふしふひせつ）「古今餘材抄」を見よ。

續萬葉論（ぞくまんえふろん）「古今和歌集打聽」を見よ。

續無名抄（ぞくむみやうせう）　隨筆　三卷

【著者】岡西惟中【刊行】延寶八年【解說】「長明無名抄」に擬してこの書名を題したものであるが、歌論・歌評に止まらず、漢土詩賦・唐音等の記事にも及んだもので、下卷の末に「世話字盡」と題して江戸時代俗間通用語に當てた漢字三百ばかりを表にしてある。上卷に平等院建立の事以下三十則、中卷に三部神道の事以下四十四則、下卷に萬葉文字ぬき書以下七則を收めてゐる。歌話中には著者の師烏丸資慶卿と著者との關係を述べたもので、聊か自讃に似たふしが多い。著者はまた俳人である所から俳諧に關した談話も少くない。延寶八年の著

者の自序にある。巻尾に、「延寶八年八月吉日」と書林名記載の名がなかしい。【和田】

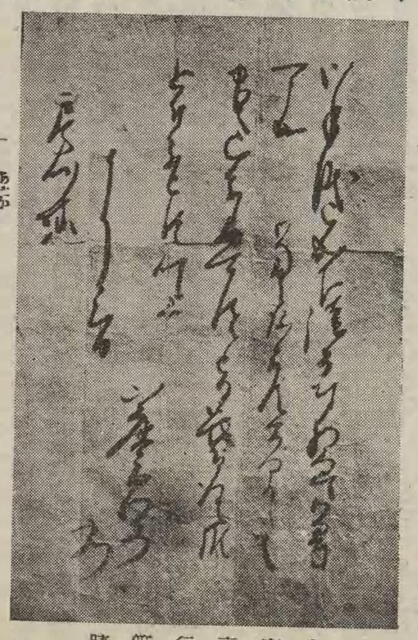
續名聲戲場談話（ぞくめいせいぎちやうだんわ）　演劇書　三卷【作者】幕末にゐた狂言作者かと思はれるが詳かでない。【成立】嘉永の末か。【諸本】原本と認められる寫本の外に、轉寫された幾本かがあるが、雜誌「歌舞伎」（五の一〇）以下數回に校訂を加へられて、飜刻連載された。【解説】江戸歌舞伎の年表と見るべき「役者名聲牒」（別項）の續篇として、明和元年以後文政元年に至る間の江戸歌舞伎の興行記事を連載したものである。天・地・人三卷の内容は、それ〴〵中村座・市村座・森田座と分類せられ、各卷は年を逐うて興行名題の下に、役割・藝評、主な役者の動靜等にも及び、「役者名聲牒」に比して一層精密である。また「歌舞伎年代記」の類以上に、年表的正確さを持つのも一特色である。編纂の資料は、恐らく紋番附の如きものではなかつたかと思ふ。部分的には誤謬もないではないが、他の同樣資料とは全く別途に詳細な記事であることが、江戸歌舞伎研究資料として、本書が高い地位を有する所以である。〔守隨〕

續山の井（ぞくやまのゐ）　俳諧集　五册【編者】北村湖春【刊行】寛文七年十月十八日、下御靈前谷岡七左衞門板【解説】前四卷が發句、後一卷が附句で、發句の部の末尾に湖春の「寛文七年五月良辰、依二家父之命一而妄部二類之一、以附二增山井之後一者也」との跋がある。季吟の「山之井」（別項）は、季寄（きよせ）で例句も擧げてあるが、その「增山の井」（別項）は季寄だけであるので、季吟がその例句集に當るものの編纂を湖春に命じたものらしく、題號は「山之井」を標準にして附けたものらしい。作者九百六十七人、總計十八萬餘句、句數に發句四千四百七十九句、附句五百五十六句で、季吟一派の作者の作が多く、季吟の勢力範圍を窺はしめる。句數の最多數者は季吟の門人井狩友靜の發句百二十九句附句十九句で、最後の卷末の續山の井作者並句數には友靜考とあるから、これは友靜の作製に成つたものらしく、友靜のこの頃のかゝる特殊な關係が見られる。【價値】本集は延寶四年の季吟の「續連珠」（別項）と共に、季吟一派の模樣を知るに二大中心をなす撰集と云つてよいが、宗房（むねふさ）の頃の芭蕉を知るにも不可缺のものである。芭蕉の故主藤堂蟬吟の作が發句二十九句附句四句見られ、宗房は發句二十八句附句三句見られるが、宗房としての作の纏まつて見られるのは本集が第一で、これに次ぐものは延寶三年の宗信（令德門）の「千宜理（ちぎり）記」に於ける發句六句位のもので、他は皆三句以下である。又捨女（別項）が發句三十六句附句五句採られてゐることも注意して置いてよいであらう。〔志田〕

俗謠（ぞくえう）「歌謠」を見よ。

續連珠（ぞくれんじゆ）　俳諧集　七册【編者】北村季吟【刊行】延寶四年十一月十八日、下御靈前谷岡七左衞門板【解説】前二册が四季・賀・戀・雜の附句、後五册が季題別の發句で、作者八百八十四人、國別五十箇國、句數は附句千百五十四句、發句五千四百九十五句、合計六千六百四十九句である。季吟一派の作者の作が多く、季吟の勢力範圍を窺はしめる。【價値】本集は萬治三年の季吟の「新續犬筑波集」（別項）寛文七年の湖春の「續山の井」（別項）と共に、季吟父子結集の三大俳諧集で、この三集を通じて季吟一派の勢力及び俳人の推移を窺ひ得る。芭蕉が本集に附句四句、發句六句採られてゐて、その中の七句は江戸或は伊賀上野松尾宗房とあり、殘りの三句は伊賀上野松尾桃青とあり、これまで本名の宗房で現はれてゐた芭蕉が、桃青と號し始めた時機を知るべき有力な資料である。又捨女が發句三十一句採られてゐることも、「續山の井」に同數以上採られてゐたことと共に、捨女資料として閑却し難いものである。〔志田〕

素行（そかう）　儒者・兵學者【姓名】山鹿高祐（一名は義矩）。字は子敬。通稱甚五右衞門【別號】隱山（一に因山に作る）【生歿】寛永元年に生れ、貞享二年（一六八五）九月二十六日歿す。享年六十四【學統】父玄庵は、江戸に出でて醫を業とした。因つて林羅山（別項）の門に入り、後、北條氏長に從つて兵法を學んだ。【閲歷】奥州會津の人。播州赤穗侯淺野長直に聘せられて祿一千石を受け、幾ばくもなく仕を辭して教授し、傍ら著述を業とした。その著書により程朱を辯駁した故を以て罪を獲、赤穗に幽閉せられ、居ること十年、釋されて江戸に還つた。但し處士を集めて教授することをば禁ぜられた。蓋し當時、由井正雪等不逞の徒を集めて不軌を圖つた事があつたからである。元祿十四年、赤穗侯淺野長矩が死を賜はり、國を除かれた時、その遺臣四十七人の復讐の擧があつたが、これは皆素行の教育の致す所である。明治四十年十月、正四位を贈られた。【著作】聖教要錄三卷○謫居童問六卷○中朝事實二卷○武教要錄七卷○武教小學一卷○四書句讀大全二十卷○七書諺解三十八卷○配所殘筆一卷○山鹿語類四十三卷。〔佐久〕



山鹿素行筆蹟

蘇合香（そがうかう）　雅樂舞曲【名稱】蘇合香といふ草から採つた藥、蘇合香の名をとつて樂名としたものである。單に蘇合ともいふ。【性質】左方樂。新樂、大曲。磐涉調曲に屬する。序五帖（一二帖は拍子各二十、三・四・五帖は拍子各二十二）、破四帖（拍子各二十）、急四帖（拍子各二十）。舞があり六人で舞ふ。舞人は常裝束袍を着け、菖蒲甲と呼ぶ冠をかぶる。これは蘇合草の葉に象つたものである。答舞には「進宿德」を用ひる。【沿革】普通の説ではこれを印度樂であるといふ。即ち「教訓抄」に「阿育（あいく）大王、病にわづらひ玉ひたりけるに、蘇合香と云草を藥にえ玉はずば、存命かたかるべしと申ければ、一國の大事にてもとめけれども、おほかたもありがたき草なれば、求め得ず。經二一七日一てこの草を得たり。即病癒え給ければ、喜び給て作給と云。儛は育偈と云ける人、この草を甲として起レ座舞けるに、一殿の内匂かうばしかりけり。以二此草名一爲二樂名一とある。これに對する異説としては、この曲は蘇合國より出づとか、又は陳後王が作つた等の説があるが、それは信ずるに足りない。然るに支那の「教坊記」「樂府雜錄」「文獻通考」「羯鼓錄」等に、何れもこの樂名があつて

出版したことは、學界にとつても貢獻する所が甚大で、近世和歌・歌學の研究者にとつて、座右缺くべからざるものである。〔藤川〕

續日本隨筆索引（ぞくにほんずいひつさくいん）「日本隨筆索引」を見よ。

續本朝文粹（ぞくほんちやうぶんすい）「本朝續文粹」を見よ。

俗枕草紙（ぞくまくらのさうし）　浮世草子　三册【作者】斑竹堂陸葦。尾張の俳人とあるだけで傳記未詳。【名義】一名「借上納言」は清少納言のもぢり、更に原作「枕草紙」を戯稱した意茶なども揚屋一座はゆゝしと見ゆ、五三寸の女郎迄ははぶれにたれど猶なまめかし。それより下つかたこんかきの嘘連、さてははしゞ〳〵の木綿乙女、別して此里の五十錢（げん）君も、酒相すこしあぢらしく、いきはりのはづみに團十郎をにせ口說の辯口さはやかなるは、名だいものといふに成つて、いづれ籬の人だちもたえぬ故、みづからの心には、全盛なりとおもふらめといと口惜し。俳諧師一晶がたはぶれにいはく、鮫が橋とあらむ句には、檜物師さし物やの若い衆、扨は大工の委匠童、こんやの手間賃足絡中間なんど好くべしとぞ。惜しむ

定し得る場合（土佐日記・日本後紀の如き場合）は本書に收めてある。本書に歌をとつた書物は左の三十書である。

伊勢國風土記、歌經標式、神樂歌、琴歌譜、皇太神宮儀式帳、古今和歌集、古語拾遺、古事記、催馬樂、上宮聖德太子傳補闕記、上宮聖德法王帝說、正倉院文書、續日本紀、續日本後紀、丹後國風土記、東大寺要錄、土佐日記、日本後紀、日本國現報善惡靈異記、日本書紀、年中行事祕抄、播磨風土記、肥前國風土記、常陸風土記、佛足跡歌碑、本朝月令、萬葉集註釋、新撰國史、新撰姓氏本末、新撰國格日本神文錄

歌論・歌評に止まらず、漢土詩賦・唐音等の記事にも及んだもので、下卷の末に「世話字盡」と題して江戸時代俗間通用語に當てた漢字三百ばかりを表にしてある。上卷に平等院建立の事以下三十則、中卷に三部神道の事以下四十四則、下卷に萬葉文字ぬき書以下七則を收めてゐる。歌話中には著者の師烏丸資慶卿と著者との關係を述べたもので、聊か自譜に似たふしが多い。著者はまた俳人である所から俳諧に關した談話も少くない。延寶八年の著

唐樂であるらしく思はれる。未だ何れを正しとも定め難い。我が國へは桓武天皇の御宇に和邇部島繼が傳へたと稱せられる。〔田邊〕

鼠骨（そこつ）　俳人【姓名】寒川陽光（さむかわはる）【流派】日本派【閲歴】明治八年十一月、松山市三番町に生る。同二十六年第三高等學校に入學したが中途退學し、上京して新聞「日本」に入つた。爾來「電報新聞」「日本及日本人」等の新聞雜誌の記者として、操觚の業に携はりつつ今日に至つてゐるが、早くより同郷の先輩正岡子規に傾倒し、その門に入つて俳句を學ぶと共に、陸羯南・愚庵和尚等に接して修養するところがあつた。俳句に精進する傍ら、寫生文（別項）に於ても、一家を成してゐた。【著書】「寫生文作法」「斷霞錄」「寒川鼠骨集」その他、初學俳句叢書及び俳句入門叢書中に於ける諸編著をはじめ三十餘種に及び、看るべきものが多い。〔岩田〕

素材（そざい）　藝術論〔英〕Material〔獨〕Stoff〔佛〕Matière【解說】藝術を表現と考へ、藝術形式を創作心理に於ける內的活動の成果と見るとき、素材といふのは藝術形象生產以前の、卽ち表現形式とは區別されたところの創作の原料を意味する。藝術上の素材は故に表現の材料であるから、吾々のあらゆる經驗事實或は歷史的、知識的觀念、或は自然又は人間そのものが素材であり得る。併し極めて狹義に用ふれば、造形美術に於ける石とか木とかいふ物質的感覺材料を云ふこともある。蓋し美術では製作觀念とか或は生產の過程の上から見て、感覺的材料の物質的性質に拘束されることが多く、表現形式に影響する點が緊密であることから、素材の藝術上の意義を重要視する者も可なりある。藝術的唯物論（別項）を主張する人々はこれである。併し文學美術に於ては、素材は表現以前のものであるから素材的興味（價値）は、如何に事實的に吾人の興味に訴へても、所詮非美的興味たるにすぎない。小說の主人公に對する興味は、決してそのモデルそのものに對する興味であつてはならない。素材興味本位の翫賞は、美的翫賞ではない。所謂事實小說・實話物語等の如きを、文學の一種類と考へようとする場合には、吾々は根本より別な藝術本質觀を持たねばならぬ。〔村田〕

楚辭（そじ）　辭賦總集　十六卷【作者】屈原等。屈原は名は平、字は原。或は名は原、字は平とも云ふ。戰國の時楚の懷王と時を同じくして生れ、楚と同姓の貴族である。性博聞强識、辭令に嫺ひ、治亂の事を明かにし、出でて懷王に仕へて知遇を受けたが、後幾くもなく讒人のために排擠せられて、一時、漢北に遷されたが、やがて召還せられ、頃襄王の時に至つて、再び江南の野に放たれた（楚辭燈・王夫之楚辭通釋・山帶閣註楚辭）。彼は既に放たれて、楚都郢を發つて東のかた江を下り、目を異鄕江南の風物に傷ましめ、心は悒鬱として開けず、慷慨發憤して九章を作り、滿肚の幽憤と感慨とを懇へながら、遂に石を懷いて自ら汨羅に投じて身命を斷つた。時正に五月五日、後人が彼を哀んで每にこの日に祭り、又世上同じ日に粽を作り、五色絲及び練葉を幷せて帶にするのは、皆汨羅の遺風であると云ふ（梁吳均續齊諧記）。汨羅は今の長沙の地に在る。屈原の生涯がかくの如き悲愴な終末に遭つたのは、全く彼の性格の然らしめた所である。嗚咽激越の調を帶びた彼の作品は、彼の人格の全幅を吐露したものであつて、彼の辭藻を玩味するには、必ず彼の氣質を理解する所がなければならぬ。【名義】「楚辭」とはその作者が楚人であると否とに拘らず、屈原を初めとして、その遺響を嗣いで楚調をなした作品の汎稱である。この名は或は劉向が校讐した時に創まるとも云ふが、「楚辭」の語は「史記」（張湯傳）にも見え、已に武帝の頃行はれた事を知り得る（四庫提要）。戰國の世、屈原の辭藻によつて開かれた楚調の一派は、宋玉・景差・唐勒の徒によつて衣鉢を傳へられ、秦・漢以後はこれを祖述する者が益々多く、楚調は文學の中心となり、詩歌には項羽の「垓下の歌」、漢高の「大風の歌」を初めとして武帝の「秋風辭」「瓠子歌」、昭帝の「黃鵠歌」等の如き、或は李陵の「別歌」、白頭吟の「古歌」、班婕妤の「怨歌行」の如きは、皆その流を汲むものである。殊に前漢の頃に起つた五言・七言の詩形は、楚調の影響を蒙つた所が少くない。辭賦は漢代を通じて上下の君臣の間に遍く流行したので、名手も相次いで輩出し、就中、枚乘・賈誼・司馬相如・枚皐・東方朔・王褒・劉向・揚雄等はその錚々たるものである。成帝の時に賦を奏進したものに千有餘篇あつたと言ひ、「漢書・藝文志」に據れば、前漢の賦家五十一家、その作品八百四十九篇を載せ、如何に辭賦の流行したかを想見することが出來る。後漢も亦ほぼこれと同樣であつて、六朝唐宋に及んでもなほその風を傳へ、屈原の辭藻の支那文學に與へた影響と價値とは頗る大なるものがある。【內容】屈原を初めとして宋玉・景差・淮南・東方朔・嚴忌・王褒等諸家の作品であつて、その中屈原の辭藻としてほぼ一定してゐるのは、離騷・九歌・天問・九章・遠游・卜居・漁父・招魂・大招である。九歌・九章を分つて數へれば二十五篇、更に九歌の末に附せられてゐる國殤・禮魂の二篇を加へれば、都合二十七篇。「漢書藝文志」には屈原賦二十五篇とあるが、その數へ方は明かでない。〔詩形〕屈原の辭は「詩經」の詩に比べて長篇の作が多い。離騷の如きは三百七十五句より成り、天問の如きも亦三百五十四句あり、九歌の諸篇は比較的短篇であるが、なほ且つ十五句を下らぬ。而して詩經の詩は殆ど全く四言の形式であるが、屈原の賦の過半は六言で、四言がこれに次ぐ。その形は二句を以て一聯とし、概ね兮の字を加へて音節を調へてゐる。又その押韻法はほぼ詩經と同じく、句尾に韻を蹈み、大略隔句に韻を蹈むもの、一・二・四句に韻を蹈むもの、每句韻を連用するものの三類に分つことが出來る。又一篇の終りに亂と稱するものがある。卽ち全篇を總括反覆した小詩歌で離騷・涉江・哀郢・懷沙・招魂等の諸篇に見えてゐる。亂とは本と樂章の終りを意味したのであるが、一轉して詩歌の終りに加へられた小詩歌をも亦亂と云ひ、或は反辭・小歌倡とも稱し、特に楚人の間に行はれたものらしく、我が國の「萬葉集」に見える長歌の終りの反歌は、卽ち反辭で、亦この亂に擬したものと云はれてゐる。【價値】廣大なる地域を擁する支那の南方と北方との間には、單にその地勢風土の上に甚だしい差違があるばかりでなく、その住民の性格言語に於ても亦著しく異つてゐる。從つてこゝに產み出される文化も亦その影響を蒙り、北方鄒魯の文化が現實的、實踐的、社會的傾向を帶び來つたのに對して、南方荊楚のそれが超現實的、理想的、出世間的特色を有つに到つた事はまた自然的結果であつて、この兩つの相異つた方向は、文學の上にも亦明かに

とこれを認め得る。試みに本書一卷を開けば、狂狷自恣、激越沉鬱する熱情と、縱橫に馳騁する想像とが橫溢するのを覺えるであらう。而して「詩經」(別項)を以て上代支那の北方文學を代表せしめるならば、「楚辭」はこれに對する南方文學の精粹であつて、「詩經」と「楚辭」とは、支那の上代文學の中に輝く雙璧とも稱すべきである。而も又劉向以來屈原の忠誠なる性格を尊崇するの餘り、その離騷を以て經籍と同一視する者も亦少くない。淸の李光地・方葆如・林仲懿・屈復等の如きこれである。

【註釋書】楚辭章句 十七卷 漢王逸 ○楚辭補註 十七卷 宋洪興祖 ○楚辭集註八卷辨證二卷 宋朱熹 ○楚辭後語六卷同上 ○楚辭師說十七卷 淺見安正 ○楚辭考四卷 岡松辰 ○楚辭集解八卷蒙引二卷考異一卷 明汪瑗 ○山帶閣註楚辭六卷餘論二卷 淸蔣驥 ○楚辭燈四卷 淸林雲銘 ○中國韻文通論 民國陳鐘凡 〔宇野・本多〕

素質 そしつ 藝術論〔英〕Disposition〔獨〕Anlage【解說】元來素質とは、心理學或は生理學上の假定的概念であつて、吾人が外界に對して、それ〴〵異つた反應(心的に或は肉的に)をするその過程の源として考へられるところの、個人又は種族に內在する性質を謂ふのである。主として生得的であると考へられてゐる。藝術制作が個人の性格的な乃至特殊な心的反應過程と考へられる限り、そこに藝術的素質如何といふ問題が生ずる。美學者フォルケルトは(一)感官的知覺、(二)內的生活、(三)感動性、(四)想像、(五)感情移入(別項)を數へてゐる。又ハルトマンの美學に於ても、(一)感官的知覺能力、(二)記憶能力、(三)觀察力、(四)受納的な個人の趣味性、(五)想像力を擧げてゐる。而して藝術的天才と稱するも、一般的にこれ等素質の程度に於て、凡人より秀れたものに外ならないと考へられてゐる。作家の個性と稱せられるものも、かくして以上の個別的な素質から理解されるのである。(個性參照) 〔村田〕

措辭法 そじほう 「連語論」を見よ。

蘇志摩利 そしまり 雅樂舞曲【名稱】この名は、新羅の地名であるといふ。蘇志茂利・長久樂・廻庭樂・庭巡舞等の異稱がある。【性質】高麗樂。新樂、中曲。高麗双調曲に屬する。舞があり六人で舞ふ。舞人は常裝束の上に蓑をつけ、帽をかぶり、笠を持つ。昔は假面を用ひたが、今は用ひない。雨に打たれた態で舞ふ。番舞には「蘇莫者」を用ひる。【沿革】神代に素盞嗚尊が衆神に逐はれて、害草を束ねて蓑笠とし、新羅國に到り、曾尸茂利の地にゐ給うたといふ故事をとつて我が國で作つたものである。その製作の年代は不明である。平安朝に於ては、雨乞の祭にこの樂を奏すれば應驗があると稱されてゐた。久安年間以後、この舞は絕え、中絕すること八百年、明治四十四年六月、日韓合併後の記念として宮內省樂長林廣繼がこれを再興した。 〔田邊〕

素寂 そじゃく 學者【姓】源【本名】未詳。【解說】素寂の名は、或は義行の法名とも(東野州聞書)、親行の法名とも(群書一覽)云はれ、或は光行の子とも(源氏物語系圖)、親行の子とも(東野州聞書)云はれ、素舜とも、素釋とも書かれてゐて明かでない。併し、舜は寂の草體を誤つたもので、釋は寂の當字であらう。「紫明抄」桐壺の條に、「亡父大監物源光行」とあり、「勅撰作者部類」に、「五位筑前守、河內守源光行男」とあるから光行の子であり、若紫の條に、親行と素寂との問答があるから別人であり、松風の條に、「なか頃命兄親行 子舜本書二子石」とあるから親行の弟である。ところが、素寂はもと正六位主殿寮の助であつたが、關東に下つて紫雲寺を開いた(紫明抄自序)。然るに親行の弟四人のうち、關東に下つたのは孝行である(明月記、天福元年五月二十七日の條)。又「原中最祕抄」の若菜の下に、「こかの調」を註して、「孝行說」とあげてゐるものと、「紫明抄」の記述とが符合するので、素寂とは、孝行の法名であらうといふ說が、山脇毅氏によつて發表された。しかし系圖に從五位下とあつて「紫明抄」の序と合はないのが不審であつて、なほ考ふべき餘地が十分にある(系譜は親行參照)。生歿年共に未詳である。閱歷も亦明かでないが、「水原抄」「原中最祕抄」を傳へた親行・義行等に對し、別派として「源氏物語」の權威者であつたらしい。もし素寂が孝行と同じ人であるならば、「千載集」の正本二十卷を關東に於て武士から買ひ求め、年來所持した由が「明月記」に見えてゐる。又その歌は、「續後撰集」「續古今集」「新千載集」「新後拾遺集」に各一首づつ收められてゐる。【著書】紫明抄十卷(別項)。

【參考】水原抄紫明抄の撰者 山脇毅(藝文一二ノ一) 〔池田〕

徂春 そしゅん 俳人【姓名】室積尙【別號】平明居主人・碌々子・碌二道人【閱歷】明治十九年十二月十七日大津市松本に生る。本籍宇和島市本町室積南湖の四男で、祖父は維新前芭蕉堂を再建した義仲寺の住職蟻洞である。兄は日本派勃興當時の一作家煙霞郎で、同三十一二年頃から兄妹と共に俳句を岡野知十に學び、後、正岡子規の門に參じた。子規歿後、佐藤紅綠と共に俳誌「とくさ」を刊行し、傍ら同三十八年より大日本俳句研究會を設けて通信敎授をやつた。「とくさ」廢刊後は、主として「ホトトギス」に據つたが、後、その傾向に慊らず、去つて同派の各誌に携はつた。かくて昭和二年十月、自ら俳誌「ゆく春」を創刊して進展に努めてゐる。最も辯難に長じ、最近の句風は、「草の戶や元日白き干大根」「蜂の亂舞蜂の歡喜を見やるかな」等に見られる。【編著】新古俳句新註○ゆく春第一句集○河骨句集等。 〔白田〕

訴狀 そじょう 「申狀」を見よ。

素芯 そしん 「梅室」を見よ。

素性 そせい 歌人(三十六歌仙の一)【俗姓】良岑玄利【別名】良因朝臣【家系】遍昭の子、兄弟に由性があるが、長幼に就いて兩說がある。【生歿】未詳。但し貞觀十四年良房の薨去を悼んだ歌の外、「二條后の春宮の御息所と申しける時」の歌、「雲林院の親王のもとに花見に北山のほとりにまかりける時」の歌(古今集)は貞觀年中のものである。「天曆の御狩せさせ給て河內國にやすませ給にまかりかへりなんと申しを惜ませ給ひて素性があざ名をよしよりとつけさせ給に」(家集)とあるのは恐らくは昌泰元年の事にて、契沖の「河社」に「時代相違せり如何」とある如くである。又朱雀院とあるのも宇多法皇の御事にて、延喜以後の歌は見えない。【閱歷】朝に仕へて左近將監であつたが、父遍昭が法師の子は法師になるのがよいとて强ひて法師とした。初め雲林院に住し、寬平八年雲林院行幸に際し權律師に任じ、後は石上寺の良因院に移つた。昌泰元年法皇宮の瀧御遊覽の際は、住所に因んで良因朝臣と號して數日前驅し、仰せによつて和歌を獻じ、祿を賜はつた(家集)。「古今集」卷

九に、「朱雀院の帝の奈良へおはしましける時御供に仕うまつりて手向の山にて」として、道眞・素性の歌があるのもこの時であらう。「延喜の御時に御馬つかはして只今石山に參るべきよし仰言あるに參りて」(家集)とあるのは、延喜十六年九月、法皇石山御幸の折であらうか。果して然らばこの歌は、年代の明瞭な最後のものである。遍昭と北山に松茸狩に行き(古今集)、業平と宇都の山にて行き會ひ(都のつと)、歿するや、貫之・躬恒が哀悼の歌を贈答したといふ(貫之集)。【作品】勅撰集に入る歌は古今四十、後撰七、「拾遺集」以下凡そ十八首、合計凡そ六十五首。○家集「素性集」。群書類從二六七所載本と、歌仙歌集本とは同系統であるが、後者は九十九首にて二首多く、前者は補遺八首がある。「やたがらすを句の上にするしまのかもを句の下にする」た沓冠折句歌、「山闇したひの雲の間雁金のらうたにもあるかすみかゝはるも」がある。總じてその作には情熱を抑へながら力强くよんでゐるところに特色がある。

【參考】古今集目錄○歌仙傳○大和物語○大日本史八十九○百人一首一夕話　〔西下〕

そゝり狂言（そゝりきやうげん）　演劇　【名稱】「そゝり」とは「早口そゝり」又は「そゝり狂言」を意味する。【解說】形式は種々ある。(一)茶屋の亭主、仕切場の若者、表方・狂言方・お囃子等が役者の衣裳鬘を借りて、その狂言中の二三幕を素人芝居で演ずる場合、(二)女方が立役を勤め、敵役が女方に廻る等凡て役割を一變して興を添へる場合、(三)後進引立のために名題以下の役者に大役を勤めさせ、立者は却つて端役に廻る場合などあるが、(四)明治以降は頗見慣れたので自然と大袈裟のそゝり狂言は跡を絕ち、千秋樂も平生通りの役割で、ただ立者が多少の道化振りに、樂屋落の愛嬌などを振りまいてその名殘りを止めた。何れも白（せりふ）などを間違へたり絕句したりするのが、却つて愛嬌となつて見物を喜ばせ、殊にこの日に限つて役者が土間に入つて見物することを許されるので、一層俳優と見物との親しみを增す機會となつた。起原は詳かでないが、元文度の大阪の俄(別項)、寶曆度の江戸の茶番の流行等から同じ系脈を引くものと見るべく、これ等の俄茶番は一方に劇場外部の素人狂言の發展を促し、一方に劇場內部のそゝり狂言を生んだものであらう。

【備考】「早口そゝり」とは、もと俗謠又は歌舞伎狂言の言ひ立ての一種で、例へば歌舞伎十八番の「外郎賣」の白（せりふ）の如く、發音の難しい文句を早口に淀みなく述べ立てる言語遊戲の一種である。それから轉じて、江戸歌舞伎で顏見世興行舞ひ納めの千秋樂を祝して催す遊戲的餘興の一種となつたものである。〔飯塚〕

曾丹集（そたんしふ）　歌集　一卷　【作者】曾禰好忠【諸本】群書類從二六二所收本、標註曾丹集本等がある。【組織】本集は毎月集・百首・源順の百首の三部及びその他から成つてゐる。毎月集は十二月を上中下の三つに分けて三十六項とし、各項十首にて三百六十首を收めてゐる。初めに總序及び短歌一首を、四月・七月・十月の初め卽ち夏・秋・冬の初めに長歌一首、反歌一首を附してゐる。「拾遺集」には「三百六十首の中に」として現存本に見える歌を載せてゐるから、この部分の成立は相當に古い事が分る。百首は春・夏・秋・冬・戀(各十首)以下から成り、初めに序を附してゐる。現存本は百二首で二首多い。戀の次にある三十一首は沓冠の一字づつを拾つて續けると、冠は「あさか山かげさへ見える……」とあり、沓は「なにはづにさくやうの花……」とある。この種の歌は源順集や相模集にもあるが、源順集では「藤原有忠のよめるかへし」とある。百首の次にはつらね歌が四首、圓融院の御子の日に召なくてまゐりて虐待された翌日奉つたつらね歌四首、一首を挾んで別のつらね歌四首等がある。つらね歌は第一首の末をとつて第二首の頭とし、順々に連ねたものである。源順の百首は右の百首に應答したもので組織が同樣であり、初めに序を附してゐる。但し現存本は秋が九首で正に百首ある。百首の應答は相模集にその例がある。集の最後には再び好忠の歌三首をのせ、標註には補遺として勅撰集その他から若干の歌を補つてゐる。

【內容】好忠の歌は言葉の自由なる驅使と、自然の客觀的表現とに特色があり、その中に淸新なる趣が見られるのである。(好忠參照)

寒さのみ夜毎にまさるなよ竹の風にかたよる音のさやけさ

道芝も今日ははる〳〵靑み原おりゐるひばりかくろへぬべみ

美保の浦の引く網の綱のたくれ共なかきは春の一日なりけり

【註釋書】標註曾丹集安田躬弦(文化十年序、本文は契沖の校正本を基として異本二三によつて校正し標註は田豆流・寬光と共に考へる所である)〔西下〕

帥大納言（そちのだいなごん）　「經信」を見よ。

速記字（そくきじ）　「文字」を見よ。

卽興詩（そくきようし）　【名義】〔英〕Improvisation 卽座に湧いた詩興を、卽座に歌ふ詩のことをいふ。【解說】詩形としては、最も原始的のものであつて、原始民族の間に於ては、詩といふべきものは皆この卽興詩であつた。特に伊太利には後々までも、この卽興詩を作る詩人が多く輩出した。彼等の多くは卽興に依つてのみ、卽ち聽者から題目を暗示され、歌曲を示されることに依つてのみ、詩をつくることが出來たといはれる。卽興の才能は必ずしも個人の能力のみに依るものではない。一方に文法上の變化に富み、リズムが單純で、韻が豐富で、詩人が聽衆の耳に快く響くやうに、自由に言葉を驅使し得るやうな、特殊なる言語を必要するものである。その點では伊太利語は、それ自らが卽興詩の才能を持つてゐるのである。そこで先づ近代歐羅巴では特に勝れた卽興詩人といへば、プロヴァンスの屈伸自在な言語のおかげを蒙つて出て來た吟誦詩人である。けれども今日まで傳はつてゐる彼等の精妙な詩作が、果して何の準備もなしに湧き出たものか否かは疑問とされてゐる。けれども十六世紀の伊太利人は、眞の卽興詩を培つたやうである。就中、シルヴィオ・アントニオ(1540—1603)は有名である。卽興詩は詩としての根本的な要素、土臺の要素を持つたものである。一般に熱情派と稱される一派の詩人には卽興詩が多い。例へば、獨逸のウォルフ、ランゲンシュワルツの如きは、代表的卽興詩人である。廣い意味に於ては、ゲーテの言ふ機會詩なるものも亦卽興詩と見ることが出來る。彼はエッケルマンとの對話の中で、詩がすべて機會詩でなければならぬことを述べて、如何なる場合と雖も、詩は現實によつて誘因と材料とを與へられなければならないと說き、特殊な事件でも、詩人が取扱ふ時には普遍的なものとなるのであつて、自ら

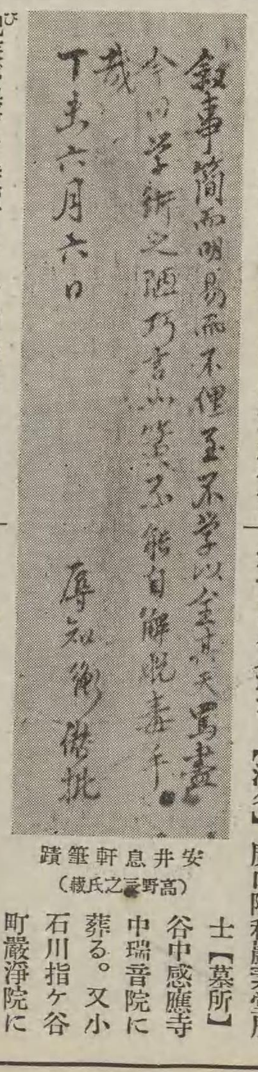
の詩が多く機會詩であることを說いてゐる。而してその機會詩は、現實から暗示を受け、現實を基礎としてゐるといつてゐるが、かゝる意味に於ては、即興は、すべての詩歌の根據になるものであつて、即興詩は、詩歌の根本的な重大な意義を持つものと言ふことが出來る。〔宮島〕

即興詩人 そくきよしじん 飜譯小說 【譯者】森鷗外 【原作】璉馬(デンマーク)のアンデルセン(Hans Christian Andersen)の作、獨逸譯"Improvisatoren"に據る。【發表】明治二十五年十一月より同三十四年二月に至るまで、「しがらみ草紙」及び「目不醉草(めさまぐさ)」の兩誌に亙つて斷續して連載。【刊行】明治三十五年九月、二册として單行。發表當時よりも見出しが二三增加された。後年縮刷版が出た外、鷗外全集・現代日本文學全集・岩波文庫等に收む。

【梗概】「羅馬に往きしことある人はピアツツア、バルベリイニを知りたるべし。こは貝殼持てるトリイトンの神の像に造り做したる、美しき噴井ある、大なる廣こうぢの名なり。」その一角で幼い日を送つたアントニオはジエンツアノの花祭の雜沓で、母がボルゲエゼ家の馬車に轢かれたので孤兒となつた。暫くカムパニヤの野の情深き牧者の手で育てられてゐたが、やがてボルゲエゼ家の恩惠で羅馬の學校に入つた。彼はそこで親友ベルナルドオと相識り、またダンテの神曲を手にして無上の感激に醉つた。その業を了へた年に、歌劇の女優アヌンチヤタに戀し、景慕の詩が媒となつてこれと親しみ、初めて即興詩の朗誦を試みる機會を得た。しかもベルナルドオとの悲しき戀爭ひから、思はず友を傷けて羅馬を遁れた。これが生涯の一轉機であつた。アントニオは、逃亡兒船に襲はれて囚はれの身となつた後、拿破里に入つて即興詩人として自由な天地に生きんとした。而してその初舞臺に異常な成功を收めたが、熱情の博士夫人サンタの不倫の戀を避けるのと、又折柄來遊したボルゲエゼ家の姫夫婦の勸說もだし難く、舞臺を見捨てて拿破里を去り、再び羅馬なる恩人の許で世の常の羈絆を忍ばなければならなかつた。快々として六年を過して二十六の年を迎へた時、かねて神の許嫁として尼僧院にあつた孫の姫が、俗世への暇乞に館へ歸つて來た。戀に破れ志を壓され悅びを失つて心歪んだアントニオの心も、純眞にして慈悲深きこの小尼公に接して明るく和んだが、やがて落飾の日が來て永久の別れを告げると、苦惱のために病を得た。館でも憐んで旅費と自由とを與へたので、アントニオは心を躍らして水の都エネチアに赴いたが、彼の即興詩は市長の姪なる美しきマリヤの心を捉へ、二人の婚約さへ噂されるに至つた。その時彼は場末の小芝居で昔の面影もなく凋落したアヌンチヤタと測らずも相語ることを得たが、再び訪ねるともう行方知れぬ旅に出た後だつた。やがてマリヤに託したその遺書は、彼女がわれを思ふ眞情を明かにし、なほマリヤとの幸福な契りを祈つたものであつた。苦悶と傷心の二月を流離の旅に過ごした後、アントニオは、このエネチア第一の美人に祭壇の前で手をさし延べた。

【批評】譯者が殆ど九星霜を費して完成した業績で、南歐の遊子が多情多恨の生涯を語るに格調正しく、而も淸新の響高き文章を以てし、色濃き浪漫的な芬香が、今もなほ人を魅了せずに措かない。衆口一致、「原作以上」の名譯譯として世に謳はれたのも理りである。當時苟くも文學に志した者にしてこれを誦讀せざるはなく、今日の聲名ある作家は悉くこれが洗禮を受けた人々といふことが出來る。現に泉鏡花の「照葉狂言」(別項)の如き、作者が「即興詩人」に感激した記念として生れたものである。かくの如く、この飜譯の感化影響は實に量るべからざるものがあり、それ自身代表的名飜譯たると共に、よく新しき詞藻情思の源泉として貢獻したことを忘れてはならないものである。〔小島〕

息軒 そくけん 儒者 【姓名】安井衡。字は仲平 【生歿】寬政十一年正月一日、日向國淸武鄕中野里に生れ、明治九年九月二十三日、東京土手三番町に歿す。享年七十八 【閱歷】昌平黌に入つて松崎慊堂に師事した。文政九年飫肥侯が擧げて侍讀となし、明年藩學の助敎となした。天保六年職を辭して東行し、再び昌平黌に入つた。その徒を聚めて業を授けるに及び、四方の俊秀が門下に來り集まり、聲望日に高まつた。幕府では擢でて昌平黌敎官とした。舊制では林氏が世々學政を掌り、經を說くには專ら朱註を用ひた。息軒は古學を崇尙したにも拘はらず、この職に擧げられたのは異數と言ふべきである。維新の後、飫肥侯が延いて世子の師となした。大正四年十一月從四位を贈られた。【著作】管子纂詁十二卷○左傳輯釋二十一卷○論語集說六卷○書說摘要四卷○孟子定本六卷○戰國策補正二卷○讀書餘適二卷○睡餘漫筆三卷○息軒遺稿四卷(明治十一年刊)【批評】その文は法を唐宋に取り、上は秦漢に溯り、古色の蒼然たるものがある。一齋・山陽以後の名文章家である。〔佐久〕



安井息軒筆蹟
(高野長之氏藏)

袖萩祭文 そでぎさいもん 「奥州安達原」を見よ。

素堂 そだう 俳人 【姓名】山口信章。字は子晋、又は公商。通稱は勘兵衞・官兵衞・太兵衞・太郎兵衞・松兵衞・佐兵衞等の異說がある。【號】來雪(初號)・信章齋・松子・素仙堂(後、略して素堂)・蓮池翁、茶道に於ける庵號として今日庵・其日庵(今日庵は千利休の孫宗旦の號を嗣ぎしもの)等。【生歿】寬永十九年五月五日(一說に正月四日)生れ、享保元年(一三七六)八月十五日歿。享年七十五 【辭世】我を連れて我かげかへる月見かな。【法名】廣山院秋巖素堂居士 【墓所】谷中感應寺 中瑞音院に葬る。又小石川指ケ谷町嚴淨院に山口黑露の建てた墓がある。その他甲斐國蓬澤に祀られ、山口靈神と言はれる。【閱歷】素堂の家は、世々甲斐國巨摩郡敎來石山口に住し、山口を以て姓としたが、素堂の少年時に甲府に移り、酒造業を營みて富を擁した。素堂は市右衞門の長男として生れたが、彼は家督を弟に讓り、遊學のため江戸へ出た。これは恐らく寬文初年頃であらう。漢學を林春齋に、和歌を淸水谷家に、書を持明院家に學んだと言はれ、茶道を今日庵宗旦に學んだ。俳諧は北村季吟を師としたと言はれるが、師といふ程の關係であつたかどうか明かでない。

「そゝり」とは「早口そゝり」又は「そゝり狂言」を意味する。【解說】形式は種々ある。(一)茶屋の亭主、仕切場の若者、表方・狂言方・お囃子等が役者の衣裳臺を借りて、その狂言中の二三幕を素人芝居で演ずる場合、(二)女方が立役を勤め、敵役が女方に廻る等凡て役割を一變して興を添へる場合、(三)後進引立のために名題以下の役者に大役を勤めさせ、立者は却つて端役に廻る場合などあるが、(四)明治以降は顯見貴も廢れたので自給と大裝裝首・源順の百首の三部及びその他から成つてゐる。毎月集は十二月を上中下の三つに分けて三十六項とし、各項十首にて三百六十首を收めてゐる。初めに總序及び短歌一首を、四月・七月・十月の初め即ち夏・秋・冬の初めに長歌一首、反歌一首を附してゐる。「拾遺集」には「三百六十首の中に」として現存本に見える歌を載せてゐるから、この部分の成立は相當に古い事が分る。百首は春・夏・秋・冬・戀(各十首)以下から成り、初めに序を附してゐる。現

美保の浦の引く網の綱のたくれ共なかきは春の一日なりけり

【註釋書】標註曾丹集安田躬弦(文化十年序、本文は契沖の校正本を基として異本二三によつて校正し標註は由豆流・寬光と共に考へる所である)〔西下〕

帥大納言 そちのだいなごん 「經信」を見よ。

速記字 そくきじ 「文字」を見よ。

即興詩 そくきようし 【名義】〔英〕Improvisation 即座に湧いた詩興を、即座に歌ふ詩のことをいふ。【解說】詩形としては、最も原始派の詩人には即興詩が多い。例へば、獨逸のウォルフ、ランゲンシュワルツの如きは、代表的即興詩人である。廣い意味に於ては、ゲーテの言ふ機會詩なるものも亦即興詩と見ることが出來る。彼はエッケルマンとの對話の中で、詩がすべて機會詩でなければならぬことを述べて、如何なる場合と雖も、詩は現實によつて誘因と材料とを與へられなければならないと說き、特殊な事件でも、詩人が取扱ふ時には普遍的なものとなるのであつて、自ら

初め何かの公職を持つてゐたらしいが、延寶七年頃職を辭して不忍池畔に退隱し、後、貞享三年頃葛飾の阿武に移つた。不忍隱退後は詩歌・連俳・茶道・香道・猿樂等を樂しみ、蓮を愛して荷興十唱の句があつたり、又芭蕉との親交漸く深きを加へ、芭蕉庵の再興勸化文を草したりした。阿武へ移居後、庭池に蓮を植ゑ、菊園を造つたりして、愈々隱棲生活に徹底し、自ら「江上隱士」など稱するに至つた。又芭蕉及び蕉門の人々との交情いよ〳〵深さを增し行き、俳壇に於ける聲望も益々高まつて行つた。古い交友の芭蕉なども素堂先生と言ひ、蕉門には外樣格として特に尊ばれた。芭蕉とは延寶以來同座しての句も多く、葛飾移居後は小名木川を上下して交遊益々深く、芭蕉との和漢五十韻があり、芭蕉の蓑蟲の句に對して蓑蟲記を作れば、芭蕉はその跋を書いてこれに酬いたりした。芭蕉歿後、素堂はその年忌毎に追悼の作を手向け、芭蕉庵六物の記を書いたりした。

【作風・地位】素堂は芭蕉と同じく、初め貞門調、次に談林調に移り、芭蕉と相並んで作を進め、貞享の頃には見るべき作もあつたが、元祿に入つては、三・四年頃まで作の量に於ては芭蕉に本書腦色の配合を論評するに、新香樹りにお初を持出して德兵衞との面會を生玉社にしたところは、作者第一の手腕である。その和やかな空氣が九平次の出現と共に忽ち破壞されて悲劇に導かれる。裲襠で男を隱したり常むが、技巧に奔り過ぎた嫌色である。併しこれ等を、當時の上方歌舞伎は直ちに迎へて上演した。歌舞伎狂言としての傑作は、「女夫星浮名天神」（並木笛風作、元文三年正月、大阪角の芝居）であらう。【守隨】

風の作とは隔たりを持つて來た。彼の作は雅語・漢語を好んで用ひ、句品は高いが、談林調が後までも拔け切らず、芭蕉のやうな眞劍味、眞實味に乏しい。かくて元祿四・五年以後は、既に熱を失ひ、芭蕉歿後は間歇的に作句する狀態となつて行つた。それ故、俳壓の長い割には作の數が少い。要するに彼はその作よりも、その學識德望が彼をして俳壇に重からしめたものである。【著書】と〳〵の句合（別項）○松の奧（寫）二册（元祿三年成）俳諧の作法書。古來素堂の著とされるが、僞書である。また「梅の奧」といふ書も僞書である。（俳諧文庫素堂鬼貫全集所收）○素堂句集一册（子光編、享保六年編、寛保四年補。俳書集覽所收）○素堂句集（吉別大魯閲、安永四年刊「俳諧五子稿」所收）○素堂家集一册（坎窩久藏編。俳諧文庫素堂鬼貫全集所收の「素堂文集」は、本書の謄寫の相異による異本のやうである。俳書集覽所收）。

【業績】元祿九年、故鄕甲州の吏櫻井孫兵衞政能を助けて、濁河の治水土工に成功し、その德を以て鄕人より山口靈神として祀られた。俳諧の方では、芭蕉歿後、素堂が去來に新風興行を勸めたと「去來抄」に見え、「東武太平鏡」には去來以外の人にも勸めたとあると云ふが、この兩者共に疑ふべき書らしく、素堂及び去來の人物から考へて、この說は却つて兩書の性質を疑はしめるものにならう。又素堂が葛飾正風（別項）を開いたとは葛飾派の唱へる所であるが、素堂自身には、さる意識はなく、自ら其日庵二世と名乘つた綯堂素丸（馬光）に始まると見られねばならぬけれども、兎に角素堂が葛飾正風の祖と仰がれた所に、彼の俳壇的德望が反映してゐる。【志田】

【參考】連俳雕百韻山口素堂○俳家奇人談竹內玄々一○隨齋諧話夏目成美○誹家大系圖生川春明○俳人百家撰水谷川柳○葛飾蕉門分脈系圖馬場錦江○芭蕉庵桃青傳內田魯庵（俳諧文庫芭蕉全集）○素堂鬼貫全集（俳諧文庫）○山口素堂の研究荻野清（國語國文昭和七ノ一・二）

蘇東坡集（そとうばしふ）「東坡全集」を見よ。

卒都婆小町（そとばこまち）「小町物の謠曲」を見よ。

曾根崎心中（そねざきしんぢゆう）浄瑠璃一段又は三段世話物【作者】近松門左衞門【名稱】情死のあつた場所を讀み入れた名題。訓み方に、「そねざきのしんぢゆう」とすべしとの說もある。

【諸本】八行二十六丁本、十行十六丁本等の版本。巢林子撰註・巢林子評釋・近松世話淨瑠璃集（帝國文庫）・近松淨瑠璃集（有朋堂文庫）・近松名作集上（日本名著文庫）・近松全集第十一卷等に所收。

【興行】元祿十六年五月七日初日、竹本座「日本王代記」の切狂言として上演、空前の當り作であつた。更に近松存生中、享保二年八月、再度上演されてゐる。【題材】實說については、大阪內本町醬油屋平野屋久右衞門手代德兵衞は、豫て北の新地天滿屋の抱女お初に馴染んでゐたが、主人の姪と夫婦になつて江戸へ下らねばならなくなり、お初の方も侍客の身請話が決まつた爲めに二人で曾根崎天神の森で情死を遂げたと「心中大鑑」に傳へる。「心中戀の塊り幷名寄鹿子」には、男の齡は二十五、女は二十一と記す。但し本曲興行の前月、大阪竹島幸左衞門座を初め京阪諸座でこの事件を脚色上演してゐる。

【梗概】（觀音廻り）天滿屋お初は田舍客に連れられて、當時流行の三十三番の觀音を巡り、生玉の社についた。（生玉社境內。十行本、中）こゝで計らず掛取り歸りの德兵衞にあひ、その不沙汰をかこつので、德兵衞は伯父である今の主人から信用を得て、その內儀の姪と結婚を强ひられたが、これを拒絕したので、明日中に金の淸算をつけて家を出ねばならなくなつたと語る。その金は友達九平次への一時貸が必ず戻るといふ。お初も驚いて男に力をつけてゐる中に、伊勢講歸りの九平次が現れた。早速德兵衞が貸金の催促をすると、九平次は

繪入本曾根崎心中（小田久太郎氏藏）

その所作とも言ひ難き、徳兵衛の見せ場文の印刻は、前に落したものだとて、終に大喧嘩が始まり、お初は駕籠で引上げさせられ、九平次も逃げ延びた。（蜆川天満屋。十行本、下）お初は晝間の事で胸も塞がつてゐる折から、表に徳兵衛の忍ぶ姿が現れたので、裲襠の裾に隱して内に引入れ、緣の下屋に忍ばせた。そこへ九平次が入り込んで、徳兵衛の惡口を放つと、お初は徳兵衛と合點しながら最後の決心を語るので、九平次も出て行つてしまふ。その夜更け、死裝束に着替へたお初は徳兵衛と手をとりあつて、最期の場所を目ざす。（徳兵衛道行）二人は七ツの鐘に名殘りを惜しんで、近くの曾根崎の森に辿りついた。松と櫻樹の相生樹に二人の身體を結びつけ、徳兵衛がまづお初を刺し、やがて己れも咽喉をついて息を引取つた。

【構想】本曲は、竹本座が從來興行成績の思はしくなかつたのを、いかに救濟すべきかの苦心の産物である。而も冒險的試みではあつたが、意外な成功を博した。元來、世話物の價値は民衆の心に一致するところにある。本曲は最近の評判の事件であり、歌舞伎芝居等の流行狂言を操に仕組むといふことが、まづ好奇心を惹いたのは言ふまでもないが、構想を具へるまでには幾多の苦心が拂はれてゐる。竹本座として京の名作者近松に筆を執らしたのもその一である。女方人形の名手辰松八郎兵衛をして、お初に艶のある振を見せさせたのもその一である。殊に所謂出遣ひらしくもある流行の觀音廻りを初めにおいて、觀衆に靈所々々を合點させたのも亦その一である。これ等に據つて、世話淨瑠璃なるものが確立され、今後のために先鞭をつけたのである。

更に本曲獨色の配合を點檢するに、觀音廻りにお初を持出して徳兵衛との面會を生玉社にしたところは、作者第一の手腕である。その和やかな空氣が九平次の出現と共に忽ち破壞されて悲劇に導かれる。裲襠で男を隱したりする局部的な名案もないではないが、それ等は歌舞伎芝居からの摸倣も相應考へられねばならぬ。寧ろ全曲の組織照應の苦心こそ本曲について認めらるべきである。本曲は正本に據ると一般に一段である。操年代記もさう傳へたが、鶴屋版十行本のみは三段に分割されてゐる。文章の形式に古淨瑠璃式の箇所も發見されるので、これが強ち後の改作であるといふ事も出來まい。一段として創作されたとしても、三段に分割さるべき構想の下に綴られたのは事實であらう。本曲と、豐竹座の「心中涙の玉の井」（別項）との前後が、世話淨瑠璃の嚆矢たる意味で、問題にもなつたが、現在に於ては、「涙の玉の井」は、本曲によつて生れたと見るが妥當であらう。道行の名文については荻生徂徠の感激した話や、岩田涼菟が助けたとか、樣々の傳說を生んだ。【影響】加賀掾正本に同名の「曾根崎心中」（年代未詳）がある。後日を描いたものには「曾根崎後日心中遊女誠草」（作者未詳、元祿十六年か）がある。曾根崎丸屋のしげが、わが男の井筒屋清六に意見のために一人心中を遂げるといふ筋。直接曲本の改作と認むべきは、「お初天神記」（享保十八年二月、豐竹座。殆ど同文で、徳兵衛のみ助かる筋）、「曾根崎模樣」（若竹笛躬等作、寶曆十一年五月、豐竹座）、「よみ讀三巴」（近松半二等作、明和五年七月、竹本座）等で、海音の「梅田心中」（寶永中）も本曲の書替か。「往古曾根崎村噂」（近松半二等作、安永七年九月、竹本座）等に至つては、變化には富むが、技巧に奔り過ぎた傾色である。併しこれ等を、當時の上方歌舞伎は直ちに迎へて上演した。歌舞伎狂言としての傑作は、「女夫星浮名天神」（並木笛風作、元文三年正月、大阪角の芝居）であらう。

【參考】牟藝古雅志瀨川如皐○巢林子撰註　饗庭篁村○巢林子評釋　藤井乙男○近松門左衛門同上○近松全集第十一卷解說　同上○近松研究序篇前島春三○近松名作集上解說　熊木勘藏○近松世話淨瑠璃研究　藤村作（日本文學講座）

その妹（そのいもうと）

戲曲　五幕　【作者】武者小路實篤【發表】大正四年二月より「白樺」に連載。【刊行】大正五年一月、代表的名作選集（新潮社）。日本戲曲全集第四十五卷所收。【上演】大正六年三月ロオヤル館に於て舞臺協會初演。役割、野村（加藤精一）、靜子（三井光子）等。【梗概】畫家野村廣次は、戰爭で盲目になつたので、新しく小說家として世に立たうとしてゐる。美しい妹靜子はよく兄を助け、原稿筆記を初め凡ての世話をしてゐる間に、最近緣談が起つて來た。相手といふのは金持の評判の道樂息子なので、廣次はもとより大反對だが、先方がこの兄妹を扶養してくれてゐる叔父の上役の家なので、斷れば失職問題が起らないでもないからと、叔父夫婦はしきりに承諾を强ひる。兄妹は憤慨しながらその立場に困つて、かねて廣次の創作の最もよき理解者であり、且つ文壇への推輓者たらうとしてゐる小說家西島に相談すると、彼は心から同情して兄妹に叔父の家から出ることを勸め、生活の補助さへ出來るだけしてくれることになつた。しかし西島の妻は次第に嫉妬を感じて家庭の爭ひも絶えないやうになつた。その中に、靜子が西島の妾だといふあらぬ噂が立つたり、近所の悪な婆が妾の口を周旋しに來たりする。又やつと世に發表した苦心の小說も惡評を浴びたりして、廣次はあれこれで焦立たしい思ひをしながら鬱屈してゐる。靜子としては、西島の生計も案外不如意なことが解つた上に自分に戀してゐることまで知つたので、その好意を受けることの心苦しさに、遂に思ひ切つて初めの緣談を承諾するために叔父の許へ行かうとする。廣次は怒つて無理に引留めようとする。が、結局自分には妹を救ふ力のないことを悟るばかり。そして「あせらないでね。私生きてゐて、あなたの仕事が見られるのは嬉しい」といふ悲しい妹の勵ましと諦めの言葉を聞きつつ、「俺は力が欲しい」と心に泣くだけだつた。

【解說】作者の前期に屬する作品であり、特に現代に取材した戲曲としては殆ど最初の長篇であるが、その素朴な感情と新鮮な筆致と獨自のスタイルとは、發表當時より非常な好評を呼び、人道主義者たる作者の作品的價値を確然と決定した作であつた。後年の傑作、「愛慾」（別項）「ある畫室の主」等寫實風な戲曲の先驅をなしたもので、大正九年九月有樂座の再演は、守田勘彌・森律子等の舞臺的成功に依つて劇壇に深い感銘を與へ、商業劇場に於ける新劇上演の機運を招來した程である。〔水木〕

其面影（そのおもかげ）

小說　【作者】二葉亭四迷【名稱】初め「二つの心（ハート）」又は「心（ハート）づくし」などと題したが、友人内田魯庵の意見で「其面影」と改めたといふ。【發表】明治三十九年十月以降、東京朝日新聞連載【刊行】明治四十三年五月、二葉亭全集第一卷所收。

【梗概】「弱々とした秋の日は早や沈んで、夕榮ばかり赤々と西の空を染めた或夕ぐれ、九

芭蕉との和漢五十韻があり、芭蕉の蓑蟲の句に對して蓑蟲記を作れば、芭蕉はその跋を書いてこれに酬いたりした。芭蕉歿後、素堂はその年忌毎に追悼の作を手向け、芭蕉庵六物の記を書いたりした。

【作風・地位】素堂は芭蕉と同じく、初め貞門調、次に談林調に移り、芭蕉と相並んで作を進め、貞享の頃には見るべき作もあつたが、元祿に入つては、三・四年頃まで作の量に於てはなほ衰へないけれども、質に於ては漸く蕪ふが、この兩者共に疑ふべき書らしく、素堂及び去來の人物から考へて、この說は却つて兩書の性質を疑はしめるものにならう。又素堂が葛飾正風（別項）を開いたとは葛飾派の唱へる所であるが、素堂自身には、さる意識はなく、自ら其日庵二世と名乘つた絢堂素丸（馬光）に始まると見られねばならぬけれども、兎に角素堂が葛飾正風の祖と仰がれた所に、彼の俳壇的德望が反映してゐる。〔志田〕

【參考】連俳雅百韻山口素堂○俳家奇人談　竹内

屋久右衛門手代德兵衛は、豫て北の新地天滿屋の抱女お初に馴染んでゐたが、主人の姪と夫婦になつて江戸へ下らねばならなくなり、お初の方も侍客の身請話が決まつた爲めに二人で曾根崎天神の森で情死を遂げたと「心中大鑑」に傳へる。「心中戀の塊り」幷名寄鹿子」には、男の齡は二十五、女は二十一と記す。但し本曲興行の前月、大阪竹島幸左衛門座を初め京阪諸座でこの事件つたと語る。その金は友達九平次への一時貸が必ず戻るといふ。お初も驚いて男に力をつけてゐる中に、伊勢講歸りの九平次が現れた。早速德兵衛が貸金の催促をすると、九平次は

（藏氏郎

段坂を漫々と上つて行く洋服出立の二人連がある。」それは小野哲也と、その友人葉村幸三郎である。哲也は帝大を出た法學士の學校教師である。學生時代から秀才を見込まれて小野家の婿養子となつたもので、妻時子と姑との三人暮しであるが、この頃は夫に死に別れて出戻つた義妹の小夜子といふ二十三になる女がゐる。勝氣な時子との間の圓滿を缺く哲也は、その心の空虛を小夜子に依つて慰めを見出してゐるのである。時子が義理の妹に對する不滿は爆發して來る。小夜子は自分の身をひいて、一時、葉村にすゝめられるまゝに富豪澁谷家に家庭教師となる。哲也は妻を疎む心が激しくなり、澁谷に無態を言はれてそこを逃げ出して來た小夜子に一層親しみかける。併し小夜子は義姉に對する義理を思ふために哲也を避けてゐる。遂に危機は來た。小夜子は千葉の舊友勝見の許に去ることになつたが、その途中から哲也に電話をかけて呼びよせる。その後小夜子の隱れ家に哲也の訪ねて來る日がつづいた。時子の哲也を疑ふことは一層激しくなり、遂に哲也は家出して小夜子の許にかくれた。時子に發見され、小夜子は姉と賴む勝見の忠告に從つて姿をかくし、哲也も家に歸る。その後、哲也は悶々の情のやる方ないため、東京を去つて清國天津の學校に赴任する。葉村が勤め先の會社の用務でその地を訪ねた時、彼はその學校をも去り、放浪同然に身を持ち崩して飲酒に溺れてゐる。歸京をすゝめるが、彼はそのまゝ行方知れずになる。後、日露戰爭の最中に哲也の姿を認めた者がゐるといふ噂も殘つた。葉村は社會的に成功した。

【批評】二葉亭の小說の中では、最も筋の通つた構想のはつきりした作品で、當時の所謂家庭小說等の影響さへもありはしないかと疑はれる。哲也と云ひ小夜子と云ひ時子と云ひ、類型的な性格と心理を脫してゐない。時子の嫉妬、小夜子と哲也の戀愛の描寫などには通俗味が多分にある。また探偵小說的に筋の變化を追つて行く邊りにも通俗味がある。發表當時の世評は高く、一般社會にも愛讀されたが、文藝史的の意義と價値とは、「浮雲」(別項)のそれに比較すべきものがない。すでに二十年程の歲月を經た當時の自然主義一派の最高潮の時代にあつては、「其面影」は何等新機運を誘ふことの出來なかつたのは事實である。併し日本を去り國外に放浪する哲也には、晩年の作者の風貌とその思想上に於ける浪漫的な片影とを認めない譯には行かない。本作の最後は「浮草」(ルーヂン)(別項)の結末を思はせるものがあり、哲也にもルーヂン型の一面がないでもない。又哲也の性格は「浮雲」の文三と同型で、その新しい發展とも見られる。

【參考】二葉亭四迷坪内逍遙・内田魯庵等○思ひ出す人々内田魯庵○雜誌「早稻田文學」明治文學研究號　〔武藤〕

其俤淺間嶽（たのおもかげあさまがたけ）「淺間」を見よ。

園塵（そのちり）　連歌集　三卷【作者】猪苗代兼載。「文龜壬戌臘月末注」之、恥ニ外見一者也。兼載」と奥書がある。【諸本】帝國圖書館本。續群書類從連歌部所收。【解說】每卷附句を四季・戀・雜の六部に部立し、外に發句を載せてあるが、その中、第一卷と第三卷とは卷末に發句を四季の部立なしに載せ、第二卷には四季の部立の中に發句と附句とを載せてある。又第三卷の雜は上下に分つてあり、一體に作の數も多く、この一卷で前二卷分の分量を持つてゐる。かゝる不統一なものになつてゐるが、文龜壬戌(二年)はこの七月に宗祇が歿してゐて、當時岩城に庵住した兼載がこれを聞いて、態々宗祇終焉の地の箱根の湯本まで來、追悼の長歌を宗長へ送つたりしてゐるなどから考へて、宗祇の死に感ずる所があつて急に思ひ立つて書き纏めた結果、かゝる不統一なものになつたかと想像される。本集中、師心敬僧都の歿後八年の春に、その墓所で百韻を行ひ、十三回忌に佛名を冠字にした百韻を行つたことの見えるなどが注意される。〔志田〕

園の花（そのはな）　人情本　六編　十八册【作者】狂訓亭主人(爲永春水)【畫工】溪齋英泉【名稱】貞烈美談と角書がある。「園の花」の名稱は、編中の女性三勝・お園の心の美を譬喩したのである。【刊行】初編天保六年。第二編同七年。第三・四編同九年。第五編同九年稿、同十年刊であらう。第六編同十一年。【題材】脚本で有名な三勝半七に、お園を配した「艶姿女舞衣」を材としたのであるが、實はそれから出た曲亭馬琴の「三七全傳南柯夢」(別項)に據つたもので、春水自身も補綴と稱してゐる。半七を笠松家の子とし、お園を茜根養之進の娘としてあるなど、多少の變更はあるが、人物の名稱は全く「南柯夢」と同一である。

【梗概】鎌倉佐介ケ谷に住む笠松半太夫(笠谷とした箇所もある)といふ二千石取りの武士は、既に死し、妻は尼となつて貞心と云ひ、甥半兵衞を後嗣とした。實子半七は部屋住で、腰元三勝と戀に陷ちた。同じ腰元浦路も半七に戀してゐる。三勝の實父で家臣なる十平は憂慮して、それとなく三勝を伯父の醫者非野得元方へやり、その次男種次郎と結婚させようとする。三勝はこれを悟り、鳥田髷を切つて家出して了つた。茜根養之進の娘お園、半七を大師川原で見染め、養之進は人を介して半七を養子にした。或る日出入の醫者稻田安幸が尋ねて來て、築地に移轉したからと誘ひに來る。半七は何も知らず遊びに行くと、死んだと思つた三勝が安幸宅にゐるのを見て驚く。實は見詰の橋(本所三つ目)で三勝の櫛が落ち、女の死骸が上つたので(腰元浦路の死骸)、三勝は死んだと思ひ詰め厚く葬つたところが、安幸に救はれてゐたのである。半七はそのまゝ三勝を安幸の家近く圍つて折々通つた。彼は養家の首尾惡く遂に離緣となつた。三勝は根岸に琴の指南をして半七を養つた。三勝の不在中、浦路の亡靈が通つて來て半七と契つた。浦路は伯父の惡漢に欺かれて惡醫蟻松典全に賣られ、投身して死んだのである。その妹お浦は半七の隣家に住んでゐたが、姉の亡靈がお浦に乘り移つて、半七と契つたのである。お園の父養之進は、主君の惡行を諫め切腹した。養子半七を離緣したのも、迷惑の及ばぬやう心遣ひしたのである。お園は追ひ出されて種々の迫害誘惑を受け、門附にまで零落するが、遂に半七に再會し、後、茜根家は再興され、半七は召返されて本妻お園、三勝・お浦はお部屋樣と呼ばれてめでたく榮えた。

【構想】一人の男性を巡る三人の女性の戀といふ春水の人情本の常套的なものであるが、讀本から脫化した作だけに、草雙紙趣味に富んだものである。稻田安幸夫婦が默酒落を言ひ合ふ所などは、文政以後の滑稽本に似通つたものである。〔山崎〕

薗八節（そのはちぶし）　淨瑠璃の一流派【名稱】流祖宮古路薗八の名に據る。【異稱】宮薗節【沿革】宮古路薗八は、宮古路豐後掾(豐後節

物の名稱は全く「南柯夢」と同一である。

【梗概】鎌倉佐介ケ谷に住む笠松半太夫（笠谷とした箇所もある）といふ二千石取りの武士は、既に死し、妻は尼となつて貞心と云ひ、甥半兵衞を後嗣とした。實子半七は部屋住で、腰元三勝と戀に陷ちた。同じ腰元浦路も半七に戀してゐる。三勝の實父で家臣なる十平は憂慮して、それとなく三勝を伯父の醫者非野得元方へやり、その次男種次郎と結婚させようとする。三勝はこれを悟り、島田髷を切つて家を飛出し、二代蘭八、即ち宮蘭鸞鳳軒によつて基礎が固められた。寶曆・明和頃には、京都を中心に盛んに行はれ、「宮蘭花扇子」（別項）によると、八十太夫以下百四人の名が掲げられてゐる。鸞鳳軒は明和の末、江戸に下つて斯流の扶殖を試み、文化頃まで凡そ五十年間持て囃された。然るに鸞鳳軒の門弟宮蘭文字太夫（二代鸞鳳軒）が、文化九年に歿した頃から、秀れた後繼者も出でず、斯流が拍子本位の所作事に適せず、而も豐後諸流が芝居座附の長唄・囃子方に兼ねられるに至つて、頓にその衰微を來した。その後、初代鸞鳳軒の門弟春太夫に就いて學んだ事のある山城屋清八（宮蘭千之）によつて、文政年中、遺曲十數種が江戸で復興され、今日に傳へられた。

【傳系】〔初代蘭八〕傳未詳。「宮蘭花扇子」等に據つて、斯流の祖であり、宮古路豐後掾の未だ國太夫（半仲）時代の高足とおぼしく、同門の繁太夫が大阪で一流を開いたのに先立つて京都で一流を起した事、門下から二代蘭八・春富士正傳・宮古路世代太夫（二代豐後掾）等の逸才を出した事などが知られる。〔宮蘭鸞鳳軒〕詳傳未詳。寶曆十二年宮蘭豐前と改め、更に明和四・五年前後鸞鳳軒と改名。別號、平吳。天明五年五月九日京都で歿す（名人忌辰錄）。彼は天成の美音家であつた。又文才があつて、輕快な肴淨瑠璃などの作もあり、且つ斯流の語り物の大部分が彼の作曲であるのに徵しても、彼は宮蘭節の大成者である。一時京都に宮蘭豐名である。〔春富士正傳〕詳傳未詳。早く一派をなし、寛延・寶曆頃から正傳節として相當行はれた。寶曆十年前後、受領して春富士出雲掾（藤原貞政）と改めた。門下では歌國太夫・和國太夫・春太夫等、三絃彈では輪龍・龜藏等が著はれてゐる。段物等四十二を集成した「春富士都錦」（寶曆十三年刊）がある。〔二代鸞鳳軒〕初名宮古路蘭吳。家名大和屋。法名開權院壽顯日實。寛延元年大阪に生れ、文化九年正月二十五日同地で歿す。享年六十五。墓所、大阪高津正法寺。二代蘭八門下。寶曆十二年師が宮蘭豐前と改名と同時に、宮蘭文字太夫と改め、文化元年師名の鸞鳳軒を襲名。寛政・文化年代は殆ど彼が劇場出勤を獨占してゐる觀があり、斯流の大阪に於ける隆盛の一半は、彼の力に俟つ所が多い。彼の歿後、天保に至つては全く絶えた。〔春太夫〕詳傳未詳。初め宮古路春太夫といひ、二代蘭八の弟（門人とも）で、後に宮蘭春太夫となつて江戸に下り、春太夫節とて行はれたといふ。〔宮蘭千之〕通稱山城屋清八。天保五年十二月二十二日江戸に歿す。墓所、本所押上大雲寺。江戸日本橋葭町の蔭間茶屋の主人。春太夫の門人と傳へられる。大阪で斯流の名曲十段を學び得て、文政中、江戸に下り、復興した功勞者で中興の祖といはれる。門下に宮蘭千秀と同千壽との兩婦人が著名である。〔初代千壽〕本名しま。明治元年四月歿、享年六十三。日本橋通二丁目の茶漬茶屋宇治の里の妻女。文久元年師千之の二十七回忌追善記念として夫清三郎と共に「宮蘭千草種」といふ復興された蘭八節十段を收めた正本を版行した。これが今日行はれる正本である。〔二代千壽〕本名梅田たづ。生歿未詳。日本橋吳服町の兩替屋の娘で、その孫が伊井蓉峰と傳へる。師初代千壽の歿後、斯流の唯一の師匠で、明治八年一時廢業し、斯流も暫く廢絶の狀態であつたが、同十七年二代千之と流儀再興を出願し、共に斯流の取締となつた。〔二代千之〕本名小川（又は村井）さな。後、村井に改姓。天保四年に生れ、明治四十二年一月十日歿す。享年七十五。

宮蘭鸞鳳軒正本

【構想】一人の男性を巡る三人の女性の戀といふ春水の人情本の常套的なものであるが、讀本から脫化した作だけに、草雙紙趣味に富んだものである。稻田安幸夫婦が駄洒落を言ひ合ふ所などは、文政以後の滑稽本に似通つたものである。〔山崎〕

蘭八節（そのはちぶし）　淨瑠璃の一流派。【名稱】流祖宮古路蘭八の名に據る。【異稱】宮蘭節（みやらんぶし）。【沿革】宮古路蘭八は、宮古路豐後掾（豐後節の部屋樣と呼ばれてめでたく榮えた。

【詞章】概ね一段物で、時代物よりも世話物が多く、義太夫節（別項）の節事から多く抽き、近松の作品からも相當流用してゐる。「宮蘭新曲集」に收錄された肴淨瑠璃類の短篇も相當にある。內容から分類すると、心中道行物・愁嘆物・祝言物・滑稽物・肴淨瑠璃等に分けられるが、心中道行物と愁嘆物が數も多く、また最も特色に富む。「鳥邊山」「梅川」等は、その中の代表曲であるが、詞章として殊に優秀なのは「掛行燈」であらう。作詞者としては並木十輔・同翁輔・英露鳥・並木五瓶等の狂言作者があり、肴淨瑠璃では柳里恭・度量・南廓・泉明・麗白・御風・吉祥等がゐる。【曲風】哀婉な心中道行物や哀傷的な愁嘆物は、やがて蘭八節の特色であり、生命である。豐後掾の藝風を繼承墨守したもので、從つて拍子本位の所作事に適しない所以である。この點に於て豐後三流（常磐津・富本・清元）に比べて、劇場音樂としての素質を缺いた爲めに、文政以降の凋落を見たのであるが、それだけにまた抒情的の詩味と趣致とを多分に持つてをり、一味新內節（別項）と相通ずる所があるともいへよう。而もその手附・聲調等に、丸く柔かな京都特有の情調が現はれてをり、就中、婉曲にすんなりと素直に下げる語り口や節尻を半音だけぼんやりと暈すやうに下げる味ひ等は、やがて上方の鄕土的音節である。

【傳存曲】語り物は、その數百五十段を越えるといふが、初代千之によつて復興されて現存するものは次の十曲である。○鳥邊山（浮橋）（明和三・四年頃初代鸞鳳軒作曲。「忠臣講釋」の「人月の重縫」の改訂。お染半九郎の心中を隨谷縫之助と浮橋との心中に改めてある）○ゆかりの月見（夕霧）（寶曆年中初代鸞鳳軒作曲。後の各流の夕霧物の

原作。近松の「夕霧阿波鳴渡」の改作）○桂川戀の柵（お半）（明和初年初代鸞鳳軒作曲。後、各流のお半長右衛門道行の粉本）○道行相合炬燵（梅川）（明和末年頃初代鸞鳳軒作曲。近松の「冥途の飛脚」の改修）○花街の色絲（文藏おしづ）○道行菜種の亂咲（吾妻與次兵衛）○江戸の繪姿（おひな吉三郎）○小春治兵衛炬燵の段○道行緣花房（お花半七）○口說八景（小いな半兵衛）。【詞曲集】宮薗大全（寶曆十二年刊。京都美濃屋平兵衛版。五十段收錄。最古のもの）○宮薗雲井櫻（同年十一月刊。四十五段を收錄）○增補宮薗集都大全○宮薗花房子（別項）○宮薗鸚鵡石（別項）○宮薗都の春（別項）○宮薗浪花梅（刊行年月・版元未詳）○宮薗新曲集（安永三年刊。日本歌謠集成卷十所收）○宮薗千草種（初編、文久元年冬刊）等。

【參考】聲曲類纂齋藤月岑○江戸時代音樂通解　町田博三○薗八節の研究　黑木勘藏、近世演劇考說）○日本歌謠史　高野辰之○薗八節の歷史　中内蝶二・田村西男共編（日本音曲全集第十一）○歌舞伎圖說　守隨憲治・秋葉芳美共編○江戸時代之音樂　田邊尙雄○二代目宮薗鸞鳳軒に就て　野間光辰（上方四）　【秋葉】

その濱ゆふ（そのはまゆふ）　俳諧紀行　一册

【著者】服部嵐雪・石内朝叟【名稱】伊勢から紀州を廻つた紀行で、紀州南部の條に、「此間はまゆふ多し」とも記して居り、濱ゆふは紀州海岸の著名な草で、「萬葉集」人麿の「三熊野の浦の濱ゆふもゝへなす心は思へどたゞに逢はぬかも」の歌をはじめ、常に熊野の浦に詠み合せられてゐるものなので、書名としたのであらう。【刊行】寶永二年【諸本】舊間俳諧續集（俳書大系）所收。【解說】寶永二年の三月半ばから夏へかけて、太神宮不思議の示現があるとて、前代未聞の拔參りの大參宮があり、國々の奇瑞の說話など多かつたので、嵐雪も同年四月、朝叟・百里・全阿・甫盛の四人の門人を連れて、伊勢參宮に出掛け、兩宮に參拜し、磯の宮・朝熊等を廻り、八鬼山（やきさん）の觀音にも參詣し、それから紀州に出て熊野三山その他の名所舊跡を廻り、五十日の長途を難もなく大阪へ着くまでの紀行である。出發の日及び大阪着の日附はないが、四月二十三日から五月五日までの日附がある。紀行中の發句は嵐雪及び同行の門人の發句に定重・竹宇・左波の一句づつを加へて都合四十七句、中、嵐雪の句が十二句ある。卷末に「らくがき三十六句」と題して、那智から谷汲に至る西國三十三所觀音に新宮・本宮・湯峯を加へて三十六句とした一行五人の五吟歌仙一卷を添へ、その後に朝叟・嵐雪の連名で、江戸の門人序令へ宛てて、「五十日の長途難なく大阪へ着いたし候。是より大和路を經て出京の砌、尙可申入候」と書き送つた文面があつて終つてゐる。【價値】疎懶で出不精であつた嵐雪は、行脚らしい行脚をせず、紀行も貞享三年の「胡塞記」、年時不詳の「塔澤記」、元祿十三年の「裝遊稿」と本書との四つ位で、それもいづれも文は見るべき文であるに拘らず皆小さく、中では「裝遊稿」と本書とは大きい方である。かく紀行がいづれも短篇である所にも彼の疎懶な性が能く現はれてゐる。なほ紀行中の句を見ても、純客觀の作が少く觀相の句が多いので、旅行句に於てさへかゝる傾句を見せてゐる所に彼の作風の特徵が能く窺はれる。「らくがき」の歌仙も知識的な興味のものである。これ等の點に於て、本書は他の三紀行と共に嵐雪の特徵を窺ふに看過し難いものである。　【志田】

其袋（ふくろ）　俳諧集　二册

【編者】服部嵐雪【名義】自序に、「其袋や花のしぼみたる、月のかけたる、かつがつひろひえて、括て我家の祕藏ぶくろとす」とあるから、その折り〳〵自他の吟詠を拾ひ集めた集といふ義であらう。【刊行】元祿三年【諸本】京西村の再刻本がある。但し原版には月下の跋があるが、西村本にはこれを逸してゐる。俳諧七部拾遺・嵐雪全集（俳諧文庫）中の嵐雪撰集・蕉門俳諧前集（俳書大系）に所收。【內容】元祿三年六月の嵐雪序、寒陽堂月下の跋がある。四季類題の發句七百五句があり、終つて春二卷・夏二卷・秋一卷・冬二卷の七歌仙（立志・嵐雪・鋤立三吟一、驛白・嵐雪・李下・冰花四吟一、立志・嵐雪兩吟一、百花・菊峯・笠凸・嵐雪四吟一、其角・百里・嵐雪三吟一、秀和・舟竹・嵐雪三吟一、月下・嵐雪・桐雨三吟一）が收められてゐる。發句の部の春の部の終りには四季混雜の神祇・釋教附哀傷・戀（めぐり）・述懷の句を收め、夏の部の終りには嵐雪の妻鱗詣の句や他の人々の旅行句、園女の大和旅行の句、芭蕉の奧羽旅行の句を收め、冬の部の終りには世話の句、物名の句、琴風の七福神の句、かしこ坊の七小町の句、山川の戀の通路を詠んだ句、卜宅・冰花の廻文の句を收めてゐる。秋の部に嵐雪の菊花九唱や素堂の己巳（元祿二年）九月十三夜游園中十三唱が收められてゐるのも注意される。なほ發句の部の中に、嵐雪・孤屋兩吟の表八句、鬼貫・才麿・來山三吟の三句、沾荷・芭蕉・露沾・嵐雪四吟の半歌仙等が交へられてゐる。【特色・價値】發句の部は上述の如くであるので、その體裁やゝ雜駁の感を免れぬが、それだけ又目先に變化があつて興味を覺えしめると共に、體裁に頓着しない所に嵐雪の疎懶な性格も窺はれる。作者は江戸蕉門の人が多いけれども、季吟・湖春・信德・千春（ちはる）・幽山・才麿・鬼貫・靑人（あをんど）・來山・露沾・露言・沾德の如き、他派の俳人の交へられてゐるものも少くはなく、この點に前年の「曠野（あらの）」（別項）を想はせる所がないでもないと共に雜駁さもないではない。本集には嵐雪の發句が五十九句も見られ、彼の觀相的な特色が既に十分現はれてゐるが、連句の方はまだ十分談林風の餘臭を脫し切らない所がある。併し兎に角本集は、彼の撰集が少い上、その撰集中最大のものであるから、彼の代表的撰集と見らるべきものである。　【志田】

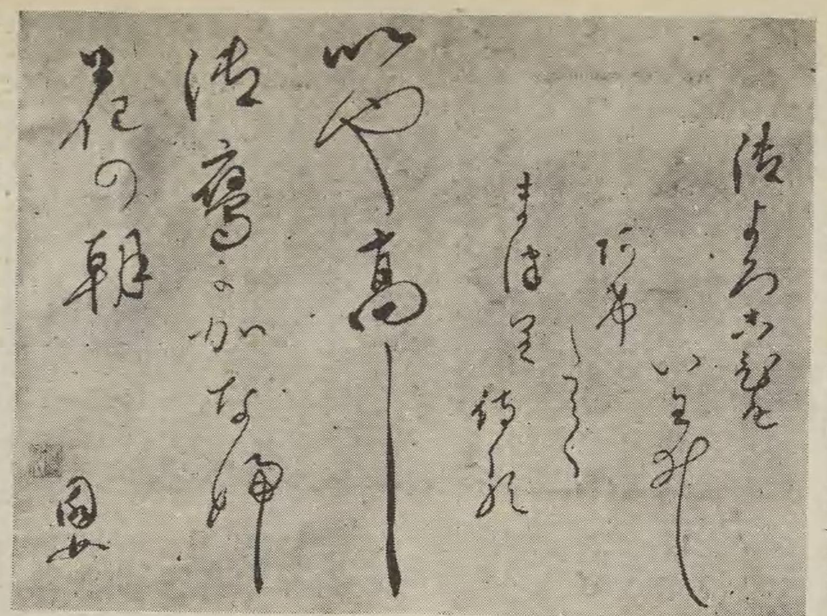
そのむかしがたり　隨筆　一卷

【著者】三木隆盛【解說】每章の起頭に「其昔」といふ詞を置いて昔談をしてゐるが、後の方には、寬政・文化頃著者見聞の世事談をも擧げてある。古今習俗の變遷を比較したところも少くない。紫宸殿前の櫻橘樹から南朝の皇統に至る凡そ三十九條を收めてゐる。老狐・天狗の怪談、陰德陽報談、女帶及び女髮樣の古今、煙草・根樹・顯微鏡の事等もある。弘化元年東武駿臺產人最中三成の序がある。

【著者小傳】同序に據ると、著者は橘氏、和歌・俳諧・茶道を翫び、茗器の鑑識に長じた人で、晩年剃髮して麾陀羅毛坊乾道と號し、俳名を晉堂雲南と稱した。歿年は分らぬが、齡八十餘とあるので察すると、寬政天保年間を風流に送つた江戶人と思はれる。　【和田】

園女（その）　俳人

【姓】斯波氏。本姓庾會氏【別號】智鏡【生歿】寬文四年生れ、享保十一年（一三八六）四月二十日歿。享年六十三（「俳諧家譜」に七十四歲とする誤は、六十賀集「鶴の杖」のあるによつて知られる）（「辭世」）秋の月春の曙見し空は夢か現かなむあみだ佛。【法名】林香院遊譽稱詠妙園信女【墓所】深川靈巖寺中



園女筆蹟

入るといふは疑はしい。併し初め美津女を師としたとの説は、年齢上否定される。【閲歴】伊勢山田の神宮秦師貞の女で、同地の醫師斯波一有（清川）の妻である。舊説に岡西惟中（別項）の妻とするは誤である。夫一有も俳人で、貞享二年頃の「明烏」は、その撰であらうと云ふ。園女が芭蕉に入門の時、芭蕉から「暖簾のすゑ」と本書とは大きい方である。かく紀行がいづれも短篇である所にも彼の疎懶な性が能く現はれてゐる。なほ紀行中の句を見ても、純客觀の作が少く觀相の句が多いので、旅行句に於てさへかゝる傾句を見せてゐる所に彼の作風の特徴が能く窺はれる。「らくがき」の歌仙も知識的な興味のものである。これ等の點に於て、本書は他の三紀行と共に嵐雪の特徴を窺ふに看過し難いものである。〔志田〕

其袋 そのふくろ　俳諧集　二冊　【編者】服部巴（元禄二年）九月十三夜游園中十三唱が收められてゐるのも注意される。なほ發句の部の中に、嵐雪・孤屋兩吟の表八句、鬼貫・才麿・來山三吟の三句、沾荷・芭蕉・露沾・嵐雪四吟の半歌仙等が交へられてゐる。【特色・價値】發句の部は上述の如くであるので、その體裁やゝ雜駁の感を免れぬが、それだけ又目先に變化があつて興味を覺えしめると共に、體裁に頓着しない所に嵐雪の疎懶な性格も窺はれる。作者は江戸蕉門の人が多いけれども、季吟・

はまゆふ多し」とも記して居り、濱ゆふは紀州海岸の著名な草で、「萬葉集」人麿の「三熊野の浦の濱ゆふもゝへなす心は思へどたゞに逢はぬかも」の歌をはじめ、常に熊野の浦に詠み合せられてゐるものなので、書名としたのであらう。【刊行】寶永二年【諸本】舊門俳諧續集（俳書大系）所收。【解説】寶永二年の三月半ばから夏へかけて、太神宮不思議の示現があるとて、前代未聞の拔參りの大參宮が

園女　俳人【姓】斯波氏。本姓度會氏【別號】智鏡【生歿】寛文四年生れ、享保十一年（一三八六）四月二十日歿。享年六十三（「俳諧家譜」に七十四歳とする誤は、六十賀集「鶴の杖」のあるによつて知られる）〔辭世〕秋の月春の曙見し空は夢か現かなむあみだ佛。【法名】林香院遊譽稱詠妙圓信女【墓所】深川靈巖寺中名を晋堂雲南と稱した。歿年は分らぬが、齡八十餘とあるので察すると、寛政天保年間を風流に送つた江戸人と思はれる。〔和田〕

園女句集　大野洒竹編（俳諧文庫元禄名家句集）。

のみ」と云つてゐる。享保八年、自ら六十の賀を行ひ、その時人々に乞ひ得た賀章に、剃髪の折人々から送られた句などを併せて、自ら「鶴の杖」を撰したが、それより四年にして遂に歿したのである。【著作】菊の塵（別項）○鶴の杖一册　園女撰（享保八年刊。園秀俳家全集）○園女句集　大野洒竹編（俳諧文庫元禄名家句集）。

【人物】園女は趣味性に富んでゐたと見えて、唐風の雄健な書に巧であつた外、和歌をも善くし、詩作をもした。當時の女俳人中優れた作者の一人で、捨女・智月尼・秋色女と共に元禄の四俳女として選ばれて居り（俳諧あすなろ）、俳諧の外、前句附の點者をもした。芭蕉の句などから考へると、人妻としても貞淑であつたらしいが、俳友琴風の云ふ所によると（鶴の杖跡）、世事に無頓着で、「袖下の紅ミを切つては下駄の鼻緒を整へ、茶碗を二ツ合せて花生けん事を思ひ、十あるを九ツまで穴明けんと打割り、張文庫の蓋を水流しに用ひる」などいふやうな風であつたと云ふ。眞摯であるだけ、また敬虔でもあつたらしい彼女は、富ケ岡八幡宮に三十六株の櫻を奉納し、歌仙櫻と稱したが、世に園女櫻とも稱せられた。「江戸砂子」の書かれた享保十七年頃には、半ば殘るに過ぎなかつたと云ふが、斑象の頃には、一二株を殘すに過ぎなかつたので、江戸深川の住なる斑象が都鄙の俳人に、櫻一株發句一章の法樂を需めて舊態に復せしめたといふ（櫻勸進）。〔志田〕

【參考】俳諧高天鶯　良弘○若えびす　青木鶯水○俳諧萬人講　草芬堂○歷代滑稽傳　森川許六○江戸砂子　菊岡沾涼○俳諧溫故集　箕輪蓮谷○俳諧家譜　早川丈石○櫻勸進斑象（芙蓉文集）○芭蕉門古人眞蹟　依兮○古事記布倶路　佐藤既得○芭蕉翁反古文　文曉○俳家奇人談　竹内玄々一○蕉門諸生全傳　遠藤日人○俳家大系圖　生川春明○俳林小傳　中村光久○俳諧人物便覽　三浦若海○神都俳人の系統　松本疎絃（わか竹）○蕉門分布史觀　勝峯晋風（早稻田文學大正一二ノ九）○俳人眞蹟全集　元禄時代上　巖谷小波編

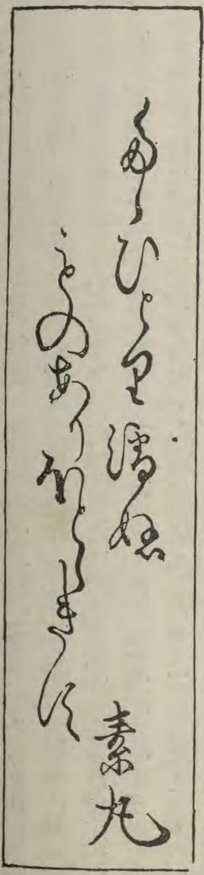
其雪影 そのゆきかげ　俳諧集　二冊　【編者】高井几董【刊行】明和壬辰（九年）秋の序跋があるから、當時の刊行であらう。【諸本】蕪村曉臺全集（俳諧文庫）・其雪影・續明烏（古俳書文庫）・中興俳諧名家集（俳書大系）・蕪村新十一部集（河東碧梧桐編）所收【解説】明和九年高井几圭の十三回忌に當り、その子几董が追福のために編した集である。首卷には几圭の遺句に几董及び門流五六子の句を繼ぎ交へて百韻の俳諧としたものを最初に掲げ、以て追善の意を表はしてゐる。「其雪影」といふ題號もこの百韻中の几董の脇句によつたのである。次に几董の獨吟歌仙一卷、子曳・几董兩吟歌仙一卷、蕪村・几董・竹護三吟歌仙一卷を收め、尾卷には故人知友の四季發句を集めてある。なほその初めに蕪村の筆になる蕉翁・其・嵐の三家及び巴人・几圭の像を掲げ、終りに嘯山の跋文を載せて故人追慕の意を致してゐる。本書は元來追善集であるが、蕪村の序にも、「あながち紫雲青蓮の句を求めず、ひとへに弄花醉月の吟を拾ふ」とある通り、内容は普通の撰集と大差ない。而して集中の作者は、几董が先人の知己宋阿の門流を標準として、その詠を採つたものであるから、必ずしも蕪村一派の人々のみに限らず、その句風の如きもなほ幼稚拙劣なものが少くない。併し大部分の作者は夜半亭系のものであり、移竹・太祇等の先輩を初め、蕪村及びその直系門流たる馬南・召波・几董の徒は、この中に在つて自ら清新の調、時流を拔くものがある。明和七年蕪村が夜半亭二世を襲いで、その新調漸く盛んにならうとする當時の樣は、本書によつて最もよく窺ふ事が出來るであらう。因にいふ、蕪村七部集（別項）には本書の首卷の大部分が省かれてある。〔潮原〕

鼠璞十種（そはくじつしゅ）　叢書　二册　【編者】三田村鳶魚【刊行】大正五年、國書刊行會第五期【内容】第一卷高尾追々考、新吉原細見記考、諸家隨筆集、奇異珍事錄、浮世草、橘窻自語、卽事考、反古のうらがき、讀老庵日札、色里新かれうびん、第二卷明和誌、道聽塗說、續道聽塗說、昔ばなし、燈前一睡夢、江戸見草、板兒錄拔粹、遊相醫話、寶貨漫文抄、寶永年間諸覺、伊勢町元享間記、麴街略誌稿。【解說】編者は序文中に「燕石十種」（別項）の岩本活東子に摸して「我が好むまゝに委ね、我が撰ぶ所に任せ」て本書を編したと言つてゐる。編者は江戸文學研究家として夙に大を成す人、或る時代の文化を知る上に當時の人々の隨筆雜著の類が如何に大きな役目をなすかは明かであるが、本書の如く編者にその人を得た場合、その價値は更に數倍するものである。殊に原本を求むる勞は隨筆類に於て著しいものがあるが、本書は大部分未見の原本を以て校訂せる點に更に價値を高めるものである。〔土井〕

蘇莫者（そまくさ）　雅樂舞曲　【名稱】この樂名は高昌國の女の帽子の名であるといふが、この樂と如何なる關係があるか不明。又「そまくしや」ともいふ。【性質】左方樂。古樂、中曲。盤涉調曲に屬する。序二帖（拍子各六）、破四帖（拍子各十二）。舞があり一人で舞ふ。舞の出入には古樂亂聲を吹く。舞者は蓑笠を着ける。古圖によれば身體全部蓑毛を以て蔽はれてゐる。假面をかぶり、桴を持つて舞ふ。舞の間、樂人一名常裝束で太刀を帶び、舞臺に出て笛を吹く。天王寺の樂人の祕曲となつてをり、今日でも蘭家に於てそれを傳へてゐる。答舞には「蘇志摩利」を用ひる。【沿革】俗說には、昔役行者が大峯に登つて笛を吹くに、山神これを聞いて感じて舞つた事を現したとか、又は聖德太子が河内の龜瀨に於て尺八を吹き給うた時に、山神感じて舞うたことを象つた舞だとかいふが、何れも信ずるに足らぬ。白石の「樂考」には、「者當レ作レ遮。唐の時、所謂西胡渾脫舞也。蘇莫遮は高昌國の女子の帽子の名なり」とあつて、これを西域なる高昌國の散樂の一種とし、高昌國の女子が舞ふ態であると說いてゐる。又「大日本史」禮樂志には、「按、敎坊記、曲名有二蘇莫遮一、羯鼓錄、太簇宮有二蘇莫賴邪一、並音相近、蓋同曲也」とあつて、これ亦西域より支那に入つた敎坊の樂であると述べてゐる。然るに又「敎訓抄」「體源抄」には、これを印度の樂なりとする一說をも揭げてゐる。何れが是なるか詳かでない。恐らく白石の說が最も當を得てゐるであらう。その古い舞態を見るに、全身に毛を蔽ひ、帽に角があつて、狂ひ廻るところから見ると、或はこれは獸類であつて、山中に於て猛獸が笛の音を聞いて喜悅するといふ、印度又は西域の傳說に伴ふ舞樂ではないかとも考へられる。我が國へは天王寺の樂人のみに依つて傳へられてゐる。或はこれは推古天皇の時、百濟の味摩之の傳へた伎樂の中の一つであつて、それは秦家卽ち天王寺樂人の家のみに傳へられたもののやうである。〔田邊〕

蘇莫者（古圖）

素丸（そまる）　俳人【姓名】溝口勝昌、通稱十太夫【別號】白芹・絢堂・臺華齋・一練窓・竹光・天地庵・向旭樓・青虾・謙虛道人・萬里齋・兩儀庵・五味堂・亨堂・宜春園・枸杞庵・晦近舍・竹蘚堂・奧足軒・先故・寶机庵・淨々庵・蘭溪堂・荷葉・爺婆亭・活道耳・渭濱庵・果日庵・龍齋。【生歿】正德三年八月二十六日江戸に生れ、寶政七年（一七九五）七月二十日同地に歿す。享年八十三【法名】嘯月庵鐵翁素丸居士【墓所】芝青松寺【閱歷】本所長崎町に住んだ幕府の士で、御書院番を勤め、采地五百石を賜はつてゐた。俳諧を長谷川馬光に學び、初め師の初號白芹を傳へられ、元文年中更に絢堂素丸の號を附屬されて二世素丸となり、遂に其日庵三世を繼いで、素堂・馬光と傳はつた葛飾派の正系を傳へた。而して寬延四年には自ら發起して同門の竹阿並に雪門の蓼太・斑象、採茶庵派の二世宗瑞を語らつて、師馬光等の「五色墨」に次いで「續五色墨」（五色墨參照）を撰び、江戸座（別項）一派の人々に對して暗に反抗の氣勢を擧げた。葛飾派（別項）は、元來素堂をその祖としてゐるが、實は素丸に依つて世間的名聲を贏ち得たといふべきで、彼は江戸座の晦澁奇僻な調が漸く世人に厭かれようとする時に乘じて、寧ろ美濃・伊勢風（各別項）に近く、俗耳に入り易い調を以て臨んだ。この通俗化的傾向は師馬光の時から既に見えてゐた所であるが、素丸に至つて大に時好に投じ、葛飾派の實際的勢力は始めて玆に認められた。且つ彼はかの「說叢大全」（別項）の如きを著すだけの學問的蘊蓄もあり、加ふるにその性篤實寬容で、子弟を導くに諄々として倦まなかつた。明和九年四月十日致仕し、薙髮して龍齋と稱するやうになつてからは、特に俳事に專心になる事を得て、その門流は益々盛んとなつた。世に彼を葛飾派中興の祖と稱するのも誠に尤もな事である。併し彼の俳風は、それが俗耳に近からん事を努めただけ高踏的な藝術味に乏しい。風雅の眞を窮めようといふのでなく、ただ風雅の趣を樂しまうとする輕い態度であつた。やゝもすれば俳諧を處世修身の具にしようとする傾さへ見える。これは彼が幕下の士だといふ地位的自覺に煩はされた點もあるかも知れぬが、要するに彼の天分が藝術家といふより敎育者といふに近かつたからであらう。併しとにかく彼によつて其角以來の江戸座の俳風が一變され、蓼太の雪門と共に、葛飾派が當時の江戸俳壇の一大勢力となるに至つた事は、俳諧史上注目すべき事である。【編著】說叢大全（別項）五卷（安永二年刊）○素丸發句集（寬政八年刊。素丸の歿後門人絢堂橫山德布が編したもので、體裁頗る完備し、收めた句數も甚だ多い）○笑ひ續け（明和八年）○梅の絢（天明五年）○十論裸問答（享和二年）等。【門流】其日庵四世を嗣いだ加藤野逸、同じく五世をついだ關根白芹を初め、二世今日庵森田元夢・二世佐野蓮之・天地庵高畑我泉・三世絢堂橫山德布・二世渭濱庵柴田蛙水等その門流は頗る多く、鬱然たる勢力を有してゐたが、藝術的に見て眞にすぐれた作家と稱すべきも



素丸筆蹟

のは少い。「葛飾雀門分脈系圖」によれば、小林一茶も亦素丸の門となつてゐるが、一茶は素丸の同門二六庵竹阿に屬してゐたので、素丸の直系とは言ひ難い。

【參考】葛飾雀門分脈系圖 馬場錦江編 〔類原〕

蘇民將來 そみんしやうらい 説話 【名義】生民を將來に蘇朔する義（日本書紀通證）、神符を衣袖に懸けると死人と雖も蘇生する義（下學集）、蘇民は人の名で、將來は將に奉らんとする義（雍州府志）、朝鮮の蘇姓より來つたもの（南留別志）、新に皇朝に歸化した韓漢の人を將來と書く（八阪神社舊記集錄）、將來は縣守を誤つたもの（八阪神社舊記集錄）など、異説紛々としてゐるが未だ明かでない。【本質】一方に寓言の上に立つ作爲の人物となすものがある（日本書紀通證・下學集等）。近くは友誼親好の擬人格であるとなす説（阿刀田令造氏「蘇民將來」）も、これに屬すと云へる。他方には實現した人物となす説も少くない。荻生徂徠がこれを朝鮮人となし（南留別志）、貝原好古がこれを琉球人となした如き（諺草）これである。

【説話梗概】「釋日本紀」引用の「備後風土記」に、疫隈國社の緣起譚として、昔北海の武塔神が南海の神の女に婚するために出かけて、日暮に、蘇民將來・巨旦將來といふ兄弟の許に到つた。兄は貧しく弟は富んでゐた。弟は神に宿を拒んだが、兄は家に導いて粟飯を供した。その後、年經て武塔神がまた蘇民將來を訪うて、彼とその女とに茅輪を腰に着けさせた。その夜二人を除いて悉く死に失せた。その時神は、「吾は速須佐能雄能神である。後世疫氣があつたら蘇民將來の子孫と云つて茅輪を腰につけるがよい、さうすれば災を免れる」と敎へたとある。「拾芥抄」「公事根源」「神社本緣記」「二十二社註式」「勝餘寮雜記」「麻尻」等の記する所も、この「備後風土記」の記述に基いたものであるが、祇園牛頭天王緣起には、須彌の半腹にある豐饒國の武荅大王の子牛頭天王が、大海中の沙渴羅龍王の女を求めに出かけ、道で古端長者といふ富豪に宿を拒まれ、蘇民將來といふ貧者に粟飯で歎待せられた。天王は蘇民將來に牛玉といふ如意寶を與へ、八萬四千の眷屬に命じて、古端長者の一家を滅すことにしたが、誤つて蘇民將來の一族を殺してはいけないといふので、茅輪を着けしめたとある。更に簠簋內傳諺解にも、摩訶陀國の王舍城の商貴帝（牛頭天王）が、南海の娑竭羅龍王の女を求めて、夜叉國の巨旦大王に宿を拒まれ、賤人蘇民將來に粟飯の饗應にあづかり、二人をそれ〴〵賞罰した物語が出てゐる。

【解説】この物語は、全體の構成から云へば、「常陸風土記」に出てゐる一説話――祖神尊が巡行して駿河の福慈岳に至り、日が暮れたので宿を乞ふと、福慈神は新粟の初嘗で家中が諱忌してゐるからと云つてこれを拒んだ。尊恨み怒つて、汝の居る山は夏冬冷寒であれと呪ひ、去つて常陸の筑波岳に至ると、筑波神は快く宿をさせたので、これを祝福した。それ故、「福慈岳常雪、不レ得二登臨一、其筑波岳往集歌舞飲喫、至二于今一不レ絕也、」とある説話と同じく、その話根は、或る神が巡遊して日暮に宿を乞ふこと、一はこれを拒み他はこれを容れること、拒んだ者は罰を受け、容れた者は賞を受くることに存し、而して這般の話根から成る説話は、廣く世界の諸地に見出される。かくて本原的には、蘇民將來の説話は、福慈・筑波の説話と同樣に、道德的説話の形を採つた一の世界大擴布説話に過ぎない。それがいかなる過程の下に、速須佐能雄能神に就いて物語られるやうになり、又どうして茅輪の神事の起原を説明するために利用せられるやうになつたかは、解釋が甚だ困難である。ただこの説話に現れる武塔神が、もし民間信仰に強く根を張つてゐる一種の訪問神――山・海から現れて來て人間に禍福を授ける朧げな靈格の觀念と血緣があるとしたら、速須佐能雄能神が持ち出されるのは、さして不思議ではなくなる。なぜなら、この神は這般の訪問神と若干の關係を有してゐるからである。蘇民將來といふ疫病除・怪我除などの呪物を出してゐるところは、仙臺の木下藥師を初め、宮城縣・山形縣・青森縣・岩手縣・長野縣・山梨縣・三重縣・京都府・兵庫縣等頗る廣きに亙つてゐるが、本源地はやはり備後であらうと説く學徒がある。この説話は、武塔神を素戔嗚尊とする時期から、牛頭天王を素戔嗚神とする時期に推移し、更に後代に至つて濃厚な佛敎臭味を帶びるやうになつたが、本源的に云へば、民間の祭儀的風習が基礎となつて、その由來を説明するために世界大擴布説話が拉し來られたものであらう。

【參考】比較神話學 高木敏雄 ○蘇民將來 阿刀田令造（東北文化研究一ノ四・五） 〔松村〕

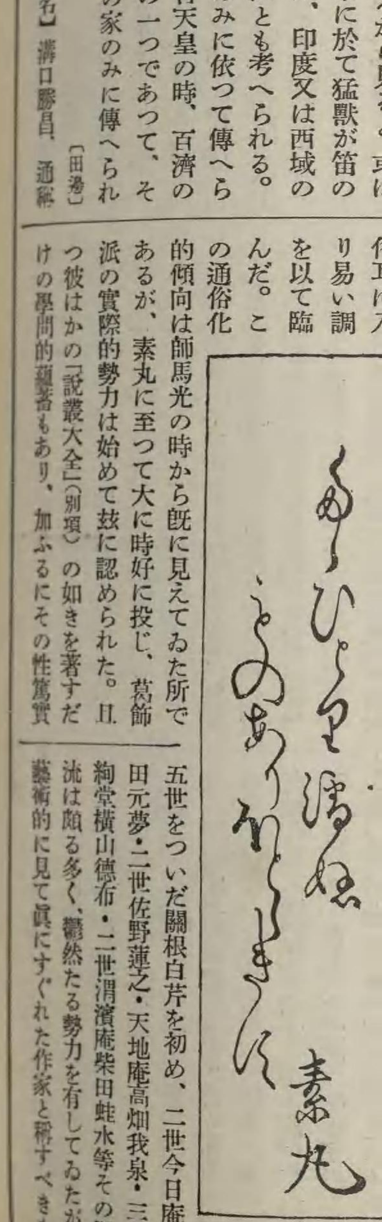
染崎延房 「爲永春笑」を見よ。

そめちがへ 小説 【作者】森鷗外 【發表】明治三十年八月號「新小説」。【刊行】同四十四年、短篇集「烟塵」、春陽堂。鷗外全集第五卷所收。

【梗概】昨夜痴話が縺れて、相手の男を歸した後は、附景氣の深酒を飲んだので、藝者の兼吉は代地の待合朝倉で晝時分に起きた。歸らうとすると朋輩お萬の贔屓客三谷が來て、附き合つて飲み直せといふので、また酒になつた。むしやくしやする時は、何でもしたいことをして遊ぶに限る、あれならといふ人があるなら呼んでやる、中屋の松つあんなどはどうだとの言葉に、兼吉は松太郎の弟の清二郎なら、浮氣らしいが一日でも遊んで見たいとの答へに、早速迎ひを出すことになつた。清二郎といふのは堀田原の名ある競異服の次男で、この土地の小花と前々からいゝ仲なのを承知の上で、兼吉はとうから惚れてゐるのだつた。やがて清二郎が商用かとやつて來たのを、かねて手筈した四疊半に連れこんだが、さて年下の焦れた男を前にしては、打ちつけにも切り出されず、三谷との冗談からこの始末と戯れのことにして、やつと浴衣に着かへさせ、枕を竝べて寢ることが出來た。そしていくら深間の小花があるにしても、相手は若い身空で、手が觸り足が觸りしてゐたら味な氣にもなるだらうと、溫順しく寢てゐる男の領へ手をやつて見た。と、清二郎は身を縮めてぶる〳〵と震へた。女の肌を知らぬ人といふではないのに、數々の男に接したことのある兼吉にも、こんな經驗はなかつた。はつと思つて手を引く途端に、何ともいへぬ清淨なものに觸れた心持がして、今まで燃え盛つてゐた情慾の火が、その一瞬にすうと消え去つた。そこでふつつり清二郎のことを思ひ切つて、その手さへ冗談の體にして間もなく男を歸してやつた。しかし兼吉がしごきばかりの姿で、男に飲ませるラムネを階下に誂へるのをお萬が見たので、本當に清二郎とわけがあつたやうに噂された。それを耳にした小花の胸はただならず騷いで、清さんに限つてはと

破四帖（拍子各十二）。舞があり一人で舞ふ。舞の出入には古樂亂聲を吹く。舞者は蓑笠を着ける。古圖によれば身體全部蓑毛を以て蔽はれてゐる。假面をかぶり、桴を持つて舞ふ。舞の間、樂人一名常裝束で太刀を帶び、舞臺に出て笛を吹く。天王寺の樂人の祕曲となつてをり、今日でも蘭家に於てそれを傳へてゐる。答舞には「蘇志摩利」を用ひる。【沿革】俗説には、昔役行者が大峯に登つて笛を吹くこれは獸類であつて、山中に於て猛獸が笛の音を聞いて喜悅するといふ、印度又は西域の傳説に伴ふ舞樂ではないかとも考へられる。我が國へは天王寺の樂人のみに依つて傳へられてゐる。或はこれは推古天皇の時、百濟の味摩之の傳へた伎樂の中の一つであつて、それは秦家卽ち天王寺樂人の家のみに傳へられたもののやうである。 〔田邊〕

素丸 そまる 俳人 【姓名】溝口勝員、通稱



素丸筆蹟

り易い調を以て臨んだ。この通俗化的傾向は師馬光の時から既に見えてゐた所であるが、素丸に至つて大に時好に投じ、葛飾派の實際的勢力は始めて玆に認められた。且つ彼はかの「説叢大全」（別項）の如きを著すだけの學問的蘊蓄もあり、加ふるにその性篤實五世をついだ關根白芹を初め、二世今日庵森田元夢・二世佐野蓮之・天地庵高畑我泉・三世絢堂横山德布・二世渭濱庵柴田蛙水等その門流は頗る多く、鬱然たる勢力を有してゐたが、藝術的に見て眞にすぐれた作家と稱すべきも

思つたのも、矢張り慾目だつたかと口惜しく、また兼吉が洒々してゐるのが憎らしくてならなかつた。そこへ目と鼻の間に住む兼吉から手紙が屆いた。蟲を押へて拾ひ讀みすると、自分の心事と昨夜の事を長々と委しく書き連ねた上、「――返す〳〵も浦山しきは清ちやんのやうな人をお持なされ候ふお前樣の身上」とあり、「ここに一つ申し置き候ふは……よしや兼吉が心から罪に墮すまいと思つてではないにしても、罪に墮すことの出來ぬやうな何とも知れぬ心に兼吉はなることもあつたと言ふ事ばかりに候」ともあつた。小花が清二郎と添ひ遂げても兼吉は相かはらずの浮氣勤め、今も唄ふは荻江露友の後家が彼の朝倉での行違ひを老のすさみに聯ねた一節、三下り「雨の日を二度の迎にただ行き返り那加屋好みの濡浴衣、慥か模樣は染違へ」。

【批評】「舞姫」「うたかたの記」「文づかひ」（各別項）の三作を世に問うた後、久し振りで公にした短篇であるが、その題材とその文體との點で、彼の創作中一個の變り種と云つてよい。雅俗を交へた西鶴調で、珍らしくも花柳界の事情を描いてゐるが、惡魔が神を見る瞬時を捉へて作の契機となしてゐる點、着想流石に時流を拔くこと數等である。〔小島〕

染模樣妹脊門松（そめもやういもせのかどまつ）

淨瑠璃　二段　世話物　【作者】菅專助【名稱】角書に語傳た袂の白絞　言傳た忍の寢油とあつて、先行の祭文や淨音の「袂の白しぼり」をにほはせ、お染久松を名題の頭尾に置いた。【初演】明和四年十二月十五日初日、大阪北堀江座【題材】「お染久松袂の白しぼり」（別項）の改作。

【梗概】（上の卷）（天滿小山屋の段）東堀の油屋の總領息子多三郎は、質屋松尾源右衞門の妾策に乘り定家の色紙を借りて自家の手代善六に預け、父の金三百兩を引出させ、それを以て、戀人の傾城いとを身請けする。（東堀油屋の段）丁稚久松を戀する油屋の娘お染は、山家屋への嫁入りが近づくのに惱んでゐるのを、番頭善六がつけ廻すをかしみ。多三郎が源右衞門のために苦しめられるのを、お染の聟山家屋清兵衞が救ひ、源右衞門と善六とは追出される。勘當を受けた多三郎を預つて清兵衞が歸つたあとで、お染と久松は心中を圖るが、折から源右衞門・善六が盜みに入り色紙は久松の手にはひる。（下の卷）「道行夢路の地藏廻り」お染久松の道行。（生玉の段）兩人は我が身の上を祭文に歌はせる善六を殺した上情死する。が、これは二人の夢であつた。（質店の段）お染は、懷胎を語つて久松と共に嘆く。久松の親野崎の久作が革足袋を土產に訪れて久松に異見し、お染も母に嘆かれて二人は戀を思ひ切る事を誓ふが、藏に入れられた久松は、お染と諜し合せて內と外とで心中し、山家屋清兵衞の情も無駄となる。

【脚色】祭文と歌舞伎の「心中鬼門角」とから成立した「おそめ久松袂の白しぼり」（別項）に據つて構成され、特に下の卷の生玉の段に於ける祭文の利用や兩人の夢といふ趣向、質屋の段に於ける久作異見の件や情死の條は、意識的に「白しぼり」の手法を襲うてゐる。ただ多三郎・いとの件が添へられ、色紙をめぐつて時代物的な色彩が施されてゐる點が前者と異つてゐるのは、この時期の操劇一般が、正德・享保期のそれに比して、平民藝術としての淸新さを失ひ、形式主義に陷つて來てゐる事の現はれである。又山家屋清兵衞を類型的な敵役とせず、立役として描いてゐる點は、後の「新版歌祭文」（別項）等に比して注意さるべきであらう。【影響】歌舞伎にも移されて屢々行はれ、質屋の段は俗に「革足袋」或は「革足袋の久作」と呼ばれて、今日もなほ演ぜられる。又、上の卷油屋の段からは、所謂「ちよいのせの善六」が脫化して今日も稀れに舞臺に上る。なほ江戸ではお染久松の狂言は比較的少かつたが、明和の末頃から春狂言の曾我や、伊達狂言等に交へて盛んに脚色されるが、主として江戸淨瑠璃に依る所作に重點が置かれ、お染久松・お千代半兵衞・お初德兵衞の六人の道行とか、お染久松・お梅傘之助の一日替りとか、五節句五日替りとかの如く單に趣向のためのお染久松であり、筋のためのそれではないものが多かつた。江戸歌舞伎の（特に安永・天明期の）特性として當然である。後の清元の「お染」（別項）は、顏見世狂言から脫して現存する最も著名な所作である。書替としては、「お染の七役」と呼ばれる南北の「お染久松色讀販」（別項）が名高く、曾我に綯交ぜられたものとしては治助の「江戸富士陽曾我」が有名である。

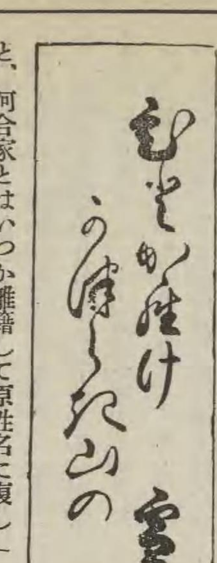
【參考】染模樣妹脊門松（俗曲文庫）○江戸富士陽曾我（日本戲曲全集卷十）○お染久松色讀販（大南北全集・博文館演劇脚本集）○新版色讀販「ちよいのせ善六」（日本戲曲全集卷二十一）○正・續・續々歌舞伎年代記　〔近藤〕

曾良（そら）

俳人　【姓名】もと岩波庄右衞門。後、河合惣五郎。通稱は正字。【號】曾良を「そら」と讀むについて、長島に傳はる說によると、木曾川の曾と長良川の良とを取つたからであると云ふ（長島はこの兩川の間にある）。別號の知られるものはない。【法號】宗悟【生歿】慶安二年生れ、寶永七年（一七三七）五月廿二日歿（墓碑による。寶永六年十月二十二日或は元祿六年五月二十二日とするは誤である）。享年六十二【法名】墓碑には、賢翁宗臣居士【墓所】壹岐勝本能滿寺に墓碑がある。又諏訪の正願寺に姪周德の建てた句碑がある【俳系】松尾芭蕉門【閱歷】信濃上諏訪表上町の人で、父は高野七兵衞とも傳へるが、曾良の書簡に見える岩波六兵衞がそれかとも思はれる。母は河西氏。弱冠の頃か家を弟に讓つて伊勢長島藩に仕へた。長島の大智院の住職が曾良のをぢであつたと云ふから、それからの關係であつたかも知れぬ。長島藩に仕へて河合氏の養子となり河合惣五郎と改名したと云ふ。然るに數年ならずして致仕して江戸へ出で、吉川惟定の門に入つて神道・和歌等を學び、又いつの頃よりか俳諧に指を染めた。初めから芭蕉に就いたかやゝ遲れてからであるか明かでないが、芭蕉との關係は貞享三年頃から見られ、その頃芭蕉庵の近くに住んでゐた。貞享四年の芭蕉の「鹿島紀行」の旅行にも宗波と共に隨從し、元祿二年の「奧の細道」の大行脚の際にも同行し、旅立つ曉に剃髮して惣五郎を改めて宗悟と號した。芭蕉が芭蕉庵に在る時も常に薪水の勞を助け、芭蕉から深く愛せられた。芭蕉の最後の旅には箱根まで見送り、その歿

河合曾良

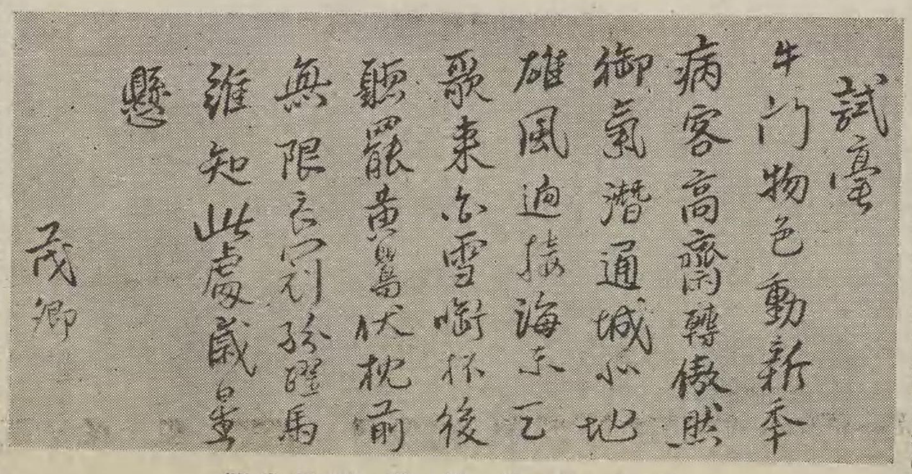
した時には江戸に在つたか。機嫌悪と深く、その死を悼み、後、義仲寺の墓に詣でて熱涙を絞つてゐる。芭蕉の如く行脚を好み、特に芭蕉の歿後は六十六部として遍歴することが多かつたらしく、寶永五・六年の頃同行の傳手もあつて、筑紫から壹岐・對馬の方へ遍歴したが、遂に同七年五月二十二日壹岐の勝本で客死し能滿寺に葬られた。同寺の墓碑には、「江戸住人岩波庄右衞門塔」とあつて、これから考へると、河合家とはいつか離籍して原姓名に復したものか。歿する年の春、故郷の氏族へ「春に我乞食やめても筑紫かな」の句を送つて後、音づれがなかつたので、母方の姪河西周德（「雪丸げ」の編者）が、この句を辭世と定めて正願寺に句碑を建てた。【著作】一部の自著をも出版してゐない。「蕉門諸生全傳」は「曾良日記」のあつた事を傳へる。諏訪に遺る曾良資料の中に「道の記」があるが、これと同物か。遺稿の編纂されたものには「雪丸げ」（別項）がある。【人物・地位】芭蕉が、曾良を「性隱閑を好む人にて、交金をたつ」（雪丸げ）と云ひ、志水の追福文（乞食ぶくろ）には、「旅に倦むことなき質なれば」と云つてゐるので、芭蕉のやうな隱逸性の人で煙霞の癖があり、又芭蕉の右の言葉やその他から見て、頗る篤實な人であつたことが知られる。旅をするにも乞食巡禮の如きに甘んじた點も芭蕉に似てゐる。「芭蕉門古人眞蹟」に、「弓法和歌五首」の眞蹟があり、其殘の「曾良翁由來」に、「弓矢とる業を愁ひ」とあるなどから、武士としては弓術に優れた人であつたらしく、又諏訪に遺る曾良資料によると、醫術の心得もあつたらしい。兎に角人としては感ずべき人であるが、詩人的素質は優れたものとは思はれない。蕉門十哲（別項）の或る種の中に選ばれてもゐるが、作が少い上に理智に落ち、蕉門の俊才の作に比べては頗る見劣りがする。而も眞の技倆以上に重く見られてゐるのは、芭蕉との關係及びその人物によるのであらう。



曾良筆蹟

【參考】奥の細道芭蕉○乞食ぶくろ（五十回忌追善集）隨時庵李郭編○俳家奇人談竹内玄々一○蕉門諸生全傳遠藤曰人○俳人百家撰水谷川柳○俳林小傳中村光久○俳諧人物便覽三浦若海○俳人眞蹟全集元祿時代上巖谷小波編○河合曾良荻原井泉水（國語と國文學昭和三ノ四）〔荻原・志田〕

徂徠（そらい）　儒者【姓名】荻生雙松。字は茂卿。通稱總右衞門。その先は參河の荻生に居つたので荻生を氏とした。姓は物部であるから支那風に修して物徂徠ともいふ。【別號】蘐園（けんえん）（日本橋の菖場町に住してゐたからである）・赤城翁【生歿】寛文六年二月十六日、江戸二番町に生れ、享保十三年（一三八八）正月十九日歿す。享年六十三【閲歴】父の名は篤、方庵と號し、幕府の醫員となり、法眼に叙せられたが、延寶七年、徂徠年十四の時、事に坐して上總國長生郡本納村に竄せられ、一家を擧げて移り住んだ。徂徠は上總に在つて毎日田夫野人と伍し、師友などは全くなかつたが、唯一の藏書たる「大學諺解」を讀み、後、遂に徧く群書に通ずるやうになつた。元祿三年赦に遇うて江戸に還つた。時に年二十五。芝の增上寺門前に塾を開いて程朱の學を講じた。その頃將軍綱吉の寵臣たる柳澤吉保が、その名聲を聞き、擧げて書記を掌らしめ、吉保の手引で將軍綱吉にも接近するやうになつた。寶永二年に柳澤氏の權勢がいよ〳〵加はり、將軍の子弟でなければ嘗て封ぜられたことのない甲斐に封ぜられた。因つて徂徠はその命を承けて國内を巡視した。有名な「峽中紀行」はこの時の作である。寶永六年綱吉が薨じ、吉保が失脚するに及んで徂徠も勢力を失ひ、單に一個の儒者として市中に門戸を張るに止まつた。【學風】徂徠が古文辭（別項）の旗幟を飜して天下に呼號したのは、享保元年徂徠年五十の時である。これが一世に流行して害毒を流したが、一面から觀れば詩文章の上に利益も與へてゐる。元祿・享保時代になつて、ともかくも漢文らしい漢文が作られるやうになつたのは、主として徂徠などの力である。故に齋藤拙堂の「拙堂文話」（別項）に、「室鳩巣・物徂徠出でて扶桑の文始めて雅なり。徂徠文才最も雄、光焰萬丈、一時風靡して之に從ふ。恨むらくは李王の古文辭に陷溺し、文運將に隆ならんとして其の毒を流せり。之を要するに功罪相掩はず」と評してゐる。次に徂徠に至つて盛行したことは、我が國の地名・人名・官名等を悉く支那風に書くことである。例へば徂徠は物部氏であるから物徂徠、服部南郭は服南郭といひ（尤もこれは、徂徠に始まつたのではない。平安朝に出來た「本朝文粹」などにもこの例がある）。地名では江戸を隅田川に沿うてゐる所から武昌（支那の長江沿岸の地名）といひ、金澤を金陵といひ、相模國を湘中（馬入川を長江に比し



荻生徂徠筆蹟（先哲書影）

て）といひ、加賀を賀陵といひ、岡崎を東都（德川家康の故郷なる故、これを武の高祖の故郷に比す）といひ、官位では町奉行を市尹、從五位下を朝散大夫、大學頭を祭酒といつたが如きである（漢學參照）。【著作】譯文筌蹄六卷○護園隨筆五卷（各別項）○辨道一卷○辨名四卷○論語徵二十卷○大學解二卷○中庸解二卷○孫子解二卷○南留別志五卷（別項）○讀荀子四卷○讀韓非子三卷○絶句解三卷（別項）○徂徠集三十卷（別項）〔以上佐久〕

【國語學上の業績】徂徠の隨筆「南留別志」（別項）の中には、漢字の訓、國語の語源等に關

する考説がある。その説は必ずしも直に信用する事は出來ないが、併し又他山の石として頗る參考になるものがある。例せば「ふつか、みか、よかなどのか文字は箇なり。ふつかのひ、みかの日などいふ事を日の字を略しつれば、日の字の訓をかといふやうなり」。「三線をさみせんといふは、三の字閉口音なるゆゑ、はねがなをみといへるを、世俗のしらで、味の字を加へたるなり」と云ふ如き、又テニヲハはヲコト點から出た詞であると云ふ如き、傾聽すべき説である。〔以上龜田〕

蘇來（そらい）「清涼井蘇來」を見よ。

徂徠集（そらいしふ）詩文集　三十卷【著者】荻生徂徠【解説】著者の詩文集である。卷一に古詩、卷二・三・四に律、卷五・六・七に絶句、卷八・九・十・十一に序、卷十二に論・記、卷十三に記、卷十四に賛・銘・碑誌、卷十五に紀行、卷十六に説・題言、卷十七に雜文、卷十八に雜文・跋、卷十九に題言、卷二十から三十までは書牘文、別に補遺が一卷ある。著者の歿後、門人等相謀つて出版したものである。〔佐久〕

ゾライズム〔佛〕Zolaisme【解説】フランスのエミル・ゾラの文學上の主張及びその業績を併せていふのであつて、つまりゾラがその首領となつてゐる自然主義文藝（Le Naturalisme）の要旨に外ならぬ。ゾラは人間生活を自然科學的方面と社會科學的方面とから觀察して、人間の個人生活だけでは解決のつかぬ問題を提出する。性的衝動の如きがその最なるものである。また或る遺傳性の如きに至つては、個人の後天的な要素を超絶してゐるものである。これ等を生理的に考ふる時は人間は全く動物的な生活をしてゐるのである。更にそれを道德的に、また宗教的に説明すれば、遺傳の如きは卽ち原罪と呼ぶべきものに當る。これは個人が如何に脫却せんと努力しても不可抗力である。性的衝動の如きも同じことである。ゾラはその自然法に動かされてゐる人間生活の種々相を示さんがために、ルゴンとマカアルといふ二つの家族を結合せしめ、その結合から生ずる種々の人物を社會の凡ゆる階層へ解放して、その生活相を突きとめ、描き出してゐるのである。それが彼の「ルゴン・マカアル叢書」と呼ばるゝ二十卷より成る大作である。併しゾラのこの「ルゴン・マカアル叢書」は、單に人間の生理學的自然科學的研究報告書に止まるのではない。それは一方に於てはフランスの第二帝政時代と呼ばるゝナポレオン三世治下の、千八百五十年より七十年に至る間の社會歷史でもあるのである。ゾラはこの第二帝政期二十年間の生きた社會史を書かんがために、そしてその社會に宿る社會惡の根源は何處にあるか、いかなる組織の中にその社會惡は根を持つてゐるかを確かめ、更にその社會惡は根を持つてゐるかを確かめ、更にその社會惡のために最多く惱まされてゐるのは、いかなる階層の人々であるか、病根とその病毒を受ける者とは、同じ階層の人々でない事を明示せんがために、ルゴンとマカアルの人々凡そ何百人といふ人物を、社會の凡ゆる方面へ解放して、身をもつてその生活に於て社會の實相を體驗せしめてゐるのである。まさにこの「ルゴン・マカアル叢書」なるものは、人間の生理的社會的歷史である。〔手法〕而もゾラが人間生活を研究し描出する手法は、單に現實主義の文藝家等がなす如き觀察と想像とに倚るのではなく、自然科學者が試驗管内に於て液體の實驗をしてその結果を集積して行く如くに、人間生活に對し心理的に實證的に實驗を加へてまで研究するのである。經驗だけでなく實驗である。事實ゾラが或る人物を研究する場合は、新聞記者の如く、醫者の如く、實驗心理學者の如く、更に統計學者の如く、八方からその資料を蒐集して綜合せずんば已まなかつた。〔觀念形態〕ゾラがその研究描出報告の結果として、彼の人生社會に對する觀念形態を構成したものは何であるかといへば、それは資本と勞働との相爭ふ時代を通じて究極の勝利は勞働に歸すべきであるとなし、勞働都市の建設をこそ彼は望んだのである。そしてかくすることに於て、最終は生理的罪惡にも打勝つ事が出來て、道德的にも優良な社會が建設せらるゝと信じたのである。彼の四禍音なるものはかくして書きはじめられた。

【日本に於けるゾライズム】日本では、ゾラの影響は早く小杉天外の「はやり唄」「初姿」などに見え、永井荷風も亦「地獄の花」「夢の女」などに、その匂ひを移し傳へてゐるが、單なる寫實、もしくは性慾的な一面に着目したのみで、當時は、ゾラの社會的に廣いところ、遺傳的に深いところ、思索的に勁烈なところを、十分に受け入れるだけの素地がわが文壇になかつた。隨つて自然主義と云つてもフラウベル、ゴンクール、モウパッサンの系統のものが榮え、ゾラの影響は少しも發展してゐない。むしろプロレタリヤ文學論が起つてから、ゾラはやゝ正しい全き姿で見直されたと云つていゝが、併しその解釋が創作となつて、具體的に生きて來るやうな事は殆どなかつた。

【參考】ゾラの實驗小説を論ず〔鷗外〕○自然主義文學の理論的系體〔平林初之輔〕○邦譯ゾラ全集序〔吉江喬松〕

天うつ浪（そらうつなみ）小説【作者】幸田露伴【發表】明治三十六年九月から「讀賣新聞」に連載。【刊行】明治三十九年から同四十年にかけて第三篇まで刊行。明治大正文學全集（幸田露伴篇）・露伴全集第三卷所收。

【梗概】或る秋の夕べ、山瀨・日方・島木等の若い人々が、遠洋漁業から無事に歸つて來た友人の羽勝を、芝浦の料亭に迎へて、宴を開いたが、必ず來る筈の水野が來ない。それが戀愛事件のためだと聞き、軍人肌の日方が、ひどくその腑甲斐なさを慨くのを、島木が戀愛事件の内容を述べて、愛嬌よく水野を辯護し、一同水野に忠告するといふことにしてその夜は散會した。噂に上つた水野は、今年二十四歳で、東京市外の或る小學校に勤め、本來詩人肌であり、勤勉家で、眞面目で、しつかりしてゐた。この水野が[illegible]

「天うつ浪」挿畫（梶田半古畫）

女を目的の繼子十子の才氣と美貌に惹ひき寄せられたが、五十子は嫉つてゐる樣子に見える。しかし彼女の繼母は、わざと水野に媚びて時々小遣ひを貰つたりする。その中に五十子が腸チブスに罹ると、繼母は少しも世話をせぬので、水野ひとりが心配し、遠くから名醫を呼んだり、百圓餘りの療養費を作つたり、夜の目も寢ずに看護する。五十子はそれでも水野に好意を持たぬが、五十子が冷かであればあるほど、水野は、一層彼女に愛着を感じ、病氣平癒を淺草觀音に祈つたりする。そこへ五十子の繼母の家にゐて、繼母の使ひで五十子を見舞つたお龍といふ女が來て、水野の深切に感動する。後でお龍は、淺草觀音へ參詣した水野に逢ひ、姉のやうにしてゐるお彤と一緒に水野と話し合つた。水野が歸宅すると、日方が來てゐて、女に對する腑甲斐なさを酒の勢で非難し、そこへ訪ね寄つた羽勝も亦忠告する。水野は友人の好意は喜んだが、どうしても五十子を思ひ切れぬ。一方五十子は病氣がよくなつても、一向水野へ感謝しようとしないが、水野は少しも怒らず、深切を盡す。その事情を能く知つたお龍は水野を氣の毒と思ふあまり、窃かに水野に心を寄するやうになつた。その中に、水野は同僚から觀音祈願が時代錯誤だといふやうな、種々非難の的となり、遂に校長から迫られて潔く辭職する。お龍はそれを聞いて一層同情し、お彤に話すと、お彤は、水野に同情するのはよいが、戀してはならぬと忠告し、水野の一身を世話しようといふ。お龍は元來男のために一度失敗し、叔母が見立てた聟をも振り捨てたといふお俠な氣質。當時三味線師匠の、五十子の繼母のところにゐたのだが、その中に筑波といふ有力な援助を持つお彤のもとに引き取られたのであつた。

【批評】紅葉の「金色夜叉」(別項)の後を承けて讀賣新聞に連載された。浪漫主義の露伴が、寫實主義にも才刀の冴えた作家であることを示した長篇で、世間・人間を見る眼も著しく成熟した。佛教趣味は、依然玆にも附き纏つてゐるが、その思想的方面を述べるについても、可なり注意を拂つたらしく露骨でない。女性の描寫も、相當の出來榮えだが、中でもお龍が最もすぐれ、お濱といふ少女もよく描かれてゐる。水野の性格ははつきりしないが、友人島木の飄逸洒落な俤は鮮かに浮き出してゐる。且つ本篇の構圖はどつしりして相當大きく、大長篇とする意圖であつたらしい。然るに人物事件の展開と活躍が、これからといふところで筆を止め、あたら雄篇が未完の儘で終つたのは殘念である。當時の他の作物が、青年男女の戀愛のみを採るものが多かつたのに、この作物は、人物の年配でも材料でも、相當世間馴れたものを取扱つたので、一般的に強く期待されたものであつた。〔高須〕

空腕（そらうで）　能狂言　【作者】金春四郎次郎・宇治彌太郎二代のうちの作(舊正錄書上)。【格式】本神文濟相傳の部(大藏流)。

【梗概】或る主が、平常から空腕だてをいふ冠者を、日暮に淀へ鯉を求めに行かせようとする。冠者は、あの邊は物騷な所であるし、夜道は人通りがないからとて斷らうとするが、主は汝は日頃お馬の前で討死をもすると言つてゐるではないかと、用心に重代の一腰を貸して無理に行かせる。冠者は已むを得ず出かけると、東寺の邊で日が暮れて暗くなり、そろそろ臆病風が身に沁みてくる。突然路傍の茂藪を見て人と思ひ悲鳴をあげる。やつと正體がわかつて安心し、今度は眼を閉ぢて歩き、松の木に突き當る。そこで決心して命を捨ててかゝらうと言ひながら、眼をきつと見開いて天魔鬼神が出でたりとも恐くはないと豪語して行くと、忽ち向うから眞黑になつて人が押寄せてくるらしいので平伏して命を請ふ。一方、主は後を追つて樣子を見てゐると、相手もないのに黃金作りの太刀を差出して命乞ひをしてゐるので、主はそつと太刀を取り先に立ち歸る。冠者は斬られたと思ひながら次第に氣を取戻して家へ逃げ歸り、色々强さうなことを言つて言ひ拔けようとするが、主に太刀を見せられて、御立身をなされ御普請をされる御瑞相に、折れた太刀も言ひ合ひまして、某より先へ戻つたものでありませうと言ひ、やくたいもないと叱られる。〔瀧田〕

空礫（そらつぶて）　「立圃句集」を見よ。

それから　小說　【作者】夏目漱石　【發表】明治四十二年六月二十七日から同十月十四日まで「朝日新聞」(東京・大阪)に連載。【刊行】明治四十三年一月春陽堂。漱石全集第四卷・同普及版第六卷等所收。

【梗概】長井代助と平岡常次郎は、三年目にまた東京で出逢つた。一緒に學校を出て、一年間は兄弟のやうにして附きあひ、それから平岡は代助の世話で三千代を妻に貰ひ、勸めてゐる銀行の上方の支店詰となつて、しくじつて歸つて來たのである。三千代は色白く髮の黑い、細面に眉毛のはつきり映る、古版の浮世繪に似た女である。彼女が平岡と結婚する前に、實は代助が彼女を思つてゐたのであつた。今代助は父や兄夫妻から嫁を勸められてゐるけれども、貰ふ氣持になれない。却つて三年目に逢つた三千代を愛せずにはゐられない自分を發見した。同時に、三千代と平岡との間に疎隔の生じてゐることをも發見した。彼は天意に從はうか、自己の意志に殉じようかと迷つた。遂に代助は、三千代に自己の戀を告白する機會を持つた。二人は愛の刑と愛の賚とを同時に切實に味はつた。次に代助は平岡に告白した。平岡は代助と絕交して代助の父に報告した。代助は父からも兄からも見放された。

【批評】代助は、肉體も精神もデリケートな男である。作中彼の纖細にして銳敏な感覺の働きが、實によく感覺的に印象的に描かれてある。この作は、三四郎(別項)の後篇の如くも見られるが、「三四郎」の主人公はまだ田舍から出て來たばかりのナマな所が殘つてゐて、「それから」の主人公の如き都會人的敏感さがない。これは性格上に於ける大なる相違である。その主題ともいふべき性的生活の內容から言つても、「三四郎」の主人公は若いかよわい戀愛を感じてゐたのが、「それから」の主人公は、强烈な眞劍な戀愛をする人になつてゐる。「三四郎」は大學生活を始めたばかりの青年であつたが、代助は學生生活を終つて數年、既に世間を見て來た男である。三四年前の自分になつて今の自分を批判して見れば、自分は墮落してゐるかも知れない。けれども今の自分から三四年前の自分を回顧して見ると、確かに自己の道念を誇張して得意に使ひまはしてゐた。鍍金を金に通用させようとする切ない工面より、眞鍮で通して眞鍮相當の侮蔑を我慢する方が樂である。かう考へてゐる代助である。〔野上〕

從夫以來記（それからいらいき）　草雙紙　黃表紙

三册　十五丁十六圖　【作者】竹枝爲輕【畫工】喜多川歌麿【名稱】先行の「無益委記」「長生見度記」（別項）の後を承けて二書に描かれた以後の世界の意味。前記の二書に本書を加へて三未來記といふ。【刊行】天明四年【諸本】從夫以來記（稀書複製會第五期）・黃表紙百種（續帝國文庫第三十四編）・黃表紙名作集（關根默庵）・黃表紙集（近代日本文學大系第十二卷）・黃表紙傑作集（蘇武、三星社）。

【梗概】わい〳〵天皇の一萬八千年に、草雙紙は大人、四書五經は子供の讀物となる。劇場では見物が芝居をし、遊里は古風となり、羽織の丈は一尺二三寸となり、女郎買は朝になる。大人が甘い物を食ひ、子供は辛い物を好み、呉服屋は高賣の引札を出し、神佛は一體となり、街路を移動して廻る音樂入の据風呂が出來る。男敵討、牡丹餅寺、大通の開帳、餅の醉ひ等があり、盲人が目明から金を借り、傾城は客に高利の金を貸し附ける。下肥は取賃と大根とを出し、且つ迎への船をやつて頼まねば汲み取つてくれず、大屋は肥取にとられる運上で難儀をする。大晦日には掛取が來ず、借主が財布を持つて拂ひ歩く。

【構想】既に「無益委記」と「長生見度記」によつて擴張された黃表紙の未來の架空的な想像の世界は、諧謔・穿ち・諷刺の三重奏の中に、面白く展開するやうになつた。底止する所を知らない空想で、前述二書の先きを思うた所に、本書の趣向が湧いた。そして本書は、進化の結果をあるまじく思うた當時の世態と全く逆ふ世界に落す所にある。【史的地位】三未來記は、時代が後になるにつれて描寫が細かくなり、具體的になり、同時に穿ちの力が强くなる。事項數は「無益委記」二十八項、「長生見度記」十七項、本書は十九項であり、書入は後になるほど密になる。これ等の外に、「孔子縞于時藍染」（別項）「本樹眞猿浮氣噺」（後出）「世上酒落見繪圖」、その他未來記の片鱗を持つ作品は相當にある。【價値】本書が人氣を博したことの上には、喜三二・春町・杜芳・通笑、その他實在の人物を拉し來つて、それと知らせたところや、當時の世態と全く逆の世界を展開させたところや、通言や穿ちに、心にくい點を有つことが擧げられるにもせよ、二未來記を繼いだ有利な立場を看過する事は出來ない。繪は三未來記中の隨一で、繪組の面白さ、人物の姿態容貌のうまさ、野外の風景などの出來榮えには、畫工の腕を見せてゐる。黃表紙名作二十三部の一。

【備考】〔本樹眞猿浮氣噺〕（寛政二年板、蔦唐丸作）。天野邪九郎は、當世の人の心を察して、新しい趣向で金を儲けようとする。小松引の遊、貸し鏹、仲の町での貝拾ひ、夜發の反對の畫鷹、菊見せ、若衆藝者、押かけ俳諧、嗟り駕籠、引ずり煤拂等をやつて見たが一向に當らず、埒も無く金を消費し、我慢の角を落して頭を剃り、天野道也と改名する。〔小池〕

村菴稿　詩文集　三册　寫　【著者】希世靈彥、號は村菴。【成立】應永二十五年戊戌の岐陽叟方秀等の序がある。【解說】禪僧靈彥一代の詩文を輯錄したもので、上・中・下三册に分つ。上册には、漢詩七言絕句四百餘首を收載し、中册には同百餘首、五言絕句二百餘首、七言律詩・五言律詩各若干首を收載し、下册は漢文の疏・賛・序・說等を收載してゐる。この下册は、別本の「村菴疏稿」（一册）、「村菴散文」（一册）にほぼ同じものである。首に江西龍派・岐陽方秀・惟肖得巖等の序文があるが、これ等の序文に依り、作者靈彥が、一世の大名を博したことが知られる。靈彥は細川滿元の推擧により、將軍足利義持に知られ、後に後小松天皇の勅召を拜するに至つた。而して靈彥の詩文は才氣が流露してゐるが、重厚の氣を缺いてゐる。〔鷲尾〕

尊圓流　「御家流」を見よ。

た

他阿　歌僧　【俗姓】源氏【號】他阿彌陀佛と云ひ、略して他阿と云ふ。【法諱】眞教【生歿】嘉禎三年京都に生れ、元應元年（一九七九）正月二十七日、相模高座郡當麻無量光寺に寂す。享年八十三。【閲歷】法然上人の弟子に辨阿聖光があり、辨阿の弟子に辨西がある。他阿、出家して西國を經廻り、豐後瑞光寺で辨西に從つて淨土教を受けた。建治三年一遍上人西國に遊行の時、初めてその弟子となつて京都に入り、後、弘安元年上人に隨從して備前を遊行した。同三年同じく上人と陸奥に入り、白川の西行の遺跡、松島の見佛の遺跡等を訪うて和歌を詠じた。同四年、一遍上人相模當麻の金光院に入り、翌五年に上人、弟子智得を金光院に留めて諸國に遊行するや、これに隨從し、尾張の甚目寺、近江の關寺等で念佛修行した。それより京都に入つて四條京極の釋迦堂・雲居寺・六波羅蜜寺等で念佛修行、攝津の天王寺に參詣し、後、四國を遊行した。正應二年八月、一遍上人、攝津兵庫に寂したが、他阿はその臨終に侍して示教を受けた。同年九月播磨の粟河の極樂寺で念佛修行、同三年越前に遊行し、國府に入り、惣社に參籠、後、佐々生・瓜生野を、同四年八月加賀の今港・藤塚等を遊行し、平泉寺の法師等の迫害に遇ひ、白山權現の神人等に擁護せられた。永仁五年、上野に遊行し、尋いで下野小山の新善光寺如來堂で念佛修行し、同六年、武藏大里の村岡で所勞あり、時衆、即ち一門の念佛修行者を敎誡した。尋いで平復し、越中の放生津に遊行し、越後の柏崎に留まり、國府より關山に至り、信濃の善光寺に參詣し、後、甲斐より相模を經て、再び越前に遊行した。正安三年十月、伊勢に遊行し、十一月櫛田の赤御堂に留まり、太神宮に參詣し、法樂舍で念佛修行。乾元元年、越前の敦賀より近江に入り、八月、攝津の兵庫に到り、一遍上人の十三回忌を修し、後、紀伊の熊野權現に參詣し、東海道を經て武藏に遊行し、嘉元元年十二月相模當麻の金光院で、恒例別時念佛を修行し、同院の道場を造營し、翌二年、法弟智得に他阿の號を讓つて諸國を遊行し、念佛修行させた。これより金光院の道場で諸人の敎化をなし、德治元年九月十九日、道場制文を作つて時衆即ち一門の念佛修行者を敎誡し、同二年上總に入つて敎化した。延慶三年、冷泉爲兼、東國下向の時、來つて敎化を受け、且つ和歌の道を共に語る。この後頻りに和歌を詠じたが、元應元年金光院に寂した。後に金光院は當麻山無量光寺と號し、一遍上人を第一世とし、他阿上人を第二世とす。【著作】他阿上人法語八卷（制文・消息・和讃・和歌等を收錄す）。【人物】一遍上人の後、その敎化の事業を繼承して興隆したものは他阿である。所謂遊行上人で、一代諸國を遊歷して諸人を敎化した。殊に諸國の神社に參詣し、神人の歸依を受け

たのである。その一代の教化の盛んなることは、他阿上人法語に收むる數多の消息に依つて知られる。貴賤僧俗男女を問はず、念佛修行を以て教化したもので、消息は皆懇切な法語で、これに依つて他阿の性行思想等が見られる。

【參考】一遍上人緣起　宗俊撰　○他阿上人法語　○無量光寺來由記　○遊行歷代譜　〔鷲尾〕

他阿上人法語　「法語」を見よ。

田遊　舞踊　【別名】田遊祭　【解說】御田植祭（別項）の古名で、今、田遊の名をとどめてゐる土地は、東京市豐島區赤塚町、靜岡縣安倍郡大川村、愛知縣一宮等、その他である。（御田植祭參照）　〔小寺〕

態　「動詞」を見よ。

大晏寺堤　「敵討襤褸錦」を見よ。

第一の世界　戲曲　【作者】小山內薰　【發表】大正十年十二月、「新演藝」。【刊行】大正十一年九月、脚本叢書（新潮社）。小山內薰全集第三卷・日本戲曲全集第四十卷所收　【初演】大正十年十二月帝國劇場、土方與志演出。

〔役割〕山中愼一（左團次）、娘敏子（山本安英）、谷村龍太郎（猿之助）、谷村糸子（中條惠美子）、島村國雄（故宗之助）。

【梗概】むかし熱烈な戀愛詩人として唱はれた山中愼一は、或る動機から急に枯淡な學究となり、窓もない方舟のやうな書齋に籠つて、世間で言ふ幻影の世界即ち第二の世界を彼にとつての現實として生きて來た。諸大學の招聘も斥け、博士號も斷り、年に一二度外國の專門雜誌に業績を發表するだけで、娘敏子と實驗に役立つ書生の島村とを相手に、養鷄をやつては卵を賣つて僅に生計を立ててゐるのだつた。偶々ダンテの神曲中、プルガトリオの末段――地上樂園で天使の撒く花の中からベアトリチェが現れる件を、ダンテの目が實際に見た幻影として取扱ひ、この心の淸い優れた感覺の詩人と心靈界との密接な交通を說いた新研究が、伊太利學界の認める所となつて奬學金を贈られることになつた。それを、彼は今日不思議にも大使館まで出かけて受取つて來たのだつた。いつもは人を避けてゐるのに、郊外の家を訪ねて來た新聞記者とも快く會見した。即ち二十年間一度も觸れなかつた世間に、第一の世界に、珍しくも一瞬觸れたのである。その時二十年前の第一の世界の消息を齎らして、これまで音信不通だつた親友の谷村が突然訪ねて來た。――さきに山中が糸子に熱烈な戀を寄せてゐた時、女に愛のないことを知つて忠告して思ひ切らせたのは谷村だつた。そしてその後の成行きが谷村と糸子とを夫婦にして了ひ、山中は別の女と愛のない結婚をして敏子まで生んだ。――ところが、その糸子が眞實山中を愛してゐたことを谷村は結婚後に知つた。山中の詩人的な熱狂的な言動を見て、糸子は自分を愛してゐないと思ひ誤まつて、谷村に近づいたのだと分つた。――それがため谷村は心苦しさに二十年間惱んでゐたが、山中が世界的な名譽を得た今日を選んで、妻共々あやまりに來たといふのである。山中はそれ等の錯誤をすべて神の意志のさせたことだと觀じ、溫く舊友に對した。谷村は重荷をおろした氣持で、さて敏子を息子の嫁に貰ひたいと申し出た。その二人の間には既に戀が成り立つてゐるから、二十年前と同じやうな間違を起させまいとするのだつた。敏子は喜んで谷村夫婦に伴はれて行く。山中は天意の測るべからざる事と、人間のことはどうなるか分らないといふ感慨を再びした。すると敏子を愛してゐた島村は、この家を捨てて去る。全くの孤獨になつた山中は、「絕望は人生に於ける崇高な瞬間だ――今吾々と關係のあるものは、人間や人間の律ではなく、もう永遠だけだ」、「俺の本當の生活はこれからだ」と、書齋へ第二の世界へ歸つて行く。

【批評】作者自身處女作と呼び、始めて戲曲作家としての全面容を世に問うたものである。「本曲一つを作つた爲めに、實際二十年から若返つたやうな氣がする」とも云ひ、これまでの永い修練時代を脫した彼の全的な心力の感ぜられる作品である。所謂「芝居らしさ」を捨てエッセンスだけを書き、意力的な構成の下に緊張した氣分を保ち、主人公の心境を力强く描き出してゐる。その手法、殊に劇的効果ある舞臺的な簡素な對話は、爾後すべての作品の特色をなすに至つた。「森有禮」（別項）「亭主」と共に代表作として推すべき名品であり、また後年の優秀な特殊相が、すでにこの處女作に十分發揮されてゐる點で、彼を理解する上に忘るべからざる作品である。　〔水木〕

大會　「天狗物の謠曲」を見よ。

題詠　和歌　【名義】歌を詠ずるのに題によつて詠む事をいふ。【解說】歌は本來感動の生ずるによつて詠まれるべきもので、題を設けて詠むことは、感動の自然の發生を妨げることになる。從つて題詠の行はれるに至つたのは、自由なる感動性の弱められてからである筈である。そこに題詠の有する缺陷がある。併し一面から見て、自由で無限の擴がりを有する素材に限定を加へることによつて、感覺を集中させることは効果のある點もある。即ち制限せられた素材によつて感動の散漫になることを防ぐのである。落合直文は歌を敎へるのに題詠によつたが、しかし固定した題でなく、自由なる感動を表現するのにふさはしいやうな題であつたことは注意すべきである。題詠の初めて見られるのは、「萬葉集」に於てであるが、殊に盛んになつてきたのは平安時代以後である。歌會や歌合（各別項）等が盛んになるにつれて題詠も同じく行はれ、即席に題を出すか、豫め題を出すかによつて、即題・兼題の區別も生じ、また題そのものが遊戲的に扱はれることによつて隱題の如きものも生じた。又形式から言つても、山・河といふ如き單純な題もあれば、複雜な題もあつて題の多樣性がある。【影響】和歌の題詠は連歌・俳諧等にも影響したが、連歌の賦物（別項）の如きは和歌の隱題にも相當すべく、俳諧の季題（別項）の如きも、廣い意味の題詠の意識を有するものである。（兼題參照）　〔久松〕

代奕雜抄　隨筆　二卷　【著者】石川安貞　【刊行】寬政十三年　【解說】儒者の隨筆で、學問の心がけ、詩文の作り方及び評論、經義、繪畫・音樂の要旨、和漢類似の事跡等を雜集してある。寬政十三年著者の序がある。　〔和田〕

大悅物語　御伽草子　一卷　寫　【成立】室町末か。「梅津長者物語」（別項）との先後は俄かに定め難い。大黑舞（別項）の事が雙方共に見えるが、本書は主神が大黑天である點に關聯させてのみ考へれば、また七福神でなく、單に大黑・夷子の兩神に止まる等から言へば、この方が梅津に先立つと見るのが自然のやうでもあるけれども、それだけで決め

るのは早計であらう。但し素材となつた童話的な物語の發生は、已に甚だ古く溯り得る。

【梗概】大和國吉野の里に、大悅之助と云ふ者がゐた。樵夫をして老父母を養つてゐたが常に貧に苦しんでゐた。或る時都に上り清水の觀音に參詣して、十分の孝養が盡したいと祈誓すると、夢に老僧と現じた觀世音から「下向の折階上の藁しべを拾ひ取れば福人となる」と有難いお告を賜はつた。夢想に從つて藁しべを拾つた大悅は、子安の地藏堂に參詣すると、梨賣が鼻血を流して惱んでゐるので、その藁しべで小指を結んでやると血が止まつた。梨賣は、感謝の印に梨の實三個を與へて去つた。三年坂に差掛ると貴い上臈が途で苦しんで水を求めるのに行き逢ひ、彼は梨を贈つて難儀を救ひ、今度は謝禮に絹二疋を貰つた。三條の橋詰まで來ると、大番勤の侍の馬が俄に倒れ、主の侍も當惑してゐるのを見兼ねて、大悅は彼の絹一疋と馬とを交換して、熱心に看病してやると、馬は癒えて起きたので、馬市に曳いて行つて百兩に賣つた。かうして裕福になつた大悅之助は、願の如く父母に孝養が出來るやうになつたので、その孝心を愛でて大黑天が來り逗(とど)まり、隱れ蓑・隱れ笠・打出の小槌・如意寶珠等の寶を授け、益々大富貴となつた。丹波國大江山の邊に棲むおふてきり右衞門と云ふ盜賊が數十人の部下と共に來襲したが、大黑は小槌、夷子三郎は釣竿を振つて賊共を追拂つた。この由天聽に達して大悅親子は召出され、大悅は吉田のきよむねと姓名を賜はつて昇殿を許され、領地を下し置かれた。且つ宣旨によつて壬生中納言の娘と婚し、三男一女を擧げ、三男は後それ〴〵中將・少將・侍從に任じ、一家和樂、大黑天も「鳴るは瀧の水」と拍子を踏んで舞ひ、更に强ひられてめでたく大黑舞を舞ひ納めた。

【解說】童話、孝行談、福神說話。「梅津長者物語」と構想が酷似し、これにも大黑舞があり(詞句少異)、盜賊の亂入もある。孝德の報と彼の夷子三郎に當るのが、これでは大黑天なのが違つてゐる(夷子・大黑兩福神の信仰は室町期以後で、狂言にも「蛭子大黑天」があり、お伽草子に「かくれざと」(別項)がある)。「梅津」との關係を離れても、本書の內容を成す說話の本據は、「今昔物語」卷十六「參二長谷一男依二觀音助一得レ富語」、乃至それを書き改めた「宇治拾遺物語」卷七「長谷寺參籠男預二利生一事」の說話に求め得る。若し直接それ等の書から取られたので無かつたら、同じ童話の地方的に遊離してゐたのが本書の素材となつたのかも知れない。(梅津長者物語參照)

【參考】近古小說解題○近古小說新纂初輯(かくれざと考說)○惠美須と大黑 長沼賢海(島津)

戴恩記(たいおんき) 歌學書 上下二卷

【著者】松永貞德

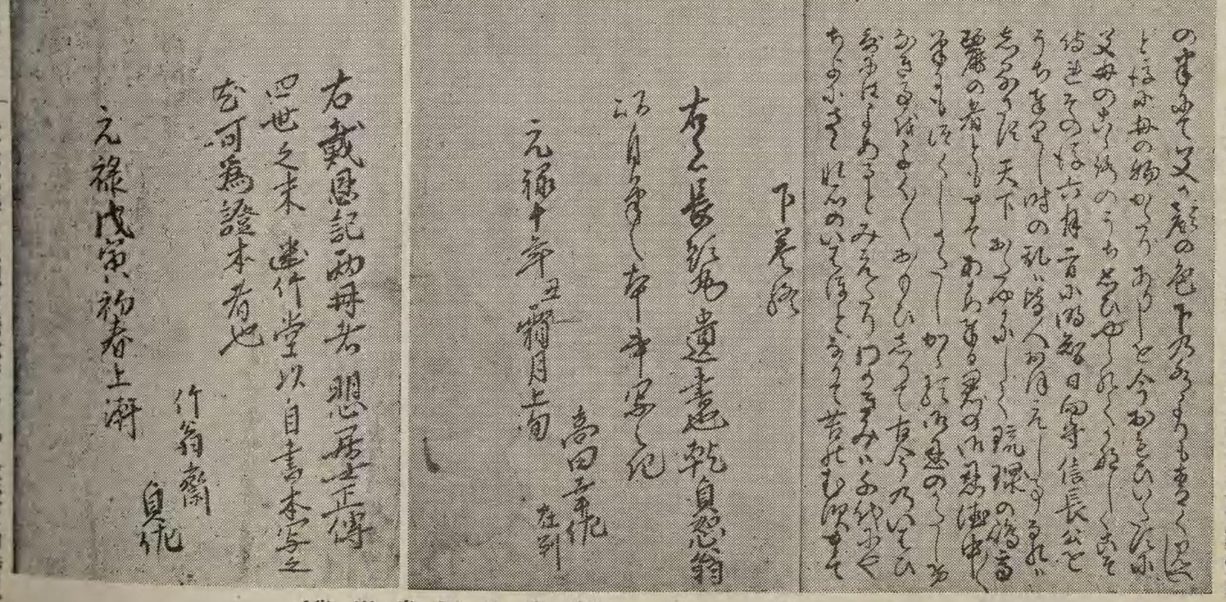
【別名】歌林雜話集(本書中に「此戴恩記」と云つてあるから、戴恩記が原名であつたと思はれる)。

【名義】師承戴恩の追憶記であるから、かく名づけた。

【刊行】天和二年刊行と云ふが見るを得ない。元祿十五年の刊本(四册)がある。

【諸本】溫故堂本・爲原本・某家古寫本・圖書寮本・帝國圖書館本等がある。續群書類從・存採叢書・歌學文庫に所收。

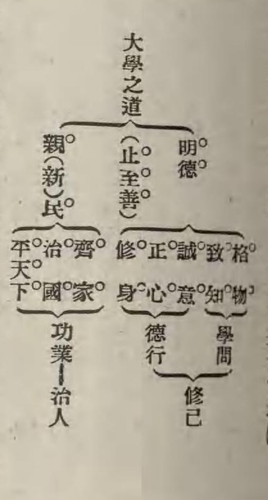
【內容】貞德の孫講習堂寺雲子松永昌易の漢文の序跋がある。貞德が本書を書いた動機は、本書によると、定家の「詠歌大概」の「和歌無二師匠一をはき違へて師傳を輕んずる者のあるを慨し、師傳がなければ邪路に入るとなし、自己の師傳を記して、末世の邪路に入らず和歌の本道に歸するやう警告を與へるにある。かくて本書は、全篇師承戴恩の精神によつて、幼時から就いて學んだ多くの師に對する追憶が歌學を中心として記されてゐる。中心は歌學にあるが、連歌を學んだことも多く記され、國文學全般に及んでゐる。歌學の事は、その師承の事實を記すと共に、歌道に於ける自己の意見をも述べてゐるので、貞德の歌學に於ける傳統的思想が窺はれるが、貞德は當時の堂上家の歌學を學んでゐるから、その思想は二條家(別項)の傳統思想以外に出でない。彼が師として數へ擧げてゐる人に、九條禪定殿下玖山公・細川玄旨法師・菊亭右相(晴季)・中院入道(通勝)・飛鳥井大納言(雅綱)・同宰相(雅敦)・紹巴法橋・淸水宗我・城勝檢校・安法法師等があるが、「今玉まつりにかぞふれば、師の數五十餘人に及べり」と云つてゐる。この中、歌學・國文學に於て最も關係の深いのは、玖山公と幽齋との二人、次いで通勝、連歌に於ては紹巴で、玖山公・幽齋・紹巴に關しては、頗る詳細に記して居り、通勝についても相當精しい。後部に自己の歌道に於ける意見を可なり精しく述べてゐて、全篇に亙つて定家尊崇の見られるが、こゝにも頗る定家を尊び、定家の傳を花風實體と習ふと云ひ、花に過ぎることを斥け、「古今集」は花實相對で、「新古今集」は花に過ぎ、定家も歎いたと云ひ、又歌を五行によつて說き、古今集序に合せて說いてゐる。要するにその說は二條家傳統の堂上歌學の思想の繼承である。最後に幼時以來兵亂に惱まされたこと、義輝將軍沒落の上



戴恩記(宮內省圖書寮藏)

京の亂から信長滅落までの騷亂に惱まされた顯末を述べて、世を泰平に歸せしめた德川家の恩澤を讃美して終つてゐる。【價値】本書は當時の堂上歌學を代辯した歌學書でもあると共に、玖山公・幽齋・紹巴等の國文學方面を主とした傳記的記錄にもなつて居り、又それ等の間に貞德の父永種のことが彼此述べられてゐる。從つて又本書全體として貞德の國文學全般の學統についての自叙傳ともなつて居り、當時の國文學界及び社會の消息記ともなつてゐて、當時に於ける樣々な資料を含んでゐる。本書の中心は歌學にあり、全篇を貫く精神は師承感恩にあるが、可なり複雜多岐な內容を持つてゐて、研究者に與へる裨益は頗る多く、同時に貞德及びその時代を知るにも頗る重要なものである。〔志田〕

大學（だいがく）　經書　一卷【著者】不詳。鄭玄の註や、孔穎達の正義には著者の名を擧げず。鄭曉によれば、魏の虞松が「石經大學」を上る表の中に、漢の賈逵の言を引いて孔伋（子思）が宋に窮居した時、先聖の道の泯滅を懼れて、「大學」「中庸」の二書を作つて經緯とした と云つてあるといふが、それは速斷である。朱子は經と傳とに分けて、經文は孔子の意で曾子がこれを述べ、傳文は曾子の意によつてその門人が作つたと云つてゐるが、これは孔子・子思・孟子にそれ〴〵「論語」「中庸」「孟子」の書があり、且つ所謂傳の所に、孔子の語の外にはただ曾子の言のみを引いてある所から、この書を曾子に配したので、道統を明かにするために思想の發展上、かく認めたに過ぎず、歷史的論據はない。本文中に曾子の言を引用するのを見れば、戰國時代に齊・魯の間の諸儒の手に成つたものであらう。【名義】後漢の鄭玄は、「名づけて大學と曰ふは、其の記博學以て政を爲すべきを以てなり」と云ひ、隋の劉炫は、「博大聖人の學」と云ひ、その他宋の司馬光等、何れも博大の學の義としてゐるが、「禮記」等に見える大學の語が、何れも學宮を指してゐるので、朱子の「古の大學、人を敎ふる所以の法なり」（大學章句序）と論じたのが至當である。故に大はタイと讀まずしてダイと讀む。【由來】大學は、もと「禮記」中の第四十二篇である。唐の韓愈が「原道篇」の中に、夙にこれに注目したが、これを單行して講說したのは、宋の司馬光の「大學廣義」一卷に始まる。後二程子は、錯簡ありとして定本を作り、更に朱子はこれを承けて經傳を分け、章句を定め、且つ闕文ありとしてその補傳（傳の第五章、格物致知の傳）を作り、「大學章句」と名づけ、これを「論語」「孟子」「中庸」に配して四書として以來、世の尊尙するところとなつた。【諸本】「禮記」中の「大學」は、全篇一貫して章段の分劃はない。これを「古本大學」と云ふ。然るに程子の改刪に次いで、朱熹・董槐・葉夢鼎・程敏政・薛淸・薛濟・崔銑等、各々その見る所に從つて定本を作るもの凡そ十數家（大學證文）あり。我が伊藤維楨・太田元貞等も亦、これに倣つてゐる。〔大學章句〕朱子の大學章句は、大要は程子の說に基づき、更に經一章傳十章に分つ。經傳を分けることは、上述の如く無稽の說であるが、章句の分け方は大體に於て妥當である。ただ彼が格物致知の解を不足として、傳の第五章を補つた所謂補傳は蛇足で、その殘闕とする二句は、所謂經文の末に置けば足る。【內容】〔三綱領、八條目〕朱子が「大學」一篇の綱要として摘出したものであるが、その內容は儒敎の主義と目的とを、最も組織的に叙述したもので、これを表示すれば、



要するに「大學」の要領は修己と治人との二つの大綱に約し得る。格物致知の學を修めて先づ自己の明德を明かにし、更にこれを家國天下に實現するので、所謂自我實現說と言ひ得る。明德とは朱子に從へば、「人の天より得たる所にして、虛靈不昧、以て衆理を具へて萬事に應ずるもの」。親民とは、程子の云ふが如く新民で、新とは舊を革めるの謂である。さて修己の本は格物致知の工夫を積んで心の發する所を誠實にするに在る。誠意とは自ら欺かず、自ら慊（こころよ）くするを云ふ。故に閑居するも不善を爲さず、愼獨の工夫を要する。これは愼獨の工夫を以て始とする中庸の思想と符節を合するもので、兩書の作者がその傾向を同じくすることは疑ない。意が已に誠であれば心は自ら正しく、偏僻して宜しきを失へば、一家の內を齊へるに足らぬ。故に齊家は修身を以て本とし、一家を齊へて而る後に國人を敎へ、進んでは天下に及ぼし得る。諸々の家庭的道德は直に移して社會的國家的道德に擴大し得る。これを稱して絜矩の道と云ふ。絜矩の道とは孔子の所謂忠恕に外ならぬ。この點に於て、「夫子の道は忠恕のみ」（論語里仁）と云つた曾子の語は、「大學」の作者に就いての暗示を與へる。〔朱・王二氏の異同〕朱子は前述の如く「大學」の要旨を三綱領八條目に分類して、その始敎を致知格物に在りとなし、物とは天下百般の事物とし、格とはこれを窮格（イタルと訓ずるの意とし、知を後天的知識とする。然るに王陽明は、心卽理の立脚地から朱子の致知格物說の誤謬を發見して、補傳を棄てて「古本大學」を奉じた。彼は格物の物を、精神的現象のみに限定した。從つて格とは意の在るところに就いて、その正しからざるものを正す（タダスと訓ず）の意とし、また致知の知とは、經驗的知識でなく、孟子の所謂良知と解して、彼の致良知說の根據とした。從つて彼は大學の中心思想は誠意に在りとして、これを「大學」の鬼門關と稱した。卽ち前者は歸納的主知說に基づき、後者は演繹的主意說の上に立つ。朱子の致知の解釋は當らずと雖も遠からざるものであるが、格物に對する解釋は、朱子は廣汎に過ぎ、陽明は狹隘に過ぎ、我が荻生徂徠の「物とは敎の條件なり。古の人、學んで以て德を己に成さんことを求む。故に人を敎ふる者は、敎ふるに條件を以てし、學ぶ者亦條件を以て之を守る。鄉の三物、射の五物の如き是なり。」（辨名下）と論じたところが、最も明快にして妥當である。（四書參照）

【註釋書】大學或問一卷宋朱熹○大學衍義四十三卷宋眞德秀○大學古本旁釋一卷明王守仁○大學問一卷同上○大學衍義補一百六十卷明邱濬○大學證文四卷淸毛奇齡○大學定本一卷伊藤維楨○大學解二卷荻生雙松○大學釋解一卷皆川愚○古本大學旁注一卷大鹽平八郎○古本大學刮目七卷同上○大學原解三卷太田元貞

【參考】大學篇成立年代考武內義雄（支那學三ノ九）　〔宇野・本多〕

大學（だいがく）　學校【名義】地方の國學（別項）及び太宰府の府學に對する稱である。【解說】

國學・府學と共に、大寶令によつて制定されたものであつて、式部省の大學寮（フンヤノツカサと訓む）の管轄に屬してゐた。貴族の子弟を教育する處で、初位の者の子弟及び庶人の子弟は、絶對に入學を許されなかつた。即ち大學の學生は五位以上の者の子弟及び東西の史部の子弟から採るのであつて、八位以上の者の子弟は、出願して特に許されることになつてゐた。定員四百人、年齢は十三歳以上十六歳以下で、聰明な者に限られ、在學年間は、國學と同樣九ヶ年である。入學には、束脩として布一反及び酒食を師に納れた。學生は徭役を免ぜられ、浮浪することを許されてゐた。九ヶ年の修業を卒へたものは貢擧（官吏登用試驗）（別項）に應ぜしめ、これに耐へ得ないものは退學を命ぜられた。なほ大學寮の建物の位置は、今の京都二條離宮の西方にあつたらしい（拾芥抄・二水記）。郭内に本寮以下紀傳・明經等の大學の講舍があつた。都堂院は一に北堂といひ、紀傳道の學舍、明經道院は南堂と呼ばれた。その他、算道院・明法道院・廟堂・廟倉院等があつた。廟堂は釋奠を行ふ所、廟倉院は孔子の畫像及び祭奠の器具を藏める所である。

〔學科〕明經道・紀傳道・明法道・算道の四部に分れてゐる。この外書道などもあるが、それは一道としては取扱はれてゐない。明經道とは、修身及び政治の道をいふ。周易・尚書・毛詩・周禮・禮記・左傳・論語・孝經等が教科書として用ひられ、その中、禮記・左傳を大經とし、毛詩・周禮・儀禮を中經、周易・尚書・公羊傳・穀梁傳を小經とした。その註にも規定があり、周易には鄭玄・王弼の註、尚書には孔安國・鄭玄の註、三禮・毛詩は鄭玄の註、左傳は服虔・杜預、孝經は孔安國・鄭玄、論語は鄭玄・何晏等の註を用ひた。故に皆師説を守つて一家の見を出す者は殆ど無かつた。以上の諸經のうち、孝經と論語とには兼ね通じなければならなかつた。又、公羊傳・穀梁傳を一經として學生に教授するやうになつたのは、延曆十七年以後のことである（令集解）。紀傳道とは、歴史と文章の道である。史記・漢書・後漢書・文選・爾雅等を教科書とし、この中、三史と文選とは大經に準ぜられた。明法道とは法律の道である。律令格式の書を教科書とした。このうち律は大經に、令は小經に準ぜられた。算道は算術の道で、孫子・五曹・九章・海島・六章・綴術・周髀・九司・三開重差等を教科書とし、何れも小經に準ぜられた。〔職員〕大學寮の職員は、頭（從五位上）・助・大允・小允・大屬・少屬、各一人で、これ等の官吏は、學生の試驗及び釋奠その他の事を掌つた（職員令）。頭は、もとは最もその選任に意を用ひられ、文章生、諸王がこれに任ぜられたが、後には菅原・大江兩氏が多くこれに任ぜられた。この外、令外の官に別當があり、頭の上に在つて大學の事を總べてゐた。もとは式部少輔の兼職であつたが、醍醐・朱雀兩帝の頃からは親王或は大臣がこれを兼ねるに至り、後醍醐帝の御代に廢絶された（職原抄）。博士一人、經書を教授した。大學博士ともいひ、後には明經博士とも大博士とも言つた。もとは正六位下の官であつたが、後五位の官となつた。後世中原・清原兩氏が位次によつて任ぜられた。助教二人。正七位下、博士の下に屬す。直講三人。唐名直學士、令外官である。博士・助教を助けて經書を講じた。もと三人（四人のこともあつた）であつたが、大同三年二人となつた。その下に得業生四人があつた。文章博士一人。從五位下、唐名を翰林學士といふ。紀傳道（史學）及び詩文章を掌る。令外官である。文章博士の名稱は「續日本紀」養老五年正月の條に既に見えてゐるが（この時は四人）、一時廢せられたものらしいが、その後天平二年再び置かれた（類聚三代格）。もと一名であつたが、大同三年直講一名を減じて紀傳博士を置き、後、承和元年四月これを廢し、文章博士を二人に增し、紀傳道をも司らしめた。但しその後も、なほ特に紀傳道に通じた文章博士や文章生を、紀傳博士・紀傳生と稱したやうである。文章博士の下に、文章得業生・文章生・擬文章生等があつた。明法博士二人。正七位下の官、唐名律學博士、令外官である。大寶年中、既にこの官はあつたが、後廢せられ、神龜五年七月再び設けられた（類聚三代格）。後世、坂上・中原兩氏の世襲となつた。法律を教授した。その下に明法得業生・明法生があつた。音博士二人。從七位上、後五位の官、唐名音儒。明經道の人を任じ、漢音を教授せしめた。下に音生があつた。書博士二人。從七位上、後五位、唐名書儒。書道を教授し、下に書學生があつた。算博士二人。從七位下、後正七位下、唐名算學博士。算術を教授し、下に算得業生二人、算生三十人があつた。正平二十一年二十人に減ず。これも後世、三善・小槻兩氏の世襲となつた。以上のうち、明經博士・紀傳博士・明法博士・算博士を四部の博士といふ。〔釋奠〕大學も國學も、孔子の祭祀、即ち釋奠を以て最大の儀式とする。大學では先聖孔子に配するに先師顏回等十哲の影を以てする。その儀式に就いては大學式に詳述されてゐる。式終つて後、都堂院に集まり、執經・執讀の儀がある。即ち執讀は經を讀み、執經は義を講ずる。この儀の後、酒盃三巡してから、文章博士が題を獻じ、文人等が詩を賦すのである。釋奠は春は二月仲春、秋は八月仲秋、上丁の日に行はれる。上丁の日に差支ある時は、中丁の日に行ふことになつてゐた。

【沿革】應神帝の朝、漢字が輸入せられ、道德・政治・文學等に熱心な研究者も次第に增加し、天智帝の御代になつて初めて學校が設けられた（懷風藻序）。天武帝の時、廢れてゐた學校を興したといふ記錄もある（武智麿傳）。かくて大寶元年には、釋奠も行はれた。又「日本紀」卷二十九、天武天皇四年正月の條には、すでに「大學寮」の名稱も見え、同書卷三十、持統紀五年の條には、大學博士・音博士・書博士の名も見えてゐる。これ等によつて見れば、大寶令による國學の創立以前、京都に學校のあつたことは疑ふべき餘地はない。これが大寶令によつて組織立てられたものであらう。然るにその後、朝政の萎微に從ひ、大學の衰頽も愈々甚だしく、文章道の儒官も、菅原・大江兩氏の世襲となり、明法道に於ける中原・坂上兩氏、明經道に於ける清原・中原兩氏、算道に於ける小槻・三善の兩氏の如く、公學が一家の私學の如くになつた。かくて、次第に大學・國學の制は行はれず、又康平年中、屋舍の倒潰、或は燒失などの災に遭ひ、遂に荒廢に歸した。但し「桂林遺芳抄」（永正十二年成）には、給學問料事を説いてをり、或は弘安頃から文正頃の對策なども見えてゐるから、儀式や制度だけは微々たるものながら、形式だけは存してゐたものらしい。（國學・貢擧參照）

【參考】令義解○令集解○職原抄○官職祕抄○類聚三代格○桂林遺芳抄（群書類從四九七）○日本法制史○日本制度史通卷二○文藝類

太神樂（だいかぐら）　舞踊【別名】伊勢神樂。太神樂は代神樂とも書く。【解說】放下師系統の曲藝・茶番狂言・獅子舞等を演ずるが、獅子舞が本體であるために、神樂の文字を挿んだものであらう。代神樂とも書くので、代の字の意味を解釋せんとする試みもあつたが首肯するに足らぬ。寧ろダイダイカグラを略してダイカグラと云ふのであらうと云ふ「言海」の說が好い。（獅子舞・太々神樂參照）〔小寺〕

太華山人（たいくわさんじん）「高橋太華」を見よ。

臺頭霞彩幕（だいがしらかすみのいろまく）　脚本　五幕十四場　世話物【作者】奈河篤助【通稱】三勝半七【名稱】臺頭は三勝の大頭舞から得、その舞臺の幕の義を正月の春に通ぜしめた。【別名題】京紅藍杜若【諸本】日本戲曲全集第十八卷所收【興行】文化九年正月十五日初日、江戸中村座。

【役割】茜屋半七・厚倉次郎太夫（三代中村歌右衞門）、筑波屋茂右衞門（市川市藏）、野花屋女房お縫（藤川友吉）、有松源之丞（尾上紋三郎）、番頭長九郎（坂東善次）、百姓次郎作（荻野伊三郎）、下人彌八（中村七三郎）、娘お通（尾上榮三郎）、横井丹藏・半左衞門女房お今（桐島儀右衞門）、茜屋半左衞門（市山七藏）、笠松角太郎・今市屋善右衞門（中村東藏）、信田奥方青柳御前（市川おの江）、田宮右内・野花屋勝次郎（二代關三十郎）、東金屋茂右衞門（尾上松助）、美濃屋三勝・時雨ヶ岡妙貞尼（五代岩井半四郎）、腕の喜三郎・美濃屋平左衞門（助高屋高助）。

【題材】三勝半七の世界を借りたが、內容は全然作者の創案である。

【梗概】〔序幕〕（淺草寺）　信田奥方青柳御前參詣につき、出入り商人筑波屋茂右衞門・東金屋茂右衞門・茜屋半七、この處で目見得。有松源之丞・笠松角太郎が武藝の爭論。東金屋茂右衞門、源之丞に代つて角太郎を試合に打ち負かす。半七の許婚お園を父半左衞門、母お今が連れて參詣。半七はお園を嫌ふ。下人彌八の忠義。奉納金紛失の科で源之丞浪人。東金これを引請ける。お今は番頭長九郎と計つてお園を奪はせる惡企み。（元柳橋）惡者はお園と間違へて美濃屋娘お通を奪はんとして河中へ落す。船中へ落ちると中に半七がゐて無體の狼藉。〔二幕〕（鶴ヶ岡八幡）お園狂氣を裝ふ。今市屋善右衞門は横井丹藏や長九郎と計つて半七を追ひ出す惡企み。（奉納臺頭舞臺）美濃屋三勝、臺頭の舞。三勝はお通の後身である。半七、掏摸丸鐵を捕へる。茂右衞門違ひにて筑波屋・東金の達引。（八幡境內）半七誤つて百姓次郎作を氣絕さす。善右衞門等半七を赦して逃がす。次郎作蘇生。（裏手河岸）丹藏、次郎作の着物を着て川へ投げ込まれる。腕の喜三郎、惡人等の仕業を窺ふ。〔三幕〕（仲町野花屋）野花屋勝次郎・お縫夫婦が藝者三勝に盡くす深切。三勝今はお通といふ娘がある。半七が來て三勝を口說くが諾かぬ。（奥座敷）三勝を中にして筑波屋・東金の達引、双方に加勢する角太郎・源之丞。（表座敷）善右衞門・丹藏は次郎作殺しの科で、半七を引立てようとしたが、侍に扮した喜三郎が助ける。喜三郎は半七の舊臣。お縫、わざと勝次郎と夫婦喧嘩して三勝の身請けを妨げる。（奥座敷）三勝・半七は、五年前元柳橋で逢つた同士と知つて深い仲になる。〔四幕〕（洲崎武藏屋）半七の伯父次郎太夫は三勝へ、三勝の母妙貞尼は半七へ、各々緣切りを賴む。半七は納め物の金の才覺に迫り、筑波屋へ哀願するが、三勝の遺恨で取合はぬ。三勝、半七の身を思つて愛想づかし。（三十三間堂）田宮右內、半七へ納め物の催促。半七、再び筑波屋へ賴むが諾かぬ。（同裏手）半七は、遂に筑波屋と長九郎を斬る。〔大詰〕（美濃屋）お園、半七の科を着て繩にかゝる。娘を思ふ平左衞門の實意、右內の心盡し。お今・善右衞門、惡事顯はれ、源之丞に縛られる。平左衞門はわざと半七をつれなくする。三勝・半七、情死の覺悟。（常磐津淨瑠璃「其常磐津仇兼言」）（千日谷）三勝・半七が情死せんとするを、平左衞門が止める。右內は半七赦免の由を傳へて、角太郎を縛り上げる。めでたい結局。

臺頭霞彩幕（初演繪本番附）

【解說】馬琴の讀本「三七全傳南柯夢」（別項）に據つた爲めか、全體が冗漫に流れ、事件の進展も遲く、駕助としては手法が拙い。三勝の性格だけは一貫してゐる。この作が非常に歡迎されて明治まで殘つたのは、四幕目の二人の早替り競べで、他は主として俳優の技倆に依つたのであらう。〔渥美〕

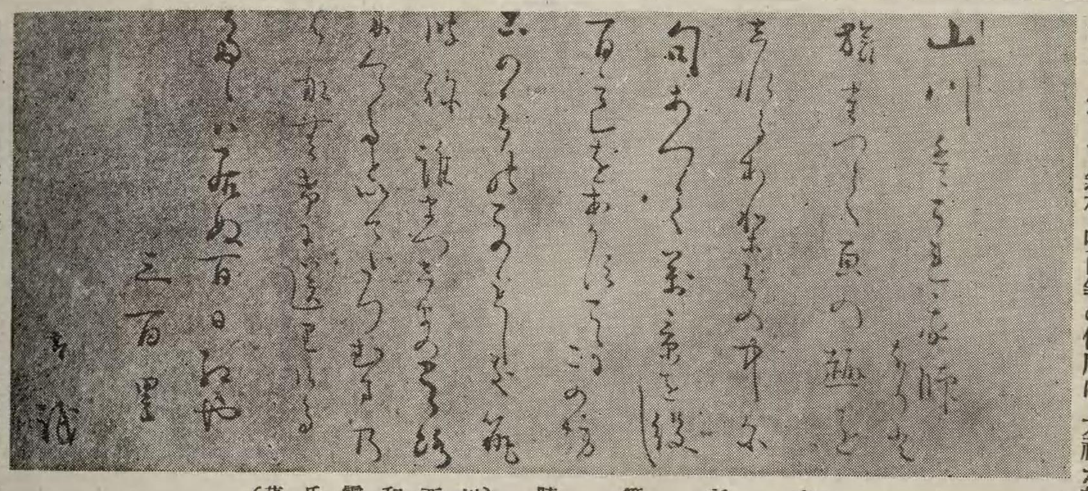
退閑雜記（たいかんざつき）　隨筆　前編十三卷後編四卷【著者】松平定信【名稱】寬政五年老中の職を退いて後、閑を得て書いた雜記の意。【諸本】本書は久しく寫本で行はれたが、明治二十五年江間政發所校の活字刊本が出た。從來諸所に傳へたところのものは卷數不定であつたが、こゝに至つて完本十七卷を得た。右活字本の卷首に、著者自筆本に存する自序があつて、寬政六甲寅歲から同九年二月迄に書き集めた由を記してある。但しこれは前編だけの事で、後編はその後を承けて寬政十二年九月迄に記したもので、この間前後八年を費してゐる。日本隨筆全集所收。【解說】書中擧げてある所は、著者の該博なる知識と精到なる觀察とを以て、種々雜多の見聞事實を考證論斷したものが多く、まゝ經濟及び修身・齊家の談を交へ、又和歌風流の事を述べてゐる。采地白川附近の地理や民情に關する項が少くなく、後編第三卷は、寬政十二年養痾のために飯坂溫泉に旅した折の紀行一篇で、詠歌を挿むことが多い。但し著者の草本が塗抹改刪縱横であつた爲めに、傳寫の諸本に魯魚の誤が多く、江間氏の校本には大に注意訂正の跡が見えるけれど、なほ完全とは言ひ難い。日本隨筆全集所收の一本は、比較的訛誤が少いと稱せられる。〔和田〕

太祇（たいぎ）　俳人【姓】炭（すみ）【別號】徳母（俳諧拾遺譜）・水語・宮商洞（續の筏）・三亭（時津風）・

不夜庵【生歿】寶永六年生れ、明和八年（一七四三）八月九日京都に歿す。享年六十三。【法名】蓮譽道源法子【墓所】京都綾小路通大宮西入光林寺【閲歴】太祇は、もと江戸の生れである（太祇句選序）。初め雲津水國の門に入つて俳諧を學び、後、慶紀逸に屬した。十八九歳頃、俳諧に志したとしても、恐らくは享保末年の頃であつたらう。水國は享保十九年に歿したから、紀逸に屬したのはその後の事と思はれる。兎に角太祇の作を始めて俳書の上に見出すのは、寛保元年紀逸の編に係る「吾妻舞」に於てである。當時彼は水語と號してゐた。次いで、寛保二年に成つた「西の奥」「續の筏」「小雪」、同三年の「蕎の花」、延享二年の「默止」等に、彼が紀逸の四時庵社中の一人として、江戸の少壯俳人に伍して漸く活動して來た樣が窺はれる。寛保元年は彼が丁度三十三歳の時である。即ち彼の俳諧生活は先づ三十代から始まつたと見て宜い。かくて寛延三年の冬に成つた「時津風」（稿本三册。刊本の「時津風」とは別本。當時の江戸座の知名俳人の發句連句をその自筆のまゝ覆せてある）には、自ら「三亭太祇」と署してゐるので、當時始めて改號立机したことが推察される。時に彼は四十二歳であつた。

炭太祇（太祇句選）

それから間もなく、江戸の俳壇を去つて陸奥から笑柴の果まで大行脚の途に上つた。かうして長い間山水の間に放浪してゐた彼は、京都を永住の地とするやうになつた。その上洛した年代は明かでないが、寶暦元年か三年頃であつたと思はれる。即ち蕪村と相前後して京の人になつたのである。而も彼は入洛後間もなく佛門に歸した。寶暦四年に刊行された「其飛佐古」（三田白峯の門人丹志撰）に、「太祇發心して京都眞珠庵に有るよし、文通に聞えたる句」と前書して、「石山の石をたゝいて月見哉　道源」の一句が載つてゐる。道源とは即ち太祇の法號である。かくて彼は京都時代の第一歩を僧院生活から始めた。併し結局、彼にはやはり氣輕な俳諧師の生活がふさはしかつた。眞珠庵に何年位居たのか分らないが、寶暦五年六月には、紙隔の旅行に餞別の句を送つてゐるから（眞蹟）、もう僧房を出てゐたらしい。更に翌六年の正木風狀の「除元集」に據れば、そこには洛西不夜城の呑獅亭連衆の一人として太祇の名を列してゐる。呑獅は島原の妓樓桔梗屋の主人で、風狀に俳諧を學び、後には太祇の最も忠實な門人であり後援者となつた人である。かうして太祇は薄暗い禪堂の中から、華やかな不夜の歡樂境へ一足飛びに移つてしまつたのである。これも所詮は彼の都會人的な通人趣味や洒脫な性格がさうさせたのであらう。かくて不夜庵主として洛西に落着く事になつた彼は、寶暦六年（推定）の夏、東武に舊師故友を訪ねて滯在數旬に及んだ。「都のつと」は即ち當時の記念に彼が撰んだ集である。さて島原では、主に呑獅の世話で點者生活を營んでゐたのであるが、又廓中の子供に手習を敎へたり遊女達の文筆の師匠をしたりして、安らかな生活を送つてゐた。而して俳諧の方では、寶暦年間迄はやはり主として風狀一派との交渉が多かつたが、明和元年には風狀も歿し、それからは嘯山・隨古・蕪村等、古夜半亭系の人々と漸く親しくなつて行つた。かくて蕪村・嘯山等の俳席に、太祇が額を出すことは益々繁くなり、かの「平安二十歌仙」（別項）の如きもこの間に出來た。明和八年の春蕪村が夜半亭二世を襲いだ後も、不夜庵と夜半亭社中との親密さは一層厚かつたが、


太祇筆蹟（川西和露氏藏）

その年七月の半頃から半身痿えるやうな病に罹り、八月九日遂に歿した。【編著】都の裏一册（寶暦六年成）○鬼貫句選二册（明和六年刊）。なほ長崎紀行「春夏集」二册が刊行されてゐる筈だが、まだ傳本が知られない。その作品は「太祇句選」（別項）「同後篇」に收められ、追善集「石の月」にも數章を載せてある。【人物・俳風】太祇は蕪村ほどの儁敏な才もなければ、又學問の造詣も餘り深くはなかつた。けれども彼には句作に對する不斷の努力があつた。「太祇句選」に蕪村と嘯山とが序した言葉を見ると、太祇が一句を得るために如何に苦心慘澹したかが分る。誠に行住坐臥、燕飲病床といへども句案を忘らず、佛を拜むにも神にぬかづくにも發句するといふ有樣であつた。彼には俳諧の外には殆ど生活がないと言つてもよい位であつた。それは藝術家が自分の仕事に對する最上の態度たるに違ひない。そしてこの眞摯と熱烈さとが、遂に彼の俳諧を大成させたのである。彼は常に、「題一つを得て趣を百に分ちて句を案ずる時は、百樣の姿情を得るなり。さほど勞煩をなさずしては、さうなき一句の主にはなりがたし」（新雜談集）と言つたといふ。「山吹や葉に花に葉に花に葉に」「行く女給着なすや憎きまで」「側に置いて着ぬことわりや夏羽織」などその苦心の跡は十分に窺はれるであらう。彼が江戸座（別項）の俳人として、「武玉川」式の人事趣味に養はれて來た結果、社會の現實相や人情の複雜味を多く句材にしようとする傾向があつたのは當然だが、行雲流水の間から得來つた作も少くなかつた。而もその中にも、やはり自然そのものよりも、暫し語り合つた遣れ、一夜を過した旅の宿等に多く心を惹かれた。所詮彼

は、人間に最も親しい詩人であつた。又彼は自ら自に見耳に觸るゝ程のものは、悉くこれを俳諧化せねば止まぬ熱心さがあつた。「ふらこゝの會釋こぼるゝや高みより」「婆々つれた爺も來にけり二の替」「帷子のそこら縮みて晝寢哉」等はこれである。勿論、かうした態度からは、無理にも一句を纏めようとして遂には

太祇筆蹟

何等の藝術的感興をも伴はない句を作り上げるやうな弊も生ずる。等身の句稿中、この種の句が相當見出されるのは寧ろ當然の事と言はねばならない。時には一七日間の禁足をして所謂俳諧三昧に耽つた彼の生活を思ふと、藝術家としての眞摯な態度に尊敬の念を拂はずには居れない。彼は常に酒を呷つて着物には大きな紋を附け、役者連と能く交際したりした(翁草)。一面また禪房に起居し、禁足の生活を續けるやうな深味と落ちつきとを持つてゐた。それが彼の人事趣味な句を、決して卑俗に墮さないで、複雜さと清雅な情趣とを兼ね備へさせた所以であらう。彼の俳諧の獨自さも全く玆に存する。【史的地位】天明の俳諧史を説くものは、何人も先づ太祇と蕪村とを時代の代表的人物として數へ上げる。併しこれは果して正しい見解であらうか。蕪村は姑くこれを措く。太祇が生前京都に於て占めてゐた俳壇的地位はどうであつたか。彼は洛西の一郭に、僅かに呑獅・雅因等の徒を擁してゐただけで、而も彼等は皆眞に藝術を理解し俳諧に精進する者ではなく、所謂遊俳の連中に過ぎなかつた。現に不夜庵社中の撰集として世に傳はるものもない。當て京都の書肆が中興俳諧の六家集(寶政八年)を撰んだ時にも、太祇の名はその中から逸せられてゐるのである。それはこの六家に比して彼の時代がやゝ早かつたのに由るのかも知れない。併し若し當時彼の史的地位が今日位に評價されてゐたとしたら、決して彼をその中から逸する事は出來なかつた筈である。やはり寛政の當時太祇の名が餘り世間に知られなかつたからと解すべきであらう。實際、今日若し一部の「太祇句選」が殘されてなかつたとしたら、蕪村や嘯山關係の俳書に見得る作品だけで、彼を今日の地位にまで引上げる事は、如何に犀利な眼光を持つてゐる文學史家と雖もなし得ない事であつたらう。それ程彼が時代に投げた影は薄かつた。勿論彼が寶暦・明和の交、蕪村一派と相提携して京都俳壇に革新の機運を齎した事は、俳諧の史的展開上大きな業績には違ひない。併しこの提携は蕪村の新しい俳風そのものとは餘り深い交渉を結ばなかつた。即ち太祇の風調は几董などに幾分の影響を與へたことは認められるが、畢竟それは彼獨自の風調として終つた。又太祇の後繼者五雲とてもただ庵號を繼いだといふだけで、特に太祇の遺風を傳へた譯ではない。かう考へて見ると彼が當時の俳壇に寄與し若しくは次の時代に暗示した力は、比較的少かつたと言はねばならない。これは彼が活動的な人物でなく自ら樂しみ獨り善しとする性格に出た結果で、この事は勿論彼の作品の價値そのものとは全く別な問題であるが、少くとも彼と時代との交渉は、今日一般に考へられてゐる程重大なものではなかつた。

【門流】太祇歿後、不夜庵には伊豫の僧獨苗や東都の竹護などが替る〴〵住んでゐたが、遂に必化坊五雲がその後を繼いで、不夜庵二世となつた。五雲は太祇の舊友で、筑紫の旅寢をも共にした因み淺からぬ間柄である。されば安永二年には、太祇三回忌追善集「石の月」を手向け、寛政五年には二十五回忌を取越して追善集「その秋」を撰んだ。太祇の門人としては一家を成した人はないが、ただ呑獅は最も忠實な後援者として終始し、太祇の作を後世に傳へる事が出來たのは全く呑獅の功績に歸せねばならない。

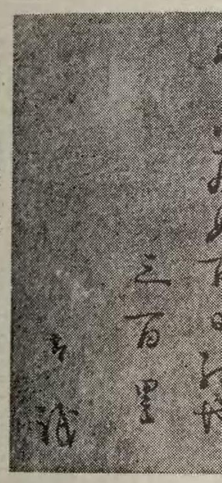
【參考】不夜庵太祇 勝峯晋風(にひはり一二ノ二・三・四)○太祇の研究 穎原退藏(國語國文の研究二・三)○太祇研究同上(日本文學講座)〔穎原〕

台記(たいき) 日記 十二卷一册 【著者】宇治左大臣頼長 【原名】暦記・日次記 【名稱】別名を槐記・宇槐記・宇左記・宇治左府記・治相記といひもと具注暦に記したものなので、暦記、又は日錄の意で日次記と言つたのを、後人が他の日記と分つために諸種の命名をしたもので、「台」「槐」は支那で大臣のことを三台・三槐といふのに因んだ名で、「治相」「宇左」「宇槐」は、宇治宰相・宇治左大臣の義である。【諸本】内閣文庫藏舊幕楓山文庫本・八條隆榮卿本・小中村博士本・前田侯爵家藏本・久松伯爵家本・深川文庫本・榊原芳野本等がある。史料大觀記錄部所收。大觀本は以上諸本中最も完本に近い楓山文庫本を底本として、その十四卷中目錄一卷を除き、九・十の二卷を合せて一卷とし、都合十二卷を一册にし、これに他の諸本を參照補正したものである。【解説】本書はもと卷帙の多かつたものであるが、いつか散佚して今殘存してゐるものは、その一部に過ぎないが、保延二年冬一卷、康治元年から久安四年までが七卷、久安六年一卷、久安七年春・仁平二年正月・仁平三年秋が一卷、仁平四年から久壽二年までが二卷、都合十二卷あつて、頼長の十七歳の時に始まつて、數年を缺いてはゐるが、保元の亂の前年までも續いてゐて、精力絶倫で好學な頼長の面目、頼長・忠通の紛爭に關した錯綜した保元の亂因等、十分にこれを知ることの出來るものである。又この日錄は、具注暦中に記されたものである關係から、長文に亙る記事はこれを別に記したもので、それを「台記別記」と呼んだ。八卷あつて、第一卷は頼長任大將記・大賞會・賭弓、第二卷は禪閤七十賀・官政・天子讀書始、第三卷は婚記、第四卷は師長元服記・近衞帝元服記、第五卷は春日詣部類記、第六卷は藤隆長元服記、第七卷は詣春日社記、第八卷は詣賀茂社記となつてゐる。又この記を抄錄したものに、「宇槐記抄」三卷、「宇槐雜抄」一卷、「台記抄」一卷がある。「台記別記」「宇槐記抄」「台記抄」は、史料大觀記錄部に一卷に收めてあり、「宇槐雜抄」は群書類從卷四五一に收めてある。

【參考】歴世記錄考 星野恒(史學叢説一)〔石村〕

太祇句選(たいぎくせん) 句集 一册 【編者】嘯山・雅因 【名稱】題簽には、「太祇句選」とあるが、嘯山の序には「太祇句集序」とあり、内題には、「不夜菴太祇發句集」とある。【刊年】蕪村の序に、明和九年九月と識されてあるから、當時の刊行であらう。京平野屋善兵衞刊。

である。即ち彼の俳諧生活は先づ三十代から始まつたと見て宜い。かくて寛延三年の冬に成つた「時津風」(稿本三册。刊本の「時津風」とは別本。當時の江戸座の知名俳人の發句連句をその自筆のまゝ觀せてある)には、自ら「三亭太祇」と署してゐるので、當時始めて改號立机したことが推察される。時に彼は四十二歳であつた。それから間もなく、江戸の俳壇を去つて陸奥から筑紫の果まで大行脚の途に上つた。かうたのであらう。かくて不夜庵主として洛西に落着く事になつた彼は、寶暦六年(推定)の夏、東武に舊師故友を訪ねて滯在數旬に及んだ。「都のつと」は即ち當時の記念に彼が撰んだ集である。さて島原では、主に呑獅の世話で點者生活を營んでゐたのであるが、又廓中の子供に手習を教へたり遊女達の文筆の師匠をしたりして、安らかな生活を送つてゐた。而して俳諧の方では、寶暦年間迄はやはり主として



を出すことは益々繁くなり、かの「平安二十歌仙」(別項)の如きもこの間に出來た。明和八年の春蕪村が夜半亭二世を襲いだ後も、不夜庵と夜半亭社中との親密さは一層厚かつたが、

【諸本】名家俳句集(有朋堂文庫)・天明名家句選(俳書大系)・俳文俳句集(日本名著全集)等所收【解説】太祇の歿後、その故友嘯山と雅因とが、呑獅の許にあつた太祇の遺草數十卷を閲し、その中から先づ初稿を編輯して世に弘めようとしたのが即ち本書である。蕪村の序によれば、太祇の句集の艸稿は實に等身の夥しさで、その取捨には二人の編者も困つたので、ただ四時の初め毎の五六枚だけの句を選び取つて初稿と題するに至つたといふ。併し勿論手當り次第ではなく、幾分秀逸を選出するだけの努力は拂つたに違ひない。隨つて本書を以て太祇の作品を代表させることに大した不當はないが、几董が「新雜談集」(別項)に言つてゐることに徴しても、彼の遺作は幾萬句といふ事を知らなかつたさうだから、本書に收める所は、なほ太祇の全豹を窺ふに十分だとする事は出來ない。安永六年に至り、不夜庵二世を繼いだ必化坊五雲が、「太祇句選後編」を編したが、それとても殘つた句の十分一にも當るまい。だが、とにかくこの二書によつて、太祇の作品が後世に傳へられた事を多とせねばならない。なほ「太祇句選」の卷頭に、五雲の寫になる太祇の像が掲げてあるが、彼の像として最も信ずべきものである。

【參考】太祇全集(ホトトギス發行所刊)○太祇句集 酒原退藏編 〔羅原〕

大經師昔暦(だいきやうじむかしごよみ)

世話物 【作者】近松門左衛門 【興行・成立】明和板外題年鑑に、寶永三年九月二十一日から竹本座興行とあるが、大團圓の句によつて正德五年春の作と推定される。「戀八卦柱暦」及び貞享元年「情柱暦」は共に外題替。【諸本】八・九行二十六丁本、七行四十五丁本、共に山本九兵衛板。諸種の近松全集所收【題材】京四條烏丸の大經師意俊の女房さんが、同家の手代茂兵衛と密通し、その媒介をした下女玉と共に、丹波の山田村に隱れてゐたが、召捕となり、天和三年九月二十三日三人とも洛中引廻しの上、粟田口で刑せられた實説に基いて脚色したもの。本作以前に同題材を扱つたものに、貞享三年刊の西鶴の「好色五人女」卷三、元祿五六年頃の作らしい「大經師おさん歌祭文」、寶永元年刊「落葉集」卷五、踊音頭の部の小豆庄兵衛作「おさん茂兵衛」等があり、皆幾分の影響を本作に及ぼしてゐる。正德五年正月、大阪嵐三十郎座の興行に「大經師」と題したのがあるが、本作との關係は不明。

【梗概】〔上卷〕發端は貞享元年十一月朔日、京四條烏丸の大經師以春の女房おさんは實家から夫に内密でといふ條件で金の調達を賴まれ、思案に餘つて手代茂兵衛に相談する。茂兵衛は金の調達のために主人の印判を盗まうとする所を惡手代助右衛門に發見され、家中の騒ぎとなる。日頃茂兵衛を慕つてゐた下女玉が見兼ねてこれを庇ふが、毎夜の如く玉の寢所に通つて口説いても意を遂げ得ないでゐる以春は、却つて兩人を不義者と罵り、茂兵衛の監禁を命じて外出して了ふ。玉は口惜しさの餘り、夜靜まつてから以春の不埒をおさんにぶちまける。憤つたおさんは今夜玉と寢床を代へて、夫が通つて來たら辱しめてやらうと計畫する。が、その夜茂兵衛が、畫間自分を庇つてくれた玉への禮心に通つて來たので、二人は圖らざる罪を犯してしまふ。夜明近く以春が戻つて來て、始めて兩人は自分達が恐ろしい罪を犯した事を知つて逃れ出る。〔中卷〕岡崎村の浪宅に住む太平記講釋赤松梅龍は、玉の伯父で且つ奉公の請人になつてゐる。此處へ夜晩く以春の宅から玉を駕籠で連れて來て梅龍に預けて歸る。梅龍が玉に覺悟を諭してゐると、おさん茂兵衛が諸所を流浪した末、此處に來て内の話を立ち聞きする。そこへ又おさんの兩親岐阜屋道順夫婦が黑谷の菩提所へ詣る途中、此處を通りかゝつて圖らずもおさん等兩人に逢ふ。道順は一時はおさんの罪を責めるが結局親の慈愛が先に立ち涙ながら別れを告げる。折から家の中の玉も、それと氣づいておさんに呼びかける。〔下卷〕二人は、茂兵衛の在所丹波柏原に隱れてゐたが、自然この事が京に知れて召捕の觸狀が代官所に着く。この事を茂兵衛が正月の惠方詣の途中で聞き、急いで歸宅してこれから二人で丹後の宮津へ逃れようとする所へ、兩人の金を預つてゐる家主の助作が、金に目が眩んで訴人したので、役人がやつて來て捕へられる。そこへ梅龍が玉の首を提げて馳せつけ、罪を玉一人に負はせて兩人を助けようとするが、それは却つて大事な證人を殺してしまつた事になる。これからが道行の「おさん茂兵衛曆歌」で、おさんは蘆に鷺の裾模樣の着物を着て、茂兵衛と共に馬に乘せられ、洛中を引廻されて刑場にやつて來る。道順夫婦も來てゐるがどうともならぬ。折から馳せつけた黑谷の東岸和尚が命乞ひをして助けてやる。

【構想】二人が通ずるに至る徑路については「五人女」から、又惡手代助右衛門・下女玉・赤松梅龍等の人物に就いては元祿十年四月京の都萬太夫座興行の狂言「其曉明星が茶屋」の惡手代十左衛門・おさん・小池戸介等から暗示せられたものらしい。【影響】操では明和八年十二月北堀江座で素人・梁塵軒・阿契等が改作して「本卦(ほんけ)復昔暦」として興行。歌舞伎では享保五年八月大阪金子吉左衛門座で「大經師」、江戸では天明七年八月中村座の二番目常磐津道行「浮名草月小夜衣」、天保七年二月中村座璃光御目見狂言として「茂兵衛(おさん)大經師昔暦」等もあるが、本作との詳しい關係は不明。近頃では明治四十二年十一月改作して明治座で仁左衛門上場。本作から出た讀本では文化十年刊行と思はれる、ちぬ平魚作「茂兵衛(おさん)大經師宗像暦」六冊があるが、これは筑前蔦が城主梅津の忠臣宛石(ついし)長六が京に出て假に大經師以春と稱し、主家の遺兒おさんを妻とことふれて御家の再興に腐心するといふ、時代も戰國時代にかりた全然別の趣のものである。

【參考】近松傑作全集第四卷(水谷不倒)○歌舞音曲考說(高野辰之)○近松名作集下(黑木勘藏)○近世邦樂年表(義太夫之部・常磐津之部)○歌舞伎狂言細見(飯塚友一郎)○京阪歌舞伎年代記(歌舞伎研究附錄)伊原敏郎○花江都歌舞妓年代記談洲樓焉馬○同續編(豐亭芥子) 〔高野(正)〕

大虚集(たいきよしふ)

歌集 【著者】島木赤彦 【刊行】大正十三年十一月、古今書院 【内容】第四歌集で、大正九年後半から十三年前半までの作中、四百八十一首を選んだものである。本集の歌風は前集「氷魚」の歌風に比して餘程主觀的になり、調子も豐かに、且つ人麿風の雄大の調子を加味し、同時に靜寂の氣をも湛へて、赤彦調の完成を思はしめるに足るべきものである。(島木赤彦參照) 〔齋藤(茂)〕

體言(たいげん)

文法 【解説】體言とは、實體をあらはす語で、叙述の主體となり、主語に立ち得るもの。體といふ語は、用に對するもので、古く佛教に用ひたのに淵源し、宋儒も盛んにこれを用ひた。わが國では、契沖が「和字正濫

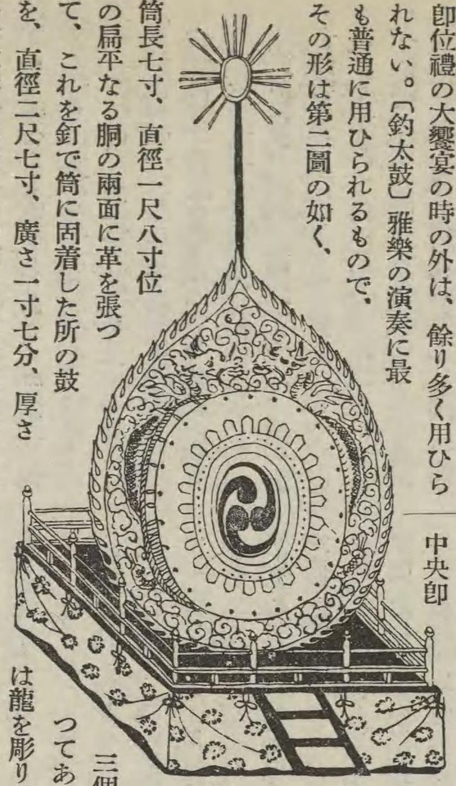
抄に並に「源氏物語」に體と用とを論について用ひ、鈴木朗・東條義門等に至つて、品詞類別上の名目とした。體言・用言といふ名は、義門の用ひたのに始まる。【種類】普通文法上の品詞では、名詞・代名詞・數詞（各別項）の三つがこれに屬する。〔小林〕

體源抄（たいげんしやう）　音樂書　十三卷二十二册

【著者】豐原統秋（とよはらのすねあき）【成立】永正七・八年より同九年七月四日に至り完成。【諸本】寫本は帝國圖書館を初め、公私の圖書館にも數多藏せられてゐるが、本によつて繁簡の差があり、文章の相違が甚だしい。日本古典全集所收。なほ「體源基要」と題する二册本があり、第一卷は、體源抄第一册より第七册まで、第二卷は第八册より二十册までの抜書で、煩雜なる原書を要領よく小さく纏め、研究に便利なる所だけを都合よく抜萃してゐる。【解説】第九卷の終りに永正八年六月、第十二卷の上の末の奥書には、永正第九曆二月二十一日と見え、最後の第十三卷には、永正九年六月に撰し終つた旨、跋文の終りに記し、目錄の終りには、永正九年七月四日の日附がある。初めに序文があり、應仁の亂の事を述べ、道のため世に書き殘し置くよしを述べてある。著者はいたく年老いた由が見える。第一卷は笙の事や樂律、調子に關する事四十二ケ條を述べた。第二之本は、雙調・黃鐘調・太食調・平調・盤涉調の事などがあり、「鴨長明無名抄」の事で終つてゐる。中に神樂・催馬樂の事も見える十三ケ條より成る。第二之末は、盤涉調の續など六ケ條、第三之上は壹越調など八ケ條、第三之下は壹越調の續以下五ケ條、第四卷は笙事・方鞨鼓事など二ケ條、第五は笛・篳篥・尺八等の管絃器に關し十ケ條に亙つて述べ、「糸竹要抄」「體中抄」等を引いてゐる。第六卷は打物で、鞨鼓・揩鼓以下雞婁・腰鼓に至る十四ケ條、第七は太鼓・鉦鼓等四ケ條、第八の本は、琵琶・箏・和琴・琴等、絃樂器に關する條項六ケ條、第八の末は、篳事・日本に渡らざる樂器の事等二ケ條、以上の樂器に關する卷は、大略「續教訓抄」に所載の由を奥に記してゐる。且つ漢籍を引くことが甚だ多い。第九卷は舞の事など四ケ條、第十の上は唱歌・神樂の事等七ケ條、第十の中は、神樂・催馬樂の事等三ケ條、この兩卷には、「梁塵愚案抄」（別項）を文明元年の釋有璠奥書本によつて全部收めてゐる。第十の下は、風俗事・今樣事・伽陀事等以下、玄義序事（「法華玄義」の抜書）まで十七ケ條、第十一の本は、代々中殿作文御遊伶人歌樂等事以下、樂道古今物語に至るまで八ケ條で、年表風に記した所もあり、終りには逸話を多く掲げてゐる。第十一の末は、「愚聞記」の抜書以下天竺皇代々記事まで十ケ條で、舞曲の事多く、後半には支那の音樂名手の事が多い。第十二の上の本は、萬秋樂事以下、七調子渡韓神及び六調子姿事まで、第十二の上の末は、蘇合香説日記口傳事以下、序口傳事まで、本末兩册通じて四十二ケ條と云ふが、實は五十ケ條ばかりも記してゐる。舞樂の名をあげて説明した所は、前の補遺となつてゐるが、「辨内侍日記」「三體詩」「萬葉集」の神島の長歌等、音樂に關係なき諸書より歌文の抜萃がある。第十二の下は、唐人名事（支那音樂の名手）以下、笛の十二調子の事や歌物語事など二十一ケ條で、中に樂之略頌と云ふものも入つてゐる。第十三卷は系圖の卷で、豐原氏・狛氏・多氏等の樂家の系圖があり、又代々公私荒序所作事がある。目次には、「此一卷者景範筆也、相承血脈系圖」と記してゐる。以上の十三卷二十一册の外に目錄一册、合計二十二册となる。題は著者の姓の豐原によつて名付けたのである。なほ本書は、内容が雜然として居り、老筆で讀み難いためか、諸本によつて誤脫の甚しきものがあり、字句も大に異なる所があつて、諸本の校訂を頗る必要とする。【價値】本書は「續教訓抄」を祖述したものであるらしいが、老後の著者がその經驗蘊蓄を傾けて、音樂の手法祕傳を書き記したものであるから、音樂書としては、「教訓抄」「續教訓抄」（各別項）と並んで、三部書とも稱すべきものである。前兩書に見えない祕法逸話記事等が多く見える。又「源氏物語」よりの抜書が各卷に亙つてあり、その他「辨内侍日記」の抜書等著者の文學に趣味深い事が現はれてゐる。「續教訓抄」その他の樂書は更にも云はず、「通典」「五經通義」「漢書」「新唐書」「本朝書籍目錄」等、和漢の典籍の引用の多い事も特色の一であるが、就中、日蓮大菩薩御抄とか、同秋元抄御書事などと記して、日蓮上人の文章を頻繁に抄出し、又抜萃引用した所が少くなく、日蓮讃仰の言葉も多く見え、奥書に題目を記してゐる等、著者が熱心なる日蓮信者なる事を遺憾なく現はしてゐる。十三卷の中、第十卷だけは歌謠を主とせる卷として、この方面の研究に特に參考となる記事が多い。〔藤田〕

太鼓（たいこ）　樂器【解説】太い胴の兩面（時として片面）に革を張り、これを撥又は他の物を以て打つて鳴らす所の打樂器。又時としてこれと類似の音を出す所の革屬樂器をも太鼓と呼ぶことがある。例へば田々太鼓（でんでんたいこ）・團扇太鼓（うちはたいこ）等の如きである。【種類】太鼓は古くから世界各國民の間に廣く用ひられたものであるから、その種類は極めて多い。今日我が國に於て用ひられてゐるものでも、その用途に隨つて頗る種類が多い。即ち雅樂に用ひるものは總稱して樂太鼓といひ、これに大太鼓（だいだいこ）（火焔太鼓ともいふ）・釣太鼓（つりだいこ）・荷太鼓（にないだいこ）の三種があり、能樂及び長唄囃子にて用ひる締太鼓（しめだいこ）、田樂及び散樂にて用ひる太鼓・鈴太鼓（すずだいこ）、昔、軍陣にて用ひた陣太鼓、民間にて廣く用ひられる大太鼓（おおだいこ）、明治以後軍樂及び洋樂にて用ひられる大太鼓及び小太鼓等がその主要なものである。【構造】〔大太鼓（だいだいこ）〕（第一圖）木製の筒、長さ五尺、徑四尺二寸、少しく中央膨らみ、筒の左右に厚さ四寸、長さ二尺、廣さ七寸の耳がある。この筒には布を張つて漆を施し彩色をなす。この筒の兩面に、革面徑六尺三寸のものを當て、調穴各面十六個づつあり、赤・白・黑布を合はせて繩となした調緒を用ひて、革面を筒に緊め付けてある。この太鼓を高さ三尺、横三尺の臺上に安置し、太鼓の周圍には厚さ四寸の、彩雲に龍或は鳳凰を附けた寶珠形の飾板を以て鼓を取纏（まき）、その外邊は悉く朱彩の火焔狀になつてゐる。これに依つて、この太鼓を一に火焔太鼓といふ。その火焔の中央頂點より、長さ七尺八寸の柄を立て、その頂上に日形又は月形が附いてゐる。その直徑一尺二寸、その周圍の御光の長さ一尺六七寸許。この太鼓は、八尺四方、高さ三尺の平臺上に載せられてある。この平臺の周圍には朱塗の高欄、高さ一尺二寸許のものを以て取纏いてあり、正面には横二尺七寸、長さ四尺の階段が附いて居り、段は二段あつて、臺及び階段は凡て黑漆塗である。奏者はこの階段に昇り、臺に片足を掛けて鼓を打つ。桴は長さ一尺三寸、上頭三寸五分の圓球狀をなしてゐる。こ

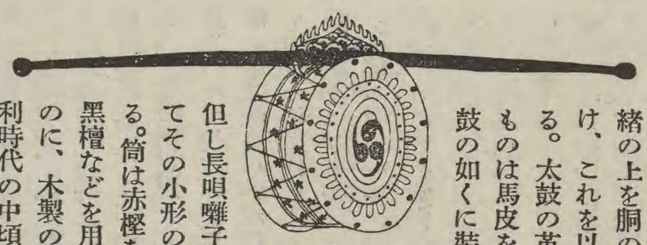
の大太鼓は左右二個を用ひるを定式とする。左方のものは鼓面に巴三を畫き、筒は赤色、彩雲の中に雌雄の龍を描き、柄の上端には金色の日形を附ける。右方のものは鼓面に巴二を畫き、筒は青色、彩雲の中に鳳凰を描き、柄の上端には銀色の月形を附ける。大太鼓は昔野外に於ける御遊に用ひられたが、今は御即位禮の大饗宴の時の外は、餘り多く用ひられない。〔釣太鼓〕雅樂の演奏に最も普通に用ひられるもので、その形は第二圖の如く、筒長七寸、直徑一尺八寸位の扁平なる胴の兩面に革を張つて、これを釘で筒に固着した所の鼓を、直徑二尺七寸、廣さ一寸七分、厚さ一寸五分の木製の輪枠の内部に、三箇所の環に依つて吊り下げ、この輪枠は四趾を備へた一本の脚の上に安置してある。脚の高さ一尺八寸位。輪枠の頂上には雲形を描いた寶珠頂形の板(木製、時として金屬製)が立ててある。この板の周邊には火焔を附けることもある。なほ雲形の面には、左樂に用ひるものには龍を、右樂に用ひるものには鳳凰を描くを普通とする。民間に行はれてゐるものには、雲形及び龍・鳳凰の無いものが多い。枠及び臺脚は、凡て黑漆を塗り、その角邊に朱線を施す。革面には三匹の唐獅子を描き、その中央に巴を畫く(左方のものは巴三、右方のものは巴二)。桴はその形大太鼓のものに似てゐるが、長さ八寸五分、頭徑二寸位ある。この釣太鼓は坐して奏する。〔荷太鼓〕(第三圖)その形猿樂の太鼓に似て、革面の直徑二尺七寸、金地に黑彩を施してある。筒の長さ一尺三寸、徑一尺八寸、朱地に彩色を施し、普通牡丹唐草を描いてある。革面の周邊に調穴各々十個づつあり、これに調緒を通して緊めてある。この鼓を長さ八尺(横三寸、厚さ三寸四五分)の金物棒の中央に曲釘を以て吊り下げてある。この棒の中央即ち鼓の上部には、高さ一尺二三寸、横一尺七八寸の寶珠頭形の板があつて、これに雲形を描き、その周圍に朱の火焔を附け、雲形の中間に寶珠三個、或は龍・鳳凰形を彫つてある(左樂に用ひるものは龍を彫り、革面の中央に三つ巴を畫く。右樂に用ひるものは鳳凰を彫り、革面の中央に二つ巴を畫くこと前記の樂太鼓に同じ)。棒は黑漆を施し、その兩端の肩に當る所は圓くしてあること、太鼓の桴の頭に似てゐる。桴は長さ一尺、上頭は徑二寸五分、長さ三寸許の圓形になつてゐる。但し釣太鼓の桴頭は革で包んであるが、荷太鼓の桴頭は包んでない。この荷太鼓は主として道樂に際し、



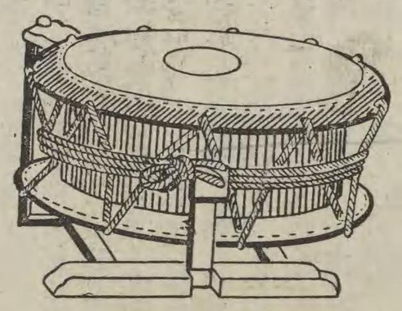
第一圖

第二圖

歩行しながら用ひるのである。棒の兩端を二人で擔ひ、奏者は別に鼓側にあつてこれを打つ。〔締太鼓〕(俗に〆太鼓と書く)荷太鼓の棒及び上部の飾の無いものに似てゐて(第四圖)、胴の寸法は一定してゐないが、通常は筒の長さ四寸五分位、直徑八寸五分位、革面の直徑一尺一寸二分を定制としてゐる。革面の周圍には調穴各々八個づつあり、これを赤色の組紐を以て作つた調緒をもつて緊め附け、その調緒の上を胴の中腹に沿うて胴繩を掛け、これを以て調緒を又緊索してゐる。太鼓の革は牛皮を用ひ、粗惡なものは馬皮を用ひる。革面には樂太鼓の如くに裝飾模樣はなく、その中央に小さな圓形の撥革を張るだけである。撥は檜の圓棒で、長さ一尺一寸位、直徑九分許。但し長唄囃子の時には、小撥と唱へてその小形のものを用ひることがある。筒は赤樫を最上とし、黑柿・紫檀・黑檀などを用ひる。太鼓を安置するのに、木製の枠形の臺を用ひる。足利時代の中頃迄は臺が無くて、狂言方が手でこれを持つてゐたので、「太鼓持ち」と呼んでゐたが、能樂太鼓の家なる觀世の四世國忠が、挾臺といふものを發明し、後に又同家の六世金春又右衞門が、これを改良して今日用ひるところの枠臺を案出した。故にこれを一に又右衞門臺と呼ぶ。この締太鼓は主として能樂囃子及び長唄囃子に於て用ひられる外に、劇場及び市井に於ても亦屢々用ひられる。〔大太鼓〕大小種々あつて、その形は筒の長さはその直徑よりも大きく、中央は膨らんでビール樽の如く、革は筒の端面に當てその周邊を筒に釘着けにしてある。劇場で用ひられるものは、通常胴の長さ三尺五寸位、革面直徑三尺位、これを木の臺上に置き、桴を以て打つ。桴はその用法に依つて長短大小各種ある。大太鼓には通常彩色又は圖畫を以て裝飾することはない。劇場囃子その他民間の祭禮、諸種の囃子に於て用ひられる。〔陣太鼓〕雅樂の釣太鼓の胴に似た扁平な筒の兩面に、革を直接に張つたもので、革面には多く劔菱巴などを黑色で描いてあり、これを左手で持つて吊り下げ、右手に撥を持つて打つて鳴らす。軍陣中に於て用ひられたものである。時として棒の中央に紐にて吊り下げ、棒を二人で擔ひ、歩きながらこれを打つこともある。〔鈴太鼓〕小形の扁平なる太鼓(革は片面だけに張つてゐる)の胴の周邊に數個の鈴を附けたものであつて、西洋のタンブリンに似、片手で太鼓を振り動かし、鈴を鳴らしつつ、他手で革面を打つて鳴らすのである。田樂又は散樂に於て用ひられる。



第三圖



第四圖

【沿革】雅樂の太鼓は、特にその傳統の系圖を明かにしないが、平安朝の初めに至り、尾張濱主は打物の祖と尊崇せられるところを以て見れば、その頃から、太鼓及び鼓類の用法は確定して傳へられるに至つたらしい。併し樂

右樂に用ひるものには鳳凰を描くを普通とする。民間に行はれてゐるものには、雲形及び龍・鳳凰の無いものが多い。枠及び臺脚は、凡て黑漆を塗り、その角邊に朱線を施す。革面には三匹の唐獅子を描き、その中央に巴を畫く(左方のものは巴三、右方のものは巴二)。桴はその形大太鼓のものに似てゐるが、長さ八寸五分、頭徑二寸位ある。この釣太鼓は坐して奏する。〔荷太鼓〕(第三圖)その形猿樂の

第二圖

ゐる。桴は長さ一尺、上頭は徑二寸五分、長さ三寸許の圓形になつてゐる。但し釣太鼓の桴頭は革で包んであるが、荷太鼓の桴頭は包んでない。この荷太鼓は主として道樂に際し、

家は前後の猿樂師と共に打物を傳へて、今日に及んでゐる。田樂の太鼓は、古くから田樂の家に傳へられて來たものと思はれる(田樂參照)。猿樂の太鼓も、古くから散樂の家に傳へられたものであるが、殊に秦河勝からその系を引くところの秦氏(後に金春氏)は、その中心をなして來たものと思はれる。足利の初め、

〔觀世家〕

秦始皇帝之後裔　秦河勝……(三十九代)太鼓初祖　竹田三郎(觀阿カ)——

養子 觀世與四郎吉國(觀世元重音阿彌の四男)明應二年六月五日歿 — 吉久(吉國長男)永正十五年九月十五日歿

國忠(吉久長男)天文九年七月廿六日歿 — 國廣(似我與左衞門)(國忠長男)慶長七年九月廿九日歿

女壻 重家(金春又右衞門)(金春喜家の子)寛永丑年八月七日歿 — 重次(觀世左吉)(金春重家長男)萬治元年九月四日歿

重照(重次長男)寛文十一年六月十二日歿 — 重治(左吉)(重照長男)元祿八年十一月二日歿

養子 克德(左吉)(結崎玄入の子)享保十九年八月八日歿 — 永常(左吉)(克德二男)寛政六年六月廿八日歿

養子 重道(左吉)(醫師松波大潤二男)文政十三年六月十七日歿 — 養子 元恭(與左衞門)(觀世豐綿次男)天保十二年三月廿八日歿

元常(左吉)(元恭二男)明治七年八月廿六日歿 — 元規

〔金春流〕太鼓初祖 金春三郎(觀阿又貫阿)(前記の竹田三郎と同人か)——

彌次郎善德(竹田觀阿彌の甥) — 彌次郎善珍(善德の子)

彦九郎權頭(善珍の子) — 養子 彦三郎長詰(觀世豐次二男)

物右衞門一峯(長詰實子)寛永廿一年正月八日歿 — 物右衞門氏慶(一峯の子)寛永五年二月八日歿

物右衞門國重(氏慶の子)天和三年十月五日歿 — 彦九郎朝重(國重の子)貞享二年六月廿三日歿

猿樂ふら能樂に進むに至り、太鼓の家として觀世家及び金春家の兩系があつた。それに就いては、「猿樂傳記」に詳記してある。また戰國時代に至つて樋口家といふのがあつたが、今は傳はらない。なほ今日、能樂太鼓の家たる觀世家及び金春家に、太鼓家系の家譜がある。

養子 物右衞門國倚(觀重の弟)享保十三年十一月十五日歿 — 門弟榮雲(本名中西源四郎)歿年不詳

物右衞門方慶(榮雲弟、本名中西新次郎)正德二年四月二日歿 — 養子 物右衞門國映延享二年六月廿九日歿

物右衞門國憲安永四年四月廿六日歿 — 養子 物右衞門國惟(植田安右衞門の子)文化四年三月三十日歿

物右衞門國義(國惟實子)天保十年十月廿七日歿 — 物次郎國秀(國義實子)弘化三年三月十八日歿

泰三(國秀の兄)明治三十六年歿 — (門弟增見仙太郎預)

方が手でこれを持つてゐたので、「太鼓持ち」と呼んでゐたが、能樂太鼓の家なる觀世の四世國忠が、挾臺といふものを發明し、後に又同家の六世金春又右衞門が、これを改良して今日用ひるところの枠臺を案出した。故にこれを一に又右衞門臺と呼ぶ。この締太鼓は主として能樂囃子及び長唄囃子に於て用ひられる外に、劇場及び市井に於ても亦屢々用ひられる。〔大太鼓〕大小種々あつて、その形は

長唄囃子に於ける太鼓は、鼓と共に長唄囃子の家系をなし、六鄕(六合)・田中・望月・福原・柏等の家がある(鼓參照)。

【參考】教訓抄卷九○體源抄○猿樂傳記○鐘鼓類集 岡昌名(樂道類集所收)○樂家錄卷十八・二十四—二十六安倍季尙○能樂大辭典○日本音樂講話田邊尙雄○日本音樂概論伊庭孝○長唄稽古手引草 町田博三 〔田邊〕

大黑舞(だいこくまひ) 門附の一種【解說】年頭に大黑天の姿を摸し、面と頭巾を着け、寶の槌を持つて、祝賀の歌を謠ひ且つ舞つて、米錢を乞うた者、又はその歌。近世になつて二人連れ立つ時には、一人が三味線をひいた。

【沿革】發生した土地も、時代も明かでない。「嬉遊笑覽」には、正月禁中で行はれる左義長(とんと)から起つたとあるが、それは鬼の出る舞や囃子で、歌詞がなく、大黑と稱する役人は出ても殆どこれと共通點がない。この說恐らくは非。行はれたのは「陰涼軒日錄」の文正元年の條に「彼知客平日好ニ大黑舞ヲ一」とあり、延德二年の條にも「土倉庵主來作ニ大黑舞ヲ一」とあれば、室町時代の初世頃からであらう。江戸時代に入つては、京都あたりは悲田寺四ケ所垣外(かいと)が專らこれを行つた。又これを學んで出た者もあつて、井原西鶴の「世間胸算用」卷一、「長刀はむかしの鞘」の條に、「隣に舞まひ住みけるが、元日よりは大黑舞に商賣を替へければ、五文の面、張貫の槌一つにて正月中は口過すれば」とある。また江島其磧の「賢女心化粧」に、京都の河東專借屋を敍して「夫は粟島大明神のお影で過れば、女はお福の面をかけて大黑舞に出て、女夫ゆるりと暮せば」とある。大阪あたりでは文政の頃にはもう廢つたといふ。江戸のことは「嬉遊笑覽」に、「たまたま夷大黑をまねして來る乞丐あれども、定りたる時はなし。定りてあるは吉原町へ正月六日より大よそ二月初迄も大黑舞とて、非人來て種々の物眞似をなす。大黑舞はかた計にて、多くは芝居狂言の眞似をなす。これも

大黑舞

近世始りたる事なり」とある。古くは聲聞師の千秋萬歳（別項）と連れ立つた事もあつて、「山科言繼卿記」の永祿十三年正月四日の條に、彼等が議定所のお庭で種々の舞を演じたとある。現今正月來る萬歳の才藏が大黒頭巾を被るのは、兩者の風を合したのでもあらうか。「歌舞妓事始」卷二、舞臺年中行事の條に、大阪芝居の事をいひて、「又正月に至て、大黒舞といふものを兩人出てまふ。本是は美濃國より出る。民家にて春のことぶきに是を謠ふ」とあるが、委しいことは知られない。

【歌詞】室町時代末期の作と思はれる「梅津長者物語」に見えてゐる。

大黒打笑ひ、かゝるめでたき御座敷に、何かいなび申さん。はやし給へや舞はんとて、ゆさゆさと立ちあがり、それがしが能には、一に俵を足に踏み、二ににこと打笑ひ、三に酒を造らせ、四つ世の中守りて、五ついつものきげんにて、六つ無病息災に、七つ何事なくして、八つ屋敷をひろめて、九つこくらを建てならべ、十でちうと納れりと舞ひ納め、本の座敷に直り給ふ。

「大悅物語」にもほぼ同樣に見えてゐる。延寶四年八月輯の「淋敷座之慰」に昔の大黒舞の歌と題して掲げたものは、「御座つた〳〵福の神を先に立て大黒殿の御座つた。大黒殿の能には一に……」と、これも大差なき歌の詞を掲げて、「大黒舞を見さいな〳〵」と結んである。後の大盡舞（別項）の歌はこれに摸したもの。又江戸時代風に作り替へたものは、同じくこの書に中古大黒舞と題して大名に寄せたものが載せてある。「嬉遊笑覽」には滑稽雜談によつて、年々嘉祝の詞を以て新作したといつてゐるが、遺存するものは少い。近松門左衞門作の「淀鯉出世滝徳」に、「浸つた〳〵光の君の渡つた。夢の浮橋六十帖を渡り詰め、十帖と詠じた。一に一夜のお情の夕顏の若ばえ、二に匂ひたきしめて浮舟に蜻蛉、紅梅竹川橋姫に手習、わが名ゆかしき東屋で、これ樣の忍寢」とあるのは、恐らく近松の新作で、門附に用ひられたものではあるまい。

【參考】嬉遊笑覽 喜多村信節 ○日本歌謠史 高野辰之 〔高野〕

醍醐隨筆（だいごずひつ）

中山三柳【刊行】寛文十年【解説】著者が京師から退隱して山城國醍醐に村居し、優遊自適した頃の漫筆で、醍醐日野附近の故蹟名區や故舊等に贈酬した詩歌を錄し、交へるに若干の史談、儒佛學上の感想談、又は鄕國土佐及び近江・河内邊に傳はつた土話・怪異談等を以てした。朝倉の家臣松木内匠の遺子復讐、熊と猪と、又猿と鷲との爭鬪、松永久秀果心居士の幻術を見る、心氣凝結して火に燒けずの諸記事の如き奇聞もある。又醍醐に近い小栗栖の記事中に、明智光秀を刺した者の名を百姓作右衞門としてあるのは、異說とも見られる。上卷は寛文八年戊申正月醍醐卜居の事以下、下卷は寛文九年己酉歳旦の詩以下、各三十條ばかりを收む。寛文十年の著者自序があり、この年刊行の趣が卷尾に見える。詩歌も文章も凡ならぬところがある。

【著者小傳】中山三柳は土佐の人、京都に出て醫を業とし、法眼に敍せられ、禁中にも出入した。蓋し當時の名手であつたらう。學問は和漢を兼ね、老・莊・儒・佛に通じた。貞享元年歿、享年七十一。〔和田〕

太鼓音智勇三略（たいこのおとちゆうのさんりやく）

御本（阿彌）四幕　時代物　【作者】二代河竹新七（默阿彌）【通稱】酒井の太鼓【別名題】世響太鼓（せけいたいこ）【初演】明治六年三月、東京村山座。

〔役割〕鳥井四郎左衞門・億川善三郎・酒井左衞門尉忠繼（河原崎權之助）、鳴瀬東藏正員（尾上菊五郎）、鳥井の妻松江・忠繼の姉伏屋（市川門之助）、鳥井の若黨逸平・馬場美濃守信房（關三十郎）、櫻井庄司・駒井右京・億川氏家公（坂東家橘）等。

【諸本】默阿彌全集第十卷所收。【題材】野史による。

【梗概】〔序幕〕濱松家中の鳴瀬東藏の妻小笹は、甲州と遠州との和睦破れた爲め、夫の武運を祈りに下女お民、若黨三平を伴つて神詣での途中、甲州武士の亂暴組に出會つて難題を持掛けられるが、亂暴組は戰端を開かうとする下心の者故手出しするなといふ主人の堅い戒めで、三平は相手の無禮を我慢して只管に詫び入る。そこへ豫て鳴瀬と確執の鳥井四郎左衞門の若黨逸平が現はれて甲州武士を追拂ひ、鳴瀬を臆病者と罵つて三平の眉間を割るが、三平は小笹とお民に留められて無念を忍んで歸る。〔二幕〕東藏は四郎左衞門に果し狀を送り、二人が勝負を決しようと立廻つてゐる處へ火急の注進が來て、俄かに甲州の大軍が攻め寄せた趣を傳へるので、二人は君恩のために命を棄てるが武士の本分と悟り、小笹は自害して夫の門出を勵ます。死を諸共と約した東藏・四郎左衞門の二人は、三方ケ原の合戰で深手を負ひながらも互に尋ね合つて行き會ひ、笑つて武士の本懷を遂げる。〔三幕〕億川善三郎は甲州黑澤の獄屋に囚はれてゐるので、鳥居彥右衞門の妹梅ケ枝は爛酒賣りに姿を變へて、牢番の侍達に痺れ藥を入れた酒を飲ませて善三郎を救ひ出す。善三郎は途中探索の手を脫れ、危い處を助かつて逃げ延びる。〔四幕〕億川氏康は三方ケ原で甲州勢に取圍まれ、既に危い處を辛くも脫出して、濱松天現寺まで引揚げて來る。武田の勇士山形三郎兵衞は唯一騎それを追つて來るが、鳥居彥右衞門に遮られて氏康を討ち洩らす。歸城した氏康は勝鬨揚げて城外に押寄せた敵の大軍を餘所に悠々と茶漬を喰ひ、大手の橋を切落し城門を閉してはといふ彥右衞門の進言を斥けて、橋もその儘に城門も開き、夜に入つたらば敵勢からよく見えるやうに篝を焚けと命ずる。一途に主君のためを思ふ彥右衞門が、君命に背いても防禦の用意を整へようとする時、酒井左衞門尉忠繼が生醉の有樣で現はれてそれを留め、氏康と左衞門尉とは味方の勇氣を落さないやう面には現はさないが、互に心では今生の別れかと思ひながら、主從三世の盃を交はし、わざと酩酊を裝つて眠る。姉伏屋の意見も聞かず高鼾の左衞門尉に、果して思ふ所存あるかどうかと、彥右衞門は槍を突掛けるが、左衞門尉に隙がないばかりか却つて打込まれる。生醉の左衞門尉は櫓へ上つて敵の大軍を見渡し、やがて肝に徹するやうに、暮六つの時の太鼓を打ち出す。武田の軍勢では城門の開いてゐるのに計略ありと疑つてゐた折柄、打ち出す太鼓の響に勇氣が充ち滿ちてゐるのに感じ、敵し難しと悟つて引揚げる。九死に一生を得た城中の一同は、左衞門尉の殊勳を賞し、氏康の智仁勇兼備を讃へる。

【脚色】作中濱松城内太鼓櫓の一場は、後に新歌舞伎十八番の中に加へられた程で、九代團十郎（その當時は權之助）の當り藝となり、大好評であつた。團十郎は不和であつた菊五郎と一座し、鳴瀬東藏・鳥井四郎左衞門に扮して、舞臺上に於て和解の實を示して當て込み、特に「開化を知らぬは愚でござつた」と双方刀槍を收める件は、その頃頻りに唱へられた文明

は一に……」と、これも大差なき歌の詞を掲げて、「大黒舞を見さいな〳〵」と結んである。後の大盡舞（別項）の歌はこれに摸したもの。又江戸時代風に作り替へたものは、同じくこの書に中古大黒舞と題して大名に寄せたものが載せてある。「嬉遊笑覽」には滑稽雜談によつて、年々嘉祝の詞を以て新作したといつてゐるが、遺存するものは少い。近松門左衛門作の「淀鯉出世滝登」に、「淺つた〳〵光の君の淺つた。夢の浮橋六十帖を淺り詰め、十帖と詠文章も凡ならぬところがある。

【著者小傳】中山三柳は土佐の人、京都に出て醫を業とし、法眼に敍せられ、禁中にも出入した。蓋し當時の名手であつたらう。學問は和漢を兼ね、老・莊・儒・佛に通じた。貞享元年歿、享年七十一。

〔和田〕

太鼓音智勇三略（たいこのおとちゆうのさんりやく）　脚本　四幕　時代物　【作者】二代河竹新七（鶴屋南北）【通稱】酒井の太鼓【別名題】世響太鼓（よびたいこ）【初演】明治六年三月、東京村山座。

九死に一生を得た城中の一同は、左衞門尉の殊勳を賞し、氏康の智仁勇兼備を讃へる。

【脚色】作中濱松城內太鼓櫓の一場は、後に新歌舞伎十八番の中に加へられた程で、九代團十郎（その當時は權之助）の當り藝となり、大好評であつた。團十郎は不和であつた菊五郎と一座し、鳴瀨東藏・鳥井四郎左衞門に扮して、舞臺上に於て和解の實を示して當て込み、特に「開化を知らぬは愚でござつた」と双方刀槍を收める件は、その頃頻りに唱へられた文明開化等の新熱語を諷刺した點に於て時代味を帶した。九代市川團十郎の當り狂言として、又作者に取つては比較的初期に屬する成功せる時代狂言として注目すべきもの。活歴物（別項）乃至史劇の先驅として算ふべきものでもある。

【參考】市川團十郎○河竹默阿彌○續々歌舞伎年代記　〔河竹〕

臺山隨筆（たいざんずるひつ）　隨筆　二卷　【著者】廣瀨淸風　【刊行】未詳　【解說】上卷を「雅俗辨」、下卷を「文武辨」と內題し、雅俗文武といふ詞について、世人が實義を誤り居ることを辨じたもの。「雅俗辨」の初めに、「まづ其詩人の雅とせる者を見るに、異なる態を好み、奇怪放逸の行狀を爲し、世に用ひらるゝ事をうるさく思ふ振になし、喫茶・飲酒を縱にし、世事にうときを高しと稱し、日夜哦吟に耽る類を雅也とし、これに反するものを俗とする也」といひ、「文武辨」の初めに、「文道といへば、只書をよみ、詩歌・文章を作りなどする公家・儒者・長袖の業とのみ思ひ、武道といへば、弓馬・鎗・太刀の術に達し、御馬先にて潔く一命を捨べく、平生も怯をとらず、恥に臨で死を厭ず、都てむさくきたなびれずして、俠客の如き氣あるを武道と心得れども、是まつたく文武の本源を明らめざるなり」と書き出してゐる。著者は嘗て本書を藩主津山侯に獻じて採納を蒙つたといふ。無年紀松崎明復（慊堂）の序がある。

【著者小傳】廣瀨淸風、字は穆甫、通稱雲太夫、號は臺山。津山藩松平氏の世臣で、留守居役に累進した。詩文を能くした上に書技を中林竹洞・福原五岳に受け、書道を細合半齋に學び、なほ篆刻・音樂に通じ、殊に畫筆には出藍の稱あつた。文化十年歿。行年六十一。　〔和田〕

泰山府君（たいざんふくん）**大師めぐり**（たいしめぐり）　「鬼神物の謠曲」を見よ。

【作者】十返舍一九　【名稱】滑稽本　上編三冊　滑利（ちやり）識言　と角書がある。滑利は滑稽の意で、そこに敎訓を寓してゐることを示したのである。【成立】文化八年　【諸本】滑稽名作集（帝國文庫）所收。

【梗概】平野町の靈場では、福德屋德助が貧乏になるやうに祈願するのを、貧久が羨しい思ひで福德屋と話してゐる。大融寺の境內には嫁の噂をする老婆連がある。寶珠院の廣前には乞食が身の上話をしてゐる。番場の原には利いた風の男連れが色男ぶつて醉つてゐる。玉造には似而非俠客が高慢の鼻を高くしてゐる。天王寺への途中には、女好きの男に、兎角今の世の女は金でなくてはと戒める友がある。五重の塔から生玉への道の茶屋には、上戸と下戸とが、酒の善德惡德を言ひ合つてゐる。大師堂では、僅かの賽錢で慾張つた願をし、道心坊から嗜められてゐる男がある。一九はこれ等を目擊して宿に戻る。

【構想】剽竊摸倣は當時の作家達には、大した問題ではなかつた。又同一の意匠が自己の作品の中に再現三現しても平氣で居れるのである。例へば、卷頭の福德屋德助が金を減らさうと苦心をすればする程、意外に殖えて行く說話の如きは、唐來三和の黃表紙「莫切自根金生木（きるなかからふたのよつき）」（別項）と同趣向である。或は嫁の惡口をいふ姑連や、金さへあれば先方から惚れて來る話の如きは、「六あみだ詣」（別項）の中にも見えてゐる。

〔小柴〕

大社敎（たいしやけう）　「神道各派」を見よ。

大衆文學（たいしゆうぶんがく）　【名義】狹義にいふ時は、謂はゆる髓物・劍戟物等、舊幕以前に取材せる通俗作品を指し、廣義に云ふ時は探偵小說・俠賊小說・家庭小說・戀愛小說・ユーモア小說なども包含せられて、純文學的作品と對立する。この名稱は關東大震災の直後、先づ博文館の諸雜誌の新聞廣告に見え、後に「大衆文藝」なる雜誌が創刊せられて、一層文藝語としての地位が明確になつた。中には大衆の語を、一山の大衆などと云ふ僧侶を意味する語だとか、又は無產大衆などの如く階級運動を意味する語だとか云つて、名稱の上に難詰も出たが、いつとは知らず流通するやうになつた。【解說】狹義の場合の大衆文學は講談（別項）より出でたといつて差支ない。元來講談は市上の實說が俗間に傳はるうちに、種々の人間が創作的尾鰭を附加して出來上つたものだから、最も完全なる共同製作で、その故にこそ又流布の範圍が廣い。隨つてこれが改良を思ひ立つた者は古くから少くなかつた。純講談の立場からは細川風谷・村山鳥徑・伊藤痴遊等があつた。文學者の間には、坪內逍遙・尾崎紅葉、その他硯友社の一派があつた。逍遙の「ソクラテス」や、紅葉の「湯女の魂」「燒繼茶碗」などはその作例である。又、社會主義者もこれには早くから目をそゝぎ、片山潛の「勞働世界」、平民社關係の諸刊行物に數々これが見える。白柳秀湖はこの中から巢立つた。中里介山ももとは平民社の運動に參加した一員であつた。併しその機運が一時に向いて來たのは大正五六年の頃からと言つてよく、「講談雜誌」「ポケット」「寸鐵」「講談倶樂部」などが最もその創成に力を致してゐる。初めは書き講談、又は新講談と呼ばれた事もあつた。本田美禪・前田曙山等は、この新講談時代の擡頭者である。輓近は大佛次郎や直木三十五により文藝への復歸が試みられ、一時はプロレタリヤ文學陣營でも大衆文學論が盛んに討議せられた。現在大衆文學の作家として活躍してゐる人に大佛・直木の外佐々木味津三・吉川英治・田中貢太郎・白井喬二・國枝史郎・下村悅夫・長谷川伸等がある。

〔木村〕

對照（たいせう）　藝術論〔英〕Contrast【解說】時間的に又空間的に意識される二つの內容が性質的に又は量的に相異する時の局限的對立を對照と云ふが、美的現象に於て美的對象の二つの相反する意識要素が全く相反する事によつて、反つて對象の形式的統一を意識上成立せしめる場合に、對照は美的形式の統一原理として理解される。例へば赤と綠靑とは全く對比的反撥的であるが、その性質上の對比が全體として高次の美を感ぜしめる。〔村田〕

對照（たいせう）　修辭學【解說】相反した事物を並べ揭げて、一方を特に目立たしめ、或は兩々相映發せしむる辭樣である。白を目立たしめようとすれば黑を點じ、善人を引立てるため惡人を配する如きもの。「提燈に釣鐘」「釋迦に提婆」「滔々たる水は濫觴より起り、森々たる樹は毫末より生ず」など皆それである。對照には、一語・一句の間に用ひられるものがあり、全篇の結構の上に用ひられるものがある。小說・戲曲に於て忠臣と奸臣とを配合し、悅樂に次ぐに悲慘を以てする如き皆それである。對照を大別して二となす。一は單に語句を對立せしめて文を飾るもの、二は思想を對立せしめるもので、これには文字上に對立の跡のないものもある。對照の上乘は寧ろこの方である。

〔語句對照の例〕彼の厄難を鎭め給ひし、御恩は三國の山より高く、又もろ人の喜びは千隈川より深

かるべし。（瀧澤馬琴「八犬傳」）

〔思想對照の例〕都をば霞と共に出でしかど秋風ぞ吹く白河の關（能因）

若草に雲雀あがりし野邊行けば薄穂に出でて百舌ぞ鳴くなる（熊谷直好）〔武島〕

大嘗會儀式具釋（だいじやうゑぎしきぐしやく）有職九卷【著者】荷田在滿【成立・由來】東山天皇卽位の際、二百年廢れた大嘗會を再興あつたが、次の中御門天皇の世には又行はれなかつた。それを次の櫻町天皇卽位の元文三年に又復興せられることになり、在滿、幕府の內命を被り、上京してこれを記錄する事となつたが、偶々實父の喪に遇つて親しくその儀を拜することは出來なかつたが、東馳西驅、朝廷有司に聞き質し、翌元文四年春、東歸してこれを記し、註を加へて幕府へ進獻したものである。【諸本】大正五年十一月、著者の後裔羽倉信一氏九卷一册として刊行。又日本國粹全書第十八輯にも收められてゐる。【解說】元文三年の大嘗會の式次第を漢文で記し、句每に國文の註を加へたもので、卷一、國郡卜定次第、卷二、荒見河祓次第、卷三、御禊次第、卷四、供忌火御飯次第、卷五、由奉幣次第、卷六、卯日次第、卷七、辰日悠紀主基節會次第、卷八、巳日悠紀主基節會次第、卷九、豐明節會次第が記されてある。近世大嘗會の式次第を詳密に記したもの外になく、永く後の世の參考資料となるべきものである。〔石村〕

對象感情（たいしやうかんじやう）〔獨〕Gegenstandsgefühl【名義】吾々に於て統覺される對象それ自身の性質に規定される感情。例へば快不快、深さや量の感じ等を云ふ。【解說】美的對象感情は、吾々の個人的な主觀的感情と對立して、寧ろ對象のものとして、卽ち內容として感ずる感情。例へば、劇の主人公等が有する感情生活は、見物人から云へば彼等の感情生活であるとして感ずる。卽ち對象（劇）の內容と感ずる。感情移入說では、對象的感情は自我の價値の感情の移入であるとする。卽ち對象化された自我感情である。しかしこの場合、對象に移入される自我感情、卽ち對象感情は、現實の感情であるか、或は表象化された感情であるかといふ論爭點が生ずる。リップス（並にグロース）は、現實の感情が移入される場合のみ（類感的感情移入の場合のみ）美的であるといひ、これに反してウィタゼク、又はランゲは、それは再生的感情に外ならないとする。フォルケルトは折衷的立場を取つて、美的對象感情を二つの型に分けた。卽ち

（一）移入される感情卽ち對象の感情として現はれるものが現實の感情である場合。例へば劇の如き場合には、現實的對象感は繪畫などよりは、より多く作用する。

（二）對象の內容として感ぜられる感情が表象化された感情卽ち再生的感情である場合。例へば繪畫などについて感ずる感情は、多く再生的複製的である。

なほ彼によれば、吾々の實生活上の凡ゆる種類の感情は、對象的美的感情として現はれるといひ、又神とか人間性とかといふ無限的な感じも對象的に感ぜられるといひ、極めて自由廣汎な領域を認めてゐる。（美的感情・感情移入說參照）〔村田〕

大嘗祭（だいじやうさい）神道【名稱】「おほにへのまつり」ともいふ。【名義】天皇御一代に一度新穀を以て天照大神その他天神地祇を祭られる神事で、古來最も重大な祭儀とせられてゐる。大は稱辭で、嘗は本來新嘗卽ち爾比能阿閇（あへ）の能阿が奈（な）に約まつたので、新稻（にひしね）を以て饗（あへ）するの義である。【解說】新嘗祭は右の如く、新稻を以て神にも奉り、人をも饗へ、自らも食する所の儀で、上代一般に行はれたのであるが、殊に朝廷にあつては、天照大御神が新嘗を遊ばして以來、最も重大な祭祀となつてゐる。尤も上代には大嘗と新嘗とに區別なく、新嘗祭を大嘗祭とも云つた。後、天武天皇の二年に大嘗祭を行はれ、五年及び六年に新嘗祭を行はれてゐるが、未だその區別は明かでない。「延喜式」には「凡踐祚大嘗祭爲ニ大祀一」とあつて、新嘗を中祀としてゐるのを見ると、當時は明確に區別の出來たものと思はれる。〔祭神〕「令義解」に「凡天皇卽レ位、總祭ニ天神地祇一」とある。蓋しすべて天神地祇を祭神としての祭儀である。〔祭時〕上代には、日時は一定しなかつたのであるが、「令義解」には「仲冬下卯大嘗祭」とある通り、十一月下の卯日に始まつて、辰巳午の四日間に亙る。〔兩齋國〕大嘗祭には、悠紀・主基の兩齋國を卜定し、齋田を定め、神饌の料とする。〔大嘗宮〕大嘗宮は、大嘗祭を行はせらるゝ齋場で、悠紀殿・主基殿に分れ、こゝに親祭を行はせらる。【參考】令義解○延喜式○大嘗會儀式具釋荷田在滿○大嘗會便蒙同上○古事記傳本居宣長○祝詞講義鈴木重胤○古事類苑○祝詞新講次田潤〔田中（義）〕

大正詩文（たいしやうしぶん）漢詩文雜誌【解說】雅文會（別項）發行で、最初は法學博士高橋作衛が主宰したが、その歿後は日下勺水が代つて主宰し、大正十五年その歿後は、名を昭和詩文と改めて今日に至つてゐる。〔佐久〕

退宿德（たいしよとく）雅樂舞曲【名義】未詳【異稱】退走禿・退走德・老鮮【解說】高麗樂。新樂、大曲。高麗壹越調曲に屬す。舞があり六人で舞ふ。舞人は常裝束、袍に帽子をかぶり、假面を用ひる。番舞は春鶯囀。起原未詳。後に退き走つて左右を見上げる手があるのでこの名があるといふ。近世この手は絕えて、多好茂の時には輪を作つて舞つたといふ。傳來未詳。〔田邊〕

大正文學（たいしやうぶんがく）【名義】大正時代の文學をいふ。【性質】かなり複雜な屈折のある大正文學の特質を一口に規定する事は容易でないが、その主なる部分であつた有產者文學一般の特質に就いて見れば、有產者文學の使命が個人の解放にあり、個人主義思想の確實な把握にあつた當然の結果として、それはまづ傳統的・封建的・國粹的等の思想觀念に對して反逆的であり、反對に自由主義的・個人主義的・非國粹主義的等々の思想觀念に對して忠實であつた。が、我が國の有產者階級がその發展の歷史の必然から、自らその革命的使命を放棄し、却つて封建的勢力と妥協し或は寧ろその庇護の下に成長しなければならなかつた爲め、上記の如き思想傾向も、とゝすれば純粹性と徹底味とのない一種歪められたものにされ勝ちであつたし、さうでない場合には、さうした思想傾向が社會性のない一種空想的な觀念的追求にのみ傾く傾向を帶び易かつた。それだけさうした思想傾向に依る批判が、外、社會に向つてむけられる代りに、只管個人內面の問題にばかり向けられるのを餘儀なくされた。當然大正文學は社會中心的でなく人間中心的であり、社會批判的でなく個性探求的であり、從つて心理解剖的であり、氣分尊重的であり、神經記錄的であり、唯心的であつた。さういふ性質が大正文學を全體として局面の狹

いものにし、その鋭い刷毛を多くの作家が殷から後からと探求して行く事が、それを巧緻綿密・深奥幽玄・纖細微妙な感觸に充ちたものにして行つた揚句、心境小說（別項）などの如き手にもとまらぬ氣分の陰翳や、心理の交錯だけを描いた作品の流行を齎らしたと同時に、屢々病的・頽廢的・非道德的な世界に沈酒したものにして行つた。資本主義文化の爛熟が齎らした時代の享樂主義的傾向と、更により强く時代文學一般の社會性を缺いた一種空想主義的な傾向が、この病的頽廢的な傾向を煽つたことも云ふまでもない。その歷史的使命として個人解放のための現實暴露から封建主義の打破、新しき價値觀や道德律の樹立へとの方向に進んだ有產者文學が、かうした病的頽廢の世界にまで踏み込まなければならなかつた程その道に踏み迷つた事は、やがて其處から出發當初の意氣込みと新しき道を求める第一義とを失はして、僅かに人間性の名の下に、妥協的な古くさい人情主義に逃避する無力さを現前させた。つまり有產者文學は、それ自身の第一義を追求し了せずして崩折れて了つたのだ。結局大正文學は、當然拂拭し去らるべき封建的勢力と思想形態とが、なほ相當鞏固な存續を有つてゐた變態社會を反映して、その大正文學それ自身としての本質に於ても形態に於ても純化し成長しきることが出來ずに了つた。

【沿革】大正十五年間は、その前後の一二年づつと合せて、明治末期の自然主義（別項）によつて確立させられた有產者文學が、只管成長と爛熟とへの展開を示した時代であつたとともに、その末葉に於てプロレタリア文學（別項）の擡頭が見られた時代であつた。これを大體三つの時期に分けて考へるのが妥當であらう。

〔前期〕大正初年よりも少し遡つた、明治四十三年前後頃から、大正六七年世界大戰の終り頃までの有產者文學上昇期、別の觀方ですれば、自然主義の行き詰りに對する反動の時期で、明治四十三年雜誌「三田文學」や「白樺」（各別項）などの創刊された頃から、漸く顯著になりはじめた新主觀主義の風潮が榮え、オイケン、ベルグソン、タゴール等の理想主義哲學を初めトルストイ、ドストエフスキイ、メーテルリンクなどの思想が持てはやされ、セザンヌやゴッホが極度に尊敬される一方、ポオ、ワイルド、ボオドレエル等の耽美的傾向が心醉された。文壇的には白樺派及びその系統の新理想主義・人道主義（別項）の文學と、主として「三田文學」及びそれ以前から存在した雜誌「ホトトギス」「帝國文學」「スバル」（各別項）等に據つた、三田派・赤門派兩系統の新浪漫主義（別項）の文學とが主なる勢力をなして居り、後者の系統のうちに、餘裕派・唯美派・享樂派・頽廢派など多くの分派が數へられた。一方以上の主勢力に對立するものとして、主として「早稻田文學」「文章世界」（各別項）等に據つた自然派及び自然派直系の作家達もあつたが餘り振はなかつたり、半ば主觀主義的傾向に轉換して了つたりしてゐたし、この期の終り近い大正五六年頃には、一部の學者・評論家等に依る傳統主義の提唱もあつたが、時代的必然性なく、大した理論的展開をも優れた作物をも示さなかつた。自然主義時代に續いて大體小說中心の時代であつたが、一方ぼつ〳〵と劇文學興隆の兆も見えてゐたし、詩壇にも官能派・情緒派・象徵派などの浪漫派と生命派・人道派などの理想派との對立があり、歌壇にも一部に短歌の滅亡を云ふものがあり、或はこれを「悲しき玩具」と考へるものがありながら、全體的には自然主義精神の漸次的な浸透がある一方、アララギ一派（別項）の實相觀入寫生尊重の萬葉主義と、新詩社（別項）及びその系統の夢幻的空想主義乃至官能的情緒主義などとの對立混淆が見られ、俳壇にも所謂新傾向（別項）句派の飛躍的な進出とホトトギス派の比較的舊格を尊重しようとする保守的傾向との著しい對立が見られた。少年文學の世界にも純情派の所謂少女小說と、キリスト教系の道義的理想主義的少年文學の二つの系統が對立してゐた。一色に新主觀主義的風潮に彩られたといふうちにも、あらゆる部面に自由主義的分化主義の時代思潮を反映した對立が見られ、その對立故の發展上昇があらゆる分野に著しく見られた時代であつたと云ふことが出來よう。

〔中期〕大正六七年頃から十年頃までの、所謂新現實主義（別項）乃至後期自然主義の時代で、其處に新理知派・新技巧派・卽實派・殉情派、又は新思潮派（別項）・人間派・早稻田派（別項）・三田派（別項）等の小分派が立てられはしたけれども、概して前期に對立的だつた諸傾向の著しい融合和熟が認められ、同時に自然主義的客觀主義と前期一般の主觀主義的傾向との融合和熟も認められた。言はば有產者文學圓熟の時代であつた。所謂文化主義の哲學と大戰後の好景氣と資本主義文化の爛熟とを背景とした藝術主義が榮えて、明治大正文學の頂點期が其處に劃出されるに至つた。併しさういふ藝術主義橫流の裏に、人生派的意圖の稀薄さが絡んでゐたところに、早晩行き詰るべき有產者文學であることへの暗示がひそんでゐた。又自然主義以來の自由主義的個人主義思潮徹底化の反映である心境小說・身邊雜記小說等の流行が、文藝作品から漸次に大衆性を奪ひつつあつたところにも或る暗い影が感じられた。他面資本主義の高次的な發展に隨伴した勞働者層の成長と間接的には世界大戰やロシア革命からの刺戟とに誘因をもつた民主々義思潮の擡頭につれて、ロマン・ロオランやホイットマンが非常な熱意を以て取り上げられ、所謂民衆文學がかなり喧しく提唱されて、それがこの期の文學に或は新彩を點ずるかとも思はれたが、併しあらゆる方面に民衆派の勢力は弱く、まだ〳〵ブルジョア藝術主義の壓倒的な勝利が思はれた。前期同樣小說中心の時代と見ることが出來るが、前期に既に芽生えた劇文學の進出も漸次により顯著になつて、やがて後期の劇文學全盛を誘致すべき情勢を示した。詩壇には、神經派・新情緒派・殉情派等の藝術派と民衆派との、かなり激しい對立抗爭が見られたが、歌壇にはアララギ派の現實主義的萬葉風が壓倒的な勢力を有し、ほんの一部にデモクラシイ短歌の提唱もあつたが、問題になる程度にまでの成長も見られなかつた。俳壇には前期以來持ち越しの對立以上、別段新しい展開もなく、ただ新傾向句派に於ける分化主義が愈々著しく、結果として新傾向句とか俳句とかいふ名稱がその方面ではすてられて、三昧派（別項）・層雲派（層雲參照）・海紅派（別項）等々の名稱が見られるやうになり、一方芭蕉その他の古典俳人に關する學問的研究がやゝ隆昌に赴いたかの觀を呈した。少年文學は大正七年、雜誌「赤い鳥」（別項）が創刊されて以來、同種類の少年文學雜誌の簇出となり、隨つて前期までは觀念的にも

會次第が記されてある。近世大賞會の式次第を詳密に記したもの外になく、永く後の世の參考資料となるべきものである。〔石村〕

對象感情（たいしやうかんじやう）〔獨〕Gegenstandsgefühl【名義】吾々に於て統覺される對象それ自身の性質に規定される感情。例へば快不快、深さや量の感じ等を云ふ。【解說】美的對象感情は、吾々の個人的な主觀的感情と對立して、專ら對象のものとして、卽ち內容とし

類の感情は、對象的美的感情として現はれるといひ、又神とか人間性とかといふ無限的な感じも對象的に感ぜられるといひ、極めて自由廣汎な領域を認めてゐる。（美的感情・感情移入說參照）〔村田〕

大嘗祭（だいじやうさい）神道【名稱】「おほにへのまつり」ともいふ。【名義】天皇御一代に一度新穀を以て天照大神その他天神地祇を祭られる神事で、古來最も重大な祭儀とせられてゐる。大は稱辭で、嘗は本來新穀卽ち稻を指す。

田在滿　○大賞會便蒙　同上　○古事記傳本居宣長　○祝詞講義　鈴木重胤○古事類苑○祝詞新講　次田潤　〔田中（義）〕

大正詩文（たいしやうしぶん）漢詩文雜誌【解說】雅文會（別項）發行で、最初は法學博士高橋作衛が主宰したが、その歿後は日下勺水が代つて主宰し、大正十五年その歿後は、名を昭和詩文と改めて今日に至つてゐる。〔佐久〕

退宿德（たいしよくとく）雅樂舞曲【名義】未詳【異稱】退走禿・退走德・老鶴【解說】高麗樂。

形態的にもやゝ時勢に後れてゐたかと思はれたものが急速に新時代的なものにまで發展させられると同時に、著しく藝術的なものにまで高められるといふ飛躍振りを示し、それが兒童教育にまで著大な影響を及ぼして、從來大人によつてのみ與へられてゐた藝術を、兒童自ら製作し、享受するやうな風潮も養はれた。直接文學に關係はないが、兒童の自由畫問題が喧しくなつたのもこの時期に於てであつた。要するに多少の混亂と動搖とはあつても、全體的には藝術主義と自由主義的個人主義の思潮が最も十分な支配を有つた時期と云ふことが出來ると思ふ。

〔後期〕世界大戰の暗い影響が、ほんとに現はれはじめた大正十年頃から大正末、昭和初年までの時期で、一口に言へば有產者文學が轉落への方向を辿りはじめ、代りにプロレタリア文學の擡頭して來た時代、別な觀方ですれば、前期に於て融合した主觀主義的傾向と客觀主義的傾向とが再び分化して、混亂と蕩搖とがつづいた時代とも云へよう。即ち一方には、前期に支配を擅まにした藝術主義が漸次に行き詰るとともに、日を逐うて尖鋭化されつつあつた階級意識乃至社會問題意識に基く苦悶が著しくなつて來るにつれて、必ずしも意識的にではないまでも、人々の間に客觀を無視した主觀主義への逃避的傾向が顯著になりはじめた上に、同じ苦悶から生れた立體派・未來派・表現主義・構成主義・ダダイズム（各別項）等の絶對主觀主義に依存する所謂近代藝術主義の西歐諸國よりの流入飜譯が強い刺戟となつて、遂に大正十三年雜誌「文藝時代」に據つた新進作家の大部分を網羅した新感覺派（同項）が結成され、同じ頃ゲエ・ギムギガム・プルヽ・ギムゲムの如き雜誌まで刊行されるといふやうな主觀主義の强度な奔騰が見られるやうになり、又一方には前期の民衆藝術から系統をひいたプロレタリア文學が、大正十年「種まく人」（別項）の創刊以來、プロレタリア文學運動としての本期的活動に入り、名前もブルジョアデモクラシイの匂ひある「民衆文學」から「無產者文學」となり、更に「プロレタリア文學」なる稱呼にかはり、十二年關東大震災の打擊によつて一時頓挫はしたけれども、後十三年六月日本プロレタリア文學聯盟の結成と相踵いで、雜誌「文藝戰線」（別項）が創刊されて以來は、多くの動搖はありながら、愈々本格的になり、從つて漸次に既成文壇への地歩も固めはじめ、遂には歌壇にまで無產派短歌の進出が見られるやうになり、それが單なるイデイオロギイの相異だけでなく、固く奉ずる客觀主義即實主義の傾向に於ても、前記の主觀主義的傾向と、判然對立するものとなり、其處に所謂有產者文學と無產派文學との對立が判然たる形をとつて現はれることになつた。この二大主流の對立に介在して時代の資本主義文化の爛熟と頽廢とを背景とした。從つて只管に消費的官能的な享樂主義の風潮が著しくなり、それが大震災に煽られて、殊に顯著になつた揚句には、その反動として新人生派の主張と作品とが生れる等、いろ〳〵な傾向流派の交錯があつたに拘はらず、それ等の何れもが大した勢力となり得ず、結局有產者文學は漸次的な轉落と行き詰りとを現前して新しき發展を止め、其處に自ら顧みて過去の業績を整理しようとする動向が顯著になつた結果、明治大正文學の全集物の續出といふ現象が生れ、それを煽つた出版事業の完全なる資本主義化は更に所謂圓本全集物の洪水を齎らし、傍ら前期以來の有產者文學の大衆性喪失が愈々激しくなるにつれて一方には通俗長篇小說の流行が著しくなり、他方には多く新しき作者による中間的讀物・隨筆・大衆文學（別項）等の著しい進出が結果され、殊に大衆文學は大正末期から昭和初期にかけての讀書社會を席捲するの概を示し、大正十五年には雜誌「大衆文學」さへ刊行される勢ひを示したとともに、劇壇にも謂ゆる劍戟物の大流行を招き出した。かうした諸々の情勢が、無產派文學の擡頭と相俟つて、所謂文壇なる既成作家の特殊部落を崩壞させるに至つた。前期前々期以來の惰勢で矢張り小說が最も中心的な產物であるかの觀もあつたが、寧ろより多く戲曲の勢力を占めた時代といふべきで、有名無名作家の大多數が戲曲の筆を執つてゐる。詩壇にも主觀主義的蕩搖や無產派の擡頭が著しかつたが、やゝ時代潮流の中心からはづれた觀のあつた歌俳壇には、他の分野に於ける程の激動は見られなかつた。が、それでも歌壇にはアララギ派の勢力が從來ほどでなくなり、大正十三年一月には、雜誌「日光」（別項）が創刊されて歌壇の多頭時代を反映し、ふるく明治三十年代末の自然主義思潮横流當時乃至それ以前から、萌芽を見せはじめてゐた口語歌（別項）の主張も、この期に入つて比較的急速に展開し、更にそれがプロレタリア短歌の主張に結びついて行かうとするなどの動搖は見られた。少年文學は、この期に至つてまた急激に轉落して、昭和初年頃には新しき童話童謠の雜誌は殆ど全滅し、後、昭和四年無產派陣營より新しき少年文學運動の機關雜誌「少年戰旗」や「童話運動」の出されるまで、暫くその新しき展開を止めるかの形をさへ示した。所詮この期は文藝界のあらゆる分野に有產者文學の轉落と、その轉落故に激成された苦悶と激動との眺められた時代であつた。新しき擡頭を見せたとは言つても、プロレタリア文學もまだ有產者文學を壓倒するところまでは成長してゐなかつた。（プロレタリア文學參照）

【參考】明治大正の國文學 岩城準太郎 ○現代文學十二講 高須芳次郎 ○明治大正文學の輪廓 加藤武雄 ○日本プロレタリア文藝運動史 山田清三郎 ○文藝東西南北 木村毅 ○現代文學の研究 湯地孝（國文教育三ノ一二―五ノ一〇）○現代文學考察 湯地孝・片岡良一（國語と國文學六〇）○明治大正文藝運動大觀（新小說大正一五ノ四）○大正文學十四講 宮島新三郎 ○明治大正詩史 日夏耿之介 ○日本新詩史 福井久藏 ○日本近代詩の發達 湯地孝 ○日本近代詩書綜覽 山宮允

〔片岡〕

大織冠（たいしよくわん） 幸若舞曲（三十六番の一）二卷 【作者】未詳 【名稱】大織冠藤原鎌足の傳なるより名付く。「たいしよくわん」と慣讀してゐる。 【成立】室町期 【諸本】古板本は寛永十二年板（十行本）。新群書類從第八舞曲部所收、節附本は全曲ではないが越前幸若家元藏のものを日本歌謠集成卷五に載せてある。 【題材】王代物。玉取傳說。讃州志度寺緣起として傳へられる。謠曲「海士」と同材。但し鎌足とその子不比等とを同一人視し、房前は地名房崎より來たとしてゐる。玉取傳說の本源は、印度の佛本生譚中の大施（能施又は大意等とも）太子龍宮行傳說なるべく、それに蜑の習俗と情話とが潤色として添加せられてゐる。蜑老松若松母子が海底に寶劍を探つた類話は「源平盛衰記」卷四十四に見える。

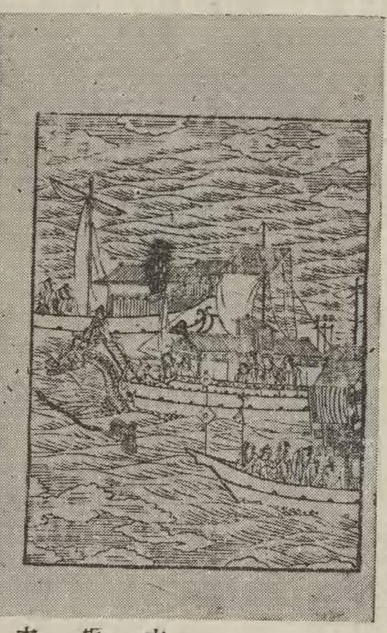
苦悶が著しくなつて來るにつれて、必ずしも意識的にではないまでも、人々の間に客觀を無視した主觀主義への逃避的傾向が顯著になりはじめた上に、同じ苦悶から生れた立體派・未來派・表現主義・構成主義・ダダイズム（各別項）等の絶對主觀主義に依存する所謂近代藝術主義の西歐諸國よりの流入飜譯が強い刺戟となつて、遂に大正十三年雜誌「文藝時代」に據つた新進作家の大部分を網羅した新感覺派（同項）が結成され、同じ頃ゲ・ギムギガム・ブ

くなり、それが大震災に煽られて、殊に顯著になつた揚句には、その反動として新人生派の主張と作品とが生れる等、いろ〳〵な傾向流派の交錯があつたに拘はらず、それ等の何れもが大した勢力となり得ず、結局有產者文學は漸次的な轉落と行き詰りとを現前して新しき發展を止め、其處に自ら顧みて過去の業績を整理しようとする動向が顯著になつた結果、明治大正文學の全集物の續出といふ現象が生れ、それを繞つた出版事業の完全なる資

治三十年代末の自然主義思潮横流當時乃至それ以前から、萌芽を見せはじめてゐた口語歌（別項）の主張も、この期に入つて比較的急速に展開し、更にそれがプロレタリア短歌の主張に結びついて行かうとするなどの動搖は見られた。少年文學は、この期に至つてまた急激に轉落して、昭和初年頃には新しき童話童謠の雜誌は殆ど全滅し、後、昭和四年無產派陣營より新しき少年文學運動の機關雜誌「少年戰旗」や「童話運動」の出されるまで、暫くそ

家元藏のものを日本歌謠集成卷五に載せてある。【題材】王代物。玉取傳說。讃州志度寺緣起として傳へられる。謠曲「海士」と同材。但し鎌足とその子不比等とを同一人視し、房前は地名房崎より來たとしてゐる。玉取傳說の本源は、印度の佛本生譚中の大施（能施又は大意等とも）太子龍宮行傳說なるべく、それに蜑の習俗と情話とが潤色として添加せられてゐる。蜑老松若松母子が海底に寶劍を探つた類話は「源平盛衰記」卷四十四に見える。

【梗概】藤原時代の末、氏子藤原鎌足は、文章生から身を起して遂に左大臣入鹿を滅し、功によつて大織冠に昇り、それが古今無雙の榮官なので不比等とも呼ばれ、又常に鎌を携へてゐた爲めに鎌足ともいはれた。氏神春日に參籠し、或は興福寺の金堂を建てなどして一家の祝福を祈つてゐたが、その數子の內、長女は聖武天皇の后に立つて光明皇后と申し、二女こうは大く女は三國一の美人の稱あり、唐の太宗皇帝が見ぬ戀に憧憬れて勇士うんかを使として所望し來り、鎌足は辭したが重ねて使があり、且つこれを聞かれた天皇御自ら返帖を授けて諾せられたので、太宗の喜び一方ならず、三百餘の船を派して迎へ后に立てた。唐國の人民の歡びも非常で、こうはく女はその榮譽を日本に傳へようと父鎌足の興福寺造營に施入のためむけい寶珠（赤栴檀のみそぎで五寸の釋迦を作り方八寸の水晶の塔の中に納めたもの）を初め、華原磬・泗濱石等の佛具・法具を調へ、萬戸將軍うんそうに三百人を率ゐさせて警護し送らせた。この由を聞いた八大龍王は寶を奪ひ取らうと風浪を起したが佛法守護の夜叉羅刹に鎭められ、再び阿修羅の助勢を得てうんそうを擊たうとして、却つて破られた處から難陀龍王の建議を用ひ、龍宮の乙姫の許にあることひさひ女に旨を含めてうつぼ船に乘せ漂流させると、房崎の沖でうんそうに救はれたが、契丹王の寵姫で、讒言のため流された者と伴り、案の如くうんそうがその色に迷つて油斷した隙にむけい寶珠を奪ひ去つた。うんそうが止むなく殘りの寶器を奈良に齎すと、失つた寶珠を取戻さうと鎌足はうんそうの歸航の船に便乘し、房崎に赴いて見たが施す策なくて引上げ、姿を變して再び下り、或る水練の巧な蜑の許に寄寓し、遂に契を結び三年を經て一人の男子を擧げ、素性を明かして目的を語つたので、蜑は海に入る事七日、かの寶珠は龍宮の寶殿に納められ、二六時中八大龍王に守護されてゐる事を見て歸つた。鎌足は八大龍王は五衰の熱苦を免れるために音樂を好む事を知り、浦々の舟を集めて飾り立て、都から伶人を召し寄せて歌舞管絃を奏でさせ、眷族を率ゐて八大龍王が陶醉してゐる隙に、妻の蜑を潛らせて寶珠を奪はせると、危く警護の小龍に迫ひ迫られた蜑は、劍を以て胸を刺して寶珠を匿したが、小龍に害されて遂に命を落したけれど、鎌足は遺骸から寶珠を獲て、興福寺の本尊の釋迦像の眉間に鏤んだ。この蜑の子が成長して房前といつた。



古板本大織冠

【影響】元祿五年刊六段本「新大職冠」、井上播磨掾正本「大職冠知略玉取」、近松作「大職冠」（島津）等がある。

大職冠（たいしよくわん）

淨瑠璃　五段　時代物

【作者】近松門左衞門【興行】外題年鑑に「新撰大職冠」として、正德三年十一月の上場とあるが、正德二年刊の「鸚歌が薗」にこの外題あれば、それ以前の作と思はれる。【諸本】十行三十五丁本。山本九兵衞板。八行六十七丁本。板元缺。諸種の近松全集、近松傑作全集卷四・近松淨瑠璃集下（有朋堂文庫）・近松時代淨瑠璃（帝國文庫）所收【題材】その本は「允恭紀」の男狹磯の話や華嚴經傳說等にあるが、直接には謠曲の「海士」や舞の本の「大織冠」「入鹿」等から出てゐる。同じ題材の淨瑠璃には六段本「大しよくはん」所屬不明。五段本「大しよくはん」相模掾正本。延寶八年八月刊。「大伽藍寶物鏡」松本治太夫正本。歌舞伎では、元祿十年京都早雲座興行の「而向不背玉」白石彥兵衞作等があり、何れも本作に幾分かの影響を及ぼしてゐる。又「外題年鑑」に、「大職冠知略玉取」井上播磨掾正本。「大職冠方便（たよび）の玉」岡本文彌正本。「入鹿大臣」同上等があり、土佐少掾橘正勝の正本板行目錄にも「大職冠二度玉取」（又は單に大職冠）と見えてゐるが何れも未見。

【梗概】〔初段〕（大序、麟德殿の段）唐の太宗は日本の鎌足の女藤照姫を妃に迎へるために面向不背玉を引出物にせよといふ鎌足の要求に應ぜねばならぬが、元來この玉は佛敎の妙理を象徵した非實在のものであるため、太宗も當惑して、使を萬戸將軍に仰せ付ける。（中、京の町の段）鎌足の執權山上有風の一子則風は室の傾城花月に溺れ、金松といふ子まで生ませ、主親に勘當され、讀賣りに零落して京の町を徘徊してゐるが、折から忍び歩きの藤照姫に、唐へのお供を願はんとお側へ寄ると、それは入鹿に狙はれてゐる姫のため、身替りとなつてゐる花月であつた。そこへ突然跳り込んだ入鹿の手下の者達が花月を奪つて去る。（切、大內裏の段）入鹿が殿上の小板敷を踏み鳴らして參內するや、帝の胸元をとつて鎌足の官位を剝げと强要する。鎌足この態を見て、自ら冠を打落し、階下に土下座して帝を救ふ。そこへ有風が出て來て、入鹿の首はその中この有風が討つと約束し、とど入鹿・有風兩人の眼力競爭となる。〔二段〕（口、多武峯の段）鎌足一家が有風の末子在天法師のゐる多武峯に忍んでゐる所に、萬戸が讃州志戸の浦に着いたが玉は龍神に奪はれたといふ噂が來る。有風は時節到來と喜んで、萬戸に姿を變へ、在天と共に入鹿の館に乘込む。（切、入鹿館の段）首尾よく萬戸に化けて入鹿に近づき、擊つてかゝるが、突き倒されて親子諸共郎等共に搦められる。そこへ藤照姫逃亡の知らせがあるが、入鹿は既にその僞なる事を知つてゐる。やがて有風は首を落されるが、その首は宙を飛んで在天を護つて逃れしめる。〔三段〕（口、志戸の浦鎌足庵の段）鎌足は玉を取返さうと、志戸の浦に來て庵を結んでゐる。則風も亦この浦に來て、和布刈（めかり）の戸次の入婿となり、名も五郎介と改め、鎌足を助けるので、鎌足はその勘當を許し、改めて則風の妻なる海女滿月に、玉を取返す事を賴む。

（中、戸次苫屋の段）満月が留守がちな夫を恨みながら、夫の連子金松と添寝してゐる。戸次も不機嫌である。そこへ入鹿の館を遁れた花月が、この浦に辿り着き軒に佇むと、中から乳を求める兒の泣聲が聞えるので、乳をやらうと申し出て、はからずも母子再會する。これを見た満月は、嫉妬から掴み合ひを始める。戸次が出て來て婿を入鹿に訴人すると言つて、花月母子を戸外に投げ出す。そこへ歸つて來た則風は、満月に對する義理から花月母子を斬り殺し、さて大事を打明け、戸次の心底を恨んで自害しようとする。戸次はこれを押止め、これ迄の憎まれ口は、皆娘可愛さからだと臨月の満月を勵まして玉取りを思ひ立たせる。（切、志戸の浦海上の段）鎌足・萬戸を初め、貴賤群衆見物の前で、満月は海底深く潜き入るが、玉は取り得ず、惡魚のため、五體朱に染まつて浮び上る。併し萬戸が玉を龍神に取られたといふ披露は、窮餘の策であると察してゐた鎌足は、満月の乳の下を鎌で裂いて胎内から男兒を取出し、これを布に包んで高く差上げ、海女が乳の下を裂いて中に玉を籠め取返つたと呼ばはれば、諸人皆これを拜し、萬戸はその智慧に感ずる。かくて萬戸・鎌足の智略により、玉の存在を否定せず、衆生の信仰を繋ぎ止める事が出來る。後鎌足は満月の子を己の孫として、房前の大臣と呼ばしめる。（四段）（口、般若坂の段）霜月の末、三笠山の松が枝に藤の花が咲き亂れ、藤原氏繁榮の前兆だといふ評判なので、入鹿は眞偽檢分のため出かけるが、途中般若坂で、猫が數匹の鼬に喰ひ殺されるのを見て、己に危難の近づいた事を豫感し、坂熊兄弟に三笠山の邊を巡見して、鎌足一味を召捕れと命じて立ち歸つて了ふ。（中、藤照姫道行）藤照姫は乳母と共に春日野の邊に忍んでゐたが、父の行方を探しに賤の女と姿を變へ、讃岐の浦へと志し、やがて室の港に着く。（切、奈良茶屋の段）鎌足の嫡子淡海は在天と三笠山麓に茶店を開いて入鹿等を狙つてゐる。とは知らず坂熊兄弟等が立ち寄つて奥へ通る。所へ和布刈の戸次が、満月の子を懐にして訪ねて來て、玉取りの次第を告げると、これを聞きつけた坂熊等は、鎌足一味と知つて立廻りとなるが、あたりの藤葛が忽ち延びて坂熊等を締め殺す。（五段）（口、鴻臚館の段）萬戸と共に歸洛した鎌足は鴻臚館に入り、淡海に命じて鎌足は失明したれば、藤照姫と共に渡唐して日本へは歸らぬと、倉田の參議、高向の玄理を介して入鹿に言ひ遣らしめる。（大切、大内裏の段）萬戸は獻上の寶物を捧げて淡海に手を引かれた鎌足と共に參内するが、入鹿の僭上に憤激して一騎討となる。淡海も萬戸が獻上の虎の檻を開いて入鹿にけしかけ、鎌足も眼を開いて鎌で入鹿の首を落せば、首は雲中に飛び上るが、春日の宮の方から飛び來つた白羽の矢に當つて亡びる。

【構想】全體としては、前述の諸先行作に負うてゐるが、二段目の切の、僞萬戸となつた有風父子の南京問答は、既に「傾城阿波の鳴門」（別項）や「國姓爺合戰」（別項）に近松が用ひ、「國姓爺合戰」には本作の大切、虎の場面が用ひられてゐる。又四段目切の藤葛の怪は「藤壺の怨靈」や「本領曾我」以來、近松が慣用の手段であり、又二段目の切及び大切の有風や入鹿の首が宙に舞ふ場面は、古く「搜神記」の眉間尺から題材を採つた角太夫正本の「眉間尺物語」や土佐少掾橡正勝正本の「和國女眉間尺」等に導かれたものと思はれる。【史的地位】玉取傳説が舞の本や謠曲から出て最初に淨瑠璃の正本となつたのは六段本「大しよくはん」であらう。これは寛文頃板行の繪入本であるが、内容は舞の本をその儘用ひてゐる。角太夫正本「大しよくはん」は相模掾時代のものと土佐掾時代のものとある。構想や文章を謠曲「海士」から採つた點もあつて、六段本よりは可なり進歩を示してゐる。松本治太夫正本「大伽藍寶物鏡」は、奥付に宇ノ五月吉日板行とあるから、元祿九年板と推定される。師角太夫正本の系統で、構想は餘程複雜になつてゐる。兩正本共に水機關を使用するに力めてゐる。又「面向不背玉」（別項）に出る人物には、これ等兩作中の名を借りてゐるものがある。近松の「大職冠」は、これ等の後に出て諸先行作を集大成したものである。舞の本「入鹿」系統としては更に竹田出雲の「入鹿大臣皇都諍」（寛保三年四月竹本座）や、近松半二等の「妹脊山婦女庭訓」（明和八年竹本座初演）に展開したが、玉取系統としては本作以上の展開は見なかつた。これ本作が近松作中の傑作と言へないが、歴史的に意義ある所以である。【影響】本題材を扱つたものに、歌舞伎では享保五年九月大阪嵐座興行の「大職冠傳授玉」。享保十八年九月角の芝居興行の「新館大職冠」等があるが、詳しい關係は不明。明治二十四年七月歌舞伎座興行の櫻痴居士作「志渡浦海人玉取」は、本作からの脱化である。黑本には、刊行年時不明の「大ショククハン」二册、寶曆六年鱗形屋板の「大職冠鎌倉開」等がある。

【參考】外題年鑑一樂子○近世邦樂年表、義太夫之部）○近松傑作全集卷之四○近松全集第九卷○元祿歌舞伎傑作集下卷（近代日本文學大系）○日本小説年表○京阪歌舞伎年代記（歌舞伎研究附錄）伊原敏郎　〔高野（正）〕

大師流（だいしりう）「三筆」を見よ。

退私錄（たいしろく）　隨筆　三卷　附言一卷

【著者】新井君美（白石）【諸本】本書は久しく寫本で傳はつてゐたが、明治三十九年、國書刊行會の「新井白石全集」第五に收載された。【解説】織田・豊臣兩氏時代から德川氏初期に至る間の片々たる史談、又著者がその師木下順庵や同門雨森芳洲等から聞いた談片や、自己が讀書上の心覺え并に感想等を記し附けたもので、幕初名臣等の逸話や關が原役に於ける東西兩軍將士の噂などに、興味ある節がある。上卷に如木雜色之事以下、中卷に藥師如來差上候事以下、下卷に鎌倉景清が籠居の跡之事以下、附言に兌長老神廟の御前にて道を説し話以下、各數十項を收めてゐる。原本に序跋はない。　〔和田〕

大進公（だいしんのきみ）「俊惠」を見よ。

大盡舞（だいじんまひ）　歌謠　【名義】大盡舞に用ひたよりの名。【作者】二朱判吉兵衛。正德三年初めて舞臺に出た俳優中村吉兵衛、享保年中道化役者として知られ、後、吉原の幇間の群に入りて化生の者と呼ばれた。明和二年八月十六日歿す。享年八十餘。【成立】大盡舞の歌は、この當時の作。板本の卷首に西吉述とあるので、谿舍和山人は吉兵衛の作でなく、作成の時代も紀文や奈良茂の事蹟が作り込んであるので、元祿や正德よりは後、元文年中の作だらうといつてゐる（大盡舞考餘）。年代はこの説の如くであらう。但し西吉は二朱吉の隱し名で、やはり大部分は吉兵衛の作と認める。【解説】凡そ七五調から成る長篇二十五段より成り、吉原關係の名物・由來・遊女・

戸・鎌足の智略により、玉の存在を否定せず、衆生の信仰を繫ぎ止める事が出來る。後鎌足は滿月の子を己の孫として、房前の大臣と呼ばしめる。〔四段〕（口、般若坂の段）霜月の末、三笠山の松が枝に藤の花が咲き亂れ、藤原氏繁榮の前兆だといふ評判なので、入鹿は眞僞檢分のため出かけるが、途中般若坂で、猫が數匹の鼠に喰ひ殺されるのを見て、己に危難の近づいた事を豫感し、坂熊兄弟に三笠山の邊を巡見して、鎌足一味を召捕れと命じてゐるが、二段目の切の、僞萬戸となつた有風父子の南京問答は、既に「傾城阿波の鳴門」（別項）や「國姓爺合戰」（別項）に近松が用ひ、「國姓爺合戰」には本作の大切、虎の場面が用ひられてゐる。又四段目切の藤葛の怪は「藤壺の怨靈」や「本領曾我」以來、近松が慣用の手段であり、又二段目の切及び大切の有風や入鹿の首が宙に舞ふ場面は、古く「搜神記」の眉間尺物語」や「眉間尺」等に導ら題材を採つた角太夫正本の土佐少掾操正勝正本の「和國女眉間尺」等に導

興行の「大職冠傳授玉」。享保十八年九月角の芝居興行の「新館大職冠」等があるが、詳しい關係は不明。明治二十四年七月歌舞伎座興行の櫻痴居士作「志渡浦海人玉取」は、本作からの脫化である。黑本には、刊行年時不明の「大ショククハン」二册、寶曆六年鱗形屋板の「大職冠鎌倉開」等がある。

【參考】外題年鑑一樂子○近世邦樂年表、義太夫之部）○近松傑作全集卷之四○近松全集第九卷○元祿歌舞伎傑作集下卷（近代日本文學大

八月十六日歿す。享年八十餘。【成立】大盡舞の歌は、この當時の作。板本の卷首に西吉述とあるので、翁舍和山人は吉兵衞の作でなく、作成の時代も紀文や奈良茂の事蹟が作り込んであるので、元祿や正德よりは後、元文年中の作だらうといつてゐる（大盡舞考餘）。年代はこの說の如くであらう。但し西吉は二朱吉の隱し名で、やはり大部分は吉兵衞の作と認める。【解說】凡そ七五調から成る長篇二十五段より成り、吉原關係の名物・由來・遊女・

傾客・詩歌等の著名なものを列擧してゐる。大黑舞（別項）の名をもちつただけに、飽く迄も輕快陽氣で、假にも愁歎や、怨恨や、皮肉嘲罵等に陷つてゐない。その反面に鄙野醜陋に墮してゐるものもある。當初はこれに和して簡單な舞が演ぜられたかと思ふが、後には三味線に合せて謠ふだけになつた。近く明治の末年頃迄は古老の間に遺存してゐた。曲は抑揚の少い、極めて悠々たるもので、甚だ變化に乏しいもの。近年まで謠つたものは、第二・三・四・五・七段等、比較的好文字と見るべきものだけであつた。左に一例を示す。

〔一段〕新吉原の寶は。から尻にかくれ駕籠。こゝに新町揚屋町。浮橋小むら八橋。立出でて下谷筋。東叡山のこ櫻坊。金龍山の取られん坊。こゝに名譽しけるは小平の坊さまの長羽織。されば孔子のたまはく。ツトセかならず我を念ずる輩はツトセかならず惡所へ引きや入れんとのホ・ホン・ホ・ホン・ノンホノン　ヨ〳〵のたまはく　ツトセエンヤ〳〵アリヤチンナ

【參考】大盡舞考證山東京傳（溫知叢書十二卷）○大盡舞考餘翁舍和山人（同上）○日本歌謠史高野辰之　○萍花漫筆桃華園　〔高野〕

大成敎（たいせいきょう）「神道各派」を見よ。

大山寺緣起（たいせんじえんぎ）　繪卷　【解說】伯耆大山寺所藏十卷。昭和三年四月火災のため全部燒失した。大山草創の緣起より說き起してその靈驗の數々を叙したもので、奥書には「于時應永五年戊寅八月一日書之、前學前入道了阿」とあり、當時了阿が世々の記錄を辿つて作製させたものであることが明かである。書畫とも、筆者の名を傳へてゐないが、畫風から見れば、蓋し土佐派の筆致で、應永頃の繪卷としてはまづ整美の致を見るべきものであり、詞書を色紙形の中に記してゐる遺り方も類例に乏しい。〔田中（一）〕

大山寺緣起（大山寺舊藏）

大千世界樂屋探（だいせんせかいがくやさがし）　滑稽本　三册　【作者】式亭三馬　【角書】有情非情　【成立】文化十三年の序文がある。同十四年正月刊行　【諸本】三馬傑作集（帝國文庫）所收　【題材】標目には、乾坤の部、時候の部、神祇の部、人倫の部、支體の部、衣服の部、飲食の部、草木鳥獸蟲魚の部、器財の部、雜の部をあげ、その下に細目を記してゐる。併し本編には、その中の一部分のみがある。

【梗概】第一は、一の谷に於ける熊谷次郎直實と無官の太夫敦盛との組打の實說として先づ「源平盛衰記」の本文を出し、三馬按ずるにとして、以下この事實を茶化し滑稽化してゐる。敦盛は平家の上臈で且つ都人で、生白の柔弱者である。江戸の俠婦にはもてない男であるとか、熊谷に敦盛が名乘れといはれて、修理大夫平經盛の末子無官の大夫敦盛と名乘ると、蜜柑二つに溫い蕎麥で六かんの大夫あつ盛かと尋ねるとかいふ類のふざけである。第二は「一切諸靈盂蘭盆會の述懷幷に葬式の遺恨」と題してゐる。これは一年に一度の魂祭に精靈達が寄合つて話し合ふ。先づ偏屈院性來金鐵信士が出て、佛家の墮落と娑婆にゐる子孫達が先祖の靈を粗末にすることを憤慨する。すると傍にゐた流行穿鑿信士と呼ばれるものが盛んに通語を振りまはして、この說に賛成する。金鐵信士は益々憤慨して精進料理の不味いこともつけ加へる。所へ幇間上りの陀璃無垢信士の鬼六の精靈が出て、これも追從輕薄な辯で娑婆の輕薄や、自分の死後は女房が後添の亭主を持つたことなどを話す。其處へ奸曲院欲心貪着信女といふ姑の精靈があらはれて、娑婆に殘つた若夫婦のだらしない生活に叱言をいふ。これ等の連中がが〳〵してゐる所へ、大通院諸事本晞居士が顏を出して、魂祭の來由から、娑婆ではあまりに簡單に取扱ひ、崇祖の念の失はれゆくを嘗めたりする。金鐵信士はすつかりこの說に賛同する。流行穿鑿信士と陀璃無垢信士とは半疊を入れる。諸精靈等が、娑婆の葬式の輕薄に流れる無禮を慨く。本晞居士はこれ等をなだめて說き聞かす。第三に器財の部として蚩尾と試風の烏形との夕涼の章を出してゐる。暑夏炎熱の日に屋根の鬼瓦が暑さを喞ちながら、自分の體に猫や鳶の糞をするのを憤慨して、火見櫓の上にぐる〳〵廻つてゐる風見の烏形に向つて話しかける。烏形も自分の仕事の樂でないことをこぼし、丁稚などから惡戲されると言ふ。鬼瓦は今時の新瓦は見得ばかりで、火に弱いこと、水を吸ひ込むことなどを話す。風見は自分は風のまゝに廻る浮氣者だからとて下を通る美人の評などをする。その內に風が出て烏形はぐる〳〵廻り始める。鬼瓦はくしやみをする。鬼瓦の鼻の穴へ蝙蝠が飛び込んだのである。

【批評】滑稽と諷刺皮肉とは、三馬が滑稽本の二面である。而して諷刺は決してこれを諷刺としては現はさない。これを滑稽に包んで現はす。故に諷刺としては辛辣でない。彼の作品の多くが皮肉であるとは取つても、諷刺であるとは感じないで讀了されるのはこのためである。本篇の如き、固より書名の示す如く、樂屋探しの皮肉はある。又世相に對する諷刺も見出されるが、併しやはり滑稽の柔かみに包まれて、滑稽本としての特徵が殊に著しく出てゐる。それは決して文學としての本書の弱點とはいへない。さういふ所に作者獨自の持ち味があるのである。〔小柴〕

退藏館隨筆（たいざうくわんずゐひつ）　隨筆　二卷　【著者】大藪國義（傳未詳）　【解說】江戸時代初期を中心とし、前後の時代に亙つて史上知名の人々（多くは武士）の逸事等を錄したもので、中にも戰國時代から德川將軍初め三四代の事が多い。卷一に秀吉公鎗刀を改、以下七

十四條、卷二に甲陽軍鑑、以下八十六條を收めてある。〔和田〕

太々神樂（だいだいかぐら）

舞踊【別名】里神樂【解說】この名稱は、元祿頃既に見えてゐる。太々神樂は太々神樂講中の講金の奉納に對して、臨時に取り行はれる神樂で、諸國の神社にこの制度があり、神社の維持費の一部に役立てられてきた。講中がこの事をするのを、「太々神樂を打つ」或は「太々神樂をあげる」と稱するが、今は奉納、乃至は獻奏とも云ふ。諸國の神社では獻金の多少に從ひ、神樂の規模に大小を設け、今日では特等・一等・二等・三等などの等級別も設けてゐる。（里神樂・太神樂參照）〔小寺〕

【參考】藝術としての神樂の研究　小寺融吉

大內裏（だいだいり）

有職【解說】「禁祕抄」に清涼殿南殿の條、「拾芥抄」に宮城部があり、「禁腋祕抄」に、紫宸殿・清涼殿の記事が見えるが、大內裏の全般に亙つた結構を詳細に記述したものは、裏松光世の著はした「大內裏圖考證」（別項）を外にしては他にない。又これと參照すべき圖は、內藤廣前がこの考證の說に基き、而も多少の補正を加へて作製した大內裡圖九折、卽ち內裡附中和院圖、八省院圖、豐樂院圖、武德殿圖、神祇官圖、太政官圖、大學寮圖、眞言院圖、京城略圖（故實叢書所收）を最も正確とする。又大內裏の沿革に就いては同じく裏松光世の著はした「皇居年表」（存採叢書所收）が精しい。又「大內裏抄」（續群書類從九三一）は室町時代の土御門內裏の結構を記してあり、「もゝしき」、源宗隆著「鳳闕見聞圖說」は、寬政二年造營の內裏の規模を知るの好資料であり、勢多章甫著「安政御造營記」（增訂故實叢書所收）、「宮殿幷調度沿革」（同上）は、安政二年造營の御所、卽ち現在の京都御所の結構の大要を窺ふに、頗る便利なものである。〔石村〕

大內裏大友眞鳥（だいだいりおほともまとり）

淨瑠璃　時代物【作者】竹田出雲。但し萬象亭の「反古籠」に、「大友眞鳥の淨瑠璃の趣向は以貫（穗積）一夜にて立てたる趣向にて、竹田出雲へ授けしとなり。道行は自作なり」とある。【諸本】七行八十七丁本、山本九兵衞板。竹田出雲淨瑠璃集（續帝國文庫）所收【初演】享保十年九月十八日より竹本座。大當りであつた事は、同十二年正月板行の浮世草子「大內裏大友眞鳥」の作者其磧・自笑連名の序に、「大當りと木戸口に人の山をなす近年出來操誰も彼もと大友を誘ひ氣慰みに羽をのす眞鳥の淨瑠璃」とある。【題材】寬文三年二月、八文字屋板行の伊藤出羽掾藤原信勝の正本「大友眞鳥」（五段本）の改作。これは全く金平式であつて、梗概は、

九州の探題大友眞鳥は謀反を企て、先づその威を示さんと、九州の諸侍を召し、鳩を示して鷹と稱し、これを否む者の首を捻切り、更に犬を引出し馬と言ふ。一座の中の筑前國の住人高村正道の嫡子兼道は憤然として犬と主張し、且つ王位を狙ふ眞鳥が野心を看破し、連判を拒んで國に歸る。かくて高村の居城は眞鳥の勢の攻むる所となり、父正道は討死をする。そこで兼道は軍勢を解散し、單身眞鳥を狙はんと虛無僧に身を變して出立ち、途中求めた宿で國ちがも異腹の兄弟母子に邂逅し、その村人に訴人されて難澁せるを救ふ。その後兼道は乞食に身を變し、路頭に佇みて眞鳥を狙ひ、或は故意に縛せられて眞鳥の面前に到り、口に含みし劒を吹きかけなどするが、その度毎に眞鳥に看破される。併し眞鳥は兼道の勇力を惜んで何時も放免する。最後に兼道は高村家の舊臣龜山藏人といふ豪傑に廻り會ひ、共に力を協せて都より眞鳥追討のため下つて討死した武將顯國の形合戰をする。この合戰に龜山は討死するが、眞鳥も多くの股肱の臣を失ひ、所詮己が野望は遂げ得ずと觀念し、自ら首を刎ねる。

この正本は、後、享保年間に詞章をやゝ簡單にし、六段本に改めて江戸鱗形屋から板行された。挿繪は近藤清春の筆であるが、後刷の際は段の切目及び最後の右者太夫直之正本云々の文字を削つて、單なる讀物にしてゐる。この外、「外題年鑑」の井上播磨の語物中に「大友眞鳥」があり、又黑木氏は、本作を初代義太夫の正本「大友眞鳥」の改作と言つてゐるが、何れも未見である。但し、義太夫の正本「大友眞鳥」は、種彥の藏本目錄の中に見えてゐる。歌舞伎では、元祿十二年九月江戸山村座で、「姬松連理鳥男色女兼道五頭大伴魔取」、寶永三年八月、京、龜屋座で、「大友眞鳥」、同四年春、大阪篠塚座で、「大友眞鳥」、同七年正月、京、夷屋座で、「大友眞鳥化粧文」、正德二年正月、大阪篠塚座で、「三人眞取」、享保七年、大阪嵐三右衞門座で、「大友眞鳥」、同十年七月、京、梅之丞座で、「大友眞鳥」等が上演されてゐるが、狂言本の傳存してゐるのは、「五頭大伴魔取」のみである。この狂言本は、永閑の門人虎屋喜元・豐島小源太が芝居で語つた淨瑠璃を記したもので、詳しい筋は不明であるが、本作との特別の關係は認められない。これ等眞鳥劇の抑々の源は、「大友記」（叢書類從第三九七所收）にある九州の探題大友宗麟が吉利支丹に成り、神社佛閣を破却するといふ惡逆の振舞あつた記事に據つたものかと思ふ。

【梗概】〔初段〕（大序）大寶二年六月朔日、文武天皇の宮居なる藤原宮に、諸國から鴆の

狂言本「五頭大伴魔取」（東大國書館藏）

樂に當の鎧が解つたとか、鳥が鹿を産んだといふやうな奇怪事の奏聞あり、叡慮を惱ませられてゐる所へ、九州の探題大友眞鳥が社寺を破却して謀反を起したとの訴がある。折しも禁廷守護の在番として伺候してゐた筑前の高村兼道は、眞鳥が母方の叔父なるに拘はらず、進んで眞鳥追討の勅許を得て出で立つ。(中)眞鳥は兼道の許嫁なる阿蘇宮の大宮司友賢の娘香取姫に横戀慕して、郎黨熊主をして奪はしめる。(切)眞鳥の傅虎王、その嫡子牛王は一旦主を諫めるが聽かれず、表面は謀反に與したやうに裝つてゐる。眞鳥は九州の諸大名に加盟を求め、應ぜざる者を血祭にあげる。友賢もその犠牲となり、熊主の刄にかゝる。兼道の父雅道も執權龜山藏人を具して登城するが、謀反に與せぬため擒はれの身となり、牛王に預けられる。藏人は討死せんとする所を舅虎王に諫められ、香取姫を連れ出し、熊主を討つて立ち退く。〔二段〕(序)藏人は姫を伴ひ、兼道を豐後浦姫島に着いた船まで出迎へるが、兼道は藏人が父正道を敵の擒としたことを責めて勘當し、朝敵を討つ迄は姫とも添ふ事はならぬとあつて、三人別れ〳〵となる。(中)藏人は雅道を奪ひ返さんと、眞鳥の臼杵城の要害に入らんとするが、牛王に支へられる。兩人は互に妹を交換してゐる小舅同士であるが、遂に力盡き刺し違へて死ぬ。(切)眞鳥は大野獅子丸を使者として、雅道の北の方雲井御前の許に遣し、兼道の連判を求め、さなくば兼道の首を渡せと迫る。雲井は眞鳥の姉である。雲井は奥家老と圖り、兼道と雙生兒なる御笠村の百姓助八を身替りに立てる。折しも歸國した兼道は、助八を犬死させじと助八に身を寶し、鎌を手にして落ちる。〔三段〕(序)牛王の女房花英(藏人の妹)は、雲井を伴ひ眞鳥を訪れ、兼道の首と引替に雅道を返して貰ふが、改めて雅道夫婦は、硫黄ヶ島へ流罪となり、花英の胎兒に雅道の本領鶴渡城を攻落せと命ぜられる。鶴渡城には藏人の女房立波(牛王の妹)が六歳の伜國石を大將に籠城してゐる。(切)立波は僅か十數名の女軍で以て城を固めてゐる。所へ虎王が娘や孫の身の上を案じて城門の外迄來り、兼道の首が僞なれば、早く兼道の行方を探せと勸める。所へ花英の勢が押寄せ、忽ち立波・花英の一騎打となるが、互に己を討てと爭ふ。その中に花英は產氣づいて男兒を死產する。眞鳥の命を逃れんと墮胎せしめたのであつた。虎王も義のため返り忠をせんと言へば、雙方の軍勢悅びの聲を擧げる。〔四段〕(序)眞鳥は、雅道の舊領内を巡見し、助八の曝し首の前を通りかゝるや、兼道は好機到れりと待ち構へてゐるが看破される。兼道は御笠村の百姓助八と稱して、狐憑きの眞似をして胡麻化す。眞鳥は怪しみながらも、一應村人達に預けて去る。(中、香取姫道行)兼道の菩提のため尼となつた香取姫は、夜に紛れて躍とも知らず、助八の首を獄門から盜んで去る。(切)久しく行方不明であつた助八が歸つて來たので、盲目の養母は、許嫁お作と共に祝の餅搗をしてゐる所へ、香取姫が辿り來つて宿を求め、圖らずも兼道と奇しき對面をする。兼道は敵が氣取つた樣子だから今夜の中に姫と共に落ち延びようと決心する。立ち聞きした老婆は、姫が持ち來つた首に抱き付いて涙にくれる。お作の兄の不賴漢五郎又は兼道詮議のため緣の下に忍び入り、樣子を殘らず聞いてしまふが、お作に見顯はされる。併し五郎又は兼道に恩顧ある足柳新兵衛の伜であつて、兼道を救はんと詮議の役を引請けたのであつた。折から大野獅子丸が手下と共に兼道召捕に來るが兼道は五郎又と共に獅子丸を討つ。〔五段〕(序)兼道親子・立波・花英・虎王・五郎又等が廻り會つて敵を狙つてゐる中、眞鳥が城中で鬪雞を催すのを幸ひ、國石に旨を含めて雞を持つて城中に入らしめる。(大切)眞鳥は、己が運を占ふ鬪雞とあつて、國石の雞を天皇方として、己が方の雞と鬪はしめるが、見事に負ける。これを見て城内の人心、眞鳥に離反する。そこへ兼道の勢が立ち現はれ、兼道は手にせる鎌で眞鳥の首を打落す。

【構想】身替りとか、複雜な骨肉關係及びその相爭、巡り廻る因緣譚等は出雲の好んで用ひた趣向で又本作の山であらうが、やゝうるさい感がある。但し、第二段の藏人・牛王小舅同士の一騎打は、原作の出羽掾の正本に、眞鳥の勢が正道を攻める際、正道方の川島兄弟と眞鳥方の森川兄弟とが、從兄弟同士なるに拘はらず戰つて死する事あるより出たもの。第三段の鶴渡城城門の場は、近松の「國姓爺合戰」(別項)の獅子が城樓門の場よりの脫化であり、兼道が鎌で眞鳥の首を討ち、その首が火焰を吐いて宙に上る點は、近松の「大職冠」(別項)の鎌足、入鹿を擬したものである。雙生兒身替りの趣向は當時非常な評判であつたらしい。

【影響】本作は、その後十數回も繰返して興行されたが、歌舞伎に於ても翌十一年五月、大阪嵐座を初めとして、三都に於て上演せられてゐる。浮世草子では、前述の「大内裏大友眞鳥」がある。本作を讀物風に書き改めたものであるが、これには兼道を眞鳥の子としてゐる。赤本では、近藤清春の筆によつて滑稽化されたと「ねこ鼠大友眞鳥」がある。

【參考】近世邦樂年表○柳亭淨瑠璃本目錄○近世演劇考說黑木勘藏○京阪歌舞伎年代記○正・續歌舞伎年代記○ねこ鼠大友眞鳥(稀書複製會本)

〔高野(正)〕

大内裏圖考證 だいだいりづからしよう

有職 十四册

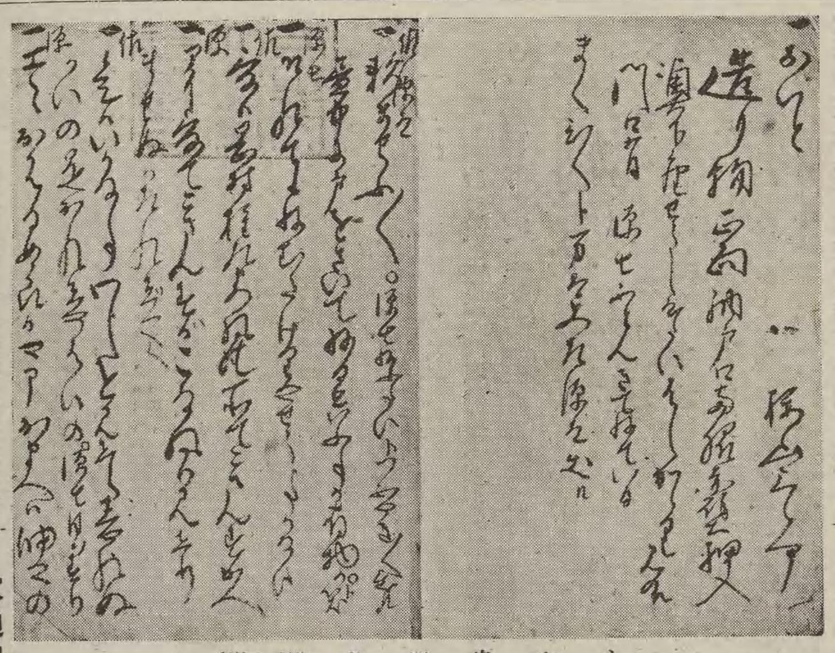
【著者】裏松光世。内藤廣前補正【成立】寶曆八年から天明八年に至る三十年間著者蟄居中の作で、藤貞幹も助力したと傳へる。後、文化年中、内藤廣前、尾張侯の命に依り校訂補正したもの。【諸本】故實叢書所收【解說】大内裏内の殿舍・門閣・園庭及び器具・調度・樹木等に就いて、一々古書の記事を揭げ、切圖を載せて精細に解說を施したもので、首卷、目錄。一卷上、左京市街、下、右京市街。二卷上・下、宮城門。三卷上・中・下、朝堂院。附錄上・中・下、大嘗宮。四卷上・下、豐樂院。五卷、武德殿。六卷、内裏外郭門。七卷、中和院。八卷、蘭林坊・桂芳坊・華芳坊。九卷、内裏内郭門。十卷上・下、紫宸殿。附錄、同殿御調度。十一卷上・中・下、淸涼殿。附錄上・下、同殿御調度。十二卷上、後涼殿・校書殿。下、射場殿・安福殿・進物所・造物所。十三卷、仁壽殿・承香殿。十四卷、宜陽殿・春興殿。十五卷上、東軒廊等。下、敷政門等。十六卷、綾綺殿・溫明殿。附錄、賢所等。十七卷、常寧殿・貞觀殿・弘徽殿・登花殿・麗景殿・宣耀殿。十八卷、五舍。十九卷、神祇官。二十卷上・下、太政官。二十一卷、外記廳等。二十二卷、侍從所。二十三卷、中務省。二十四卷上・下、大學寮。二十五卷、治部省・民部省・兵部省・刑部省・大藏省。二十六卷、宮内省。二十七卷、彈正臺・左右京職等。二十八卷、左右近衞府・左右衞門府・左右兵衞府・檢非違使廳等。二十九卷、神泉苑・穀倉院・

悲田院等。三十卷、眞言院。三十一卷、攝關頭下第。三十二卷、諸殿御帳。別錄、御屏風部上下で、諸所に內藤廣前の意見を載せ、誤を正し遺ちたるを補つてある。寫本には廣前の增補の文を頭書にしてあるが、刊本には印刷の都合上本文より一段低く記してある。大內裏內の事を知るには第一のものである。

【參考】大內裏圖內藤廣前（故實叢書所收）〔石村〕

大太法師（だいたぼし）　傳說　【名義】東日本殊に關東地方の傳說の特色として、先づ數ふべきものの一つ。昔、かういふ名前の巨人があつて、富士を一夜に作つたとか、榛名山に腰かけて、利根川で脚を洗つたとかいふ類の言ひ傳へがあつて、しかも一方には、その遺跡と稱して偉大なる足跡を留めてゐるのは、ちやうど說話と傳說との分界線上の現象として、興味多き今後の研究を期待せしめる。關東の大太法師の文獻に現はれたのは、「紫の一本」などが初めのやうだが、近江石山寺附近の大道法師の足跡なるものは、既に中世の日記にも見えて居り、かの方面に於ては、今もなほダダボシサマの昔語が傳はつてゐる。これを「日本靈異記」の怪力僧、道場法師の事ならんと想像するのは、寧ろ民間の傳承に疎かつた學者だけで、單に一個の道の字が共通する以外に、少しでも二者の關係を證する材料は無いのである。所謂巨人說話の最も誇張せられた部分、たとへば苧殼の杖が折れ、又簀の目から土がこぼれ落ちて、處々の孤山となつたといふ滑稽談などが、弘く全國の端々まで流布してゐるに反して、この足跡の傳說だけが、ほぼ限られたる地域に行はれてゐるのは注意に値ひする。新たに大東京に編入せられた東武藏の丘陵地帶にも、かういふ遺跡は、少くとも四つ五つはあつたが、何れも數畝歩以上、時としては二三反歩にも及ぶやゝ足形に近い窪地で、その底部には泉があり、水の神を祀つてゐる例もあつた。關東各地とこれに接續した福島・長野二縣の一部にも、幾つと無くさういふ地形が大人の足跡と呼ばれ、以前は除地であつた痕跡を存してゐるのを見ると、特にこの方面に限つては、巨人の信仰がなほ幽かながら活きてゐたので、單なる民間說話の興味を高調するために、新たに附會せられたる遺跡地に比べて、その間自から異なるものがあるかと思はれる。日本は傳說の比較研究に於て、特に便宜の多い國であるが、その中でも、この大太法師の地方的異同は、最も有用なる資料であつて、もしこの推測が誤まらぬならば、將來これに由つて傳說の起原、即ち地物と口碑とを結び付けた時期及び樣式に、少くとも二種の差があることは認められるだらう。大太法師は土地によつてデエラボツチヤ、又ライラボウともデンデンボメと謂ふ所があるが、それ等を合せ考へると、ダイダラ坊といふのが元の形らしい。これが近世に始まつたものか否かは、今後なほ多くの採集によつて決する外は無いが、「源平盛衰記」に、既に見えてゐる緒形家始祖の大太童は先づこれと關係が有るらしく、九州では更にそれよりも古く、豐後にも筑後にも大太良といふ神の名があるから、或はこれも上古のオホタラシといふ語の名殘りであつたかも知れぬ。（大人彌五郎參照）　〔柳田（國）〕

臺帳（だいちやう）　歌舞伎　【名義】元來、商家における諸價格の原簿を指すのであるが、これを歌舞伎芝居の社會に應用して、脚色演出を記した原本の義に用ひた。【別名】正本（別項）といつたこともある。上方では根本といふ。【解說】今日いふ脚本と同一で、舞臺に演ぜらるべき臺詞ト書を完全に記載したものである。但しその記載と實演との關係は、脚本の發達につれて、即ち年代の下るにつれて密接になつたのである。江戸中期以後に於て、記載の形式が整つたが、大體は上方から輸入されたものと傳へる。江戸で寶曆・明和の頃、半紙二つ折に細字で二十四五行から、二十七八行にも書いたといふが、やがて十三行が定式となつて幕末に及んだのである。勿論、發生の初期に、これ等の形式は定まつてゐなかつたものである。幕末に至つては、別に半紙横二つ折にして細字で記す形式をも生じた。



心中鬼門角（臺帳）

これは基本的なものではない。臺帳は元來、脚色の複雜化につれて、必要上發生したものであるが、元祿の頃には既に行はれてゐたかと思はれる。現存するものでは、寶永七年正月、大阪荻野八重桐座上演の中田嘉右衞門作「心中鬼門角」（お染久松袂の白しほり參照）を最古とする。これは全體的に簡單な記載ではあるが、形式は後世のものと少しも變りはない。所謂狂言本（別項）は小說的要素をも含むために、完全な意味での脚本と見なす譯にいかぬので、これ等臺帳は、古い脚本を知るための殆ど唯一の文獻といへる。舊名古屋大物所藏の臺帳が東京帝國大學國語研究室を初め、二三ヶ所に頒布保管されてゐる。これ等は多くは作書の書卸本から轉寫されたものであるが、元祿後の著名な脚本の大部分が收められてゐるので、歌舞伎脚本研究のためには根本資料の一である。これ等の大物本は上方脚本が多いが、古い江戸の臺帳は多く燒滅して傳存するもの極めて尠く、中に伊原青々園氏の文庫に比較的多く纏まつてゐる位である。〔守隨〕

大通紀山寺（だいつうきさんじ）　滑稽本　一册　【作者】南兌羅法師　【名稱】寺號に擬して「大通」と「氣散じ」の意を表はしたものだらう。【刊行】天明三年　【題材】緣起の形を摸したものであるが、素よりこじつけなれば、何等材としてゐるものはない。むしろ當時の俗諺俚諺を緣起化したといふべきである。

【梗概】大菩薩山寺には、いろ〳〵の末寺があつて、何れも山號寺號を持つてゐる。即ち初登山學問寺、姉山むくれん寺、笠澤山ぬけろ寺、正氣山風りやう寺、奴山天とく寺、小りん山かすてら、墨繪山よいかけじ等二十五六の多數に上つてゐる。例へば初登山學問寺の鎭守は天滿宮であつて儒學大師の作である。弘法大師の開基で兒童が文字を習ふために登るものが多く、靈寶には一字千金の井ありといふ。これに類したこじつけの滑稽話から成立してゐる。

【構想】書物の形式から見れば、「當世導通記」(別項)などより影響をうけてゐるやうである。けれども「導通記」には一つの目標があり、本書には全くそれがない。ただ通語を巧みに生かし、多少諷刺を含めて黃表紙風な色彩を帶びてゐる。從つてうがちの描寫は、流石にとうなづかさせる所もある。〔小柴〕

大抵御覽（たいていどらん）　洒落本　一册　【作者】朱樂館主人(朱樂菅江)【名稱】唐の「太平御覽」のもぢり。【刊行】安永八年【諸本】德川文藝類聚第五・洒落本代表作集(近代日本文學大系)所收。【題材】當時有名であつた今戸の三橋亭、中洲の岡場所、高田稻荷山寶善寺境內の新富士、この三つを紹介するために描かれたもの。就中、中洲に最も力が入れてある。三橋亭は間もなく廢業したか文獻に見えない。中洲は安永元年に大川に新地埋立が竣成し、中洲と稱して納涼茶屋が出來、後、岡場所となつたもので、既に「中洲雀」(別項)に、これを描いてある。四方赤良の序もこの地に於ける硝子(びいどろ)細工の口上に擬したのだ。寶善寺境內の新富士は、高田稻荷又は戸塚稻荷と稱し、戸塚村の產土神で、境內に眼病にきく水が湧出するといふので、俗に水稻荷と稱してゐる。富士は高田富士山と云ひ、稻荷の後に在る。「江都近郊名勝一覽」(弘化四年)には、「安永九年に成就すとなん」とあるが、勿論本書にある方が正しい。又本書には、「伊勢物語」や「竹取物語」の文を採つた所、七夕說話や「古事記」を採つた所とがある。全文所謂狂文であつて、中に中洲の遊女屋、遊女の名など紹介してある所に、洒落本の一種遊里案內の形式をとり、大體に於て「中洲雀」に似てゐる。

【梗概】漢張軒博望と云ふ俳諧崇匠、諸國行脚をしてゐたが、江戸へと志し、向島に來て葛西太郎(川魚料理屋)で一杯飲み、牛島・白髭と見歩くうち、三橋亭と額を高く掲げた高樓がある。案內を請うて上れば、座敷には客滿ち、裏には機の音盛んに聞えてゐる。さてこれより中洲に渡つた。料理屋の主なるものは、四季庵・樂庵を初めとして二十軒、船宿は玉松亭・布袋屋を初めとして九軒、出茶屋は伏見屋・小松屋を初めとして九十三軒、川には屋形・猪牙舟が往來し、見世物小屋には大阪下りの早崎京之助、鶴市の身ぶり聲色、子供狂言、硝子細工、群り集る客は、またと類(たぐひ)は夏の遊び、偏にこの地にとどまつた。偖又城西高田の馬場の畔に長四郎と云ふ植木職があつた。富士講の大先達で七十になるまで登山する事五十五度、今年安永八年戸塚村稻荷山の別當寶善寺の境內に、淺間大菩薩を勸請せんと思ひ立ち、諸人の脫毛を埋め、二月三日からかゝり五月二十八日竣成、中腹に御嶽石尊大權現、麓に淺間大菩薩の祠を建立した。それより貴賤老若、群集すること夥しい。かの長四郎翁は、かくや姫から受取つた不老富士の藥を服用したのか、相變らずの長壽、これをただとりの翁と云ふ。

【構想】俳諧師が、諸所を見物したりする形式は、諸曲の行脚僧や、芭蕉翁に擬したのであらう。前述の如く中洲の遊女の名、茶屋の名を列記してあるのが、本書の主眼であるらしく、それに安永八年新に出來た際物の三橋亭と水稻荷の高田富士とを添へたのである。別に大した脚色もなく輕妙な筆致で面白可笑しく讀ませるところ、風來山人の狂文の系統をひいたものである。〔山崎〕

大典（だいてん）　禪僧　【俗姓】今堀氏【諱】顯常【號】大典、別に梅莊・蕉中・東湖・不生主人【生歿】享保四年五月九日、近江神崎郡伊庭鄕に生れ、享和元年(一四六一)二月八日寂す。享年八十三【墓所】慈雲庵【閱歷】八歲父と共に京に上り、十歲黃檗山に入り獨峰に隨侍、翌年得度した。二十七歲獨峰の後を嗣ぎ慈雲庵に住む。三十二歲眞如寺住持となり、四十一歲慈雲庵を退き閑居した。明和元年(四十六歲)四月大阪に於て朝鮮聘使に應接した。五十四歲再び慈雲庵に歸住し、安永六年三月相國寺住持となつた。翌七年(六十歲)碩學に選ばれ朝鮮修文職に任ぜられた。翌年再び相國寺住持となり、天明元年(六十三歲)對馬の以酊庵輪住の任に當り同地に到つた。六十五歲任滿ちて相國寺に歸つたが、九月大光明寺に移住、天明五年正月南禪寺の住職となつた。八年京都の大火に遭つて同寺は炎燒した。寬政元年以降、慈雲庵・慶雲院等を再造した。五年十一月、六如・慈周(各別項)等と謀り、淸國に佚亡する佛敎典籍を考査し、これを淸に寄贈せん事を京都奉行に申請した。その後相國寺外門を衣盆の資を割いて建立するなど大に努めた。【著作】(甚だ多いが、文學關係のものを擧げる)○四書越組○皇朝事苑○柿本人丸事跡考○世說鈔撮○萍遇錄○平安鸚攸記○學語編○文語解○詩語解○詩家推敲○杜律發揮○唐詩集註○唐詩解頤○昨非集○小雲棲稿○北禪文草○北禪詩草○小雲棲詠物詩○雲棲疏稿○列女傳○唐詩礎○尺牘體法○李絕發揮○柳文發揮○文語推敲○俗語字訓等。

【人物】父は東安といふ。大典は性謹恪で、尤も禮節を重んじ、世俗の虛譽浮榮を省みなかつた。兄弟數人あつたが多く黃檗の僧となつた。大典は特に詩文に秀で、大潮和尙について學び、廣く漢文學に通じ、師の古文辭學派の朱子學の系を受けた。又書を善くし、日本の子昂と呼ばれた。〔鷲尾〕

大東世語（だいとうせいご）　五卷　【著者】服部南郭【刊行】寬延三年【解說】南朝宋の劉義慶の「世說新語」に倣ひ、我が國古來の故事名文を漢文に譯したものである。卷一には德行・言語・政事、卷二には文學・方正・雅量・識鑒、卷三には賞譽・品藻・規箴・穎悟・夙慧・豪爽・容止、卷四には企羨・傷逝・棲逸・賢媛・術解・巧藝・寵禮・姙誕、卷五には簡傲・排調・輕詆・假譎・黜免・忿狷・尤悔・紕漏・仇隙等に分類してある。松邨九山の「藝園鉏莠」に、「大東世語は服子遷强ひて世說の文體に倣はんとして平生修する所の古文辭の格をはづして別に一趣の風流をなす。故によからぬ文字句語あまた見えたり」とある。〔佐久〕

大道或問（たいだうわくもん）　國學書　一卷　【著者】平田篤胤【成立】人の問に答へた覺書を門人碧川好尙が修訂し、同志に頒たんと百部限り板行したもの。安政四年九月好尙の序がある。【諸本】平田篤胤全集第二所收【內容】四ケ條の問答から成る小册子で、第一條、皇

國が萬國に勝れて尊い所以は、漢土は聖人・賢人の才智で法令が定められた國であるから、常に變革が行はれて天業が長久でないのに、我が國は天照大神以來一系の皇統が連綿として君臣の分明かに、大神の神勅が永久に事實として嚴存すること、天照大神は萬國を照す日輪で、我が國はその御生誕の本國であり、天皇は御子孫であるから、我が國は君國で他は臣國であること、我が國の道は武を本體として朝廷を尊崇するのに、諸外國には武力を以て王位簒奪をなすものがあること等を數へ、第二條、儒・佛の惡しき所以は、儒者の稱する堯・舜の受禪は却つて惡風の因で、これから湯武の放伐も起り、代々王位を窺ふ者をも生じ、我が國でも儒道が入つてから、大逆の者が出たとして、儒道の害惡は人倫の第一たる君臣の大義に缺けてゐる所にあるとしてゐる。又佛道については、釋迦の敎に從へば種族が絕滅するとし、神佛同一說の如きは甚だ不可であるとしてゐる。第三條、俗神道の惡しき所以は眞の神道は神國の神國たる所以を知り、神の成し置き給へる事を習ひ學び、正しき人の道を行ふ事であるのに俗神道は國體の事など夢にも知らぬ。鈴振神道・乞食神道であると罵倒してゐる。第四條、皇國臣民たるの道は、天皇の御爲めに力を盡すにありとし、所謂三忠臣として重盛・藤房・正成を擧げ、重盛に關しては「源平盛衰記」を抄出してゐる。なほ終に修訂者好尙が初學者の讀むべき書目を書き添へてゐる。【批評】「古道大意」「西籍慨論」「出定笑語」「巫學談弊」〈各別項〉等の要點を簡單に抄出したやうなもので、著者の古道精神の概要として見るべきものである。〔西尾〕

對髑髏（たくろ）　小說　【作者】幸田露伴

【發表】明治二十三年十月、「緣外緣」と題して「日本之文華」に掲載【刊行】同年六月第一短篇集「葉末集」に「對髑髏」と改題して收錄。現代日本文學全集（幸田露伴集）・露伴全集第一卷所收。

【梗概】明治二十二年四月の頃、主人公（露伴と名乘らせてゐる）は、病を得て中禪寺の奧、白根嶽の下、湯の湖のほとりの客舍に靜養した。病癒えて同じ道を引返すも厭はしく、宿の主人の留めるのもきかず、血氣に任せて俗に魂精峠と呼ぶ木叢峠（こだち）を指して分け登つた。雪はまだ深く、殊に峠の頂で案內人に別れてからは一しほ心細く、その上、道を踏み迷つて漸く目ざす沼のほとりに來た頃には、日はとつぷりと暮れてしまつた。足は痛み、雪沓は破れ、困じ果てて佇む折から、ふと燈火を見つけて辿つて行く。その家には意外にもお妙といふ美女が唯一人住まつてゐた。狐狸のわざかと疑つて見たが、それらしくもなく、女は若いに似ず悟りすましてゐる。一夜の泊りを許されて、夜一夜、女の昔語りを聞く。彼女は東京のさる豪家に育つたが、早く父を失ひ、十八の歲には母も亡せた。まだ悲しみの失せない彼女の上には緣談が降るやうにあつた。中にも、或る貴公子から深く思はれ、彼女も嫌ひではなかつたが、亡き母の遺言を守り、心を鬼にして結婚を拒んだ。彼女に焦（こが）れて病床に臥した貴公子を臨終の際に一目見てから、彼が戀しくなり、悲しみの餘り狂ひ出して、いつしかこの山中に迷ひ入り、或る高僧にめぐり遭つて悟りを開き、こゝに草庵を結んだといふのである。青貝摺の黑塗の小箱に入つてゐたといふ亡き母の遺書の內容に就いては、女はただ笑つて答へない。たま〳〵朝日紅々とさし登つて、家も人も雲霧と消え去つて、枯れ殘つた去歲の萱薄の中に我ただ一人、足下には一つの白い髑髏が轉つてゐた。村里へ下り、溫泉宿の主にきけば、去年のこと、氣の狂つた癩病を病む女乞食が山に入つたまゝ歸らないが、多分その女が山中で死んだのであらうと語つた。

對髑髏挿畫（武內桂舟）

【解說】本篇と「血紅星」（別項）とは、抒情的散文詩とも言ふべきものであるが、併し本篇はそれ自身、纏まつた一つの筋を持つてゐる。ただ作者の主觀に、詩的表現を肉付けた露伴初期の特性の最も顯著な作品なので、一概に現實性の稀薄、若しくはその假想と現實との間に橫はる矛盾等を非難すべきではない。描寫の問題よりも、作者の空想が、この異常な舞臺を作り上げ、そこに佛敎的人生觀や戀愛と運命の悲哀を語るところに特殊な味ひがある。作者も言つてゐる如く、「血紅星」と共に、支那の說話から暗示を得たものである。なほこの作は、「風流佛」に次いで世評高く、石橋忍月の如きは、「群小說界に超然たる名什」と激賞した。〔千葉〕

大貳三位（だいにのさんみ）　歌人　【姓名】藤原賢子。最初越後の辨とも云ひ、後に正三位太宰大貳高階成章の室となり、大貳三位と稱す。【閱歷】父は藤原宜孝、母は紫式部、後冷泉天皇の乳母となり、前原兼房・定賴等と親交があつた。「河海抄」序及び「狹衣下紐」に、「狹衣物語」の作者と云つてゐるが、この說は疑問である。【作品】家集を「大貳三位集」「藤三位集」又は「大貳集」と稱し、宮內省圖書寮に寫本として二本を傳へ、神宮文庫にも一本を藏する。「勅撰作者部類」によれば、後拾遺集に九首、金葉・詞花兩集に各一首、千載集に四首、新古今集に六首、新勅撰集に三首、續古今・續拾遺兩集に各一首、玉葉・續千載兩集に各二首、續後拾遺集に一首、風雅集に二首、新千載・新拾遺・新後拾遺・新續古今集に各一首の歌を載せてゐる。

【參考】紫式部と大貳三位　石村貞吉（國語と國文學四四）○狹衣物語考　櫻井秀（國學院雜誌一五ノ一〇）〔池田〕

大日本歌學史（だいにほんかがくし）　和歌　【著者】福井久藏【刊行】大正十五年、不二書房。【解說】卷頭に年表があり、著名の歌人歌學者の著作・歿年等を記してある。第一「歌學の範圍と其の起原」より、第六十一「結論」に至る迄六十一章を設けて、明治四十年頃までの歌學の變遷發達を述べてゐる。佐佐木信綱博士の「日本歌學史」（別項）と比較してみると、各々一長一短がある。この著者には、別に「大日本歌書總覽」（別項）の著作があるためであらうが

佐佐木博士の歌學史に收錄解說した歌書よりも數に於て多い。その代り、同博士の解說よりも、詳細な部分も亦少くない。而して第二章に「和歌式と漢詩の法格」と題し、或は第四章「歌合の判に見えたる歌學思想」と題し、佐佐木博士の叙述の足らない部分を補足した章もある。歌人・歌書等に對する傳記や、書誌的研究の相違もあつて、一致しない點のあるのは當然であり、又見方の相違も多少は認められ得る。それ等は容易にきめられない問題であるが、同博士が中世歌學・近世歌學と二大別して、江戸時代の堂上歌人をも「中世歌學」の末章「幽齋門下及びその系統」に一括して主としてこれを論じ、「近世歌學」の部に於ては殆ど論じてゐないに反し、この書に於ては、長流・契沖・春滿を論じた次に、「德川中期に於ける堂上派」の一章を設けて、主として論じてゐる如きも、强ひて中世・近世と分けるとしたら「國紀八論」を以てすべきであるといふ考に基くもので、注意すべきである。〔藤川〕

大日本歌書總覽（だいにほんかしよそうらん）　三册

【著者】福井久藏【刊行】上卷大正十五年八月、中卷昭和二年十月、下卷同三年八月、不二書房。【解說】著者が多年、公私の圖書館文庫或は個人の書庫をさぐつて、研究した結果、明治初年に至るまでの約六千部、三萬卷の歌書の解題を施したものである。歌書の性質、種類によつた分類法をとり、各部門、各項目に亙り、その首に總說をかかげ、その研究の沿革や書誌的の大要をのべてゐるのも極めて有意義である。上卷・中卷を十二部門に分け、上卷は歌學・撰集の二門で、下卷は家集・定數歌集・歌合・歌合集・慶弔集・奉納歌集・詠史及譯和集・歌謠集・雜體歌集・雜集の十門に分つてゐる。歌學は總說的なものと特殊的なものとの二目に分ち、總說に關するものには、歌道に關する記載に富む注意すべき隨筆を附錄とし、特殊的なものは、作歌・歌題（附詞書）・歌詞・名所・法式（附傳授・批評・附辨・索引、類句・類礎・類語）の七目に分けてゐる。撰集の部は、古典歌集・勅撰集・私撰集・類題集の四目に分ち、古典歌集は記紀歌集に關するものと萬葉集に關するものの二つに分け、萬葉集は更に諸本・書入本・類選・註釋・語釋・作家・品物・地理・類句類礎・雜考の十項に分つてゐる。家集の部門をば、御集・竹園御集・一般家集の三目に分け、定數歌集は、百首類・千首類・五十首類・三十六歌仙類の四目に分ち、百首類は更に細かく分類解說してゐる。歌合は普通の歌合及自歌合・職人合・物合・詩歌合の四目とし、歌合集は、宮中御會類・着到・行幸御幸・御家兼當諸會・竟宴の四目に分ち、慶弔集は賀集・追悼追遠集の二つとしてゐる。譯和集は、漢籍・佛典の二つに分つてゐる。歌謠集は神樂・催馬樂・風俗・朗詠・宴曲の三目を收め、雜體歌集は長歌・今樣・旋頭歌・回文・落首・片歌の六目に分ち、雜集は以上の部門に洩れたものを收め、教訓に關するもの、物名詠物に關するもの、名敎・官職儀式・武藝・卜曆等十六の目に分ちのせてゐる。下卷は五十音順の索引及び補遺として上中の卷に洩れた歌書の解題をしてゐる。本書は歌書全般の解題としては、洩れた歌書もあり多少の誤もあり、且つ解說も餘り簡略に過ぎる感があるが、併し獨力でこれだけの編著をなしたことは尊敬に値する。國書解題の如きも歌に關するものは、この何分の一にもあたらない。將來補正せらるべき點はあるが、和歌の研究に當つては必ず參考すべき書物である。

大日本國語辭典（だいにほんこくごじてん）　五册

【著者】上田萬年・松井簡治【刊行】本文（四册）は大正四年十月——同八年十二月。昭和三年十月——同四年四月に修正版刊行。索引（一册）昭和三年十月刊。【內容】假名引の國語辭書で、上田・松井兩氏の十五年に亙る努力の結果に成る。所收の語彙は、上古から現代に至る一般日本語並びに普通の學術語、國語化した外來語（漢語・和蘭語・梵語・英語・獨逸語・佛蘭西語等）及び現在東京附近に行はれる方言（他の諸地方の方言は除く）を收め、又熟語・俚諺・格言等をも收めて、その語數二十餘萬に及んでゐる（但し、地名・人名・書名等固有名詞は除いてある）。これ等の語を、すべて歷史的假名遣に從つて平假名で標出し、振假名で發音を示し、これに宛つべき漢字或は西洋語を擧げ、品詞別を示し、語意を說き、用例及び出典を示し、或は圖解を加へてゐる。なほ語源は確實で、且つ語釋に必要なものだけを擧げた。【價値】本書は、現在に於ては一般的國語辭書として最も進步したものである。殊に語彙の豐富なことと一々典據を擧げたこととは、從前の如何なる書よりも勝れてゐる。併し語彙についても、奈良朝平安朝頃の語は、よく收錄されてゐるが、鎌倉以後になると、脫漏も少くなく、釋義の妥當でないものも時にあるやうである。かやうなものの補正は、この書で原則として缺いた語源の研究と共に、將來の辭典編纂者に遺された事業である。〔龜田〕

大日本國法華驗記（だいにほんこくほつけげんき）　「鎭源」を見よ。

大日本史（だいにほんし）　史書　三百九十七卷

【著者】德川光圀【成立】光圀は、正保二年（十八歲）「史記」の伯夷傳を讀み、感ずる所あつて修史の志を立て、明曆三年春、史局を江戸駒込の下屋敷に設け、二月二十七日初めて府僚の文事に長ずる者をして編修に從事せしめた。寬文十二年には、史局を小石川の藩邸に移し、彰考館と名づけ、徧く天下の碩學を招聘し、遺書を各地から搜索せしめて、益々その事業を擴大し、元祿十一年西山隱栖後は、史館を水戸に移し、爾來子孫相承け、十二代二百五十年を經て明治三十九年に至つて完成し、同年十二月、侯爵德川圀順が朝廷に獻上して乙夜の覽に供した。彰考館總裁として修史の業を督した者は、人見傳（懋齋）・吉弘元常・佐佐宗淳（十竹）・中村顧言・鵜飼眞昌・安積覺（澹泊）・大串元善・栗山愿（潛鋒）・酒泉弘（竹軒）・三宅緝明（觀瀾）・佐治毘・大井廣・神代熹（鶴洞）・小池友賢・中島爲貞・打越直正（樸齋）・依田處安・增子淑時・河合正修・德田庸・名越克敏・鈴木重祐（白泉）・富田敏貞（長洲）・野口祐・大場景明・立原萬（翠軒）・高橋廣備・菊池重固・川口長孺・渡邊騰・藤田一正（幽谷）・青山延于・會澤安・杉山忠亮・豐田亮（天功）・栗田寬（栗里）等である。【諸本】享保五年十月二十九日、本紀七十三卷、列傳百七十卷、並に序目修史例、引用書目、すべて二百五十卷、繕寫功竣り、幕府に獻納した。これを享保本といふ。ついで紀傳檢閱の議起り、再訂に從事し、文化七年、紀傳を淨寫して朝廷に獻じ、嘉永年間これを刊行した。すべて百册。嘉永本といふ。その後、明治四十四年、吉川弘文館から木版本二百二十六册として刊行し、昭和四年、義公生誕三百年記念として大日本雄辯會から活字本十七册として刊行した。なほ外に、山路愛山の「譯文大日本史」（明治四十五年刊、後樂書院）がある。

天皇の御爲めに力を盡すにありとし、所謂三忠臣として重盛・藤房・正成を擧げ、重盛に關しては「源平盛衰記」を抄出してゐる。なほ終に修訂者好尙が初學者の讀むべき書目を書き添へてゐる。【批評】「古道大意」「西籍概論」「出定笑語」「巫學談弊」（各別項）等の要點を簡單に抄出したやうなもので、著者の古道精神の概要として見るべきものである。〔西尾〕

對髏譫（たくろい）　小說　【作者】幸田露伴

人の留めるのもきかず、血氣に任せて俗に魂精峠と呼ぶ木叢峠（こだち）を指して分け登つた。雪はまだ深く、殊に峠の頂で案內人に別れてからは一しほ心細く、その上、道を踏み迷つて漸く目ざす沼のほとりに來た頃には、日はとつぷりと暮れてしまつた。足は痛み、雪沓は破れ、困じ果てて佇む折から、ふと燈火を見つけて辿つて行く。その家には意外にもお妙といふ美女が唯一人住まつてゐた。狐狸のわざ

文詩とも言ふべきものであるが、併し本篇はそれ自身、纏まつた一つの筋を持つてゐる。ただ作者の主觀に、詩的表現を肉付けた露伴初期の特性の最も顯著な作品なので、一概に現實性の稀薄、若しくはその假想と現實との間に橫はる矛盾等を非難すべきではない。描寫の問題よりも、作者の空想が、この異常な舞臺を作り上げ、そこに佛敎的人生觀や戀愛と運命の悲哀を語るところに特殊な味ひがある。作者も言つてゐる如く、「血紅星」と共に、

大日本歌學史（だいにほんかがくし）　和歌　【著者】福井久藏【刊行】大正十五年、不二書房。【解說】卷頭に年表があり、著名の歌人歌學者の著作・歿年等を記してある。第一「歌學の範圍と其の起原」より、第六十一「結論」に至る迄六十一章を設けて、明治四十年頃までの歌學の變遷發達を述べてゐる。佐佐木信綱博士の「日本歌學史」（別項）と比較してみると、各々一長一短がある。この著者には、別に「大日本歌書總覽」（別項）の著作があるためであらうが

【内容】本紀七十三卷、列傳百七十卷、志百二十六卷、表二十八卷から成る。本紀・后妃列傳・皇子列傳・皇女列傳・諸臣列傳・將軍列傳・將軍家族列傳・將軍家臣列傳・文學列傳・歌人列傳・孝子列傳・義列列傳・烈女列傳・隱逸列傳・方伎列傳・叛臣列傳・逆臣列傳・諸蕃列傳・神祇志・氏族志・職官志・國郡志・食貨志・禮樂志・兵志・刑法志・陰陽志・佛事志・臣連二造表・公卿表・國郡司表・藏人檢非違使表・將軍屬僚表に分ち、一項に數十卷を費したものもある。特色としては神功皇后を皇妃に列し、大友皇子(弘文天皇)を本紀に掲げ、神器の所在に據つて南朝を正統と定めたるなどは、德川光圀が最も心を用ひた所で、本書編纂の目的が皇統の正閏を正し、人臣を是非し、尊王の大義を明かにするに在つたのであるから筆鋒頗る端嚴で、勤王思想を鼓舞し、明治維新の大業を成すに與つて大功のあつた名著である。〔佐久〕

大日本書史（だいにほんしよし）　書目　二册　【編者】フオン・ウエンクステルン(Friedrich von Wenchstern)【本名】Bibliography of Japan. 題簽には、「大日本書史」とある。内題は、A bibliography of the Japanese empire. とある。【刊行】第一卷西紀一八九五年ライデン市(蘭)、第二卷同一九〇七年(明治四十年)神戸市。【解説】歐洲語で書かれた日本に關する各方面に亙る文獻の目錄である。第一卷は西紀一八五九年(安政六年)より同一八九三年(明治二十六年)の間の刊行書を含み、それ以前に於ける書誌として、レオン・パジェス(Léon Pagès)の「日本圖書目錄」(Bibliographie Japonaise)をその儘覆刻して卷末に添へてゐる。第二卷は前卷を承けて西紀一八九四年(明治二十七年)から同一九〇六年(明治三十九年)に至る刊行書を含む。これは編者が我が國に來つて出版したので、多くの日本人の援助を受け、頗る詳密になつてゐる。【附記】本書の續編として、オスカア・ナホッド(Oskar Nachod)によつて第三・四卷(西紀一九〇六年より一九二七年に至る刊行書)が一九二八年に刊行されてゐる。〔土井〕

大日本史論贊（だいにほんしろんさん）　史論書　十卷　【著者】安積澹泊【解説】德川光圀が「大日本史」(別項)を編述してより、享保年間に至つて幕府は屢々促して史を獻ぜしめた。時に論贊未だ成らなかつたので、乃ち澹泊に命じてこれを草せしめ、享保五年十二月二十九日、始めて幕府に進獻した。これを享保本と稱する。然るに文化六年二月、水戸藩主德川治紀の時、上世遠しと雖も、臣子の分として皇祖・皇宗の得失を論ずるは事體宜しからずとの說に由り、「大日本史」の中より論贊を削除した。現行の「大日本史」には論贊はない。〔佐久〕【參考】漢和兩文大日本史論贊集　井川巴一

大日本佛教全書（だいにほんぶつけうぜんしよ）　叢書　百五十册　別卷十册　【編者】佛書刊行會(南條文雄)【刊行】明治四十五年——大正十一年【内容】目錄・總記・諸經・華嚴・法華・台密・眞言・悉曇・淨土・融通念佛・時宗・戒律(附服具)・三論・法相・因明・倶舍・起信・禪宗・行事・宗論・史傳・補任・系譜・地誌・寺誌・日記・詞藻・雜の二十八部に分類される。その資料の豐富である點、佛教研究者は勿論、一般に取つても缺くべからざる集大成である。殊に附册に本書の略目錄・總目錄・分類目錄・著者名目錄・書目索引があるのは至便この上もない。〔土井〕

諦忍（たいにん）　國語學者　【姓】初め仙石氏、年少の時に出家した。【名】妙龍　【字】諦忍　【號】雲華社・空華　【生歿】寶永二年六月二十二日生れ、天明六年(一七八六)六月十日寂。享年八十二　【閲歷】諦忍は美濃國賀茂郡山上村の人で、父は仙石忠續と云ふ。七歳の時同國の神照寺檀道の弟子になり、九歳の時剃髮、享保六年(十六歳)檀道の勸めに依つて、尾張國興正寺の點阿和尚の弟子になつた。同十三年正月具足戒を受けた。同十九年正月、尾州侯德川宗春の命に依り、師點阿の後を繼いで、八事山興正寺第五代の住職になつた。爾後天明六年示寂するに至るまで興正寺に居り、大に宗教のために盡した。遺偈に云ふ、「四大飛自性、自性飛四大、何物是本性、阿鑁覽唭欠」と。【業績・著述】諦忍は僧侶であり、その專門とする所は、固より佛教學で、これに關する著書は甚だ多い。國語學に關しては、僅に「以呂波問辨」一卷(別項)及び本書を反駁した「駁以呂波問辨」(別項)を更に駁するために書いた「神國神字辨論」一卷(以呂波問辨參照)があるのみである。この二書は共に神代文字の存在を主張したもので、後に平田篤胤に重大な影響を與へたものである。【參考】諦忍和尚略年譜　〔龜田〕

大公（だいのきみ）　「俊惠」を見よ。

鯛の味噌津（たひのみそづ）　噺本　一册　【作者】新場老漁(蜀山人)【名稱】「鯛の味噌吸に四方の赤、のみかけ山の鳶烏」などとは、明和・安永期の江戸に於ける通言である。それに「(上略)めつたにうりたいはなしたい、鯛の味噌吸に四方山の、はなしにひれはなけれども、尾に尾をつけて書つゞくれば、新しうこそ腥けれ」と序にいつてゐる。【刊行】安永八年【諸本】滑稽文學全集第十一卷・蜀山人全集(新百家說林)・滑稽本集(日本名著全集)等所收。【解説】四十五話より成る。古い話も同巧異曲の形式で入つてゐる。例へば、座中の色男は皆に饗應するといふ決議の時、己惚が迷惑顏をするといふ。「色男」は「聞上手」(別項)の中にあり、或は、莖も葉も花も實も紫色である木を見て來たといひ、皆から珍しがられ、後でそれが茄子であつたといふ話は、同年代に出た志丈の「壽々波羅井」(別項)にも出てゐる。併し漸く噺は江戸風となり、理に落ちた滑稽となつて來て、黃表紙・洒落本・滑稽本・狂歌などとの內面的交渉が思はれる。「ゑびす膳」「座頭」「提灯」「佐治兵衞」「すりこ木」「土左衞門」「鷺」「比目魚」などの小噺は、少くとも蜀山人風の狂歌となる可能性があると思ふ。かく本書には小噺の內容も時代と共に移り、漸次天明調を作る傾向も看取出來る。出版年代及び作者未詳の「新作落咄口拍子」に、本書からそのまゝ取つた咄が半數を埋めてゐるのは、本書の影響と見るべきである。〔小柴〕

對の屋姫（たいのやひめ）　「岩屋の草子」を見よ。

頽廢派（たいはいは）　文學論　【名義】デカダンス(Decadance)の譯語であつて、頽唐派とも呼ばれ、十九世紀末の懷疑的思想の影響を受け、靈肉の苦惱の結果、人生に對する倦怠をどうすることも出來ず、又信賴すべき何物をも認めず、强ひてただ或る情調に浸り、何等かの强い刺戟を求めて、この苦惱を紛らさうとする文學者等の一派に對して與へられた名稱である。【由來】頽廢卽ちデカダンとは「墮落せる人」を意味する語であつて、初め佛蘭西の文明史家が、ローマの文明の爛熟衰滅した時代の人々に名づけたものであるが、後に轉じて文學及び藝術の批評に用ひらるゝに至つたもので、この稱呼は、先づ佛蘭西の頽廢的

仏蘭西の詩人の一派。例へばボードレール、マラルメ、ヴェルレーヌ等に冠せられた。頽廢的文學は、必ずしも十九世紀に至つて始めて起つたものでないが、一般にこの名稱によつて呼ばれてゐるのは、この近代に於ける頽廢派、即ち一八八二年頃、パリーのカルティユ・ラタン（Quartier Latin）のカフェーに集つて痛飲夜を徹し、悲愁の歌を歌つた一群の象徴派詩人を指してゐる。而して佛蘭西に於ては、シャルル・ボードレールがその代表者であつて、この影響は英吉利に及び、オスカア・ワイルド、スウィンバーン等の謂はゆる唯美主義者の一團となり、やがて獨逸・伊太利等に入り、ベルギーその他の各國へも傳播して行つた。ベルギーに入つたものは、メーテルリンクの象徴的な傾向となつて現はれ、英國に於けるワイルド等の唯美主義と對照される。

【特徴】齊しく頽廢派といつても、それ〴〵特色があつて一概には言へないが、大體に於て、マックス・ノルゲウの佛蘭西頽廢派に就いてあげたものが、頽廢派一般の特色でもある。（一）反科學的傾向があつて、神祕的・象徴的である。（二）甚だしく自己本位である。（三）技巧的架空的なるものを偏愛する。（四）社會制度に對して無感覺である。（五）取材に於て惡を偏重する傾向がある。なほこの外に、形式を偏重する傾向もこの派の特色であるが、要するにこれ等の傾向は、心的生活が行き詰り、肉的生活の欲望が極端に嵩じて、困憊疲勞を感じ、鋭くなつてゐる近代人の感受性は益々刺戟されて、焦慮の果、更に努力して目的や理想に向つて勇往邁進するといふ事も出來ず、自暴自棄に陷つて、ただ僅かに神經に強烈な刺戟を與へて、この苦惱を忘れようとする病的な現はれにすぎない。

【日本に於ける頽廢派】明治二十一二年前後、宮崎湖處子・矢崎嵯峨の舍・森鷗外等によつて外國のリリシズムの取入れられた時、既にこの萌芽が見え、なほこのリリシズムは雜誌「文學界」などによつて益々發展し、浪漫主義文學を生んだのであるが、これ等は未だ頽廢派といふ程のものではない。眞に頽廢派と稱し得べきものは、明治の末期から大正三・四年までの文藝界に一勢力となつてゐた新浪漫主義の一派であつて、殊に谷崎潤一郎・永井荷風に於て最も顯著である。潤一郎は明治四十三年の「刺青」（別項）に於て既に嘆美的色彩を見せてゐるが、大正元年から同三・四年に亙つて著はした「惡魔」「續惡魔」「熱風に吹かれて」「捨てられるまで」「お艷殺し」（別項）「お才と巳之介」などになると、最早單なる美の追求ではなく、異常なる美、日常生活の表面では見出されぬ美を求め、又官能の快感を求めるにしても、病的な、又は惡魔的な官能により、多くの滿足と快感とを求めるやうなところがある。彼は、この頽廢的な傾向から次第に轉じて、大正六・七年頃に書いた「人面疽」「ハッサン・カンの妖術」「玄朴三藏」及び「魔術師」などに於ては、神祕的傾向を示してゐる。全體に、彼の作品は、享樂的な、神祕的な、そして惡魔的な傾向を持つてゐる。永井荷風は、初め自然主義的傾向を持つてゐたとは云へ、彼の性格は、寧ろ唯美的で、明治三十六年、アメリカに旅し、同四十二年佛蘭西に行つてからは、頽廢的傾向を示し、後になるに從つて、益々この傾向を強めて行つた。殊に大正時代の作「見果てぬ夢」「風邪ごゝろ」「暴君」「わくらば」「腕くらべ」（別項）等になると、享樂的・官能的・快樂的要素が一層目立つて來てゐる。二人はそれ〴〵異なつた特色を持つてゐるが、共に頽廢的な色彩が濃厚で、潤一郎が、より多くオスカア・ワイルドとかエドガア・アラン・ポーとかの唯美的傾向、神祕的傾向を代表するものとすれば、荷風はボードレール、ヴェルレーヌの頽廢的・哀感的要素を、より多く代表してゐる。

【參考】喜水亭閑人の『淨瑠璃本目錄』・大通世界卷二（幸堂得知編）・黃表紙名作集（關根黙庵編）・黃表紙傑作集（蘇武編）・黃表紙百種（櫻井國文庫）・黃表紙二十五種（日本名著全集）・黃表紙集（近代日本文學大系）等所收。

【題材】謠曲「田村」「忠度」及び茨木傳說。

【梗概】不景氣のため、千手觀音は御手を損料貸にせんとの御誓願で、山師の面の皮千兵衞が、千兩で借りて損料貸にする。茨木は觀音の腕を借りたが、毛が生えてゐないので使はれず、神田の臺の與吉に毛を生して貰ふ。薩摩守忠度は右の腕を斬られたのに、周章てて左腕を借りて來、右の手を借りにやりたまへば、最早貸切りで、漣やの短册も左文字に出來て外聞が惡く、讀人不知とする。手の無い傾城は觀音の御手を借りて客を騙したが、損料どうすることも出來ず、又信賴すべき何物をも認めず、强ひてただ或る情調に浸り、何等かの强い刺戟を求めて、この苦惱を紛らさうとする文學者等の一派に對して與へられた名稱である。【由來】頽廢即ちデカダンとは「墮落せる人」を意味する語であつて、初め佛蘭西の文明史家が、ローマの文明の爛熟衰滅した時代の人々に名づけたものであるが、後に轉じて文學及び藝術の批評に用ひらるゝに至つたもので、この稱呼は、先づ佛蘭西の頽廢的

大悲千祿本

對比（ひい）「對照」を見よ。

大悲千祿本（だいひのせんろくぼん）　黃表紙一册　五丁九圖　【作者】芝全交　【畫工】北尾政演（山東京傳）　【角書】御手料理御知而已（おてりやうりおしるのみ）　【名稱】御手料理御汁の實、大根の千六本のもぢりで、御手や、大悲や、千に千手觀音をきかせてある。【刊行】天明五年、

鯛の味噌津（たひのみそづ）　噺本　一册　【作者】新場老漁（蜀山人）　【名稱】「鯛の味噌吸に四方の赤、のみかけ山の鳶烏」などとは、明和・安永期の江戸に於ける通言である。それに「（上略）めつたにうりたいはなしたい、鯛の味噌吸に四方山の、はなしにひれはなけれども、尾に尾をつけて書つゞくれば、新しうこそ腥けれ」と序にいつてゐる。【刊行】安永八年　【諸本】滑稽文學全集第十一卷・蜀山人全集（新百家說林）・滑稽本集（日本名著全集）等所收。【解說】

【解說】歐洲語で書かれた日本に關する各方面に亙る文獻の目錄である。第一卷は西紀一八五九年（安政六年）より同一八九三年（明治二十六年）の間の刊行書を含み、それ以前に於ける書誌として、レオン・パジェス（Léon Pagès）の「日本圖書目錄」（Bibliographie Japonaise）をその儘覆刻して卷末に添へてゐる。第二卷は前卷を承けて西紀一八九四年（明治二十七年）から同一九〇六年（明治三十九年）に至る刊行書籍・雜誌・神道・儒教・佛教・哲學・倫理・教育・宗教・文學・藝術・語學・法律・經濟・統計・醫學・衛生・産業・工藝・軍事・海事・地理・旅行・人類・民俗・考古・人物・傳記・系譜・紋章・家政・娯樂・遊戲・運動・美術・音樂・舞踊・演劇・映畫・寫眞・繪畫・書・彫刻・工藝・建築・庭園・茶道・華道・香道・武道・相撲・柔道・劍道・弓道・馬術・水泳・潛水・釣・獵・飼育・園藝・農・畜・水産・獸・蟲・魚・鳥・植・動・生・理・化・數・天・地・氣・鑛・物・工・機・電・化・醫・藥・衛・産・家・料・理・食・衣・住・建・土・都・交・通・運・郵・電・商・業・財・經・金・銀・保・險・會・社・法・政・行・官・吏・軍・兵・警・刑・罪・獄・教・育・學・校・文・化・宗・教・哲・倫・理・心・理・論・法・相・因・明・倶・舍・起・信・禪・宗・行・事・宗・論・史・傳・補・任・系・譜・地・誌・寺・誌・日・記・詞・藻・雜の二十八部に分類される。その資料の豐富である點、佛教研究者は勿論、一般に取つても缺くべからざる集大成である。殊に附册に本書の略目錄・總目錄・分類目錄・著者名目錄・書目索引があるのは至便この上もない。　〔土井〕

諦忍（たいにん）　國語學者　【姓】初め仙石氏、年少の時に出家した。【名】妙龍　【字】諦忍

借であるから、時々取りに來られて當惑する。無筆の者が、御手を借りて手紙や證文などを書くと、梵字ばかりで一つも通用せず、只返すのも損だとて、爪に火を點して蠟燭の代用にする。これが手燭の始まりと洒落れる。田村麿は鈴鹿山の鬼神退治の宣旨を受けたが、千の御手が無くては、一度放せば千の矢先と云ふ狂言が出來ぬので借りに來る。觀音は千兵衞と相談して貸出した手を回收し、また田村麿に貸して儲ける。取戻した手を檢査すると、遊女に貸したのは指が切つてあり、喧嘩して手傷を負つたのもあり、鹽屋へ貸したのは鹽辛く、紺屋へ貸したのは青く、下女に貸したのは味噌臭く、飴屋のはねば〳〵し、飯炊のは凍傷だらけ、搗屋のは肉刺だらけである。田村麿は九ツの鐘を合圖に手を返濟する約束で、鬼神退治に出かける。

【構想】本書出版の二年前、天明三年三月十八日から六月八日迄、淺草觀世音の地内の靈佛を殘らず開帳し、本堂と仁王門は修理された。同年江戸の諸寺にも觀世音の開帳が頻繁に行はれ、更に鎌倉法性坊の本地觀世音、下總國等妙寺の十一面觀世音など、地方からの出開帳もあり、天明四年三月には、山城國宇治平等院の如意輪觀世音の開帳が永代寺で行はれた。かゝる開帳の儲けと世の不景氣とにヒントを得、謠曲「田村」への接續から千手觀音に捻り、重心を手に置き、諸國の饑饉、米價騰貴・生活難から、世智辛く損料貸の奇警な趣向を生み出した。【史的地位】觀世音に題材を得てゐる作品は枚擧するに暇がない。但し本書のやうな手に依つた趣向は、稀に見る所である。淺草觀音を千手觀音にした手法に、一拜壽仁王參（別項）を加へ、更に教訓味を挿入した「枯木花大悲利益」（享和二年刊、山東京傳作）がある。【價値】僅かに五丁物一册で、よく黃表紙の世界に手を生かしてゐる傑作である。洒落・附會・地口・作り替へ等にそつの無い作品である。當り作であつたが、傳本は極めて少い。再版物さへも稀である。作者はこの作の重點を、不景氣と僧侶及びその世話人等の開帳による金儲に置きながら、素知らぬ顏に取り澄してゐる。繪組は細かく、地及び詞書とよく調和し、渾然たる趣の出來榮えである。遊女の姿態は繪本「新美人合自筆鏡」（天明四年刊、北尾政演畫）に髣髴たる所がある。三馬所選名作二十三部の内。〔小池〕

大府宣（たいふせん）　古文書　【解說】太宰府の都督から在廳官人に下す文書。國守の廳宣（別項）と同樣のものである。後世、周防の大内義隆が太宰大貳に任ぜられて、この大府宣を出してゐる。

大府宣　太宰府在廳官人等
可早任先例遂行筥崎宮五月會事
副下
宮寺解狀一通
右件子細、具載于解狀、有限神事無故闕怠之條、事實者、尤以不穩便、早停止新儀張行、任先例、宜令遂行彼神事之狀、所宣如件、在廳官人等宜承知、依宣行之、以宣、
嘉禎四年七月　日
權大納言兼都督藤原朝臣（花押）

大佛開眼（だいぶつかいげん）　戲曲　五幕十二場　〔伊木〕

【作者】長田秀雄　【發表】大正九年四月、雜誌「人間」【刊行】翌年新潮社より單行、現代戲曲全集（長田秀雄篇）・日本戲曲全集第四十一卷所收。

【梗概】天平十五年、聖武天皇は盧舍那佛金銅大像建立の勅を發し、大和の平城京に地をトし、諸國に賦役して鑄造の大工事を始められた。國公麿がその造營の長に擧げられたが、肝心の鑄型は行基大僧正の撰で、託阿眞玉の手に成る雛形に據つて造られる事になつた。初め楯戸辨麿が唐土の樣式を追つて紫香樂に鑄型を造り、犍馱羅風を奉ずる公麿に斥けられて失脚したが、今や眞玉の日本式な獨創的原型が採用されるに至つたので、公麿は不滿不快を禁じ得ないのだつた。併しこれも一つには、時代の背景をなす思想的・政治的勢力の消長交錯を反映するものに外ならなかつた。卽ち唐土に修業し西域の佛法を傳へて渴仰者を得てゐた玄昉法師が貶せられて、稱名念佛を根本とし、本地垂迹說を提唱する行基大僧正の敎がひろく民心を捉へる時勢になつてゐた。そして朝廷では道祖王に皇位を繼がせようとする橘の一族と、阿倍内親王を擁する藤原氏の確執が次第に烈しくなり、橘奈良麿は一味を糾合して密々謀反を策し、藤原仲麿は相模資人を間者に入りこませるのみか、大神杜女に邪神を祭らせて相手を調伏せしめてゐる。その間聖武天皇の讓位あり、行基菩薩の入滅があつたが、工事は着々として進捗し、公麿が辨麿を欺き唆かして眞玉を刺殺させたものの、前代未聞の大佛鑄造は遂に完成したのである。眞玉と公麿の娘葛城若女、相模資人と杜女の養女筑紫娘子との二つの戀の挿話に美しく彩られつつ、天平十八年より天平勝寶四年までの、大佛をめぐる奈良朝繪卷が次々と展開され、猿澤池畔大佛鑄造御願の燃燈供養に始まり、開眼された大佛の掌上に於ける狂へる葛城若女の死を以てこの戲曲は終る。第一幕、廣い路上、平城京内の市場の二場。第二幕、地獄谷の岩窟、大佛造營場、菅原寺東南院の内部の三場。第三幕、春日野の奥、鑄造工事場の二場。第四幕、占星臺の上、手向山の中腹、藥師寺僧綱所の三場。第五幕、大佛殿前、同じくその内部の二場。

【批評】これは、單なる年代紀劇として史實を連結せしめた史劇ではなく、作者の文化史觀を吐露した野心的な作品で、作者自ら語る如く、「日本將來の文化の傾向を奈良朝時代を借りて考へて見た戲曲である」。所謂奈良朝文化の精華も、詮ずるに外國の影響は竟に影響として終り、結局日本人が自身を表現するのが眞に日本の文化として殘つたことを示した。その象徵とも云ふべき、眞玉の創案に成る盧舍那佛像が、あらゆる葛藤を超えて紫摩黃金の御肌を輝かすに至るのを描いた力作で、その構想の雄大なるうちに場面の布置に變化あり、時代色を現はす抒情味の流れによく自家の史觀を熔合し、渾熟せる技巧に作者が全幅の力量を遺憾なく發揮したものである。作者の業績中一二に居る傑作たるは勿論、そのスケェルの大と、異色ある內容とに依つて、大正期所產の戲曲を通じても、特に推奬に値すべき佳品たるを失はない。〔水木〕

大佛供養（だいぶつくやう）　「景淸物（かげきよもの）の謠曲」を見よ。

大佛供養物語（だいぶつくやうものがたり）　御伽草子一卷【作者】不詳【成立】室町期。寫本の卷末に、「享祿四年二月二日書寫畢」とあり。【諸本】御伽草紙（有朋堂文庫）・大日本佛敎全書（東大寺叢書第一）所收【題材】法談物。法然聖人の法德を說く。

【梗概】春乘坊重源、東大寺を勸め造つて入唐し、歸朝の際に極樂の曼陀羅、五祖の眞影を將來したので、東大寺に於て法然聖人を導師として供養を營むこととなつた。紹朝將軍を初

鎌倉殿へ、叡山を憚つて導師辭退を申出た。朝廷から奏聞したが僉議區々として決せず、終に梶原の提案で三座の說法と定まり、闔の籌に依つて山は一番、南都は二番、寺は三番と取り當つた。建久六年乙巳十一月二十八日、諸儀嚴めしく執行はれた三說法は何れも聽衆を慊焉たらしめたのに、鎌倉殿の請により更に法然聖人の法筵が開かれ、大衆の反感、俗人の侮蔑の中で、法華經の功德、女人成佛の素懷、念佛往生の本願に就いて、午の時から酉の時までの說法に、滿座感涙に咽ばぬ者はなかつた。〔島津〕

大佛殿萬代礎（だいぶつでんまんだいのいしずゑ）「鎌倉袖日記」を見よ。

太平記（たへいき）　戰記物語　四十卷【作者】「洞院公定日次記」應安七年五月三日の條に「傳聞去廿八九日之間、小島法師圓寂云々。是近日翫ニ天下一太平記作者也。凡雖レ爲ニ卑賤之器一有ニ名匠聞一可レ謂ニ無念一。」とあるによつて、小島法師を「太平記」の作者とするのが普通である。併し小島法師の人物事蹟は明かでない。星野博士は、小島法師を以て兒島高德であらうといふ說を立ててゐるが、これは單なる臆說に過ぎないから、俄かに信じ難い。藤田德太郎氏が、「小島法師を以て太平記を語る物語僧の一人であつたらう」といつてゐる（歷史と國文學、昭和六年五月號）のは、一說として見るべきであらう。今川了俊の「難太平記」に、「此記の作者は宮方深重の者にて、無案內にて、押て如レ此書たるにや、寔に尾籠のいたりなり」と記してあり、また「太平記」の記事を見ても、兩朝に肩をもつてゐることは爭はれたことは承認してよからうと思はれる。なほ管政友は、「比叡山の事を最も委しく記してゐるから、作者は山法師などであらう」といつてゐる（菅政友全集）。禪宗の思想が本書に著しくあらはれてゐるところから見ると、作者は禪僧であつたのかも知れぬ。尤も「太平記」の原本の作者は一人で、それは恐らく小島法師であつたらうと思はれるが、後で修正して書き繼いだ際には、幾人もの手にかけられてゐるやうであり、修正や書き繼ぎに關係した筆者は幾人もあつたものと思はれるから、叡山や禪宗に關係の深い書きぶりなどは、後で修正した際にあらはれたものであるかも知れない。「太平記理盡鈔」には、「太平記」作者として武將や僧侶を十六人ほど擧げてゐるけれども、これには何等の根據もない。【名稱】「太平記理盡鈔」に、本書は、初め「安危由來記」といひ、次に「國家治亂記」とし、三度目に「國家太平記」と改め、四度目に「天下太平記」といつたとあるけれども信じ難い。「洞院公定日次記」「公文慶承法眼狀」「難太平記」などに、太平記と見えてゐるから、本書は、最初から「太平記」と稱してゐたことは明かである。そして戰亂の顚末を書いてある本書に、「太平記」といふ名稱を附してあるのは、爭亂が一時治まつて、京都附近が太平になつた時に、事變の過程を叙寫したところから來てゐるものであらう。

【成立】「難太平記」の記事によつて按ずるに、法勝寺の惠珍上人が「太平記」三十餘卷を足利直義の許に持參したのを玄惠法印に讀ませられたところ、都合の惡いことや誤もあつたから、修正するやうにといふ命令があつて中絕したのを、直義の許に持參した「太平記」は三十餘卷であつたのに、現存「太平記」には、卷二十七に玄惠法印末期の事を載せ、卷三十に直義終焉の事を記してあるから、當時の本は、現存の本とは趣を異にするものであつたことは明かである。そして「太平記」の記事や諸實錄や當時の時勢などから考察すると、玄惠が直義の命によつて讀んだ「太平記」は、尊氏・直義等が西國から東上して吉野方の目ぼしい諸將を斃し、やゝ安堵して京都に定住することができるやうになつてから以後のことであり、また玄惠の歿年たる正平五年（觀應元年）以前のことであると思はれるが、この間に於て、天下が一時靜謐に歸した時代を求めると、興國五年（康永三年）頃から正平元年（貞和二年）頃に至る約三年ばかりの間を擧げなければならぬので、「太平記」の成立は、興國の末から正平の初めにかけた數年間にあるものと考へられる。なほ、「太平記」天文本卷一卷頭に、「依レ之海內大ニ亂テ天下未レ安、狼烟天ヲ翳、鯨波ヲ動ス今ニ至ルマデ廿餘年」とあり、「銘肝腑集鈔」中の太平記遺編にも、「今ニ至ルマデ廿餘年」と見えてゐる。これは「太平記」成立の時代を示す一つの目標と見る事ができる。神田本・西源院本・寶德本・東京帝國大學本等には、この「二十餘年」とあるのを「三十餘年」とし、その他の諸本には「四十餘年」としてある。吉野時代の爭亂の發端たる元亨四年から起算して二十餘年後に當るのは、興國四・五年から正平五・六年までの間であつて、前に推定した「太平記」の成立時代と正に時代が符合し、この推定說を裏書する。次に元亨四年から三十餘年ほど降ると、「丁度正平十一年頃（康安元年頃）に當るのである。この頃天下は爭亂が絕えないが、たまゝ尊氏逝去して世運に一轉機を來したので、それを機會として改修し、「二十餘年」を「三十餘年」と改めたものと思はれる。「太平記」の獲麟たる正平二十三年（應安元年）は、元亨四年から四十五年後に當るから、この「四十餘年」といふ語に相當する年代の範圍內に於て、本書が脫稿したものと考へられる時期は、正平二十三年（應安元年）から文中元年（應安五年）まで約五年ばかりの間である。然るに、本書卷三十九（南都本・野尻本・島津本の卷四十、前田本は卷四十一）「法皇御葬禮事」の條に、「繼體ノ天子今上皇帝御手自ラ一字三禮ノ紺紙金泥ノ法華經ヲアソバサレテ五日八講十種供養アリ」といつてあるが、光嚴院追福のため御八講が行はれたのは、應安三年七月のことであり、こゝに今上皇帝といつてあるのは後光嚴院に當らせられ、この記事の成つたのは後光嚴院御在位中の事と見なければならぬが、後光嚴院の御遜位は應安四年三月二十三日の事であるから、「太平記」の大成したのは應安三年（建德元年）七月以後、同四年（同二年）三月二十三日までの間にあるものと見られる。なほ卷三十五（野尻本・前田本は卷三十六）「北野通夜物語事」の條に、或る雲客の話として、「今元弘ヨリ以來天下大ニ亂テ三十餘年一日モイマタ靜ナル事を得ス」といつてあるが、元弘の擾亂以來三十餘年といふと、正平十七八年（貞治一・二年）頃から建德一・二年（應安三・四年）頃までに當り、本書の卷首に、「今ニ至ルマデ四十餘年」（これは元亨四年發亂當時から起算したもの）とあるのと大體に於て年代が一致し、これまた本書の大成期を建德

等院の如意輪觀世音の開帳が永代寺で行はれた。かゝる開帳の儲けと世の不景氣とにヒントを得、謠曲「田村」への接續から千手觀音に捻り、重心を手に置き、諸國の饑饉、米價騰貴・生活難から、世智辛く損料貸の奇警な趣向を生み出した。【史的地位】觀世音に題材を得てゐる作品は枚擧するに暇がない。但し本書のやうな手に依つた趣向は、稀に見る所である。淺草觀音を千手觀音にした手法に、「拜壽仁王參」（別項）を加へ、更に教訓味を挿入したもの、前代未聞の大佛鑄造は遂に完成したのである。眞玉と公麿の娘葛城若女、相模資人と杜女の養女筑紫娘子との二つの戀の挿話に美しく彩られつつ、天平十八年より天平勝寶四年までの、大佛をめぐる奈良朝繪卷が次々と展開され、猿澤池畔大佛鑄造御願の燃燈供養に始まり、開眼された大佛の掌上に於ける狂へる葛城若女の死を以てこの戲曲は終る。第一幕、廣い路上、平城京內の市場の二場。第二幕、地獄谷の岩窟、大佛造營場、菅原寺

知、依宣行之、以宣、

嘉祿四年七月　日

權大納言兼都督藤原朝臣（花押）

大佛開眼（だいぶつかいげん）　戲曲　五幕十二場〔伊木〕

【作者】長田秀雄【發表】大正九年四月、雜誌「人間」【刊行】翌年新潮社より單行、現代戲曲全集（長田秀雄篇）・日本戲曲全集第四十一卷所收。

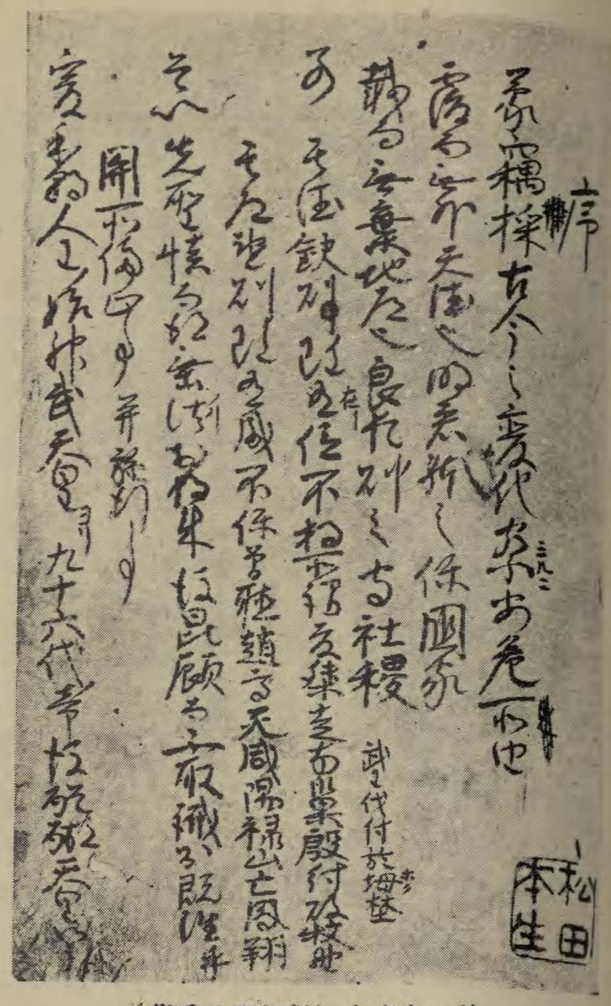
【梗概】天平十五年、聖武天皇は盧舍那佛金銅大像建立の勅を發し、大和の平城京に地を卜したのち、前代未聞の大佛鑄造は遂に完成したのである。眞玉と公麿の娘葛城若女、相模資人と杜女の養女筑紫娘子との二つの戀の挿話に美しく彩られつつ、天平十八年より天平勝寶四年までの、大佛をめぐる奈良朝繪卷が次々と展開され、猿澤池畔大佛鑄造御願の燃燈供養に始まり、開眼された大佛の掌上に於ける狂へる葛城若女の死を以てこの戲曲は終る。第一幕、廣い路上、平城京內の市場の二場。第二幕、地獄谷の岩窟、大佛造營場、菅原寺

大佛供養物語（だいぶつくやうものがたり）　御伽草子一卷【作者】不詳【成立】室町期。寫本の卷末に、「享祿四年二月二日書寫畢」とあり。【諸本】御伽草紙（有朋堂文庫）・大日本佛敎全書（東大寺叢書第一）所收【題材】法談物。法然聖人の法德を說く。

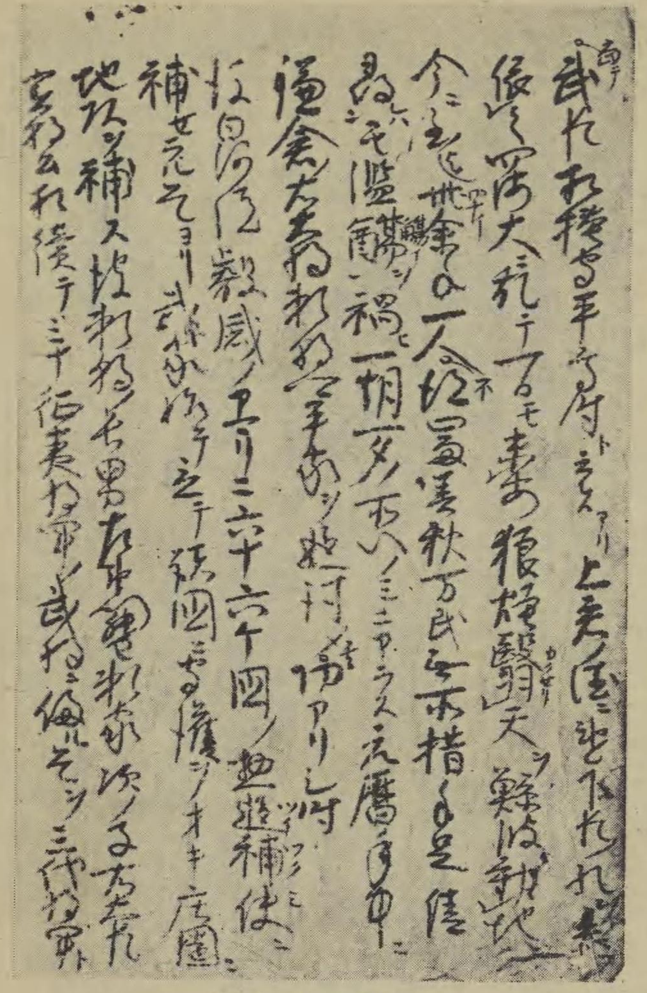
【梗概】春乘坊重源、東大寺を勸め造つて入唐し、歸朝の際に極樂の曼陀羅、五祖の眞影を將來したので、東大寺に於て法然聖人を導師として供養を營むこととなつた。紹朝將軍を初

元年（應安三年）七月以後、建德二年（應安四年）三月に至る間にあるものと推定した事由とも年代が合ふのである。なほ、本書卷六「正成披見天王寺未來記事」の條に於ける未來記の文中に、「如猴猴者掠天下三十餘年、大凶變歸一元」といふ記事があるが、この「三十餘年」とあるところを、金勝院本には「十餘年」、西源院本には「二十餘年」、天正本には「五十餘年」としてある。さて、こゝに「十餘年」とあるのは、延元元年に尊氏が西國から東上して公家一統の大業を破壞し、持明院統の光明院を擁立して、天下を南北兩朝の御爭ひのやうに仕向け、兵馬の權をその手に收めてから、正平六年（觀應二年）に尊氏が吉野方に降り、京方の崇光院が廢せられて、さきに後醍醐天皇が尊氏に授け給うた神器は僞器であつたとして、後村上天皇がそれを收められ、天下一統の實を擧げられるに至るまでの年數を示すものと考へられる。延元元年から起算すると正平六年は十六年目に當り、こゝに「十餘年」とある年數にあてはまるので、この「十餘年……」とあるのは、この頃修正された形迹を示すものではあるまいかと思はれる。また延元元年から二十餘年に當るのは正平十一年頃から同十六年頃（延文元年頃—康安元年頃）であつて、これも本書が正平十三年（延文三年）、尊氏の逝去によつて世運に一轉機を來たした頃に修正せられたらしいといふ推定說と符合し、それを裏書することになる。三十餘年といふに相當するのは、正平二十一・二年（貞治五・六年）頃から文中一・二年（應安五・六年）頃までであつて、本書の大成期建德一・二年（應安三・四年）頃と正に時代が符合し、いよ〳〵この說を確實にする譯である。五十餘年といふに相當するのは、元中九年（明德三年）に後龜山天皇が後小松天皇に神器を傳へられ、全く南北兩朝が合體せられた頃と時代が符合するので、この語を有する天正本は、この頃修補せられたものではあるまいかと思はれる。なほ「銘肝腑集鈔」の太平記遺編の卷首に「上之上」とあるのは、高野辰之博士說のやうに、「太平記」に上・中・下三卷（若しくは九卷）から成るものであつたことを示すものと見られるが、三卷（又は九卷）から成るものがあつたとすれば、それは北條氏が滅びて建武の中興が成つた頃までを纏めたものであらうと思はれる。「太平記」は、かういふ風にして、幾度か修正書き繼ぎが行はれて、現存の姿をなしてゐるものと思はれるが、こゝに注意すべきは卷二十二の內容が全く闕失して存在しないことである。そして卷二十二が古來闕失してゐるといふことは「鹽尻」（卷二十八）や寶德本の識語や「理盡鈔」の記事などによつても、明かに知られるところである。尤も現存「太平記」中には、卷二十二を存するものがあるけれども、それは卷二十三・二十四の中から、內容を抽出して來て補充したものであるか、又は卷篇を改修して卷二十二の闕失を埋合はせたものである。それで大體に於て、卷二十二を闕いてゐる本は舊態を存するものであり、卷二十二を存するものは、改竄せられた形態を存するものと見られるのである。

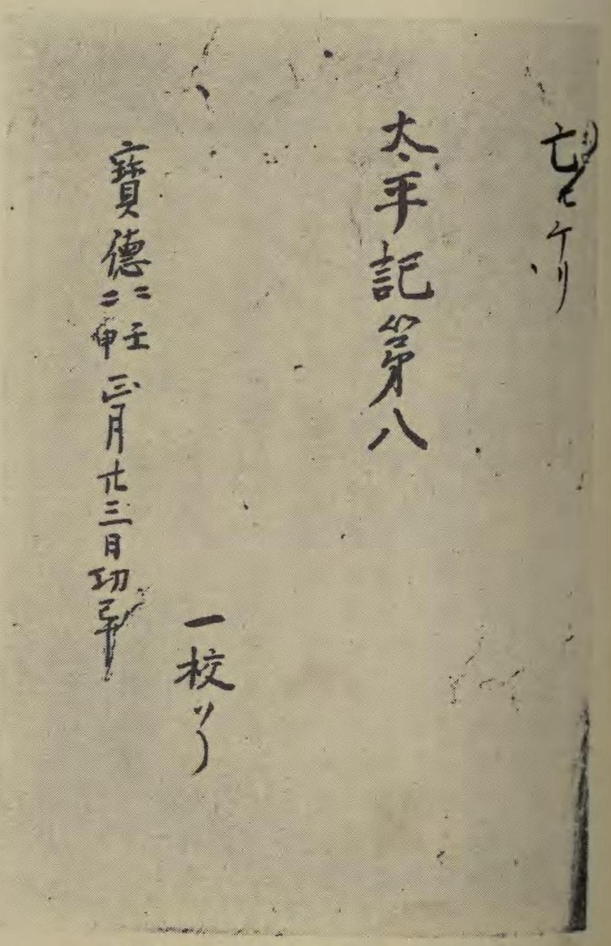
【諸本】「太平記」の諸本には、卷二十二の有無や改竄のさまによつて、大體、舊態を存するものと改竄の形態を存するものとの兩樣に分けて見ることができる。舊態本の方では神田本（現存二十六卷）が最も舊い形態を存してゐる。本書に話へてある來由書には草案の元本とあるけれども、他本を以て校合した形迹や切繼補入をしたところが幾らもあるから「太平記」の原本でないことは明かであるが、編次章句等、簡古にして古風を帶びてゐる。これは國書刊行會でも刊行されてゐる。西源院本（現存三十九卷）は編次內容とも神田本に近くして最も舊い姿を存してゐるが、改竄の形迹は幾らか多くなつて異同も少くない。黑川本（三十五卷あつたが大震災で燒失）は、西源院本に近く、兩書の間に系統上の關係が存するものと思はれるけれども、又幾分の異同は免れない。南都本現存（三十四卷）は卷三十九と四十との分け方を除けば、大體に於て西源院本に一致し、內容記事も亦これに近似し、舊形を存してゐるけれども、幾分修正增補の形迹が殖えてゐる。內閣本（現存三十八卷）・東京文理科大學本（現存三十九卷）は、相互の間に多少の異同はあるものの、何れも南都本の系統に屬するものである。築田本は參考本所引の北條本に近いが、また南都本に似たところがある。松井本（現存三十九卷）は、南都本・島津本に近似してゐるやうで、また少しく趣を異にしたところがあり、劔卷を添へてある。今川本（現存三十九卷）は卷二十一が二十の重複であり、それが順送りにずらされ、他本の卷二十一を二十二に當てあり、實際は卷二十二の內容を闕き、編次內容にも舊態を存してゐる。寶德本は卷十一以下を闕き、卷三も他本を以て補充してあるが、記事も簡古で舊態を存してゐる。「銘肝腑集鈔」太平記遺編は、僅か數葉の斷簡に過ぎないが、卷首に「上之上」とあつて、本文も簡古にして舊態を存してゐる。次に改竄態に屬するものでは、天文本が最も舊い姿を存してゐる。この本は卷十六以下を闕き、本文に於ては簡古な趣があるが、編次內容は聞書本と大體一致し、改補の迹も少くない。「太平記聞書」（四十卷）は、「太平記」古本の難語を抄出して簡單な註釋を施したものであるが、その語彙によつて按ずると、天文本と大體一致し、四十卷に分けられてゐるけれども、實際に於ては古本の卷二十二の內容は闕けてをり、舊態を存しながら、改竄の迹を殘してゐる。京都帝國大學本は四十二卷に分けられてゐるが、その中で、卷一—七を闕き、また卷二十二も闕けてゐるのを流布本形の本を以て補うてある。編次內容は、天文本・聞書本と大體一致する點が多いが、また特異な姿を呈し、改補の迹が著しく、參考本所引の金勝院本とも一致するところが多い。東京帝國大學本は、神田本に近い古本（卷二十四まで）と、島津本に近い古本（卷二十六以下）とを併合したもので、一部の成書ではなく、舊態を存する特殊な本であつたが、大震災で燒失した。前田本は四十一卷に分けられて特異な編次を有し、改竄の迹もあらはであるけれども、本文に於ては舊態を存するところが多い。毛利本（四十卷）は、本文に於ては舊態を存してゐるが、編次には改竄の迹が著しく、天正本と似た點が多く、卷二十二・二十三は、大體に於て流布本と同じ形式を取つてゐる。吉川本は毛利本・天正本・前田本・流布本などに近似してゐる點もあるが、また特異な點も少くない。天正本（四十卷）は、毛利本や流布本に似たところも少くないが、改補の跡が最も著しく、諸本中異文が最も多い。義輝本（現存三十八卷）は殆ど天正本と一致してゐるが、卷二と卷三十九との內容とを闕き、卷四十の內容を卷三十九に當て、そのまゝ大尾としてある。野尻本は天正本（卷一—三十ま



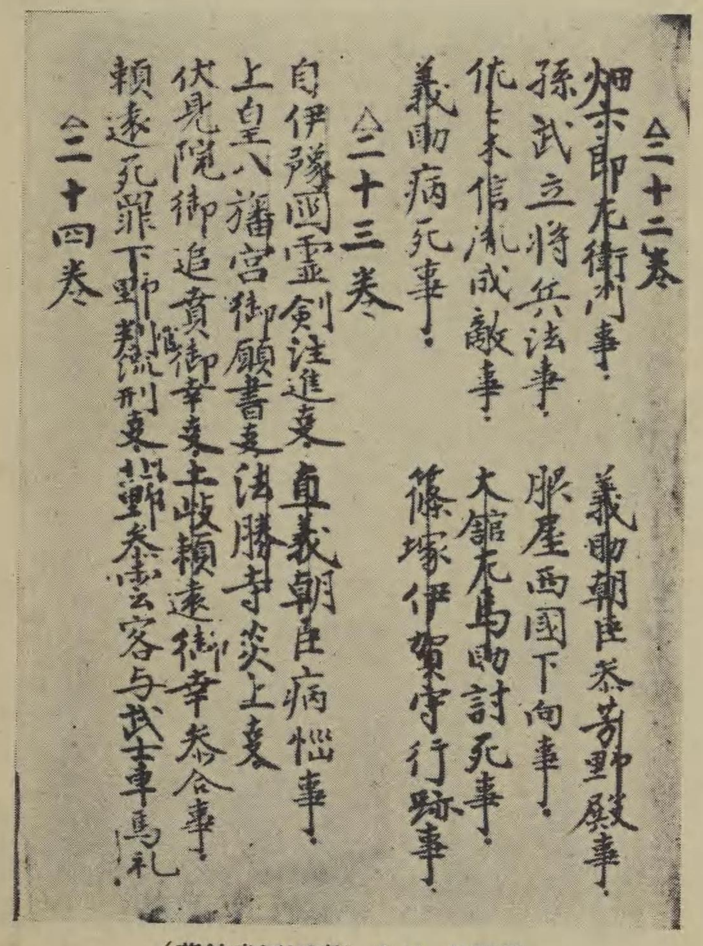
神田本序文（保坂潤治氏蔵）



神田本初頁



寶德本奥書（帝國圖書館蔵）



義輝本目次（帝國圖書館蔵）

頃から同十六年頃（延文元年頃―康安元年頃）であつて、これも本書が正平十三年（延文三年）、尊氏の逝去によつて世運に一轉機を來たした頃に修正せられたらしいといふ推定説と符合し、それを裏書することになる。三十餘年といふに相當するのは、正平二十一・二年（貞治五・六年）頃から文中一・二年（應安五・六年）頃までであつて、本書の大成期建德一・二年（應安三・四年）頃と正に時代が符合し、いよ〳〵この説を確實にする譯である。五十餘年といふ

卷二十二の闕失を埋合はせたものである。それで大體に於て、卷二十二を闕いてゐる本は舊態を存するものであり、卷二十二を存するものは、改竄せられた形態を存するものと見られるのである。

【諸本】「太平記」の諸本には、卷二十二の有無や改竄のさまによつて、大體、舊態を存するものと改竄の形態を存するものとの兩樣に分けて見ることができる。舊態本の方では神田本（現在二十六卷）が最も舊い形態を存してゐる。本書に語へてある來由書には草案の元本とあ

二十一か二十の重複であり、それが順送りにずらされ、他本の卷二十一を二十二に當てあり、實際は卷二十二の內容を闕き、編次內容にも舊態を存してゐる。寶德本は卷十一以下を闕き、卷三も他本を以て補充してあるが、記事も簡古で舊態を存してゐる。「銘肝腑集鈔」「太平記遺編」は、僅か數葉の斷簡に過ぎないが、卷首に「上之上」とあつて、本文も簡古にして舊態を存してゐる。次に改竄態に屬するものでは、天文本が最も舊い姿を存してゐる。この本は卷十六以下を闕き、本文に於ては顯

迹が著しく、天正本と似た點が多く、卷二十二・二十三は、大體に於て流布本と同じ形式を取つてゐる。吉川本は毛利本・天正本・前田本・流布本などに近似してゐる點もあるが、また特異な點も少くない。天正本（四十卷）は、毛利本や流布本に似たところも少くないが、改補の跡が最も著しく、諸本中異文が最も多い。義輝本（現存三十八卷）は殆ど天正本と一致してゐるが、卷二と卷三十九との內容とを闕き、卷四十の內容を卷三十九に當て、そのまゝ大尾としてある。野尻本は天正本（卷一―三十ま

ラレ是ハ共ニ源氏重代ノ重寶ニテ義貞ノ方ニ傳タリト聞ユレハ求末ノ一族共ノ帶クヘキ太刀ニハ非ト見ルニ彌怪ケレハ富ノ守ノ閑テ見給フニ吉野ノ帝ノ御宸筆ニテ朝敵征伐事叡慮所向偏在義貞武功選求求他殊可運早速之計略者也ト遊ハサレタリサテハ義貞ノ首相違ナカリケリトテ尸懸ノ輿ニ乘セ時衆八人ニカカセテ華禮ノ為ニ往生院ヘ送ラレ首ノハ朱ノ唐櫃ニ入レ氏家ノ中務ノ副テ潛ニ京都ヘ上セラレケリ

○義助重集敗軍事

脇屋右衛門佐義助ハ河合ノ石丸ノ城ヘ打歸テ義貞ノ行末ノタツキ給フニ始ノ程ハ分明ニ知人モナカリケルカ事ノ樣次第ニ顯レテ討レ給ヒケリト申合クレハ

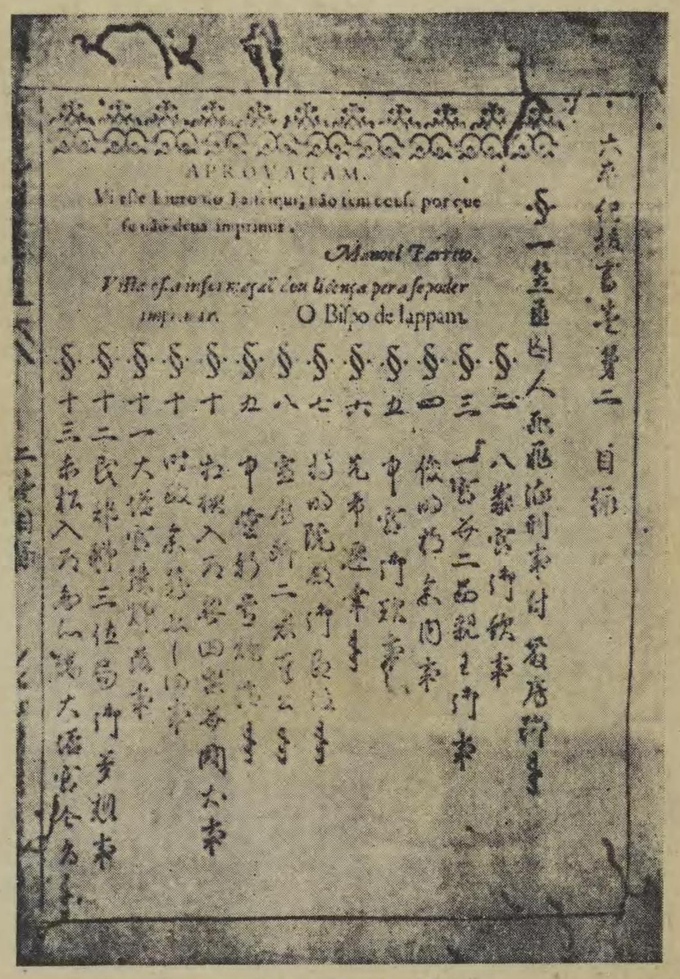
慶長活字本

や何ノ古ノ維盛ノ入道相國賞セシニ向セン哉ト被申レカハサシモ大才ノ實世卿言ナクメリ被退出シケリ

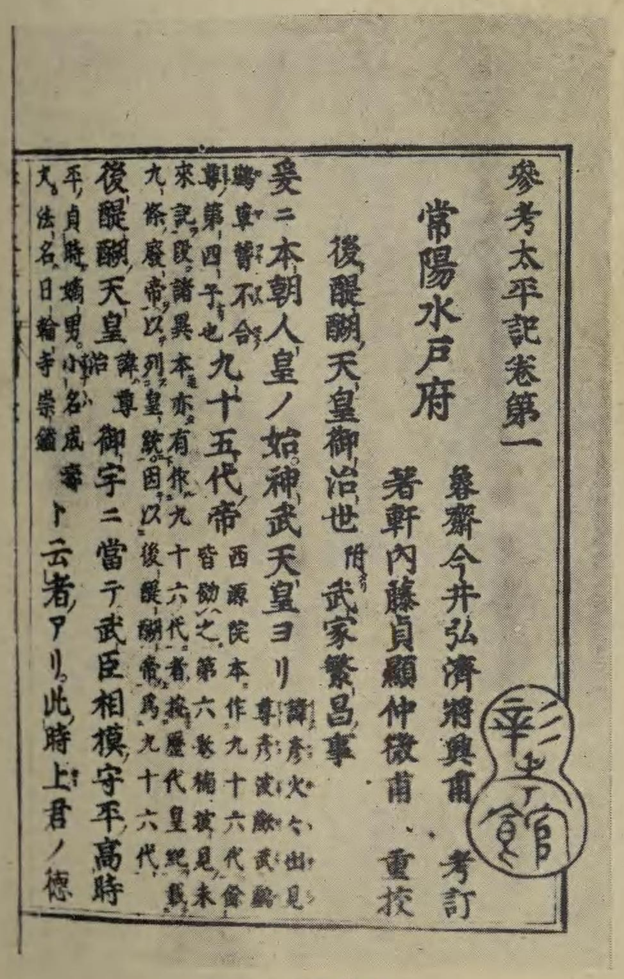
○佐々木信胤成宮方事

懸ル處ニ併諸國ヨリ專使馳來テ急キ可然大將ノ一人撰テ被下御方ニ對ノ忠戰ノ可致之由ノ奏聞シタリシカハ脇屋刑部卿義助朝臣ノ可被下公議定リケリサレ共下向ノ道海上モ陸地モ皆敵陣也如何シテ可下ト僉議不一ケル處ニ備前國住人佐々木飽浦三郎左衛門尉信胤早馬ヲ打テ去月二十三日小豆嶋ニ押渡リ義兵ヲ擧ル處ニ國中ノ忠アル輩馳加テ連徒少々打順ヘ京都運送ノ船路ヲ差塞テ候也急近日大將御下向有ハレトツ告タリケル諸卿是ヲ聞テ大將進發ノ道開テ天運機

元和活字本



吉利支丹版目錄



四十一まで。但し巻三十二・三十四・三十五は闕）を取合はせた不純な本で、普通な内容を改修して巻四十一まで延長してある。そしてなほ巻四十二を設けてあるけれども、それは石清水八幡宮に關する事項を收めたもので、「太平記」の内容ではない。その他、梵舜本（四十巻）や神宮文庫本（四十巻）は舊態を存しながら流布本の形態を備へ、その前形態の姿を呈してゐる。流布本（四十巻）は巻二十三・二十四の内容を割いて巻二十二の闕失を埋めてあるのをはじめ、全篇にわたつて改補の迹が著しい。この系統の片假名寫本・平假名寫本は、大小さまざまな形で諸家に傳はつてゐる。また版本では、片假名古活字本に、慶長八年版・同十年版・同十五年版・元和二年版・無刊記版などがあり、平假名古活字本に慶長十四年版・寛永元年版・無刊記版があり、片假名整版本に元和八年版・寛永八年版・萬治三年版・寛文十一年版・延寶八年版・天和元年版・貞享五年版・元祿元年版・同四年版・寶永三年版・無刊記版があり、平假名整版本に、寛永元年版・慶安三年版があり、平假名整版繪入本に元祿十年版・同十一年版・無刊記版などがある。現行活版本としては、日本文學全書・續帝國文庫・國民文庫・國文叢書・通俗日本全史・新釋日本文學叢書・物語日本史大系・軍談家庭文庫・有朋堂文庫・校註日本文學大系等の諸本がある。なほ島津本の異文を摘收したものに、「太平記補闕」「太平記抜萃」「異本太平記纂」などがあり、流布本の文章を抜書したものに、耶蘇會出版の「太平記抜書」がある。その他、參考本所引の異本で所在不明のものに、北條本・島津本・今出川本・金勝院本があり、他の記錄に見えてゐるものにおなほ本（「吉野軍記」・「西南記」本）（「總覽」參照）などがある。

【梗概】後醍醐天皇の御宇に當つて、鎌倉幕府の執權北條高時は、政道を顧みず、專横を擅にしたので、天下の人心が次第に離れた。天皇は、王權を回復して天下を安きにおかんと御心掛けになり、ひそかに北條氏討伐の謀をめぐらされた。然るに、その事が露顯して、計謀に關與した武將の土岐頼資・多治見國長は殺され、朝臣の日野資朝・藤原俊基、僧侶の圓觀・文觀・忠圓等は捕へられて關東へ送られ、天皇は關東へ御告文を賜はつて辨明をなされた。その後、僧達は流され、資朝も佐渡に流されて斬られ、俊基は一旦赦されたが、再び捕へられて斬られた。次いで、東使が上洛して主上を遠國に遷し參らせんとするといふ風聞があつたので、主上は笠置へ臨幸なされ、大納言藤原師賢が主上に代つて山門に赴いたが、これもやがて笠置へ參集した。よつて六波羅から大軍を差向けて攻めたので、笠置の城が陷り、主上は捕はれて六波羅へ遷され給ひ、中務親王・尊澄法親王をはじめ、月卿雲客たちも概ね捕へられて流斬に處せられた。これより先、楠木正成は勅命を受け、赤阪城を築いて勤王の兵を擧げ、敵の大軍を惱ましたが、後、計を案じ、城を燒いて落ちた。元弘二年三月、主上が隱岐國へ遷され給ふや、兒島高德は勤王の志を寄せ、途中で主上を奪ひ奉らうと企てたが果さなかつた。大塔宮は南都から吉野の城へ赴き、ひそかに賊徒討滅の計をめぐらされた。正成はその後、千劍破に城を築き、赤阪城を回復し、天王寺邊へ出沒して、屢々敵を惱ましたが、赤松圓心も播磨に義兵を擧げた。よつて關東から再び大軍を差向け、吉野・赤阪・千劍破の三城を攻めさせた。赤阪では平野將監の失策で城が落ち、吉野では防戰に力が盡きて、大塔宮は落ち給ひ、村上義光が御身代りとして自害した。千劍破城では、正成が妙計奇謀を以て百萬の大敵を散々になやました。新田義貞は綸旨を受けて上野に義を唱へ、近國を從へて勢が盛んであり、筑紫でも菊池武時が勤王の義を唱へて匪躬の節をつくし、四國でも土居二郎・得能彌三郎が宮方になつて旗を擧げた。主上は隱岐から伯耆へ潛幸なされたが、名和長年がこれを奉じて船上山に據り、追手を討ち退けたので、諸方の豪族が風を望んで馳せ參じた。また陸奥・酒部・瀬河・山崎・京都などでも屢々合戰があつて、宮方の勢が盛んになるので、關東から更に大軍を差向けた。この時、足利尊氏も西上したが、ひそかに宮方に心を寄せ、官軍と共に六波羅を攻め落し、北條仲時以下を滅した。又義貞は近國を風靡し、勢に乘じて鎌倉を攻め、高時以下北條氏の一族を悉く滅したので、地方における北條氏の餘黨も、次いで平いでしまつた。こゝに於て、主上は都に還幸なされ、王政復古の大業が遂げられ、政令が朝廷から發せらるゝことになり、功勞者にはそれ〴〵恩賞の沙汰があつたが、藤原藤房は、龍馬進奏のことにつき意見を建白して遁世した。大塔宮は讒奏に遭うて鎌倉に下され給うたが、たま〳〵北條時行の勢が起つて鎌倉に攻め入る由の風聞があつたので、直義は大塔宮を弑し奉つて逃れ、事變を都に知らせた。それで尊氏は討手として東下し、時行を滅したが、そのまゝ關東に留まつて東八ケ國を管領し、新田氏の所領をも沒收したので、義貞も尊氏の所領を沒收し、互に確執を生じた。義貞は尊氏追討のため東下し、箱根で直義を破つたが、竹下で尊氏に破られて都に引返したので、主上は山門へ遷幸なされ、尊氏は大軍を擁して都に入つた。既にして北畠顯家が奥州勢を率ゐて西上したので、それに力を得、官軍は足利勢を攻擊した。尊氏は力戰したが、遂に敗れて都を落ち、船に乘つて九州へ走つた。よつて、主上は山門から都へ還幸なされた。尊氏・直義は、九州の豪族を語らひ、延元元年五月、數十萬の大軍を率ゐ、海陸並び進んで東上したので、義貞・正成等はこれを兵庫に防いだが、破れて正成兄弟は戰死し、義貞は都に退いた。主上はまた山門に臨幸なされ、尊氏は都に入つたので、山門や京都で屢々戰があり、名和長年が戰死した。然るに尊氏は、ひそかに使を山門へ遣し、京都に還幸あらんことを請うたので、主上は思召す旨あつてその請を許された。義貞はこの由を聞いて大に驚き、苦衷を訴へたので、主上は義貞に春宮を託して慰撫せられ、京都に還幸なさつたが、忽ち花山院へ押籠められ給ひ、供奉の人々も監禁せられた。延元元年冬、主上はひそかに花山院を忍び出て吉野へ遷幸なされたので、大衆を初め近國の官軍が行在所に馳せ參じた。義貞は春宮恒良親王を奉じて北國へ赴き、孤忠を抽んでた。然るに、足利勢が大擧して來攻するに會ひ、金崎城は攻め落されて、恒良親王は捕へられ給ひ、又尊良親王は自盡し給ひ、新田義顯以下悉くこれに殉じた。次いで義貞も亦、足利高經と藤島に戰ひ、燈明寺畷で戰死した。顯家は奥州勢を以て南都を陷れ、京洛を脅したが、安部野で討死した。延元四年八月、主上は吉野の行宮で崩御なされたので、後村上天皇がその後を

承けて御即位なされた。脇屋義助は諸方に戰ひつつ吉野から伊豫に赴いたが、病にかゝつて歿した。楠木正行は父の遺志をついで王事に勤め、屢々敵を破つたが、高師直と四條畷に戰うて討死した。師直等は勢に乘じて吉野行在を犯したので、主上は賀名生に遷幸なされた。直義は南方に歸順し、桃井直常またこれに從ひ、北方と戰つたが、後、尊氏と和し、師直兄弟を殺した。その後、直義は尊氏と不和になつて戰うたが、やがて病歿した。新田義興・義宗等は、東國に兵を擧げ、屢々戰うて威勢が盛んであつたが、敵の計に陷つて滅びた。正平十三年(延文三年)四月、尊氏は癰を病んで歿した。筑紫では菊池武光が征西將軍宮を奉じて王事に勤め、少貳頼尙と筑後川に戰うて破り、次いで少貳・大友勢を飯守山・香椎に破つた。仁木義長・山名時氏等は、一時南方へ降つてゐて、後また北方に歸り、細川清氏も南方に歸順し、四國を平定したが、細川頼之に攻められて討死した。正平二十二年十二月、將軍義詮は病にかゝつて歿し、細川頼之は幼將軍義滿を輔けて執事職となつた。

【解說】本書は、吉野時代の爭亂を叙寫したものであるが、この爭亂は事件が複雜な上に、局面が擴大して戰鬪も頻繁激烈であり、戰期も五十餘年の長きにわたつてゐるので、記事も頗る紛糾錯雜して散漫となり、叙事の中心も屢々動搖してゐる。本書の結構は、大體、三部に分れてゐる。前部は後醍醐天皇の關東御征伐に端を發して、北條氏が滅亡し、建武中興が成立するのを以て一時期を劃するもので、所謂元弘の亂の叙寫が主となつてゐる(卷一乃至卷十二)。中部は足利尊氏が謀叛して王政復古の大業を破壞し、持明院統を擁立して、大覺寺統に對抗せしめ、天下を南北兩朝の御爭ひのやうに仕向けて、巧みに人心を收攬し、楠木正成・新田義貞、以下吉野方の諸將を滅して、兵馬の實權をその手に收め、足利幕府の基礎を確立するに至つた過程の描寫(卷十三乃至卷十九)。後部は吉野方の勢威が振はず、足利幕府の權勢が擴大するにつれて、足利氏骨肉の間又は諸將士の間に內訌軋轢が甚だしくなり、それにつけこんで、吉野方がまた勢力をもりかへし、南北上下相もつれて、紛爭騷亂が絶間ない內に、いつしかそれもだれて下火に向ひ、時機は次第に推移つて天下は鎭靜に歸して行き、義詮將軍の逝去によつて、足利氏創業時代の幕が閉ぢられ、幼將軍義滿の輔佐役たる細川頼之の執事職就任を以て、守成時代の幕が將に開かれんとする意をほのめかして筆を擱いてゐる。この結構は、大體に於て前部が最も整備して筋道が立つて居り、中部から後部に至るに從うて、事件が次第に複雜紛糾して統一の美を失うてゐる嫌ひがある。又叙寫が合戰に傾き過ぎて、優美なる風流譚や可憐なる戀物語などを閑却してゐるので、記事は概して殺伐陰慘な傾向を帶びてゐる。又記事は大體、戰勝者の側よりも、戰敗者の方の行動を寫してゐることが多く、人物によつて多少趣を異にしてゐる事情はあるけれども、作者の同情は武家方よりも宮方に多く濺がれてゐる。併し、宮方に對しても徒に最眉の筆を弄するやうなことはなく、公明な見解や正大な論議を試みてゐる。そして紛爭混亂した世相の顯現を、功利的・末法的な時勢と、統制を失へる人慾の發動と、惡魔の跋扈とに歸し、悲慘なる流離敗亡を宿命の致すところと觀じ、人の運命も神佛の冥慮に委ねてゐる傾向が著しい。そして時代思潮の反映するところ、個人意識が次第に消磨して、集團意識が發動し、勇武・强剛・壯烈・果敢なる形相氣魄が漲つて、男性的の特色が最もよくあらはれ、自然や人生に對する觀照態度も概して客觀的であり、美よりも寧ろ眞と善とを理想として、破邪顯正を標榜し、敬神崇佛の思想を强調し、精神發動の過程も理智的・思索的・意志的・信仰的になつてゐるので、道德的・教訓的・宗教的の傾向が著しくあらはれ、信念や道義の鼓吹に頗る力が濺がれてゐる。それで、皇宗尊崇の思想は全篇を一貫し、勤王の大義を奬め、幾多の忠臣義士の忠烈なる行動を讃賞し、治世の大道、人倫の本義を勸說し、戀愛のやうな情緖は寧ろ罪惡視して道念を以てこれを律し、愛に溺るゝ女性を卑しんで節操ある義烈の婦人を賞揚してゐる。かくて、その指導原理となつてゐるのは、倫理的の道念であるが、これには儒教と禪宗と武士道との思想が、三位一體となつて始終働いてゐる。また本書の創作態度が、集團と客觀と普遍とに重心をおく結果、人物の性格描寫の如きも、個性の活躍は乏しく、寧ろ概念的に描かれてゐることが多い。なほ、尙古的・尙外的・尙形的の風尙も著しくあらはれて、故事先例を尙び、引用・對照・誇張・比喩などによつて、行文を修飾し、形象を整へることに苦心してゐる傾向も著しい。要するに、本書は、「平家物語」(別項)に見るやうな統一渾成の妙味や優雅流麗の詩味は乏しいけれども、時代的の生彩が添はつて、深刻な人生の相を現はし、剛壯堅實なる國民性情を發揮して、飽くまでも男性的・意志的の傾向を帶び、文章は著しく漢文臭味を加へて、或は豪宕に、或は絢爛に、和漢混淆文の妙趣をあらはしてゐる。かうして、本書は、文學として特殊な地位と價値とを有してゐる上に、史書としても相當なる價値を藏し、吉野時代の史的檢討には見逃すべからざる資料となつてゐる。又本書は、楠公の神謀奇策をはじめ、合戰の計謀や經過を叙說してゐることが多いので、兵書としての面影を宿し、武人の間に大に愛重せられた。その他、本書は、諷謠的の性質を具へ、國民の間に廣くもてはやされてゐる。神田本に、「二重」「三重」「四重」「亂」などの符號を附してあるのは、本書が曲節を以て諷謠せられたことを示してゐる明徵であるが、なほ本書は物語僧によつて、中世の頃既に講演せられて居り、近世に及んでは、所謂太平記讀(別項)として民衆の間に講釋せられ、今日の講談(別項)の源をなし、この方面に於ても、大に國民文學的特色を發揮してゐる。

【影響】「太平記」は、廣く國民の間に愛讀せられたものだけに、これが後代文學に及ぼした影響は可なり著しい。先づ戲曲の方面について見るに、謠曲の「白髭」「鉢木」「武文」「義興」「大塔宮」「大森彥七」「幽靈楠」「枕慈童」外二十數番、舞の本の「新曲」、淨瑠璃の「相模入道千疋犬」「吉野都女楠」「假名手本忠臣藏」「蘭奢待新田系圖」「神靈矢口渡」「大塔宮熊野落」「太平記菊水之卷」外二十數篇など、何れも「太平記」から材料を採つたものであるが、中には文章までもそのまゝ襲用してゐるものもある。小說の方面に於ては、御伽草子(俵藤太物語・中書王物語など)・浮世草子、殊に八文字屋本(義貞艶軍配・楠軍法・鎧櫻・風流菊水卷その他)などにも、「太平記」に基づいた作品は少くなく、草雙紙類では、黑本(義興矢口渡・繪本太平記・

面が擴大して戰鬪も頗繁激烈であり、戰期も五十餘年の長きにわたつてゐるので、記事も頗る紛糾錯雜して散漫となり、叙事の中心も屢々動搖してゐる。本書の結構は、大體、三部に分れてゐる。前部は後醍醐天皇の關東御征伐に端を發して、北條氏が滅亡し、建武中興が成立するのを以て一時期を劃するもので、所謂元弘の亂の叙寫が主となつてゐる（巻一乃至巻十二）。中部は足利尊氏が謀叛して王政復古の大業を破壞し、持明院統を擁立して、大

者の方の行動を寫してゐることが多く、人物によつて多少趣を異にしてゐる事情はあるけれども、作者の同情は武家方よりも宮方に多く濺がれてゐる。併し、宮方に對しても徒に鼎肩の筆を弄するやうなことはなく、公明な見解や正大な論議を試みてゐる。そして紛爭混亂した世相の顯現を、功利的・末法的な時勢と、統制を失へる人慾の發動と、惡魔の跋扈とに歸し、悲慘なる流離敗亡を宿命の致すところと觀じ、人の運命も神佛の冥鑒に委ねてゐ

的の風尙も著しくあらはれて、故事先例を尙び、引用・對照・誇張・比喩などによつて、行文を修飾し、形象を整へることに苦心してゐる傾向も著しい。要するに、本書は、「平家物語」（別項）に見るやうな統一渾成の妙味や優雅流麗の詩味は乏しいけれども、時代的の生彩が添はつて、深刻な人生の相を現はし、剛壯堅實なる國民性情を發揮して、飽くまでも男性的・意志的の傾向を帶び、文章は著しく漢文臭味を加へて、或は豪宕に、或は絢爛に、和漢混

文學研究（國文註釋全書所收）、考定（大中黒本）、考定（大中黒本）、考定（大中黒本

はこれと正雪が紺屋の伜であつたことを併せ脚色したもので、更に在兵衛の本名を佐々目の憲法とし、憲法染の由來にまで及んでゐるが、技巧趣向を凝し過ぎた嫌もある。これは石堂を主人公とした三段目や、四段目の常悅玉川の件にも言へるであらう。鞠ケ瀨秋夜（丸橋忠彌）の件は、史實乃至俗說をかなり用ひたらしく、具足屋藤兵衛は弓師藤四郎に當る。全曲としても散漫のそしりは免れまい。【影響】淨瑠璃でも主に三段目迄が折々演ぜられ、歌舞伎でも（日本戲曲全集第三十七卷に臺本所收）演ぜられた。本作の影響作として有名なものは「碁太平記白石噺」（別項）である。又宇治常悅鞠ケ瀨秋夜の役名は、後の慶安事件劇に襲用せられ、右の「碁太平記白石噺」にも、又默阿彌の「樟紀流花見幕張」にも用ひられてゐる。

【參考】近世邦樂年表（義太夫節之部）○歌舞伎　細見　飯塚友一郎　〔增田〕

太平記賢愚抄（たいへいきけんぐぜう）

註釋書　四十卷　【著者】釋乾三。乾三は天文頃、近江にゐた學僧である。【成立】奥書によると、本書は天文十二年十月上旬に完成されてゐる。また刊本は慶長十二年頃に印行せられてゐる。

【解說】本書は「太平記」流布本中の難語・熟語を抽出し註解を加へたもので、「太平記鈔」と共に類書中に重きをなしてゐる。刊本の外現在は國文註釋全書所收本がある。〔高木（武）〕

太平記鈔（たいへいきせう）

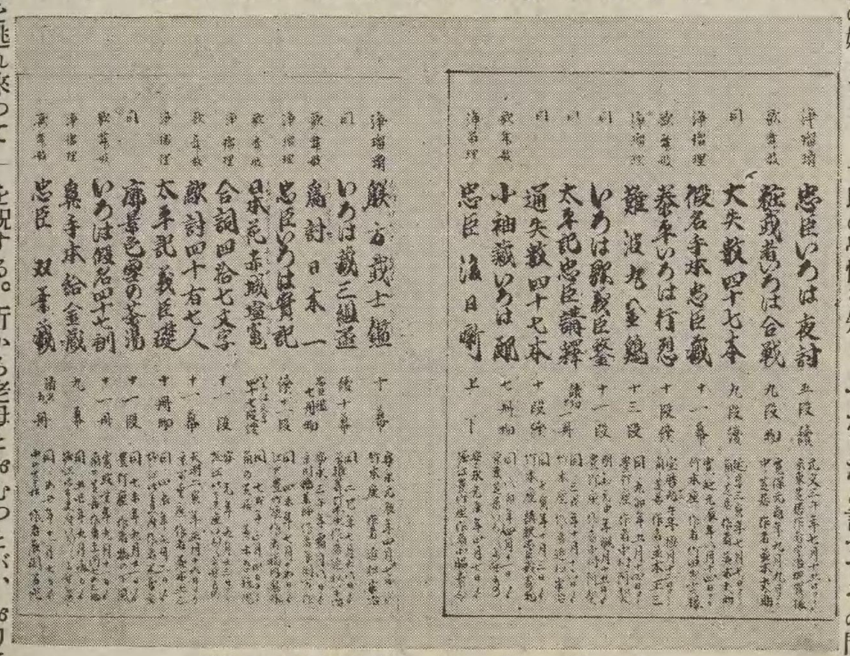
註釋書　四十卷　【著者】世雄房日性。日性は京都洛東要法寺（日蓮宗）の學僧で、典籍の註釋・編纂・刊行に大きな功績を殘し、慶長十九年二月二十六日、六十一歲で入寂した。【成立】本書は要法寺版の一として、古活字を以て慶長頃に刊行せられてゐるから、その成立は慶長頃か、若しくはそれより少しく以前にあるものと思はれる。

【解說】本書は、「太平記」流布本中の難語句を抄出して詳細な註解を加へたものであるが、引例・考證・解說も精密、適切であり、「太平記」を註釋した類書中の白眉である。古活字版の刊本が古くから傳はつてゐるが、現在は國文註釋全書にも收められてゐる。〔高木（武）〕

太平記忠臣講釋（たいへいきちゆうしんかうしやく）

淨瑠璃　十段　時代物　【作者】近松半二・三好松洛・竹田文吉・竹田小出雲・筑田平七・竹本三郎兵衛　【角書】高師直　鹽冶判官　【名稱】赤穗義士を「太平記」の世界にして扱ひ、全篇を太平記講釋に擬した爲め。【初演】明和三年十月十六日より竹本座　【諸本】七行百丁本、加島屋清助等板。十行六十五丁本、菊屋七郎兵衛板。忠臣藏淨瑠璃集（帝國文庫）・淨瑠璃名作集（同上）・戲曲義士篇後篇（名著文庫）・赤穗義士劇集（日本戲曲全集）所收。【題材】數ある先行の義士劇中、特に「假名手本忠臣藏」（別項）並に「鬼鹿毛無佐志鐙」に據る所が多い。殊に、「忠臣藏」の中の名句はその儘用ひられてゐる。

【梗概】〔一段、鎌倉御所〕勅使饗應の役に當つた鹽冶判官は、禮儀格式の傳授を受くべき高師直に賄賂を贈らぬため、辱しめられて刄傷に及ぶ。〔二段、伯州城內〕家老大星由良之助は蜂の爭ひに不吉の前兆を知る。やがて鎌倉よりの凶報到り、家中一同の評定となるが、相家老斧九太夫は御用金の分配を主張し、算用が合はぬと言つて勘定役早野三左衛門を問責する。〔三段、顏世御前館〕由良之助は、師直と內應してゐる九太夫を欺くため、先君の後室顏世に戀慕と見せる。九太夫はこれを問詰するが、由良之助は却つて九太夫がお金藏から金子を盜んだ證據の小柄、並びに金子紛失の申譯に切腹せる三左衛門の首を示して、詰腹を切らせる。〔四段、九太夫後家隱家〕三左衛門の伜勘平は、幼少の折、主君の勘氣を蒙り、零落して石屋の五郎太となつてゐたが、この度の凶變を聞き敵討の一味に加はらうとしてゐる折から、白川で兵法の指南をしてゐるお禮に見込まれて、その娘お組の婿となる。所が圖らずもお禮から九太夫の後家なることを打ち明けられた上、亡父の仇由良之助を討つてくれと迫られ、進退に窮して自害する。〔五段、祇園揚屋〕鹽冶の弟石堂縫之助は、仇討の一味に加はらんため、養家の勘當を受けようと京の遊女浮橋に馴染み、浮橋を相手に鳥邊山心中道行の狂言などをして戲れてゐる（これが劇中劇、「道行人目の重縫」）。由良之助等の動靜を探る師直方の藥師寺治郎左衛門は、縫之助と浮橋を張合ふ。〔六段、七條河原〕矢間重太郎の妻おりゑは夫の行方知れぬため、一家の糊口を助けんと、家には祇園詣と稱して毎夜惣嫁に出てゐる。所へこれもまた一家のため密かに祇園へ身を沈め、浮橋と名告つてゐた重太郎の妹おむつが、主家を逃れ來つて圖らずも嫂に出會ひ、互に身の淺ましさを恥ぢ且つ嘆く。〔七段、喜內浪宅〕おりゑは、おむつを伴つて歸る。家では舅喜內が長の病氣の上、我が子太市郎は疱瘡を病んでゐる。所へ重太郎が久し振に歸つてくる。さる主に召抱へられて鎌倉へ下るとの事である。これを聞いて喜內は二君に仕へる人非人と罵るが、重太郎は父子の緣も切れたと言つて立ち去らうとする。折から太市郎が出て來て縋りつくので、流石の重太郎の心も暗闇となるが、氣をとり直して、我が子の胸に小柄を刺して恩愛の絆を絕つ。この物音に喜內は始めて重太郎の覺悟を知り、でかしたと言つてその門出を祝する。折から老母とおむつとが、おりゑが奥で自害した事を告げ知らせる。〔八段、山科閑居〕寺岡平右衛門は、由良之助が敵討の所存なく、山科に田地を求め藏を建て、あまつさへ師直へ出入を願つてゐると聞き、その心底を確めんと、師直よりの上使鷹問宅兵衛と僞つて由良之助を訪れ、鹽冶の一子爲若の



忠臣類聚（高野辰之氏藏）